



# 町村の施策事例集

## IV

完全保存版



魅力ある町村を  
実現するための  
様々な取り組み

移住・定住・交流人口促進、空き家・空き店舗活用

教育・伝統文化・スポーツ、子育て、健康福祉

農林水産業振興、地域産業育成、起業・就業促進

自然・環境・衛生、新エネルギー

観光・イベント(ご当地フェスタ)、体験型ツーリズム

NPO・住民ボランティア等との協働、防災危機管理

町村独自のまちづくり施策

全国町村会



# はじめに

今日、少子高齢化や人口流出、基幹産業である農林水産業の衰退など極めて厳しい状況が続いていますが、全国の町村では、自主的、主体的にそれぞれの地域の特性を最大限活かしながら、創造的なまちづくりに、日々取り組んでいます。

また近年、都市部の若者を中心に農山漁村への関心が高まっているとともに、都市住民が各地域に移り住む「ふるさと回帰」や「田園回帰」の動きも顕著にあらわれつつあります。

この度、刊行いたしました「町村の施策事例集Ⅳ」は、全国の町村が取り組んでいる、移住・定住対策や高齢者福祉施策、地場産業の育成など意欲が溢れ魅力の詰まった58事例を紹介しております。

これらの施策事例は、平成24年度から25年度にかけて各町村が、最も注力した地域活性化策等を全国町村会の機関誌「町村週報」に現地レポートとして掲載したものです。町村長をはじめとして職員の方々に、小さいながらも訪れてみたい、そして住んでみたい、そんなキラリと光り、強く、しなやかな故郷（町村）を目指して取り組んでいる様々な施策が成立に至るまでの経緯や苦心談、将来の課題や展望などについてご執筆頂いております。

各位におかれましては、是非ともご一読頂き、各地域の宝や日本人が持つ素晴らしい技や技術、底力を見つけて頂くとともに、全国の町村が日々奮闘している地域活性化に向けた真摯な取り組みに、ご理解とご協力賜りますようお願い申し上げます。

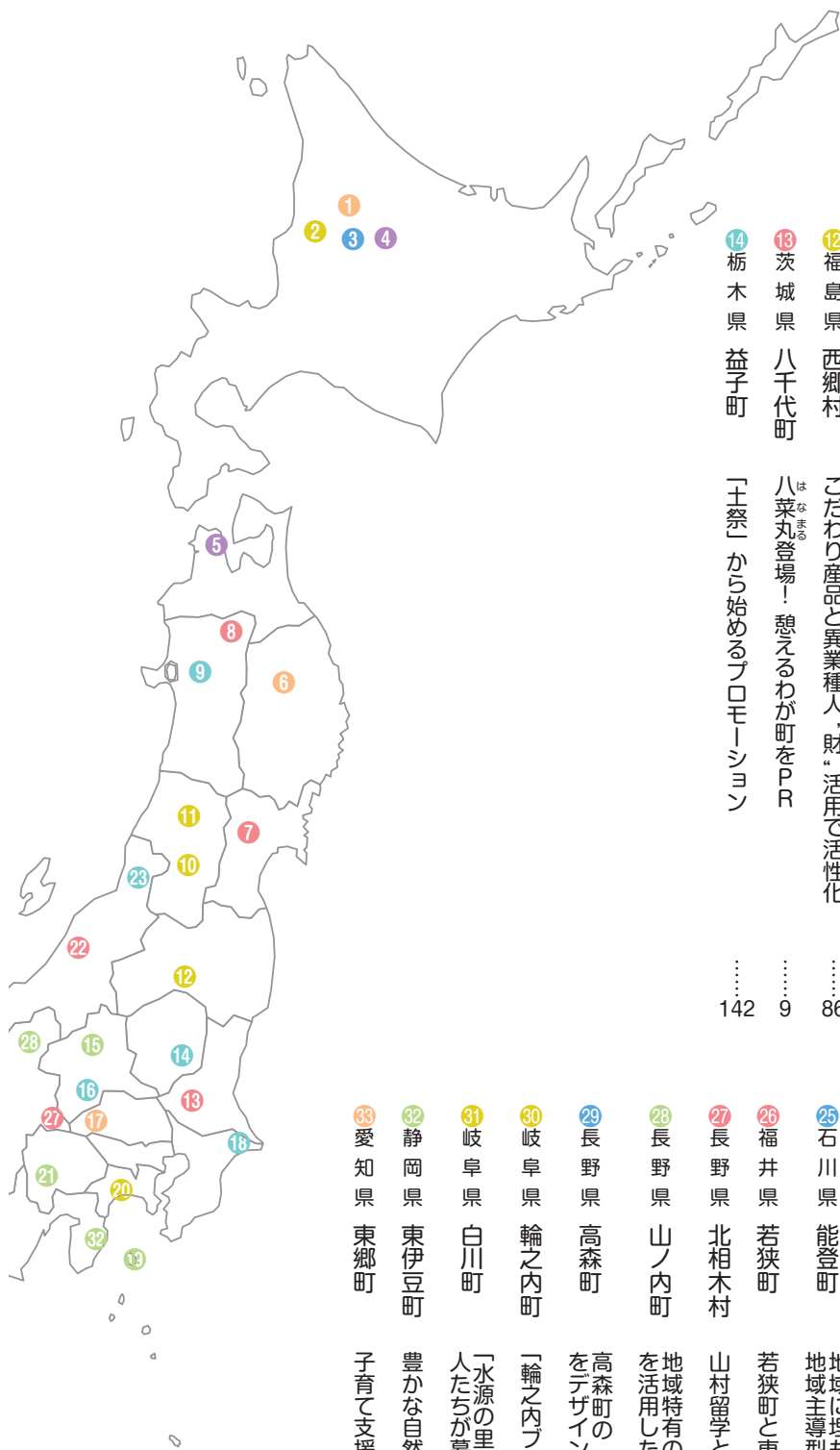
併せて、この「施策事例集Ⅳ」が各地域においてまちづくりを進めていこうとする関係者の皆様方の新たな気づき（ご参考）となれば幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、多大なご協力をいただきました関係者の皆様方に心より御礼申し上げます。

平成27年3月

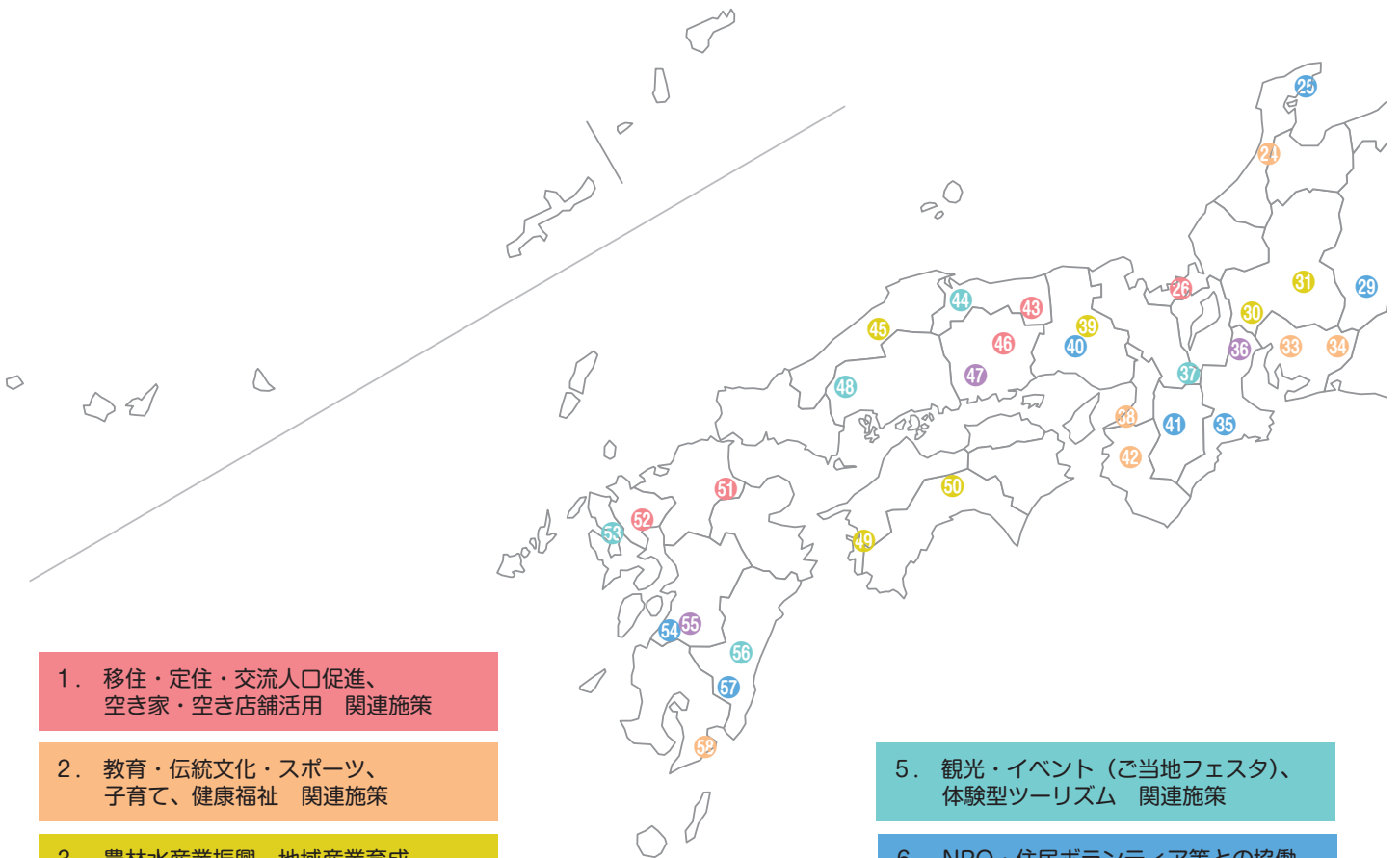
全国町村会長  
藤原 忠彦

# 目次



1 北海道 剣淵町	「心のふるさと」絵本の里づくり	39
2 北海道 幌加内町	日本一のそばの里づくり	75
3 北海道 東神楽町	みんなで築く活力あるまちづくりへ	177
4 北海道 東川町	「国道、鉄道、上水道」がないが「北海道」がある	206
5 青森県 外ヶ浜町	「風の岬・龍飛」での挑戦	210
6 岩手県 岩手町	岩手町が誇る文化的な風土と豊かな食材 <sup>フード</sup>	43
7 宮城県 色麻町	イナカの良さ、強さ、美しさを活かしたまちづくり	1
8 秋田県 小坂町	大自然と明治の風景に彩られたまち 小坂町	5
9 秋田県 上小阿仁村	現代アートと活力あるむらづくり	139
10 山形県 朝日町	りんごにこだわった町づくり	79
11 山形県 鮭川村	ナンバーワンよりオンリーワン	83
12 福島県 西郷村	こだわり産品と異業種人“財”活用で活性化	86
13 茨城県 八千代町	八菜丸 <sup>はなまる</sup> 登場！憩えるわが町をPR	9
14 栃木県 益子町	「土器から始めるプロモーション」	142
15 群馬県 みなかみ町	水を守り森林を育む利根川源流の町	118
16 群馬県 神流町	神流マウンテンラン&ウォーク	147
17 埼玉県 小鹿野町	健康長寿の町「おがの」をめざして	47
18 千葉県 東庄町	「歴史を活用した地域活性化・観光事業」の取り組み	151
19 東京都 大島町	島の価値・魅力の再発見と新たな観光地づくりへの胎動	122
20 神奈川県 二宮町	二宮ブランドで産業振興	90
21 山梨県 市川三郷町	町営温泉「つむぎの湯」を活用した節電・外出支援事業	126
22 新潟県 出雲崎町	どらまちつく日本海、良寛さんの心の町	13
23 新潟県 関川村	村民融和のむらづくり	155
24 石川県 津幡町	もっともっと元気な町へ!!	51
25 石川県 能登町	地域に埋もれた資源に光を当て、地域主導型の公民館活動の展開	181
26 福井県 若狭町	若狭町と東京をつなぐ	16
27 長野県 北相木村	山村留学と移住の村・北相木	19
28 長野県 山ノ内町	地域特有の自然資源（自然エネルギー）を活用したまちづくり	131
29 長野県 高森町	高森町の「PRIDE」「FUN」「LOVE」をデザインする	185
30 岐阜県 輪之内町	「輪之内ブランド」構築にむけて	94
31 岐阜県 白川町	「水源の里の恵みいっぱい、活力みなぎる人たちが暮らすまち 美濃白川」	98
32 静岡県 東伊豆町	豊かな自然と文化が調和するまち	135
33 愛知県 東郷町	子育て支援ナンバーワンでまちづくり	55

34	愛知県 設楽町	田峰 <sup>だみね</sup> 観音奉納歌舞伎の保存と田峯小学校 安心・安全なまちづくりを目指して	59
35	三重県 大紀町	自然と調和したまち 持続可能なまち 孤野町 笠置ファン獲得へ！	189
36	三重県 孤野町		213
37	京都府 笠置町	子育てしやすいまちづくり	159
38	大阪府 熊取町	多可町の魅力「まち・ひと・もの」を大発信！	63
39	兵庫県 多可町	柳田國男に学ぶ 福崎町	102
40	兵庫県 福崎町	シニア世代が光り輝く町	193
41	奈良県 高取町	有田川町 地域交流センター「ALEC」	196
42	和歌山県 有田川町	災害を切り口とした地域間交流と地域おこし 「智頭町」疎開「保険」	67
43	鳥取県 智頭町		22
44	鳥取県 伯耆町	全国「当地バーガーの祭典 「ごっつりバーガー・フェスタ」の試み	162
45	島根県 美郷町	産業創造と活力創出「みさとカレッジ」	106
46	岡山県 久米南町	いいひと いっぱい 久米南町	26
47	岡山県 矢掛町	旧山陽道宿場町 矢掛町 ブランド化と地域活性化	216
48	広島県 安芸太田町	ヘルスツーリズムの推進と地域振興	165
49	愛媛県 愛南町	次世代に水産業を伝えるために	110
50	高知県 本山町	「土佐天空の郷」のブランド化と地域活性化	114
51	福岡県 上毛町	地域の誇りと笑顔の好循環	30
52	佐賀県 江北町	空き家・空き店舗等再生による地域活性化	35
53	長崎県 波佐見町	産業体験型観光によるまちづくり	170
54	熊本県 津奈木町	アートを生かした住民による住民のための町づくり	199
55	熊本県 芦北町	「個性の光る活力あるまちづくり」を目指して	219
56	宮崎県 国富町	「真冬のたなばた」及び「光り輝くまちづくり」事業	174
57	宮崎県 三股町	花と緑と水のまち	202
58	鹿児島県 肝付町	歴史と未来が融合する町、肝付町	71



- 1. 移住・定住・交流人口促進、  
空き家・空き店舗活用 関連施策
- 2. 教育・伝統文化・スポーツ、  
子育て、健康福祉 関連施策
- 3. 農林水産業振興、地域産業育成、  
起業・就業促進 関連施策
- 4. 自然・環境・衛生、新エネルギー  
関連施策

- 5. 観光・イベント（ご当地フェスタ）、  
体験型ツーリズム 関連施策
- 6. NPO・住民ボランティア等との協働、  
防災危機管理 関連施策
- 7. 町村独自のまちづくり施策

1. 移住・定住・交流人口促進、空き家・空き店舗活用 関連施策

宮城県  
色麻町 (しまちまち)

イナカの良さ、強さ、美しさを活かしたまちづくり  
～定住化施策と低炭素型スマートコミュニティ構想の推進～

秋田県  
小坂町 (こさかまち)

大自然と明治の風景に彩られたまち 小坂町  
～「明治百年通りにぎわい創りプロジェクト」の推進にむけて～

茨城県  
八千代町 (やちよまち)

八菜丸登場！憩えるわが町をPR

新潟県  
出雲崎町 (いずもさきまち)

どらまちつく日本海、良寛さんの心の町  
～恵まれた自然と歴史のなかで安全・安心に暮らせるまちづくり～

福井県  
若狭町 (わかさちよう)

若狭町と東京をつなぐ  
～交流人口増加と定住促進へ～

長野県  
北相木村 (きたあいきむら)

山村留学と移住の村・北相木  
～好きです！信州北相木～

鳥取県  
智頭町 (ちうちよう)

災害を切り口とした地域間交流と地域おこし「智頭町」疎開「保険」  
いいひといっぱい 久米南町  
～小さなまちの定住対策～

岡山県  
久米南町 (くめなんちよう)

地域の誇りと笑顔の好循環

福岡県  
上毛町 (こうげまち)

空き家・空き店舗等再生による地域活性化  
～人が変わることで社会が変わって行く仕組みづくり～

佐賀県  
江北町 (こうほくまち)

健康福祉 関連施策

北海道  
剣淵町 (けんぶちちよう)

「心のふるさと」絵本の里づくり  
「人・夢・大地」やさしさ奏でる絵本の里けんぶちの25年

岩手県  
岩手町 (いわてまち)

岩手町が誇る文化的な風土と豊かな食料  
～芸術と野菜総合産地の発信拠点・道の駅「石神の丘」～

埼玉県  
小鹿野町 (おかのまち)

健康長寿の町「おかの」をめざして  
～花と歌舞伎と名水のまち～

石川県  
津幡町 (つばたまち)

もっともっと元気な町へ!!

愛知県  
東郷町 (とうきょうちよう)

子育て支援ナンバーワンでまちづくり

愛知県  
設楽町 (しだらちやう)

田峰<sup>たみね</sup>観音奉納歌舞伎の保存と田峯小学校  
〜引き継がれる伝統芸能〜

59

大阪府  
熊取町 (くまとりちやう)

子育てしやすいまちづくり  
〜子育てを応援する人がたくさん暮らすまち〜

63

和歌山県  
有田川町 (ありだがわちやう)

有田川町 地域交流センター「ALEC」  
本のあるカフェ+まんが館+ミニ博物館

67

鹿児島県  
肝付町 (きもつきちやう)

歴史と未来が融合する町、肝付町

71

3. 農林水産業振興、地域産業育成、起業・就業促進 関連施策

北海道  
幌加内町 (ほろかないちやう)

日本一のそばの里じゅり

75

山形県  
朝日町 (あさひまち)

りんごにこだわった町じゅり  
〜小さな町の大きな挑戦〜

79

山形県  
鮭川村 (さけがわむら)

ナンバーワンよりオンリーワン  
〜みんなで作る「むら」じゅり〜

83

福島県  
西郷村 (にしごうむら)

こだわり産品と異業種人「財」活用で活性化  
〜「にしごう村夢プロジェクト」の取組み〜

86

神奈川県  
二宮町 (にのみやまち)

二宮ブランドで産業振興  
〜農業再生に向けたオリーブ栽培への取り組み〜

90

岐阜県  
輪之内町 (わのうちちやう)

「輪之内ブランド」構築にむけて  
〜「食」を通じた2つの取組〜

94

岐阜県  
白川町 (しらかわちやう)

「水源の里の恵みいっぱい 活力みなぎる人たちが暮らすまち 美濃白川」  
〜白川町第5次総合計画キャッチフレーズ〜

98

兵庫県  
多可町 (たかちやう)

多可町の魅力「まち・ひと・もの」を大発信！  
〜「FB良品TAKA」と「お見合い大作戦」〜

102

島根県  
美郷町 (みさとちやう)

産業創造と活力創出「みさとカレッジ」

106

愛媛県  
愛南町 (あいなんちやう)

次世代に水産業を伝えるために  
〜愛南町の水産振興〜

110

高知県  
本山町 (もとやまちやう)

西日本で生産されたお米が日本一に  
「土佐天空の郷」のブランド化と地域活性化

114

4. 自然・環境・衛生、新エネルギー

関連施策

群馬県

みなかみ町 (みなかみまち)

水を守り森林を育む利根川源流の町

～関東の水瓶を自負して～

東京都

大島町 (おおしままち)

島の価値・魅力の再発見と新たな観光地づくりへの胎動

～伊豆大島ジオパークと観光特派員のとりくみ～

山梨県

市川三郷町 (いちかわみさとまち)

町営温泉「つむぎの湯」を活用した節電・外出支援事業

～家庭の節電と高齢者の積極的な外出促進をサポート～

長野県

山ノ内町 (やまのうちまち)

地域特有の自然資源(新エネルギー)を活用したまちづくり

～「エコのまち」「元気活力あふれる産業のまち」を目指して～

静岡県

東伊豆町 (ひがし伊豆まち)

豊かな自然と文化が調和するまち

5. 観光・イベント(ご当地フェスタ)、体験型ツーリズム 関連施策

秋田県

上小阿仁村 (かみこあにむら)

現代アートと活力あるむらづくり

栃木県

益子町 (ましこまち)

「土祭」から始めるプロモーション

～風土と工芸、人と暮らしの魅力を形に～

群馬県

神流町 (かんなまち)

神流マウンテンラン&ウォーク

～少子高齢化日本一の町が創った日本一のトレイルランニングレース～

千葉県

東庄町 (とうのしょうまち)

「歴史を活用した地域活性化・観光事業」の取り組み

～「天保水滸伝」おらが町の物語～

新潟県

関川村 (せきかわむら)

村民融和のむらづくり

「大したもん蛇まつり」と「コミュニティ活動」

京都府

笠置町 (かささぢまち)

笠置ファン獲得へ!

～全国で当地鍋フェスタの取組み～

鳥取県

伯耆町 (ほうきまち)

全国で当地バーガーの祭典「とっとりバーガー・フェスタ」の試み

～食と交流を通じた地域活性化に向けて～

広島県

安芸太田町 (あきおたちまち)

ヘルスツーリズムの推進と地域振興

～「ひと・森・癒し安芸太田」森林セラピーのまち～

長崎県

波佐見町 (はさみまち)

産業体験型観光によるまちづくり

～来なっせ やきものと自然あふれる波佐見へ～

宮崎県

国富町 (くにとみまち)

「真冬のたなばた」及び「光り輝くまちづくり」事業

国富町21世紀まちづくりフォーラム まちづくりの希望の光として輝く冬のイルミネーションの取り組み

6. NPO・住民ボランティア等との協働、防災危機管理 関連施策

北海道	東神楽町 (ひがしかわちちよう)	みんなで築く活力あるまちづくり 『知のネットワークづくり』と『地区別まちづくり計画』	177
石川県	能登町 (のとうちよう)	地域に埋もれた資源に光を当て、地域主導型の公民館活動の展開 『能登町公民館特色ある活動事業を通じて』	181
長野県	高森町 (たかもりまち)	高森町の「PRIDE」「FUN」「LOVE」をデザインする 『タウンプロモーションの取組』	185
三重県	大紀町 (たいきちよう)	安心・安全なまちづくりを目指して 『津波災害から生命を守る「錦タワー」』	189
兵庫県	福崎町 (ふくさきまち)	柳田國男に学ぶ 福崎町 『自律(立)のまちづくり』 交付金事業』	193
奈良県	高取町 (たかとりちよう)	シニア世代が光り輝く町	196
熊本県	津奈木町 (つなぎまち)	アートを生かした住民による住民のための町づくり	199
宮崎県	三股町 (みまたちよう)	花と緑と水のまち	202
7. 町村独自のまちづくり施策			
北海道	東川町 (ひがしかわちちよう)	「国道、鉄道、上水道」がないが「北海道」がある ふるさと納税を活用した「ひがしかわ株主制度」『写真の町』東川町	206
青森県	外ヶ浜町 (そとがはままち)	「風の岬・龍飛」での挑戦 『津軽半島彩北端龍飛ルネッサンス推進事業』	210
三重県	菰野町 (こものちちよう)	自然と調和したまち 持続可能なまち 菰野町	213
岡山県	矢掛町 (やかげちちよう)	旧山陽道宿場町 矢掛町 ブランド化と地域活性化	216
熊本県	芦北町 (あしきたまち)	「個性の光る活力あるまちづくり」を目指して 『すべては21世紀を担う子どもたちのために』	219

※一部文中の日付・数値、記述につきましては、原則として「町村通報」掲載時点のものです。最新のデータに修正した箇所があります。





し か ま ち ょ う  
宮城県 色麻町



# イナカの良さ、強さ、美しさを活かした まちづくり 定住化施策と低炭素型スマートコミュニティ構想の推進

## 色麻町の概要

色麻町は、宮城県のほぼ中央北西部、仙台市から北へ約30kmに位置し、人口7,400人余りの典型的な農業の町です。

地形は、東西に長く（約24km）南北に狭い（約5km）くさび形で、総面積は、109・23km<sup>2</sup>。町の西部には奥羽山系に属する秀峰・船形山や前船形山などが山岳地帯を形成し、四季折々に美しい表情を見せてくれます。

色麻町の歴史は古く、前方後円墳や円墳、さらには群集墳など学術的にも貴重な遺跡が数多く発見されています。又、「続日本紀」にも色麻についての記述が見られることから原始・古代を通じてこの地が、政治・文化の中心地であったことが推測されます。

ご当地キャラクター



「かっぺいくん」

色麻町では、暮らしの中に支え合いの精神が今なお息づく、良い意味での「イナカ」なところが本町の最大の魅力であり、これからの社会全体に求められる新しい価値と捉え、平成23年3月に策定した第四次長期総合計画で「イナカの良さ、強さ、美しさを活かしたまちづくり」を基本理念として、町民にとって暮らしやすく町を訪れる人にとっても心地よさが体感できるまちづくりを推進しています。

## 少子化対策と定住化

しかしながら、少子高齢化社会の到来により本町でも人口減少が進んでおり、人口増を伴う少子化対策が重要と捉え、子どもを安心して生み育てることができるよう保育環境や学童保育の充実、中学卒業までの医療費を無料

◀定住促進団地



◀地域活性化住宅



化するなど、他の自治体に先駆けて様々な支援事業を実施してきました。平成21年度には、小学生以下のお子様をお持ちの町外在住者に限定し、運動会などのレクリエーションや道路清掃など地区や町の行事に積極的に参画することなどを入居条件としたハイグレイ

ド賃貸住宅を30戸整備し、近傍家賃価格の半額程度で賃貸する地域活性化住宅事業を始めました。募集とほぼ同時に満室となり、若い夫婦世帯30世帯が入居しました。入居者総数は106人、そのうち小学生以下の子どもが46人となっており、地区や町の行事に参画す

団地事業を始めました。この事業は、地域活性化住宅事業の入居条件と同様に、小学生以下のお子様をお持ちの町外在住者で、地区や町の行事に積極的に参画することなどのほかに、無償賃貸契約した町有地に2年以内に住宅を建築し、8年間住めばその土地を無償

ることなどを入居条件としていることや、若い夫婦世帯が入居したことから、地区や学校の活性化に一定の成果が上がっています。3年が経過し子どもたちの数も10名増え56人となり、さらなる賑わいを見せています。

で譲渡するというものです。町営住宅跡地に一区画100坪程度の宅地を6区画造成し募集したところ、平成25年度までに全区画に住宅が建築され、入居者数は23名でその内子どもは12名となり、地域活性化住宅と同様に地域の活性化に大きく寄与しています。

### 無線による情報通信施設の整備

定住化施策の第2弾として、平成23年度には、町有地を無償譲渡する定住促進

本町では、昭和30年代より地域内電話である有線放送設備を整備し、電話機能に加え、行政・防災情報など幅広い広報活動を行って参りました。平成23年3月11日に発生した東日本大震災により、電気、水道、通信等のラインが未曽有の被害を被る中、本町の有線放送設備は、町内の有効な情報伝達手段として住民同士の情報交換や災害情報を昼夜を問わず発信し続けることができました。

しかしながら、役場内の自動放送装置などの有線放送設備は老朽化が進み、アナログのため定期的に交換が必要となる部品も既に製造中止となって

◀役場庁舎屋上に設置されたWIMAX基地局



◀WIMAX基地局



用は平成27年度から開始する予定です。

この情報通信施設は、WIMAXと呼ばれる周波数2.5ギガ帯の電波により町全域を無線でネットワークするものです。無線局の免許を取得し運用するもので、総務省による自治体がこのような施設を整備するのは、全国的に初めてのケースになるようです。音声のみならず、映像による双方向の情報通信が可能になるため、今後は、福祉分野や農業分野など様々な分野での活用が期待されます。将来的な活用方策については、それぞれアプリケーションの構築が必要になることから計画的に進めることとしています。

### バイオマスエネルギー活用事業

色麻町には昭和40年代に立地した採卵鶏飼育数250万羽の大規模農場があります。この農場から200t／

おり、十分な維持管理が難しい状況にあります。そこで総務省及び防衛省の補助事業を導入した新たな情報通信施設を整備し、町民への行政・災害時などの情報伝達手段を確保し、安心安全なまちづくりを図ることにしました。

新たに整備する情報通信施設はWIMAXと呼ばれる高速無線通信の基地局を町内6力所に設置し、町内全域

備するもので、各世帯や行政区長、消防団員にタブレット端末やIP端末を配備し、電話機能や全国瞬時警報システム（Jアラート）をはじめ、国や県、町からの情報を瞬時に住民に届けるものです。

このシステムは、災害などでNTTなどの通信事業者の回線が断線しても町内での通信は確保される町独自の

無線網です。総務省の補助で整備している6力所の基地局と役場庁舎内のセンター設備は完成し、公共施設や地区集会所等に設置するタブレット端末やIP端末については防衛省の補助により整備を進めているところです。各ご家庭に配備するIP端末につ

いては、防衛省の補助により、平成25、26年度の2力年で全世帯に順次配備することとしており、住民の皆様への供

日（73,000t/年）の鶏糞が恒常的に発生し、事業者は堆肥化し販売することで処理していますが、処理量が膨大なため新たな処分方法を模索しております。

東日本大震災による広域停電は本町全域で5日～7日間におよび、生活

家電が使えなくなるに止まらず、電話、テレビ、パソコンが使えず情報入手が困難になったことや、上下水道が使用不能になり、住民の生活に多大な支障をきたしました。特に高齢者、病院入院患者、腎臓透析患者などの社会的弱者にとっては生命に関わる深刻な状況に陥りました。今回の

震災と震災に伴う

原発事故を経験し、電気を確保することが「住民の命を守る」という行政の第一義の目的のために不可欠であり、化石燃料や原発に頼らない電気エネルギーを確保する必要性を痛感しました。

そこで、大規模農場から発生する鶏糞の新たな活用方法として鶏糞を原料にメタンガスを発生させ発電し、農場や一般家庭等に電気を供

給するという構想を検討しています。

200t/日の鶏糞を処理することで、時間当たり2,000kwの電力が発電されます。これは全世帯（2000世帯）の電力消費量を超える発電量で、町内公共施設や一般家庭等に供給されれば「電力の地産地消」になり「地域から地球温暖化防止対策」を推進することにもなります。鶏糞は、メタンガス発生量の多い未利用資源ですがこれまでメタン発酵に利用できませんでした。鶏糞は窒素分を多く含むためにメタン発酵の阻害物質であるアンモニアが発生しメタン発酵を阻害していました。そのため従来のメタン発酵は水を加えアンモニアを希釈する方法しかないので、ガスを採った後の残渣液の処理に大きな経費が必要となり普及の足かせになっていました。

このほど、鶏糞からアンモニアを除去しメタン発酵し残渣液も極わずかになる技術が開発され実用化されています。町では、「安心安全な町づくりの推進」と、「地域から地球温暖化防止対策を推進」という観点から、バイオマスエネルギー活用事業に取り

組んでいます。

また、バイオマスエネルギーによる発電を軸に、前述のWIMA X技術による町全域を無線によりネットワーク化する情報通信施設事業と組み合わせることにより、各世帯等の電力消費量をリアルタイムで把握することが可能になることから、低炭素型スマートコミュニティ構築の可能性まで検討したいと考えています。

平成24年度は住民代表、関係企業、農業協同組合、NPO法人、東北大学、県、町からなるスマートコミュニティ特区地域協議会を組織し、農林水産省の補助によりバイオマスエネルギー活用事業の調査業務を行いました。平成25年度には基本計画から実施設計まで策定したいと考えています。

東日本大震災を経験し、予測不可能なことがおこりうることに地方自治体も備えるべく、住民や議会、更には民間企業と手を携えて、重層的な事業を展開してまいりたいと考えています。

色麻町長 伊藤 拓哉

（平成25年3月4日付第2831号）



▶スマートコミュニティ特区地域協議会による先進事例調査



秋田県 **小坂町**



# 大自然と明治の風景に彩られたまち 小坂町

## 「明治百年通りにぎわい創りプロジェクト」の推進にむけて

### 小坂町の概要

小坂町は、秋田県の北東端、北東北三県（秋田県・青森県・岩手県）のほぼ中央に位置しており、気候は山間盆地特有の内陸型で、積雪寒冷地となっています。また、町土の約7割が森林であり、多くが国有林で占められています。町の中央部には米代川の支流である小坂川が流れ、北東部には国の特別名勝・天然記念物に指定されている十和田八幡平国立公園の十和田湖があり、日本でも有数の自然に恵まれた地域です。

面積は、明治4年の廃藩置県以来、境界が決まっていなかった十和田湖の境界が平成20年12月に決定し、現在は201.95km<sup>2</sup>となっています。

### 歴史的背景…鉱山とともに歩んできた町

当町は、文久元年（1861年）に小坂鉱山が発見されて以来、経済や文化も鉱山産業とともに発展し、明治初期より鉱山の町としての歴史を歩んできました。

しかしながら、昭和60年代の急激な円高や鉱山の枯渇等により、小坂町内の鉱山は統廃合や閉山が相次ぎ、小坂町の経済に大きな打撃を与えました。

現在は、古くから培われてきた鉱山業技術を活用し、環境リサイクル産業へ転換が図られ、世界的視野での資源循環型産業として、発展を続けています。

今の小坂町が誕生するまでには、明治21年の市町村合併で小坂村と小坂鉱山が合併して小坂村になり、大正3年

小坂町町章



◀明治41年頃の小板町全景



に町制が施行されました。昭和30年の市町村合併で小板町と七滝村が合併して新たな「小板町」となりました。

その後、昭和47年に当時の十和田町、花輪町、尾去沢町、八幡平村との市町村合併（現鹿角市）や、平成15年の鹿角市や大館市との市町村合併が検討されましたが、いずれも合併しない

文化財である「康楽館」や「小板鉱山事務所」等の歴史的建築物の保存活用です。明治時代の小板町をイメージして町民が手作りで整備してきた「明治百年通り」は、鉱山文化がもたらした歴史文化と、季節ごとの美しい花々などの自然とが調和した癒しの空間となつていきます。平成13年度には環境省



▲「康楽館」和洋折衷の木造芝居小屋としては日本最古



▲明治38年に建設された「小板鉱山事務所」

ことを選択しました。現在は鉱山の歴史・文化が息づく町としての特色を活かし、さらなる発展に取り組みます。その中でも特に力を入れてきたのが国指定重要

から「かおり風景100選」に平成17年度には国土交通省より都市景観大賞「美しいまちなみ賞」さらには平成18年度には町民が手作りで取り組んできた事業が評価され国土交通省から「手づくり郷土賞」「地域整備部門」を受賞しました。

### 交流人口拡大に向けた課題

現在の小板町は産業構造の変化により労働者層が減少し、町の定住人口が年々減少していることから、定住人口を基本として町の振興策を考へるこ



◀町民が手作りで整備してきた「明治百年通り」

とは非常に難しい状況にあります。

既存の観光資源である国立公園「十和田湖」や国指定重要文化財の「康楽館」「小板鉱山事務所」を核として観光による町内交流人口の拡大を図ってきましたが、国内全体に未曾有の被害をもたらした東日本大震災の影響等により交流人口は大きく落ち込みました。このような現状から、交流人口の拡大を図り、地域の雇用・経済活動に結びつけることが喫緊の課題となっています。

## 旧小坂鉄道の利活用を核とした新たなにぎわい創出へ

小坂鉄道は明治41年に大館・小坂間に全長22・3kmで開通し、明治42年には小坂鉄道株式会社の発足とともに一般運輸営業が開始され、鉱山の発展

とともに歴史を刻んできました。

しかし、車社会の到来とともに利用者が減少の一途をたどり、永年にわたり地元住民の交通手段として親しまれてきた旅客部門が平成6年9月30日に廃止されました。次いで開業100年の節目となる平成20年に貨物の運行が休止となり、ついに平成21年4月1日をもって、その長い歴史に幕を閉じました。

町は平成21年4月1日

で廃線が見込まれた時点で小坂鉄道を新たな観光資源として活用するための検討を始めました。平成20年12月に小坂鉄道利活用庁内検討会議を発足させ、平成21年3月には調査報告書を取りまとめました。調査報告書では、鉄道試験線としての利活用が望ましいとなりましたが、実現には至りませんでした。その後も沿線で隣接する大館市とも協議を行いながら模索を続け、平成23年3月には「旧小坂駅保存活用基本計画報告書」を作成、さらに見直し

を図り平成23年10月には今のプロジェクトの原形となる「明治百年通りにぎわい創出基本計画書」の完成に至りました。

この計画を基にした交流人口の拡大へ向けて、平成24年4月から役場の観光産業課へ新たに「にぎわい創出班」を創設し、課題解決へ本格的に取り組むこととしました。平成24年度から一部先行して整備が始まった国の交付金事業である「都市再生整備事業」に追加する形でソフト面での充実化を図り、最終的に既存の観光資源と旧小坂鉄道の観光活用を組み合わせ、明治百年通りにぎわい創出プロジェクトを策定しました。

このプロジェクトは、平成24年12月25日に実施された秋田県知事へのプレゼンテーションにより計画が認定され、県の交付金事業の「秋田県市町村未来づくり協働プログラム」として支援が決まりました。都市再生整備事業と合わせて平成24年度から平成28年度までの5年間で鉄道関連施設を中心と



▲多くの鉄道ファンや子供達でにぎわう「小坂鉄道まつり」

した観光資源の整備をしていくことにします。

## 旧小坂鉄道を活用して体験型交流

廃線となった小坂鉄道は愛好家等によって自主的な保存活動が湧き起り「小坂鉄道保存会準備室」が平成21年12月に立ち上がりました。毎年10月には「鉄道の日」に合わせて「小坂・鉄道まつり」を行い、魅力を発信し続



▶「明治百年通りにぎわい創出プロジェクト」を認定  
右「秋田県知事」左「小坂町長」

◀レールバイクの運転体験



けてきました。  
 小坂・鉄道まつりは駅構内でディーゼル機関車内の見学、駅構内のガイド付き案内のほか、平成24年の鉄道まつりでは体験型として初めてトロック乗車体験を行いました。また、明治百年通り沿線では、子供からお年寄りまで気軽に楽しめるレールバイクの運転体験

験を行い、今後の本格的な整備に向けて来場者へアンケートを実施し、貴重な意見を多数いただきました。

また、町の花である「アカシアの花」が咲き誇る6月の第2土日には毎年「アカシアまつり」が開催されますが、平成24年に初めて協賛イベントとして車両の展示やレールバイクの運転体験を開催したところ、大きな反響をいただきました。

**平成25年10月小坂  
 鉄道レールパーク  
 プレオープン**

平成25年10月1日から12月31日まで秋田県において大型観光キャンペーン「秋田DC」が開催され、この期間内の10月13日と14日には「小坂・鉄道まつり2014」を行い、「小坂鉄道レールパーク」としてプレオープンイベントを行いました。

**平成26年6月1日 小坂鉄道レールパーク グランドオープン**

小坂町の発展に大きく貢献し、100年の歴史を刻んだ小坂鉄道。廃線となった小坂鉄道を産業遺産として、保存・活用を図るため、「小坂鉄道レールパーク」が平成26年6月1日にグランドオープンしました。

このレールパークの最大の目玉は、実際に使用されていたディーゼル機関車の運転体験です。オープン以降、多くの方々が体験され、感動の声が寄せられています。

今後は小坂町内における交流人口の拡大をめざして、より多くの皆様楽しんでいただける充実した体験メニューを開発し、小坂町の「おもてなし」を提供してまいります。北東北へお立ち寄りの際には是非、十和田湖や明治百年通りの

景観、小坂鉄道の雄姿をご覧ください。新たな小坂町の「にぎわい」を体感してください。

小坂町長 細越 満

(平成25年4月1日付第28035号)

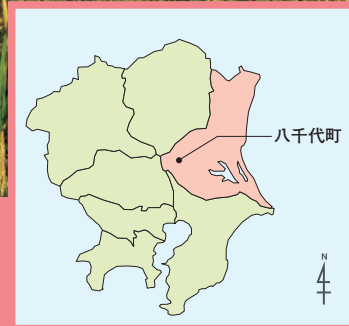


▶小坂鉄道レールパークオープニングセレモニー





# はなまる 八菜丸登場！憩えるわが町をPR



## 茨城県 やちよまち 八千代町

### 目的 八千代町の概要及び整備の

八千代町は、茨城県の西南部、関東平野のほぼ中央に位置し、首都東京から60km圏内車で約1時間半の距離にあります。町域は南北に長く、総面積は59・1km<sup>2</sup>、概ね平坦な土地柄で、町全体の64%を農地が占める人口約2万3500人の緑豊かな農村地域です。

町の東を鬼怒川、南に東仁連川が流れ、中央を山川が貫流し、彼方に名峰筑波山を望み、晴れた朝には、遙かな方に日光連山を眺望する、そんな豊かな水と自然に包まれた八千代町は、県内でも有数の園芸産地です。なかでも白菜は全国一の生産量を誇り、ネット系のメロンの栽培も盛んで、梨は県の銘柄産地指定を受けています。

恵まれた自然条件のもとで、蔬菜園芸を主体とした純農村地帯として発

展してきた町ですが、最近では都市化の波におされ兼業化が一段と進行し、後継者不足や輸入などによる農産物の価格低迷等、農業を取り巻く現状には厳しいものがあります。

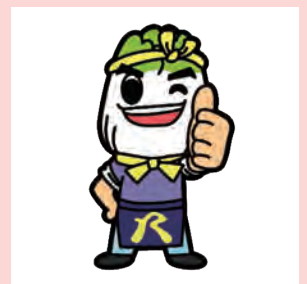
このような状況の中で、消費者ニーズを先取りした新鮮な野菜の提供や特産品の開発を通じて、都市住民へのPRによるイメージアップを図り、農業への理解を深め、更に平地林の保全・活用による健康増進、生涯教育の場を提供するため、地元住民と都市住民との交流拠点として「八千代グリーンビレッジ」を整備しました。

### 八千代グリーンビレッジ

「八千代グリーンビレッジ」は平地林を活かした約8haの敷地の中に、次に紹介する施設が整備された農村公園となっております。

「憩遊館（総合交流ターミナル施

ご当地キャラクター



はなまる  
「八菜丸」

▶ようこそ八千代グリーンビレッジへ！



設」は、公園全体の総合案内、町農産物の紹介やPRを行い、各種イベントの受け入れを行うなど八千代グリーンビレッジの中枢施設として平成9年にオープンしました。宿泊施設やキャンプ場、バーベキュー広場、自然観察の出来る体験林などの公園部分と、温泉のある憩遊館や農産物加工施設で構成されています。特に、地下1、500mから湧き出ている天然温泉「やちよ乃湯」を楽しむことが出来ます。露天風呂や寝湯、ジェットバス、サウナなどがあり、ふるさと温泉として町内外から人気を博しており、農作業で汗

かいた後は温泉につかり心身ともに癒されます。施設内では、農産物や特産品の販売を行っている直売コーナー、地元産のそば粉を使用し町内のそば打ち名人が打ったそばを提供しているそば処などがあります。

「農産物加工施設」は、農産物の加工に関する基礎知識・技術の習得や伝承技術の継承、更に特産加工品づくりの研究活動の場として整備されました。白菜キムチや田舎味噌、小麦饅頭などの加工体験を行うことができます。

「キャンプ場」は雑木林を利用した自然体験林で、野鳥のさえずりや昆虫の観察を楽しんだ後は、自然の緑に囲まれてバーベキューやキャンプが楽しめます。

宿泊施設としてコテージが整備され、ゆつくりと農村の自然を満喫できます。

「ふれあい広場」には、石塔の上に翼を天に向け羽ばたこうとする様を表した、「飛翔」のモニュメントがあり、ひょうたん池や築山とともに訪れた人々を迎えています。

### クラインガルテン八千代 (小さな庭の意味)

都市と農村をつなぐ滞在型市民農

◀グリーンビレッジでグランドゴルフを楽しむ。



園施設「クラインガルテン八千代」が平成16年にオープンしました。「八千代グリーンビレッジ」に隣接しており、地域ぐるみで都市住民との長期交流活動を通して、八千代の「農」を都市住民に周知させ、産地直売への対応などで消費者ニーズを踏まえた生産体制を推進し、地元農業の振興と農村の活性化を図っていきます。

また、農村と都市との間に顔の見える関係を築くことで「食」の安心、安全を確保し、「食」と「農」の再生プランを実現します。

◀天然温泉「やちよ乃湯」の露天風呂



▶自然の緑に囲まれてバーベキュー大会



クラインガルテン八千代は20区画あり、1区画270㎡、ラウベ29㎡（小屋の意味）で現在は満室となっております。利用者は関東地域の方々です。区画の中には菜園約100㎡、芝生や花畑などがあり、ラウベはエアコン・キッチン・バス・トイレ付、水道・電気設備を備えています。

交流やイベントも行われ、利用者と地元の住民である「田舎の親戚」が、あいさつなどの日常的な交流から農産物の栽培指導、加工技術、栽培技術、農村の歴史・文化などの助言を通して、都市住民と地元住民の親戚づきあいの



▶平成16年に開設された滞在型市民農園・クラインガルテン

よくな交流が行われています。  
農業指導のボランティアによる農作物栽培巡回指導や、収穫体験、加工教室等を定期的に開催し、秋には賑やかに収穫祭が行われています。

### 八千代発美味しい食文化

八千代町は、平坦で肥沃な土地と温暖な気候、首都近郊という立地条件を活かし、農業を基幹産業としています。野菜を中心に、稲作、果樹、畜産などの都市近郊型農業により、首都圏の主要な食料生産基地となっております。



▶ボランティア「田舎の親戚」による管理機の操作指導

当町の美味しい食べ物を紹介します。

#### ・白菜

秋冬白菜と春白菜に分けられ、秋の白菜は、霜に当たって繊維が柔らかくなり、葉の糖分が増えるため、甘味も増します。春白菜はみずみずしく、ふんわりしているのが特徴で、生のままサラダなどでも美味しく食べられます。漬物や鍋料理に適した「菜黄味」があげられます。

#### ・メロン

5月から7月にかけて春メロンとして、プリンス、キンショー、ホームラン、貴味（タカミ）、クインシーなど、多くの品種が栽培されています。中でも町内で一番多く生産されているネット系の貴味メロンは、大玉、多汁で糖分が高く、肉質のしっとりした日持ちもするメロンですので、お土産などに使われています。9月から10月にかけては、秋抑制メロンとして、アールスメロンが栽培されています。アールスメロンは、温度、湿度、水などの管理を徹底して栽培されており、なめらかな食感の希少な高級メロンです。

#### ・肥土梨

肥土という名のとおり、鬼怒川沿岸の肥沃な沖積土で、清らかな陽光をいっぱい浴びて育った梨は、甘くみずみずしく、県の銘柄産地にも指定

されています。また、県内では唯一の「あくと梨」の産地であります。8月には幸水、9月には豊水、10月にはあきつき、新高が栽培されています。

#### ・米

平坦で水の便が良いことから、米作りも盛んで、遥かに広がる黄金色の田園地帯は農作物収穫総面積の約40%を占めています。米の粘りが強く食味に優れる「こしひかり」が主流です。

#### ・その他の加工品、特産品

八千代地区農畜産物生産流通対策協議会が実施主体となり、平成23年に白菜プロジェクトを企画しました。冬が旬の「白菜キムチ鍋」は、町内の白菜キムチ鍋プロジェクト加盟店で食べられます。店により特徴ある味付けとなっており、家庭においても冬場の名物料理となっております。第2弾の「白菜メンチカツ」も町内の精肉店や憩遊館直売コーナーで販売しています。これまでに、東日本大震災への炊き出しや各種イベントにも出店しています。

「白菜キムチ漬」「田舎味噌」は、地元の白菜や大豆を農産物加工施設で加工し、憩遊館直売コーナーで販売しています。

また、手作りの干し納豆や「コシのあるつとん、恵まれた気候風土と水質を活かしたコクのある天然醸造醤油な

ど、ふるさとの味が数々あります。  
・八千代ワイン

平成22年に八千代ワインチャレンジ  
ジ会が、ワイン品種「富士の夢」を定  
植しました。平成24年から常陸太田市  
内のワイナリーで醸造瓶詰めし、八千  
代ワイン「夢」と名付けました。平成  
25年度は1700kgを収穫、11月には  
ワイン祭りを開催し、憩遊館直売コー  
ナーで限定販売しました。

### 八千代町農産物応援キャラ クター「八菜丸」登場

八千代町が生産量日本一を誇る白  
菜をモチーフにし、八千代町の農産物  
の応援と八千代町を全国にPRするた  
めに、平成24年に誕生したキャラク  
ターです。今後は、白菜はもちろん町  
農産物全体の応援団長として、八千代  
町の魅力を全国に発信していきます。



▲八千代町農産物応援キャラクター  
「八菜丸」

名前の由来は、八千代町の「八」、  
白菜の「菜」、丸く立派な白菜のイメー  
ジで、「丸」の3文字を組み合わせま  
した。

僕のプロフィールを紹介します。

出身地 八千代町内の畑  
性別 男  
誕生日 11月7日(いい菜の日)  
性格 農家が丹精込めて作った  
野菜のように、愛情に溢  
れています。

好きなもの 新鮮な農作物  
嫌いなもの 虫

僕は、「ゆるキャラグランプリ  
2013」にエントリーしました。「八  
菜丸」は今回が初参加となりますが、  
八千代町を少しでも多くの方に知って  
もらえるように、一つでも上の順位を  
目指して頑張りますので、皆さんぜひ  
応援してください。

### 未来への発信

本町は、特色あるまちづくりとし  
て、昭和59年から各地区に住民の自主  
運営するコミュニティ推進協議会が設  
立され、生活環境整備部会、産業振興  
部会、教育文化部会、健康づくり部会  
によりさまざまな話し合い活動や実践  
活動が展開されて来ました。近年は組  
織体制が固定化され、組織の高齢化と  
相まって事業活動の停滞やマンネリ化  
が懸念されていますが、町民の自立と  
連帯に支えられた、活力ある町づく  
りを進めるため、地域コミュニティを生  
かしたまちづくりが行われています。

今後は、これらの組織を活かして、  
活力と将来性に満ちた農業の振興を  
図っていくための学習会や事例研究会  
を開催し、新たな特産品・ブランド品  
の開発や更なる都市と農村交流の推進  
などを目指します。八千代グリーンビ  
レッジやクラインガルテンを拠点とし  
て、都市住民との交流を通じ、憩える  
わが町をPRしていきます。八千代町  
の農産物応援キャラクター「八菜丸」  
は、何処にでも出かけて行き、町のイ  
メージアップのために、ますますハリ  
キッテ頑張ります。どうぞよろしくお  
願います。

▲クラインガルテン入村式で  
談笑する皆さん



八千代グリーンビレッジ・クライ  
ンガルテンなどの施設については、  
八千代町ふるさと公社が指定管理者制  
度により管理運営をしております。気  
軽にお問い合わせ ☎0296-48  
-4126 ください。八千代町ホー  
ムページでも紹介しておりますので、  
皆様に八千代町への思いを深めていた  
だければ幸いです。

多くの皆様のお出でをお待ちして  
おります。

八千代町長 大久保 司

(平成25年10月21日付第2885号)



新潟県 出雲崎町



# どづらまちっく日本海、良寛さんの心の町

〜恵まれた自然と歴史のなかで  
安全・安心に暮らせるまちづくり〜

## はじめに

出雲崎町は、新潟県のほぼ中央に位置し、南東部を長岡市、西部を柏崎市に接し、北西部は約9kmにおよぶ海岸線を有し、佐渡と対峙しています。

町の面積は、44・38km<sup>2</sup>で、このうち約7割を山林面積が占めています。また、人口は平成24年3月末で5、030人となっています。

出雲崎は日本海に面した海岸地区と内陸部の駅前地区に大別でき、海岸地区は、江戸時代に佐渡からの金銀荷揚げの地として栄え、越後では最初の「天領」となりました。このことから越後経済の中心地として栄え、今でもその名残りとして「妻入りの街並み」が連なっています。また、生涯において寺を構えず無一物に徹し、清貧の思想を貫いた聖僧「良寛」もこの地で生まれました。一方、駅前地区は、南北

朝時代の古戦場や戦国時代の城址などの史跡が残されており、戦前は教育の村として先人の功績も大きく受け継がれています。

町の産業構造は、第1次産業では、農業と漁業が中心で、農業では、稲作と酪農が主体となっており、第2次産業農家がそのほとんどを占めています。また、漁業は過去5年間の平均で年間2億2、000万円程の漁獲高をあげており、県の中核漁業基地となっています。第2次産業では、就業者30人以下の製造業が多く、第3次産業は一部を除いて事業規模は小さいものばかりです。産業別就業者の割合は、現在では、5割以上が第3次産業への就業者となっています。

当町は、昭和32年に内陸部の西越村と海岸地区の出雲崎町が合併し、新生出雲崎町として誕生しました。その後、平成15年7月に合併協議会（法定）を立上げ、合併の道を模索しましたが、

出雲崎町町章



◀妻入りの街並み



**魅力あふれる出雲崎の歴史を後世に伝えるために**

かつて越後の海岸線に沿って東西

翌年11月に協議を終了し、当面は、自立の道を歩むことになり、現在に至っております。

しかしながら、人口減少は深刻な課題であり、昭和の合併当時は12,000人だった人口が、現在では5,000人ほどとなり、高齢化率は、36.2%となっている過疎地域です。

に伸び、佐渡から江戸へと金銀が運ばれた「北国（ほっこく）街道」は、江戸時代、東海道や中山道に次ぐ重要な街道として宿場町が多数点在していました。

とりわけ江戸幕府の直轄地「二大領」であった出雲崎はその要所として大変な賑わいをみせました。この当時の税金は間口の広さで取っていたため、間口が狭く奥行きの長い「妻入り」の街並みが日本一の長さに渡って形成されました。

町では、この妻入りの街並みを保存するため、妻入りの形状の建築物の

増改築や新築に助成金を出すなどしています。

また、昭和62年から東京藝術大学日本画科の大学院生・院卒業生から毎年出雲崎町に来ていただき「街並みをスケッチする合宿活動」として、街並みのスケッチ画を描いていただいています。このスケッチ画は平成23年までで346点を数え、町の宝となっています。

**観光資源を活用して全国に向けて情報発信**

出雲崎は平成16年の新潟・福島豪雨、中越大震災、平成19年の中越沖地震と立て続けに災害に見舞われました。これらの災害からの復旧・復興に奮闘するなか、演歌歌手ジエロさんのデビュー曲「海雪」が大ヒットし、出雲崎の名が全国的に広まり、

出雲崎を元気づけてくれました。このことが縁で、平成21年にジエロさんに町の観光大使へ就任していただき、現在も出雲崎を全国にPRしていただいています。

また、「おけさ」源流の地と言われている出雲崎で古くから唄われている民謡「出雲崎おけさ」を全国に広めるため、民謡歌手剣持雄介さんに「出雲崎おけさ大使」へ就任していただいています。

ジエロさんや剣持雄介さんからは町で開催するイベントに出演していた



▶街並みスケッチ画

◀毎年開催される「出雲崎おけさ」の全国大会



◀イベントでライトアップされた「夕風の橋」



だいており、多くの観光客などに楽しんでいただいています。

そして、町の各種イベント会場となる道の駅「越後出雲崎大領の里」にある「夕風の橋」からは、世界一大きいといわれる夕日を見るのができ、この橋の欄干に鎖を結び鍵をかける恋が成就するといわれ、いつしか「恋人たちの橋」と呼ばれるようになりました。

### 人口減少に歯止めを — 定住促進に向けての施策

町では人口増加・定住促進のため、平成23年、若者向けの町営住宅を建築しました。

この町営住宅は、新築の3LDK一戸建て3棟で、入居条件を「定住する意思を持って転入する者」で「申込者が40歳未満かつ40歳未満の配偶者が

同居する者」または「配偶者と中学生以下の子が同居すること」などとした。家賃は月額4万円に抑え、さらに扶養する子が1人いると5千円、2人では1万円、3人以上では1万5千円を減額することで、子どものいる世帯が入居しやすい設定にしました。また、将来この住宅を購入することもでき、定住していただくための支援として、入居から10年以内に購入される場



▶若者向け町営住宅の見学会

合には、それまで納めた家賃の一部を購入費に充てるものとして、最高150万円の支援金を支給することとしています。この住宅の募集には周辺市町村や、県外からも応募があり、申込者が募集数を大きく上回ったため、応募者の中から3世帯を決定しました。

町では、今回の町営住宅の評判・効果等を検証しながら今後の町営住宅の建設を行いたいと考えております。

### おわりに

ここまで町の取り組みを紹介しましたが、おぼろげながらも、出雲崎町のイメージを想像できたでしょうか。

町では、人口減の歯止め、定住人口の増加を目標とし、町民の方からは、町の文化や歴史を理解し関心を持ってもらうとともに、地域文化の振興を通じて町の良さを理解していただき、町外の方に対しては、まずは、出雲崎町の名前を覚えていただき、次に訪れ、感じてもらう、最終的には住んでもらうという施策を展開し、恵まれた自然と歴史の中で「安全・安心に暮らせるまちづくり」を進めたいと思います。

出雲崎町 総務課企画係

(平成24年4月16日付第2797号)



わかさちょう  
福井県 若狭町



# 若狭町と東京をつなぐ 交流人口増加と定住促進へ

## はじめに

若狭町は、福井県南西部の若狭地方のほぼ中央に位置し、北は日本海、南は滋賀県に面しており、平成17年3月31日に2つの町の合併によって誕生した、人口16,045人、4,998世帯の小さな町です。

平成17年11月にラムサール条約湿地に登録された「三方五湖」、近畿一美しい河川「北川」を始め、名水百選に選定された「瓜割の滝」や「熊川宿前川」といった素晴らしい水資源に恵まれています。

このように豊かな水環境、山や里の自然を守り活かし、後世に伝えていくことを目指し、平成18年3月に「若狭町環境宣言」を制定しました。

一方で歴史を紐解くと、この地の歴史は1万年以上前の縄文時代にまでさかのぼり、「縄文遺跡」や「古墳」が数多く点在し、国道303号は、かつて日本海と畿内を結ぶ「若狭街道」

として多くの物や文化が行き交い、街道に沿って栄えた宿場町「熊川宿」は、国の伝統的建造物群保存地区に指定されています。

産業構造としては、第1次産業への従事者が11.7%と全国平均に比べるべく、日本海側では最大の生産量を誇る「福井梅」の発祥地である三方五湖畔には、多くの梅林があり、春先にかけて梅花が見事に咲き誇り、心を和ませてくれます。

## 輝きと優しさに出会えるまち

若狭町では、まちづくりの基本方針を示した「若狭町総合計画」を平成18年度に策定しました。若狭町総合計画は、平成19年度～28年度までの10年間の計画期間として、将来像を「優しさ」と輝きに出会えるまち」と定めています。

そうした中で、社会情勢が刻々と変化する中、町を取り巻く環境も変化し、新たな課題も発生してきたことから、基本計画を見直した後期計画とし

若狭町町章





て、「若狭町まちづくりプラン」(平成23～28年度)を策定しました。このプランでは、「次世代定住の促進」と「住民自治の推進」の2つの基本戦略を設定しています。

### 次世代の定住促進

基本戦略のひとつである「次世代の定住促進」の取り組みを紹介します。平成23年度に、行政、事業所、地域、学校、各種団体、関係機関が連携した「次世代定住促進協議会」を設置し、定住意識の高揚を図り、官民が一体となつて人口の減少に歯止めをかけ、地域活力の活性化を図ることとしました。特に、事業所ネットワークを活用した定住の促進やUターン者(移住者)を増やすための事業を強化していきます。

具体的な方策としては、東京や大阪で若狭町の魅力や定住情報を説明する「ふるさと暮らしセミナー」の開催、都市部等に居住する町出身者と町内在住者を結ぶ組織づくりなど新たな定住を目指した取り組みを行っています。

### ふるさと回帰支援センターとの連携

ふるさと回帰支援センターは、条

件さえ合えば地方で暮らしてみたいと希望する大都市生活者の移住を支援する目的で、2002年に設立されたNPO法人です。

全国の自治体で進められている定住への支援と連携し、都市住民に田舎暮らし(移住)の情報提供と相談を行っています。

そつした取り組みが、若狭町が進める定住促進の施策と共通しており、より連携を強化することで利点があるとの思いから、平成23年4月から職員1名を東京のふるさと回帰支援センターに出向させました。

多くの都道府県や市町村が支援センターの会員となつているため、間接的には約900の自治体の情報が入る利点を活かし、幅広いネットワークが構築できたと思っています。

若狭町から東京に、またこつしたNPO法人に職員を出向させるのは、もちろん初めてのことでした。

ここで、若狭町と東京をつなぐという観点から2つの事例を紹介いたします。

### 若女将インターン

若女将インターン事業は、主に都市部在住の女子大学生が若狭町の漁師民宿にインターンシップに入り、仕事

の体験やSNSによる魅力発信を行うものです。

若狭町には約100軒の民宿があり、朝獲れの新鮮な旬の魚、宿の主人と女将の家族的なおもてなしが最大の魅力です。これを自当に京阪神、中京方面から多くのリピーターが訪れています。

しかしながら、年々宿泊客が減少しているとともに、後継者不足から民宿の数自体も減少しています。この状況を少しでも改善するきっかけづくりになれば、平成23年度から2ヶ年間で本事業に取り組み始めました。



▶若女将インターン生と森下 裕町長(中央)

2ヶ年間で18名の女子大学生と1名の社会人に参加いただき、それぞれが1人ずつ1軒の宿に入り、インターンを行うとともにSNSで若狭町の魅力を発信し、最終日には今後の集客案などの提案を行いました。

普通に学生生活を送っていたのでは接点のない首都圏の学生と若狭町ですが、若女将インターンがきっかけで、お互いにとってよい縁ができました。参加者から「今後も私達に若狭町のPRの場をください」との提案があり、現在も若狭町観光サポーターとして、若狭町のPRに一役かつてくれて



▶女将とともに夕食の準備をするインターン生

◀ インターンの様子



います。  
彼女たちにとって、若狭町を第2のふるさととして、また帰郷してくれることを楽しみに待っています。

## 東京若狭会

2つ目の「東京若狭会」は、平成24年2月に発足しました。

東京を中心に首都圏に生活している若狭町出身の方で構成する団体で、定期的に集まって親睦を深めたり、首都圏で行われる若狭町の特産品販売イベントに協力してくれたりしています。現在、会員は約30人ですが、□□□□で少しずつ拡大しています。

年代は30〜40代が多く、若い力がふるさとを応援してくれるのは心強いことです。職場も住む場所も違う人々

が「東京若狭会」という形で集まることにより、活動の場が広がり、また新たな人脈の構築につなが

るきっかけとなっています。  
遠くふるさと若狭町を離れ、元気で頑張ってくれている仲間たち。東京若狭会の会合では、私

ちのふるさと若狭町の話に始まり、離れてみて改めて感じる魅力ある地域に自信と誇りを持って、若狭町の為に広告塔となつて役立ちたいと胸を張ってくれます。

頼もしい仲間たち、若者に大きな拍手を送り、これからもますます活躍されることを願っています。

## 今後のさらなる交流人口の増加にむけて

若狭町は古くから交通の要衝として発展してきましたが、少子高齢化による人口減少、長引く景気低迷など、多くの地方都市が抱える問題に直面しているのも事実です。

しかしながら、若狭町にとっての明るい展望も開けています。

◀ 東京若狭会による特産品販売イベントの様子



平成26年7月20日には「舞鶴若狭自動車道」が全線開通し、若狭町へのアクセスが充実したものとなりました。現在は、平成30年3月に（仮称）三方PAスマートインターチェンジの併用開始に向けて事業に取り組んでおります。

また平成30年には、「福井国体」が開催され、県内でも有数の競技人口を誇る「ゲートボール」「グラウンドゴルフ」の会場に指定されております。さらには、三方五湖のひとつで、面積水深共に最大の湖である「水月湖」では、2006年に英国ニューカッスル大学の行ったポーリング調査によつ

て、過去7万年間の様々な地球環境の歴史を刻み続けた「年縞」が発見され、2012年の国際会議で地質学的年代の世界標準と評価されました。

このように、さらなる交流人口の増加の可能性を多く秘めており、自然や歴史文化などの魅力がいったいの若狭町のさらなる発展と交流人口の増加と定住促進を強く推し進めていきたいと考えます。

最後に、ふるさと回帰支援センターへの職員の派遣によって、多くの人脈、つながりができ、当町の持つ魅力発信、都市圏での情報収集、そして派遣した職員自身の人格の形成につながったと思っています。

前例もない環境の中で、自信、誇りを持って自分の考え方をまとめ、交流を深めてくれたこと等、2年間、家庭を持ちながら家族の理解の中で明るく元気で笑顔を決やさず頑張ってくれたことに感謝とお礼を申し上げます。

また、平成25年4月には二人目の職員がふるさと回帰支援センターに出向し、若狭町発展のため尽力してくれました。今後も同センターで得た知識と人脈等を活用し、より一層活躍してけると期待しております。

若狭町長 森下 裕

(平成25年8月5日付第2849号)

▼3月3日に行われる北相木に伝わるひな流しの行事。子供たちが作ったひな人形をワラで編んだ「さんだわら」にのせて相木川に流すと、人形が身代わりになって災いから守ってくれる。「家難」「河難」を払うという意味があるといわれている。

移住・定住・交流人口促進、  
空き家・空き店舗活用 関連施策

現地レポート

# 山村留学と移住の村・北相木

## 好きです！信州北相木



きたあいきむら  
長野県 北相木村

### 北相木村の現状

人口わずか815名。全国でも少ない方から11番目の村（離島を除いた順位。離島を含めると少ない方から21番目）。長野県の東端に位置し、あの日航ジャンボ機の墜落事故のあった群馬県上野村に接しています。

815名中、イターン者が150名。イターンの割合がなんと20%弱という村です。約20年程前から積極的にイターン政策に取り組んできた成果ですが、もしイターン政策を行っていなかったら…現在の北相木村はどうなっていたのか…。

もっとも今日では北相木村に『イターン』という言葉は存在せず、移住したその日から真の仲間である村民なのです。イターンの先駆者として27年前に移住してきた男性（60歳）は現在、村の公民館長として活躍していますが、

移住当時を振り返ると『風貌も風貌なので、皆にはジロジロ見られたり、よそ者だつて言われた』（本人談）と笑って話し、『今移住して来る人は全然怪しまれなくていいよね』…と続いて話してくれました。

人口815名の村の平成25年度の小学生は総勢43名。内訳は山村留小学生13名・イターン者23名。そして村出身者の子供が7名であり、言い換えれば山村留学政策とイターン政策で小学校を維持していることとなります。

実は、山村留事業の衰退に伴い、平成22年度には小学校の全児童数が27名まで減少し（1学年たった3名の学級が3学年ありました）、村出身者の保護者を中心とした『小学校問題を考える会』から隣町小学校への統合に関する請願書が提出され、また一方、イターン者の保護者を中心としたメンバーからは統合に反対する請願書が提出され、議会においては苦渋の選択で

北相木村ロゴ



『統合に関する請願書』が採択となりました。

昭和62年度から東京に事務局を置く「財）育てる会」と共に歩んできた山村留学事業でしたが、児童数の確保等の問題により平成21年度をもって育てる会が撤退したことが大きな要因でした。『統合に関する請願書』の採択を受けて、村は一大決心をしたのです。山村留学事業の経過とともにお話しさせていただきます。

### 山村留学事業の経緯

北相木村の山村留学事業は、昭和59年に短期で、そして同61年に「北相木村山村留学センター」の建物が竣工し、翌62年度から、(財)育てる会により、長期の山村留学がスタートしました。初年度の留学生は8名でした。ここから平成21年度までは、毎年5〜8名前後の受入を行い、小学校の活性化や、複式学級の解消に貢献し、さらには「子どもの声が帰ってきた」という思わぬ効果も生み、村民に広く山村留学の制度が浸透していきました。

しかし平成21年に、募集児童数の確保の問題などから、(財)育てる会が北相木村での活動停止を決定します。



▲夏には、村内にあるキャンプ場「長者の森」で川遊びをします。

もちろん村では、様々な意見が出されました。

そこで、平成22年度については、センターは使用せず、受入農家のみで児童を預かる、村独自の山村留学事業を行いました。この時の受入児童数はわずか3名でした。このままでは、北相木村の山村留学は継続が難しい…。そこで、村当局、教育委員会では協議や視察を重ね、長野県木曾郡王滝村で山村留学事業を行っていた『企業組合こども森』への視察をきっかけに提携を模索し、話し合いの結果、平成23年度から、こども森スタッフから主任指導員を迎えることとなりました。加えて、総務省の「地域おこし協力隊」制度を利用した新しいスタッフの確保

などにより、村直営という新しい形で山村留学制度が開始されたのです。

一人の応募もない、という可能性も含んだ状態でしたが、結果的にはこの年、10名の児童を迎え入れ、新しい「北相木村山村留学事業」が始まりました。さらに平成24年度にはスタッフの増員と中学生の受入を開始し、児童生徒17名というこれまでにない大所帯となりました。小学生の受入児童数16名は、この年の全国の山村留学のなかで一番多い数でした。続く平成25年度も児童生徒15名の留学生が、北相木の子どもとして生活しました。

また、平成23年度からは、秋に「体験発表会」を行っていますが、ここで子どもたちは、自分で決めた研究の発表を行い、練習を重ねた和太鼓と沖繩



▲センター横にある畑で、毎年色々な野菜を育てています。この時は落花生を収穫しました。



▲山村留学で一番のイベントである「体験発表会」。各自が北相木に来て興味を持ったことを研究して発表します。また、村の方やお世話になった方々へ、民舞、和太鼓を披露します。

演舞エイサーの披露もあり、多くの大人たちを感動させてくれます。

一年間の留学で、子どもたちは確実に変わります。3月の修村式では、成長した我が子の姿に涙する家族の姿が見られます。そしてそれらの感動は、村と他地域の人々との絆となり、様々な交流も生まれています。現在も、村の成人式に留学生を招き、旧交を深める機会を作っていますが、今後はOB会の設立も視野に入れ、より多くの交流の場を作っていく計画です。

### 山村留学事業の効果

山村留学事業は村に様々な効果をもたらしております。三つ具体的に書かせていただきます。

▲農家さんに教えていただきながら、山村留学での労働体験「田んぼ作業」で、一番大切な作業です。



▲立派に育った稲を、自分達で刈り取っています。この後も「脱穀」「籾すり」という作業をして、精米し、初めて自分達で作ったお米を食べられる様になります。



数年前に、山村留學生時代に民泊をしていた農家に遊びに来た山留卒業生の少女（現在では33歳になります）が、久しぶりに同級生と再会。意気投合し：愛が芽生え…見事にゴールイン!!今では押しも押されぬ村を代表する『おしどり夫婦』であります。

二つ目は、山村留学をしていた孫の祖父母が北相木村を大好きになっしまい、祖父の定年退職を機に村営住宅に入居し、孫と一緒に定住しました。村や地区の活動にも積極的に参加され、田舎暮らしを満喫されています。

三つ目が中学生。中学校は隣町村との1町2村での組合立となっていて、村では山村留学の受入は小学生のみということでした。しかし、平成24年山村留学を2年間過ごし、北相木小学校



▲新聞紙や燃料を使わず、周辺にある自然のものとマッチだけで火をおこす練習をしています。



▲子供達の冬一番の楽しみは、スキーのようです。隣町の小海リエックススキー場にて。

を卒業していった少女が：大好きな北相木村を忘れられず…2学期から山村留學生として村に戻り、組合立中学校に編入してしまいました。そして、昨日新しく中学生として1人が継続を決定し、平成27年度も新たに1名が組合立中学校に入学することから中学生は3名になります。そんなに北相木村が好きなんだと…。村の意図とは全く違ってしまいますが、嬉しいことです！

## 終わりに

議会では小学校の統合について採択されましたが、今現在は保護者からも統合に関する話題は立方消えていま



▲秋には松本市にあるりんご園で、収穫体験をさせていただいています。りんご園の方から、収穫までに至る大変さを聞き、子供達は改めて、収穫できる有り難さを実感しています。

す。小学校のない自治体にはなりたくない一念で職員も頑張っています。そんな職員を代表して一言…

信号が一つもなく、コンビニもない村。でも、この村には…真つ青な空と澄んだ空気、美味しい水、豊かな森の緑があります。そして、人々のころには温かさがあり、子供からお年寄りまでいきいき暮らしています。

あなたも、こんな北相木村での暮らしを考えてみませんか。今、北相木村では田舎暮らしを応援しています。『求む！村民』プロジェクトが進行中です。ぜひ一度、北相木村を訪れてみてください。きつと大好きになりますよ。合言葉は『好きです！信州北相木』。

北相木村 総務企画課長

(平成26年3月31日付第2874号)

▼板井原集落にある古民家で囲炉裏を囲む疎開体験ツアー参加者

現地レポート



ち づ ち ょ う  
鳥取県 智頭町

# 災害を切り口とした地域間交流と 地域おこし「智頭町」疎開「保険」

## 自治体発！自治体初！

「みどりの風が吹く、疎開のまち」をキャッチフレーズにまちづくりをすすめている智頭町は、鳥取県の東南部、岡山県との県境に位置しています。周囲は1,000m級の中国山脈の山々が連なり、その山峡を縫うように流れる川が合流して千代川となって日本海に注いでいます。そして、長い歳月を経て、鳥取砂丘の砂を育んだ、源流の森が広がっています。まちの総面積の93%が山林で、スギをはじめとする見渡すかぎりの緑が一面に広がり、春には、ソメイヨシノ、シャクナゲ、ドウダンツツジ、夏には清涼な緑、秋は紅葉、そして冬には雪化粧と、1年を通してまちを彩る美しい自然にあふれています。

平成23年4月から始めた「智頭町」疎開「保険」の発案者は寺谷誠一郎

町長。「保険」と名前はついでに、災害を切り口とした地域間交流、物流、商流による地域おこしです。地震等の災害が起こったとき、一番困るのが生活場所の確保。「地震・噴火・津波等を原因とする災害救助法が発令された地域の加入者」に「智頭町内および近隣町村提携施設での1泊3食7日分の食事と宿泊場所の確保・提供」を行う。



▲ 町内の新田集落の田んぼの風景

智頭町町章



▶ 智頭野菜新鮮組のメンバー



「農業を軸にするにはどうしたらよいかと考えたとき、主たる農業従事者

### お年寄りに元気を、地域に交流を

また、加入者特典として、智頭町自慢のこだわりのお米や安全でおいしい野菜などの特産品をお届けする。日本に在住の人で、先着1,000名までの受付。加入金(保険代金)は1人1万円、保険期間は1年間でスタートし、現在は全国約350名の方が加入している。

「お年寄りが土からこだわって作ったホンモノのお米や野菜を買い取る。今まで家族で食べる分だけで、たくさん作っても余っていた。作った分を買い取ってもらえるとなると張り合いもでるし、ちょっとしたお小遣いになって元気になる。このお米や野菜が届いた都会の人は、智頭町のファンになる。森林セラピーや農家民泊があるから疎

開の下見に行こうかと交流が始まる。」と町長。  
 「かわいい孫に食べさせたくて作った野菜をほんの少しおすそわけ」という気持ちのお年寄りたち。何をどれだけ作って出荷するかは自由。作った野菜を収穫できただけ集荷場所に持ち寄る。集荷日に集まった野菜を、みんなで作業を分担して一斉に箱詰めして加入者に送る。そして、安全・安心で新鮮な野菜をまごころ込めて作る生産者のグループ「智頭野菜新鮮組」も誕生した。みんなで作業しながら野菜作りの情報交換をしたり、箱詰めの方法について話したり、この場でも人と人のつながりが広がっている。



▶ 智頭町自慢のこだわりのお米や野菜などの特産品

「知り合いにお餅を作って送る時にはね、南天の葉を上のにのせて送るのよ。南天は難を転じると言ってるね。」とメンバーのおばあさん。

小包を受け取った加入者からは、その心遣いに感謝する手紙が送られてきた。花瓶に入れると元気を取り戻し、秋の風情が感じられてよいと。手紙とともに、飾られた花、届けられたお米と野菜、それを手に意公子どもたちの写真を送ってくださった加入者もいる。お互いに会ったことのない加入者が多いが、電話や手紙をいただく、「あー、あの方ね」と親しみがわいてくる。ま



▶ 森の中でゆったりと深呼吸

◀ 田舎暮らし体験住宅「いろりの家」



が子どもを床にたたきつける。そんな都会のストレスから逃れてみんな田舎にいらっしやい」と町長。「いよいよ田舎の出番です」ということで、数年前から人々を受け入れるための様々な取り組みを行ってきました。そのひとつが「森林セラピー」。

た、お米や野菜を宅配で送ってほしいと個別注文をする加入者もいる。「智頭野菜新鮮組」の野菜は関西でも産直販売されていて、生産者のお年寄りが更に元気になる。

様々なパンフレットやチラシ、新聞記事などを智頭町に送って情報提供や提案などで、応援してくださいる人もいる。疎開保険が縁で智頭町に興味・関心を持ってもらい、様々なつながりが広がっています。

### 智頭町でゆったりと

「災害に限らず、都会の暮らしはストレスがたまる。サラリーマンが働きすぎて疲れてうつ病になる。お母さん

森は町の大切な財産としてとらえ、森の持つ癒し効果に着目し、ゆったり深呼吸できる豊かな自然空間と人々とのつながりを育むまちづくりを行っている。「森のガイド」を養成し、県内初の「森林セラピー基地」に認定されている。

また、民泊協議会を立ち上げ、訪れる人々のために数十軒の民泊先も確保。疎開保険の宿泊先ともなっている。町内の民家に宿泊し、智頭町が「第2のふるさと」となるようにふれあいあふれる滞在型プログラムを用意している。

加入者に智頭町を訪れてもらうと、平成23年は1回、24年は3回疎開体験ツアーを実施。国指定重要文化財

「石谷家住宅」をはじめとして、昔ながらの古い建物の集まる遊歩百選「智頭宿」、昭和30年代の日本の原風景を今に残す伝統的建造物群保存地区「板井原集落」を散策し、民家に宿泊して田舎暮らしを体験、交流を深めていた。また、「森林セラピー」では「森のガイド」が一緒に芦津のセラピーロードを歩き、森の癒しに導いた。民泊は夕方からの1泊で初めて会った人同士にもかかわらず、翌朝の別れは名残惜しく、親しく交流を深めた様子であった。手作りのお土産を手渡す人もあった。加入者からお礼の手紙が届いた民泊家庭もあった。

既に森林セラピーと民泊を体験し、



▲ 国指定重要文化財「石谷家住宅」

◀ 民泊受入家庭と疎開体験ツアー参加者の顔合わせ



疎開体験ツアーでは以前と違う民泊先に宿泊した参加者がいた。ツアーに参加していることを知った以前の民泊先の人がある参加者に手紙を渡しに来て、再会を喜び合つという光景もあった。一度出来た縁はずっとつながっている。民泊は、森林セラピーや疎開保険以外にも利用されている。お酒を酌み交わし、話に花が咲いたということもあるようだ。

町は、民泊の他に、移住や定住を考えている人が長期滞在も可能な「田舎暮らし体験住宅」も準備した。智頭



▼疎開保険チラシ

町での住宅探し、仕事探し、地域との交流、トレッキング、観光の基地として活用できる。東日本大震災での放射能汚染から逃れて、子どもを安全な所で過ごさせたいと数日間滞在した家族もある。数日間の滞在でも、新鮮な野菜のおすそ分けや地域行事への参加など、管理人や地域の人々とのふれあいがある。訪れた人は田舎の温かさに感激し、町民は外からの刺激を受ける。その家族は滞在中に、智頭の豊かな自然環境を育ちの場とし、雨でも雪でも町内9カ所の森のフィールドをお散歩し自由に走り回ったり遊んだりする

「森のようちえん」の体験も行った。「森のようちえん まるたんぼつ」は「智頭町の森の中で子育てできたら素晴らしい」と一人のお母さんが「百人委員会」(住民のアイディアを町政に活かすための政策提言組織)で提案し、町や県の支援のもと専属の保育士を雇って運営しているもの。この「森のようちえん」には、半数以上が町外から通っている。県境を越えて岡山から通つ子どもがいたり、移住した人もいる。「森のようちえん」を立ち上げ、事務局長として活躍するお母さんも、智頭の森に惹かれて家族で移住した一人である。

町外からの新たな風が吹いている。こども森が新たなつながりを生んでいます。

1月から制度変更

町長が「智頭町「疎開」保険」の記者発表を東京で行ったのは平成23年3月7日。その後「東日本大震災」が起き、PRもしばらくストップしていた。テレビや雑誌で取り上げられたり、問い合わせや申込みもあることから、秋にPRを再開しました。

平成24年1月には智頭町が加盟している「日本で最も美しい村」連合事務局の美瑛町東京事務所があるフォレスト虎ノ門で、疎開保険や森林セラピーのPRイベントを行った。町長が町の魅力を語り、智頭町産の食材を使った料理に舌鼓を打ちながら、参加者との交流を深めた。事前に電話やメールのやり取りがあった保険の加入者との対面では、親しく声をかけていただき、以前からの知り合いのようない気がした。

疎開保険事業は開始してまだ1年目で課題もある。

「家族7人で加入したいけれど、1人1万円だと入りにくいなあ。家族割

引はないですか。」「1人1万円となっているけど、家族コースはないですか。」

既に夫婦や家族で加入し、1家族で2〜4件加入されているケースもあるが、家族での加入を考えた場合に金額がネックになっているようなので、家族コースの検討を行った。加入期間も、年度途中で加入しても3月までとなっていたが、コースが多いことから、併せて変更することとした。問い合わせや加入申込みが相次ぎ、4月まで待ってもらおうのもどうかということで平成24年1月から制度変更をし、加入期間は加入日から1年間、新たにファミリー2人コースとファミリー3〜4人コースを設けた。2人コースは15,000円、3〜4人コースは20,000円。平成25年度末時点で、131口、278人が加入している。今後とも体験ツアーや交流会で、新たなつながりが生まれることであろう。

「よいよ田舎の出番です!疎開保険に加入し、ぜひ一度智頭町においでください。」

智頭町長 寺谷 誠一郎

(平成24年11月5日付第28-19号)



## 「最大の川柳教室 ～ LARGEST SENRYU LESSON ～」

最も参加人数が多い川柳教室として、ギネス世界記録®  
に認定され、「世界一 川柳の町 久米南町」となった。



## 岡山県 久米南町

### 久米南町の概要

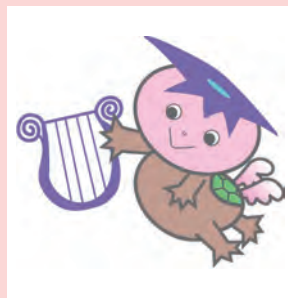
久米南町は岡山県のほぼ中央に位置し、県庁所在地の岡山市から北へ約40km、広域市町村圏の中核都市である津山市からは、南へ約20km、町の中心部を南北に国道53号とJR津山線が通っています。

昭和29年4月1日に弓削町、誕生寺村、龍山村、神目村の1町3村が合併して久米南町として誕生し、平成26年度に町制施行60周年を迎えました。古くから川柳によるまちづくりを行っており、全国的に「川柳の町」と呼ばれています。主な産業は、米作を中心とする農業で、おいしいお米をはじめ甘くて大粒のピオーネに代表されるブドウ、キュウリ、アスパラガス、ゆずなど多くの農産物を生産しています。また、山間部では中山間地域特有

久米南町町章



マスコット



「カッピー」

### なぜ今定住促進なのか？

の棚田やため池があり、「日本棚田百選」に「北庄」「上粕」の2カ所、また北庄「神之淵池」が「ため池百選」に選ばれています。町全域に光ケーブル網を構築しており、高速通信によるインターネット環境を整備しています。

久米南町の人口は、昭和30年の国勢調査では10,671人をピークに、平成22年には5,296人と減少しました。また、人口問題研究所の発表によれば、2040年には3,197人という、ピーク時に対して約3割程度の人口になるとの推計でした。

また、平成23年度の町内の出生者数も10人と過去最低の数字となり、平成24年の高齢化率は39.3%で県内2位となっています。そこで、平成24年

4月1日に人口減少・少子高齢化対策として、各課で行っていた定住施策を一本化するため定住対策を専門的に取り組む「定住促進課」を新設し、町外からの移住に関する相談への対応や空き家情報の収集・提供、Uターン・Iターン希望者に向けた町のPRなどの取り組みや企業誘致、まちづくりなどを主な業務として設置しました。

平成24年度は、定住相談の窓口を

一本化したことや東京・大阪の定住相談会に積極的に参加したことにより、98組の方から移住相談を受けその内9組の定住につながりました。その他にも、「若者定住促進住宅の建設」「移住体験ツアー」「定住促進プロジェクトチームの設置」など、各事業で町民や移住者と意見交換を中心としたワークショップを行い、定住に対する意識の向上を図ってきました。

子どもが極端に少なくなった事態への、本町の対策は、若者が住みやすい環境を整備することでした。平成25年度建設中の建物を含め、2か所11戸の若者向け住宅を整備しました。この住宅は、設計段階で子育て世代を交えたワークショップを開催するなど、若者が住みやすいと感じてもらえるような設備や間取りで設計しました。また、駐車場には電気自動車に対応できるコンセントを設置するなど環境に配慮した整備も行いました。

### 子育て世代が住みたいまちへ

◀子育て世代を交えたワークショップ



▶移住体験ツアー



▶住民を交えたワークショップ

さらに、家賃をおさえた町営の住宅に入居できなかった若者には、月額家賃の4割（上限15,000円）を交付する「民間賃貸住宅家賃助成事業」も施行しました。この制度は、空き家改修の補助との相乗効果を生んでおり、今後さらなる空き家の活用を期待しています。

### 空き家確保のため

全国的な人口減少の動きは、新しい動きも生み出しました。減る人口に対して増える空き家。空き家を利用した制度が全国各地で行われる中、本町も平成20年に「空き家・空き農地情報バンク制度」をスタートさせました。しかし、登録物件数が少なく、移住相談があっても条件にあった物件を紹介

◀空き家再生講演会



で、町内に定住した方を紹介すると同時に空き家提供者の感想を掲載し、空き家を貸すメリットを町内の方へ伝え、空き家確保に努めています。

### 眠る資源「空き家」を活用

空き家バンク制度をスタートしたものの、利用が無い状態が続きました。そこで、空き家の活用を促進すべく平成22年に「空き家活用促進事業」を施行しました。

「空き家活用促進事業」は、空き家の改修に係る補助対象経費総額の4割（上限額100万円）を交付します。利用実績は、平成22年度に1件、平成23年度に4件、平成24年度5件、平成25年度10月

現在で8件と制度活用者が増加しました。定住促進課発足以降は、多くの方に申請いただくこととなりました。

また、移住者や地域住民の方からの声を受け、対象者の規定も「転入後1年未満」から「入居後1年未満」へ一部改正をしました。改正には2つの声がありました。1つ目は移住者からの声で、生活して初めてわかる様々な

ことや新たな人間関係を得て、より魅力的な地域や空き家へ移り住みたいというもので、町内での移住に柔軟に対応することが求められました。平成24年あたりから町内移動や県内移動の相談が増加傾向にあり、時には空き家バンクに登録されていないが、新たな人間関係ができたことで空き家賃貸が成立するケースもありました。2つ目は町民からの声で、町内には不動産業者が無く、賃貸物件数も多くないため、単身者や結婚を機に住む場所を探し、転出するケースがありました。町営の若者定住促進住宅以外でも、補助金を利用できることで空き家を選択肢としてとらえてもらうためです。これにより、入れる定住だけでなく、出さない定住にも対応できる制度となりました。

### 空き店舗の活用へ

多くの移住相談を受ける中、本町の大きな課題は働く場所の確保です。本町は交通網に多少恵まれているため、町民の多くも町外で働いています。町内での仕事を希望される方については、就農以外で見つけることは非常に難しいのが現状です。また、大企業や工場などの企業誘致も容易なことでは

ありません。そこで、個人や小規模企業の起業をサポートするため、平成24年度から「起業家支援制度」を制定しました。この制度は、空き店舗等の改修に係る補助対象経費総額の4割（上限額200万円）を交付します。平成25年10月現在で3件の申請があり、移住者による民宿や農業等を通じた福祉事業等が開業し、町内の空き店舗が流動化することとなりました。今後、田舎で起業したい方への誘引となればと考えています。

### 受け入れる地域へ

定住施策を進める上で浮上した課題は、いかにして行政と地域の協力をとるかということです。これは、地域のしきたりやつきあいを重んじる小さな町にとって大きなテーマとなっています。行政のみで定住を進める場合、移住者と地域の距離が埋まるまでに時間がかかります。この距離を縮めている間は、誤解や軋轢を生み易く、定住の妨げとなります。また、空き家の提供についても、行政のみの動きでは限界があり、地域との連携や協力をとることが重要となります。事実、本町においても移住に関心が高い地域

することが出来ず、相談に応じられないケースがありました。そこで平成25年度は、空き家の登録物件増加を目指し、町外にお住まいの方を対象に固定資産税の納付書に空き家の募集チラシを同封した結果、3件だった物件数も6人の方から登録依頼があり、計9件に増加しました。

また、空き家確保のため町広報紙

◀若者定住促進住宅「こうめき番館」



では、行政の関与が無くとも移住者を受け入れ、地域の方が声をかけ、移住者が地域の敬老会でパフォーマンスを行う等、移住後も地域との距離がスムーズに縮まっています。

地域へ移住や空き家の理解を広めるため、空き家再生の講演会の開催をはじめとし、移住者が地域へ入ることのメリットを伝えて定住意識の向上に

努めています。また、平成25年度は町と地域とがより連携した移住対策の取り組みとして、定住モデル地域を選定し、移住者が相談時から地域と関わりを持ち、地域も移住者の顔がわかるように地域の定住窓口を設置し、空き家紹介や引っ越し支援、移住後のサポートなども行う仕組みを構築しています。

その一環として、移住者の声を聞く「移住者座談会」を開催し、移住者の方から積極的に地域に出る必要があるとの声を聞くことができました。今後は、移住者の方のニーズと地域の出来るサポートを調整し、町独自の定住相談のスタイルを構築していきます。

### 移住者を身近に

移住に対する先入観をなくすため、平成24年度から広報紙に移住者インタビューコーナーを設け、実際に顔を知ってもらう活動を始めました。移住してきた方が、どのような仕事をして、どのような地域活動に参加しているのかを紹介しています。この取材は、で

きるだけ移住後2〜3カ月経過した方を中心に行うようにしています。役場のカウンターで近況を伺うだけでなく、実際の生活を見ながら、困っていることや楽しいことを聞ける貴重な時間となっています。

### 5いひと1つぱい久米南町

定住促進事業が本格化して平成26年度3年目を迎えました。1年目には

行政が先頭に立ち定住促進を進め、2年目には地域と連携した取り組みを行い、3年目は行政と地域が連携した町内全体での定住促進を目指していきます。小さな町の定住対策は、1人の移住者にどれだけ多くの人が関わられるかが重要だと考えます。第5次振興計画のキャッチコピーは「5いひと1つぱい久米南町」です。人口減少・少子高齢化の問題に町内全体で取り組むことで、多くの「5いひと」がそれぞれの「5いところ」を持ち寄り、人が人を繋ぐまちづくりを目指しています。

久米南町長 河島 建一

(平成25年11月18日付第2800号)

(補足)

平成26年11月9日、町制施行60周年記念イベントで、「最大の川柳教室」がギネス世界記録®に認定されました。

久米南町を世界一にするため、427人のいひとが団結。受け継がれる町の文化が人の力で新たな魅力となりました。



▶移住者を交えた座談会

# 地域の誇りと笑顔の好循環



福岡県 上毛町

## ヒトが輝く元気な上毛町

全国的な少子高齢化の波は、上毛町においても山間の集落ほど著しく、過疎化は深刻さを増しています。これから10年先、あるいは50年先という中・長期の視点で考えたとき、皆さんは生まれ育った故郷にどのような未来を描くでしょうか。近年、「ヒトが元気」という客観的評価が聞かれるようになった上毛町では、豊かな自然環境に育まれた農林産物をはじめ、古い伝統文化を大切に育む地域活動が盛んに行われてきました。

平成19年度には、早稲田大学との連携により住民ワークショップを開催し、上毛町コミュニティ計画という住民による地域のための計画書が完成しました。この計画書は、町総合計画を補完するものとして位置付けられ、計画に沿った地域活動を応援するため、

平成20年度に上毛町地域づくり活動事業を創設しました。これは、地域づくり団体の後方支援を目的とした制度であり、団体に対して初動3年間、活動に必要な経費や情報発信、合同イベントの開催等の支援を行っています。

現在、町認定の「地域づくり活動団体」は38団体。住民自らの特技を活かし、「景観保全」「安全安心」「文化継承」「交流活動」「情報発信」などのテーマで、地域の元気のために楽しみながら活動が続けています。こうした活動の源には、地域の皆さんが考える「大切にしたいもの」や「無くしてはいけないもの」が存在し、それは住民皆さんが誇る地域の宝であると考えています。一人ひとりの誇りを集めて、その価値を内外に伝えていくことができれば、それがその「上毛町らしさ」であり、町の魅力であると考えます。過疎化に伴う課題は様々ですが、特に、後継者や担い手不足は重要なテ



都市づくり、地域づくり、  
コミュニティづくり部門受賞  
「九州福岡こうげのシゴト  
(雇用創出)×みらいのシカケ  
(定住促進)」

◀上毛町コミュニティ計画づくりの住民ワークショップ



マといえます。地域の誇りを後世に受け継ぎ、いつまでも元気な町として輝き続けるために、今、将来を見据えた垣根のない横断的で総合的な定住促進対策が求められています。

### 定住促進の取り組み

—キーワードは上毛町らしさ—

全国的に、減り続ける人口、増える空き家、地方自治体は軒並み定住促進制度を掲げて、空き家バンク制度や奨励金、短期滞在体験、交流イベント

など様々な対策を講じています。上毛町においても、「住まい」という切り口で、高校跡地を活用した宅地化事業を行っており、コモンパーク上毛彩葉<sup>いろは</sup>という名称で、電線の地中化や街並みの意匠を統一するなど、花と緑の落ち着いたある美しい住宅街を形成しています。現在、38区画（全76区画）の分譲を行っています。また、空き家バンク制度が平成25年10月にスタートし、利用者も増えています。

その他、暮らしを応援する三世代同居支援事業や、東九州自動車道整備に伴うスマートインターチェンジの設置など、快適な生活が実感できる環境づくりを推進しています。特徴的な取り組みとしては、定住をキーワードに「上毛町らしい」暮らしや仕事の在り方を追求する事業として、平成24年度から、住みたい上毛町推進プロジェクトを実施しています。これは、意欲ある住民の地域活動を基盤とし、持続可能な町づくりの仕組み（「好循環」）を構築することを目的としたものです。

### 住みたい上毛町推進プロジェクト

—コンセプトは「好循環」—

地域資源を活用した交流・暮らし・

仕事の「好循環」を作り出すために、2つの事業を展開しています。事業の主役はもちろん地域住民です。基幹産業である農業を中心とした上毛町らしい生業づくりの事業「こつげまち雇用続々プロジェクト」（愛称「こつげのシゴト」）と、地域貢献や町づくりに関心のある都市住民などを誘致する事業「お試し居住プロジェクト」です。これらは車の両輪として位置付けています。

#### (1)こつげまち雇用続々プロジェクト

—個性を活かした生業づくり—

上毛町ブランド創造協議会（町、商工会、地域づくり協議会などで構成、平成24年2月設立）が主体となり、厚生労働省の実践型地域雇用創造事業を実施しています。地域の生業を応援する（「商売繁盛のための人材育成」）ことで、上毛町らしい雇用創出を目指しています。

具体的には、各種研修やイベントを開催し、既にある原石（「農林産物、加工品、人材など」）に磨きをかけ、商品化するための知識や技術を、料理家や建築家、デザイナーなどの外部専門家が、講師としてアドバイスを行っています。ここで磨かれた商品や人材な

どを上毛町のブランドとして消費者に届け、相応の対価が得られることで雇用が生まれるという好循環が定着することを目標としています。

平成25年度の成果としては、グリーンツーリズムに取り組む中山間地域の東上有田地区で、5軒が旅館業法の民泊許可を取得しました。現在は、山野草を活用した石釜調理や散策活動などの体験プログラムの研究を行っています。

そのほか、12の研究テーマがあり、農業者・特産「川底柿」の生産組合・廃校跡地活用の交流センター・NPO



▶研修会の様子「ブログを活用した情報発信」

◀「山野草のフィールドワーク」の様子



しの居住体験プログラム「上毛町ワーキングステイ」を実施しています。上毛町について予備知識のない町外の方からの率直な意見や提案などを定住促進制度にフィードバックすることで、より「上毛町らしい」個性を活かした制度設計を目的とし、試行錯誤の中、手探りでスタートしました。居住体験の物件をイターン希望者にとってハードルが高いとされる山間地域の集落内に設定し、地域行事への参加を促すことで、相互のコミュニケーションや、受け入れ側となる地域住民の反応についても検証を行っています。

法人などの地域団体、さらには、からあげ専門店・温泉館・道の駅・天然醸造老舗醬油蔵などの事業所も参加しています。研修では、それぞれコンセプトワークを通じて素材や活動の価値を探り、課題の抽出と目標設定などを行っています。参加者自らが活性化への意欲を持ち主体的にステップアップできるよう、サポートを行っています。

(2)お試し居住プロジェクト

上毛町の魅力や課題などを外からの目線で掘り起し、町の活性化を加速させる取り組みとして、「上毛町暮らしの居住体験プログラム」上毛町ワーキングステイ」を実施しています。上毛町について予備知識のない町外の方からの率直な意見や提案などを定住促進制度にフィードバックすることで、より「上毛町らしい」個性を活かした制度設計を目的とし、試行錯誤の中、手探りでスタートしました。居住体験の物件をイターン希望者にとってハードルが高いとされる山間地域の集落内に設定し、地域行事への参加を促すことで、相互のコミュニケーションや、受け入れ側となる地域住民の反応についても検証を行っています。

▶居住体験物件「雁股庵」



ワークスペースとして開放しました。また、ワーキングステイ参加者の一人であるカメラマンが「KOUGE」という観光ガイドブックを自主的に制作するなど、想像以上の成果に繋がっています。さらに実際に上毛町への移住を希望される方も現れています。

ワーキングステイは、田舎への移住を考える方だけでなく地域住民にとっても、新たな気づきや刺激となり、外部人材積極誘致の気運が高まっています。これまでに全国から7組が参加しました。特に、平成24年度は3組の



▶ワーキングステイ参加者が制作したガイドブック「KOUGE」

多く見られるように、実際に「地域と関わる仕事があった」「町づくりに参加したい」という都会の若者は増えています。

何よりもまず、地域住民がいつまでも元気に活躍できる仕組みが必要だ

ということを念頭に、突飛でありながらも現実的で、より大きな効果が生まれる制度を目指しました。

ワーキングステイとは、その名の通り、「働きながら暮らす」ことに重点を置いたもので、体験参加者自らの仕事の持ち込みに加え、クリエイティブな発想とそれぞれのスキルに応じて、町に提言することを参加条件としています。その結果、上毛町の資源を活かした交流・子育て・教育・通信・空間づくりに至るまで、具体的な提案をいただくことができました。中でも、田舎に不足がちなインターネット環境の整備については、すぐに地域づくり協議会が取り組み、事務所をワーキングスペースとして開放しました。また、カメラマンが「KOUGE」という観光ガイドブックを自主的に制作するなど、想像以上の成果に繋がっています。さらに実際に上毛町への移住を希望される方も現れています。



募集に対して20組の応募があり、話題となりました。新しい上毛町暮らしのモデルづくりの確かな一歩となっています。

### 田舎暮らし研究村構想 —好循環による笑顔の連鎖—

平成25年度から、お試し居住プロジェクトの発展形として「田舎暮らし研究村構想」がスタートしました。住みたい上毛町推進プロジェクトの核となる構想でもありコンセプトである「好循環」を実現するために、外部の専門性や活力、客観性を取り入れる仕掛けをビジョンとともに示しています。ますます深刻化する地域課題と、能動的な外部人材のニーズのマッチングを促進することで、多様化する現代社会において、新しいアイデアとともに、適宜、町に相応しいプロジェクトを提案し、実施しています。

例えば、農業応援・担い手育成・商売繁盛アドバイス・新しいビジネスの創出・空き家の活用など、これらは全て賑わい創出の源であり、「定住」という分母で横断的な取り組みを促進します。目指すのは、埋もれている魅力を地域住民の誇りと自信に変えるこ

とです。小さな好循環を起こす「種」を同時多発的に蒔き、やがて大きな笑顔の連鎖へと繋がっていくこと、それが構想の研究テーマです。

「構想に掲げるプロジェクトの例」

(1)お試し居住の拠点づくり「田舎暮らし研究サロンの開設・運営」

都市部との交流が盛んで、素晴らしい眺望を有する東上有田地区に研究サロンを開設します。ここからは、遠く周防灘から山口県まで見渡すことができます。研究サロンは、交流・移住・



▶田舎暮らし研究サロン「改修中の古民家」

定住促進のためのシンボルであり、地域で暮らすことへの理解を深め、これからの田舎での暮らし方や働き方を、新しいアイデアと共に皆さんで考える場所です。移住希望者や交流体験参加者などが最初に訪れる「入口」としてスタッフ（研究員）が常駐し、地域への橋渡し（紹介）を行います。誰もが、いつでも好きなときに交流や文化体験ができる場所として広く一般に開放していきます。

また、様々な専門家が集まる場所として、地域内外のあらゆる分野において「頼れる拠点（田舎のシンクタンク）」を目指し、定期的に、研修会やイベントなども開催します。

①学生と地域による空間づくり  
研究サロンの設置には、長年、空き家になっていた築100年を超える古民家を活用します。今回は、古民家の改修を、学生と地域が参加する教育プログラムとして実施しています。改修を通じて、多くの方々に愛着を持って親しんでいただける空間づくりを目指しています。

現在、公募で集まった大学生（福岡・北九州を中心に建築学科などに在籍する8人）が、建築士に学びながら、設

◀田舎暮らし研究サロンの設置「町長に対するプレゼンテーション」



計から施工までを行っています。地域内外の皆さんにとって利用しやすい空間になるよう、大学生がいろいろな方に聞き取り調査をし、議論を重ねています。これまで2泊3日の現地合宿を3回行い、設計や施工準備を行ってきました。地域の方もサポーターとして大学生を支えています。2月下旬から約1カ月間、施工合宿を行う予定です。この取り組みは、空き家活用のモデルづくりとしても期待されています。

②例えば、田舎への移住をじっくり考える

東日本大震災以後、自然豊かな場所や、大都市を離れた安全な場所へ移住を希望する人が増えています。一方で、新しい土地に転居して暮らし続けるためには、住居や仕事だけでなく、地域との関係づくりなど様々な課題や不安も抱えています。そして、その不安は受け入れる側も同様です。地域住民が求めるものと、移住者の思い描くものにはズレがあることも多いようです。

研究サロンでは、地域の皆さんと移住希望の方との橋渡しをしながら、地域に望まれる形での移住をお手伝いしていきたいと考えています。交流をきっかけにお互いが顔見知りになり、信頼関係が生まれて初めて、空き家を貸したり移住を受け入れたりする可能性が見えてきます。その時間のかかるプロセスを皆さんと一緒にじっくりと取り組んでいくことが、今求められています。

(2) 体験居住の随時受け入れ「田舎の新しいワークショップスタイルの検証」

田舎の暮らしと働く体験ができる機会を提供し、上毛町において新しい

働き方を検証するワーキングステイを継続、発展させていきます。成果は、施策にフィードバックすることにも、より現実的なファンとリピーターの増を図ります。

(3) 働き方や暮らし方の提示「田舎に能動的な人が集まる情報発信」

構想の「考え方」や「動き」を的確に伝え、町に必要な人材を呼び込む



▲田舎暮らし研究村構想「概要図」

ために、奇抜で斬新なウェブサイトを構築します。移住や交流、定住施策のポータルサイト化を視野に、イターン者など、上毛町暮らしの実践者を中心に、全国の関心層に届くコンテンツを戦略的に発信していきます。

(4) こうげの寺子屋／弟子入りプロジェクト「田舎と都市住民が求めることの合致」

地域と都市住民との橋渡しをシステム化します。拠点づくりとともに構想の中心となるプロジェクトです。都市住民（＝弟子）を対象に、就農・起業・体験・研修・地域貢献など、数々のニーズをターゲットベース化し、町の農業者や加工グループなど（＝師匠）地域が抱える課題とマッチングさせていきます。

町を訪れる方が、地域の皆さんと活発に交流し、互いに助

け合い、刺激し合うきっかけをつくることを短期目標とし、いつまでも元氣なまちを実現する「笑顔の好循環」の仕組みをつくることを将来目標としています。

仕掛けから仕組みの定着へ

田舎の魅力は地域の個性であり、他所と比較するようなものではないと考えています。自らの足下にある魅力を再認識するとともに、「上毛町」の価値を皆さんで共有し、伝えていくことが大切だと考えています。地域を誇りに思う人が、生き生きしている町は輝いています。そこに持続可能な体制を構築することができて初めて「いつまでも元氣な上毛町」が実現すると考えています。また、地域のコミュニティは一定の流れに沿って動き続けています。地域を中心とした好循環が生まれることで、その仕組みが定着し、波及していくものと考えています。住みたい上毛町推進プロジェクトは、その「きっかけ」となる仕掛けを提案し続けていきます。

上毛町 企画情報課  
(平成26年2月10日付第28009号)



こうほくまち  
佐賀県 江北町



# 空き家・空き店舗等再生による 地域活性化

〜人が変わることで社会が変わっていく仕組み〜

## 江北町の概要

江北町は、佐賀県のほぼ中央部に位置しています。地勢は、東西に走る旧長崎街道を境に、北部は緩やかな南斜面をなした中山間山麓地帯で、一連の山並みが東西に走っています。また、南部は平坦地で、その大部分を農地で占めており、穀倉白石平野の一角を担っています。

さらに、本町は、JR長崎本線・佐世保線の分岐駅として特急電車が停車する肥前山口駅を有していることや、道路網においても国道34号・207号の分岐点となっていることから、県南西部への玄関口として重要な役割を果たしており、交通の要衝としても知られています。

歴史的には、昭和16年に町制を施行。昭和18年に杵島炭砒5坑が開坑し、戦後の石炭産業の発展により炭鉱の町

として繁栄してきました。当時の人口は16,379人(昭和35年国勢調査)でしたが、昭和30年代後半からのエネルギー革命に伴い、石炭産業が衰退していくとともに人口も10,546(昭和45年国勢調査)まで減少していききました。

その後も人口流出が続くものの、いち早く町の活性化を図るべく、交通・通信網の整備、企業誘致の推進、農業・産業基盤の整備、下水道の整備に努め、快適で住みよい豊かなまちづくりを進めていくことで、人口減少に歯止めがかり、平成2年以降はほぼ横ばいの9,800人前後で推移しています。

## 取組の動機

本町の上小田地区は、町の総人口9,766人の21・4%にあたる2,092人が生活しています。(平成24年4月現在)

ご当地キャラクター



「ピッキー」

この地区は、炭鉱の最盛期には映画館などの娯楽施設や商店も数多く立地し、賑わいを見せていました。が、少子高齢化の進展による人口減少、独居老人の増加、高齢者の活動の場の減少、地域コミュニティの希薄化、放課後児童の居場所不足、保護者の交流の場の減少、買い物弱者の増加、空き家や空き店舗の増加などといった地域課題が顕著となりつつありました。

このような中、一見、この地区にとってマイナ要素として見られがちな空き家や空き店舗なども、その間取りや利用条件を変えることによって、それらが地区の活動拠点として生まれ変わる可能性が出てくるものと考え、空き家や空き店舗を活用した複合拠点整備と多様な住民サービスの提供を平成25年度から実践しています。

この取組には、総務省の過疎集落等自立活性化推進交付金（過疎集落等自立再生緊急対策事業）を活用しています。

◀高校生ケーキカフェ「サノ・ボヌール」



◀交流スペース「おだ・ぷら〜ぎ」



◀遊ぶ前にみんなで宿題



## 取組の内容

### ☆空き店舗を改修した地区住民の交流スペース

空き店舗（旧金物屋）を改修して、地区住民の交流スペースとして活用しています。

若者の知恵と行動力を地域活性化

完売するほどの盛況ぶりです。

に活かすために、町と佐賀農業高等学校食品科学科の生徒40名が協議を重ね、このスペースで県内初となる高校生ケーキカフェ「サノ・ボヌール」（サノ＝佐農、ボヌール＝フランス語で幸福という意味・高校生がネーミング）を平成25年7月から毎月1回（土曜日）開催しています。カフェ開催日は2時間半でケーキ（4種類・100食）が

また、このスペースでは、平日の水・金曜日には地区住民の協力を得て、昔懐かしいお店を再現。かき氷、駄菓子、くじ、とろろてん、アップルパイ、ラムネを販売。子どもや高齢者、地区住民の憩いのスペースとして活用することができました。（1日平均50人が利用）

◀ みんなで好み焼き会の準備



◀ PCをを活用した高齢者と大学生の交流



◀ 地域おこし協力隊による出前講座



及び学生の協力を得て、高齢者サロンを開設するための事業検証（食育・健康などの講演、卓上ゲーム、PCを活用した交流、買い物代行など）を実施しました。その後、4月からは地域おこし協力隊員が各地区の老人会で「出前講座」を実施して高齢者の方々からの意見などを集約。10月に空き店舗（旧雑貨屋）を改修し、高齢者にやさしい安全な高齢者サロンとして活用したいと思っています。

また、今回の上小田地区をフィールドとした

今後も季節に応じたサービス提供ができるよう協議を重ねるところです。

### ☆空き家を活用した子育て支援と定住促進

本町では、空き家や空き店舗を活用した複合拠点整備と多様な住民サービスの提供を実践していくために、総務省の「地域おこし協力隊制度」を導

入し、福岡県北九州市と宮城県仙台市から2名の隊員を採用しています。隊員の企画・運営により空き家を利用して「放課後こどもクラブ」（子どもの居場所づくり）を実施しています。さらに、この場所を子育てママさんのサロン（未就園児保護者の交流・相談の場）としても利用していく予定です。

また、移住希望への情報提供のために「空き家バンク」の整備、地域お

こし協力隊員の企画による「空き家暮らし体験ツアー」なども現在、検討中です。

### ☆空き店舗を改修した高齢者の居場所づくりと活動の場の提供

本町では、空き家や空き店舗を活用した複合拠点整備と多様な住民サービスの提供の一環として、3月に西九

州大学短期大学部生活福祉学科の教授

高齢者支援及び子育て支援などのソフト事業は、町（地域おこし協力隊員含む）、西九州大学短期大学部、地区住民とが連携した企画・運営を推進していくことで、地域政策課題の現状把握に努めるともに、その対応策を探っていくたいと考えています。

## ☆古民家を活用したまちづくり座談会

上小田地区には、町外から移住された家具職人の夫婦が、自分たちでできる部分は自分たちで改修された築70年の古民家があります。ここでは、空き家や空き店舗を活用した上小田地区の活性化につながるソフト事業を企画・実践していくために、月に1回「まちづくり座談会」を開催しています。また、この座談会の立案で、休止されていた「長崎街道・小田宿まつり」が3年ぶりにリニューアルして（手作りパン屋オープン、高校生ケーキカフェ開店、学生による露店運営、ものづくりワークショップなど）開催することで、地域の活性化に貢献できたと思います。

さらに、セルフビルドによる空き家再生と生活スタイルを紹介・PRするために、こちらの離れを利用していただき「空き家再生塾」（参加自由）も開催しています。

この座談会のメンバー構成は、家具職人、手作りパン屋起業家、陶芸家、デ

◀まちづくり座談会



◀空き家再生塾



ザイナー、カメラマン、新聞記者、テレビ局社員、NPO代表、住職兼保育園長、県職員、町職員など町内外も問わず多岐にわたっています。地域には、本当にステキな人がたくさん居ます。ただそれが見えてなかったり、繋がってなかったりしていましたが、この座談会が開催されたことで、「人」というとても意味のある「地域資源」の存在に気付かされたことに感謝しています。

## 今後の課題

本町では、平成25年度から空き家や空き店舗を活用した複合拠点整備と多様な住民サービスの提供をスタートさせました。紹介した取組は地域活性化のための仕組づくりであり、平成25年度はこの地域社会における空き家・空き店舗を活用した住民サービスの仕

組を確実なものとし、地区住民が気軽に安心して利用できるものにしていく必要があると思っています。

また、この取組を一過性のものではなく、今までの事業の補填でもない未来につながるべくものとするためには、地域の人に理解してもらい、地域全体で取り組むことのできるものではなくてはなりません。そのためには、この取組の趣旨を十分に理解し、先頭に立つて実践できるリーダーと組織が必要となっていくと考えていますので、今後は、人材・組織育成面の充実を図っていく必要があります。

平成25年度に種をまいた今回の仕組（取組）を地区住民に知ってもらい、「自らの地域を良くしたい」という気持ち共有できれば、空き家・空き店舗再生のモデルケースとして町内の他地区にも浸透していくのではないかと考えています。

江北町長 田中 源一  
（平成25年10月28日付第2805号）



北海道 けんぶちちょう  
**剣淵町**

「心のふるさと」「絵本の里づくり」  
「人・夢・大地」やさしさ奏でる絵本の里けんぶちの25年

剣淵町って何処にある町？

剣淵町は明治32年に屯田兵が入植し、  
昼なお暗い原生林を切り開き、多くの  
苦難を乗り越え築かれた北海道開拓の  
町であります。

北海道の中央、旭川市から国道40号  
線を約50km北上した位置にあり、総面  
積は131・20km<sup>2</sup>の面積を有し、名寄  
盆地の南部に属しています。

町の中央部を天塩川の支流である剣  
淵川が流れ、それに沿って広がる平坦  
低湿地帯と、それを囲む東部丘陵地並  
びに西部の小山脈となっており標高は  
最高440m、最低129mの典型的  
な盆地であります。

気候は、内陸性気候に属し夏はプラ  
ス30℃、冬はマイナス30℃をそれぞれ  
超える寒暖の差が激しい、人口3、  
382人の純農村であります。

農産物は、水稲、小麦、ジャガイモ、  
大豆等を中心に北海道で生産される野

菜は何でも育ち、流通環境や農業政策  
に作付けが左右される状況にあります。

絵本で町おこしができるの!?

ここで、なぜ、剣淵が絵本で町おこ  
しをするようになったのか少しふれた  
いと思います。

頃は、昭和63年2月、世の中はバブ  
ル絶頂期でありました。

札幌ススキノのある場所で、「どこ  
ちから来られたの?」と尋ねられた  
時に「剣淵」と話すと「酒蔵のある町  
ですか、剣菱ですか?」などと会話が  
弾むことがあり悔しい思いがしまし  
た。けして若くはない仲間たちは、町  
への思いを巡らしているときであ  
りました。当時、北海道では、一村一  
品運動が提唱されており、各市町村が  
運動を通じて活性化を模索しているこ  
きでもありません。

剣淵は、一般農産物は何でも栽培で  
きるのと、寒暖の差が大きい事から良

剣淵町キャンペーンガール



「ぶっちな」

質の野菜が収穫できる気候でもありません。このことは、特産品としての絞るまでの状況にありませんでした。

このようなとき、商工青年部主催の講演会があり、パリから帰国して隣市に住む版画家から一つの言葉がありました。「あなたたちは、お金を儲けることしか考えていない。日本人は、パリに旅行しても、ブティックでは熱心に買い物をするが、美術館や博物館をじっくりと鑑賞することなく帰ってしまつ。商売をされている貴方達はお金のことしか考えていない。日本人は金と物を大事にするが、人とし、芸術を忘れていては世界に通用しない。」とバツサリでした。

講演でガツンと言われたことがきっかけで発奮、芸術について学ぶことになっていくのでした。その後、出版社の編集長を紹介されることになり、絵本に関する講演会を企画することになったのでした。

講演後の懇親会で「このような田園風景はフランスの農村風景に似ている。フランスでは、芸術家が離農後の農家住宅に移り住み、自給自足の生活しながら創作活動に励んでいる。時間のゆったりした流れや空気の爽やかさの中に絵本原画の美術館などがあると良いですね。」と教えられたことがオジ

サン達と絵本との接点になるのでした。

原画は、絵本を出版してしまつと編集者の机の横とか棚の上等に保管され、日の目を見ない事になってしまいます。中には、芸術的に優れている作品もあることからヨーロッパでは保存も兼ねて美術館に所蔵されている作品もあり、絵本というものの奥の深さを知ることになっていくのでした。

自然環境・時の流れ・フランスの田園風景に似ていることなど、絵本で町おこしをやらぬ手はないと考えたのでした。



▶初代絵本の館

絵本を題材とした町おこしは、すきので有名になるかもしれないし、絵本は若い女性、原画は芸術的絵画、美術館はたくさん訪問客が町にやってくるなどと勝手な発想をひらげ、突き進むことになるのでした。

### 絵本で飯が喰えるか？

文化での町おこしなんてできるはずがないと言われ、資金もなく、町からの補助も難しいときでした。ところが昭和63年は、竹下内閣の政策として「ふるさと創生資金」1億円事業が全国で始まることになったのでした。これに目をつけた仲間の一人は、早速、当時の町長に掛け合つたのでした。町長は、「君たちの考えは理解しないわけではないが、突然言われても「ハイ」とは答えられない。どのような活動ができるか仲間を増やし、町民の理解を得て欲しい」というものでした。

確かにそのとおりであった。1億円を海のものとも山のものともわからないプロジェクトに対して注ぎ込むことは、町として困惑するのが当然でした。結果、300人ほどの会員を募り、「けんがち絵本の里を創ろう会」を設立し、再度、町に申し入れを行うことになったのでした。



▲絵本キャラバンカーを利用した読み聞かせ



▲絵本の里大賞受賞作家による特別授業



町は、地域づくりとして、この1億円の約半分を使うことを英断し、活動の拠点整備として、昭和19年建設の旧役場庁舎を改装、日本一の絵本図書館を目指して絵本1万冊を購入し、初代の「絵本の館」を平成3年にオープンすることになったのです。

この時点で、まだ確実性のない絵本による町おこしは、行政が手を染めることなく自主的な民間活動に委ねられることになっていくのです。

「お金は出すが、口は出さない」と



▲美術館的な要素も兼ね備えた絵本の館。たまご型ドームに置かれた「木の砂場」には10万個の木の玉が入っている。

行政の財源的な支援が決まり、活動拠点もでき、進めることになるわけですが、町民の中には「絵本で飯が喰えるか。」と批判的な人達もあらわれ、このことで善し悪しは別に「躍注目を浴びることになりました。」「絵本の里を創ろう会」の仲間たちはめげず、絵本原画展、絵本作家・編集者等の講演会、絵本関係図書館行事への参加等、矢継ぎ早に活動の場を広げていくことになっていくのです。

### 絵本をキーワードに町づくり

スポット的なイベントとして原画展や講演会を開催してきましたが、町づくりを考えたとき、定期的で開催されるイベントが必要な事に気づくのでした。

展示期間中に絵本の館を訪問された方の投票数で決定するのはどうだろう。投票だけには来てもらえないから、同時に原画展を開催しよう。等々考えて読者が投票で選ぶ絵本のコンクール、「けんぶち絵本の里大賞」を創設することになりました。今では回を重ね22回にもなります。

平成2年には、絵本の里づくりに参加していた農家の仲間達から身体に良い農産物を作付けしようと、「頭の栄

養は絵本で、身体の栄養は無農薬野菜で」と「けんぶち生命を育てる大地の会」が誕生し無農薬で安心野菜を作る組織もできました。当時としては、先駆的取り組みとして絵本の里創りとともに関心と呼ぶことになりました。

絵本原画展も例年行ってきましたが、ミニコンサート・講演会・ふるさと絵本の発刊等々、文化的なことは、臆することなく開催実施してきました。このことは、絵本の里づくりに多様性をもたらすものであり、交流人口の拡大にもつながって行くものでした。

平成16年には、老朽化した絵本の館（絵本図書館）を新築移転することに現在に至っています。蔵書は絵本3万5千冊、児童書を含めた一般書1万5千冊、収蔵絵本原画1千点にもなります。社会福祉法人が運営する軽食喫茶店もあり、知的障がい者の働く場所にもなっています。また、ギャラリーも備えており、夏の絵本原画展等美術館的要素も兼ね備えています。

絵本の里づくりは、行動力のある男性が主体となって活動が始まっている事もあり、より前向きな活動になっていったのではないかと考えます。各家庭の書棚には、作家のサイン入り絵本があるようになり、それぞれの家庭や子供たちが読み聞かせを通じて心豊か



▲「けんぶち絵本の里大賞」投票の様子



▲絵本原画展の様子

▶スキー場跡地を活用したアルパカ牧場



▶アルパカ



に育んでいます。  
絵本といえば、女性や子ども達を対象に考えられますが、大人になっても読みたい本があったり、生きる力をつけるヒントがあったりと、心に響く一冊があります。

### 絵本が結ぶ子育てサイクルと絆!!

26年間の時間の流れは、当時の女子小中学生が母さんになり、子供さんを連れてやってきます。「オジサン、覚えていただけますか」と、ちよっぴり高校生当時の面影を見せながら、絵本の館

で子どもさんに絵本を読んであげたり、遊ばせたりする姿がほほえましく伝わってきます。

町では、平成19年から「君の椅子」プロジェクトへの参加を進め、「生まれてくれてありがとう。君の居場所はここにあるからね。」とたくさんのお出を出を絵本とともに未来へ椅子が運んでくれます。

絵本の館では、子育てが一段落した大人たちが癒しの思いで時間を過ごしたり、仕事漬けの日常を離れ「ほっ」とした空間に身を置く方もたくさん訪れています。もちろん、お孫さんとご一緒の方もいらっしやいます。遠く

◀ペルー訪問団(右6人)とペルー日系人協会の皆さん



て数年に一度しか訪れる事ができない方も剣淵を「心のふるさと」として大切に思っていたいただいています。  
絵本の持つやさしさをキーワードにした時、剣淵に合う動物を飼いたいと「アルパカ」がやってきたり、そのアルパカが「ペルー」と交流するきっかけづくりになり、平成23年7月には、日本で初めてペルーとの自治体間で姉妹都市締結もすることになりました。平成24年、6月には姉妹都市でありますペルー共和国フニン県タルマ郡パルカマヨ区を訪れ、佐々木町長他5名のペルー国訪問団が交流を深めてきました。

た。

また、絵本の魅力と子ども達を引きつける絵本の力に圧倒され、感動した映画俳優大地康雄氏が剣淵を素材とし、企画立案した心に「じんじん」と響く映画製作をしたいとロケ地になりました。絵本の里づくりは地域だけではなく全国からの「心のふるさと」となると絆で結ばれつつあります。

誰しも眠る前、いつも母や父が読んでくれる絵本にワクワクしていたころ、小さな体には、かかえきれないほどの夢や冒険のある世界が広がっていたと思います。そんな、あの日が遠くなると感じたら、再び剣淵へいらしてください。大人になって忘れかけていた、少年少女時代大切な物がきつと見つけられます。

剣淵町長 早坂 純夫

(平成25年12月19日就任)

※絵本が結ぶ親子の絆が映画になりました。ユーモアあり涙ありの感動する映画『じんじん』2013年4月に公開され、全国、海外で上映されています。

お問い合わせ先

TEL 0165(34)21121

(剣淵町役場)

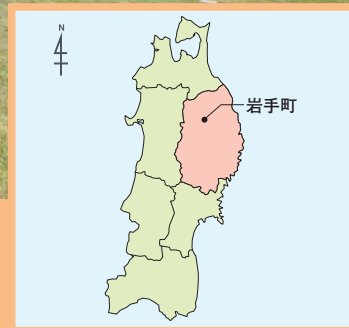
(平成24年12月10日付第28022号)

▼緑と広い空を感じられる豊かな自然の中にある「石神の丘美術館」

現地レポート



# 岩手町が誇る文化的な 風土と豊かな食材 〜芸術と野菜総合産地の発信拠点・道の駅「石神の丘」〜



いわてまち  
岩手県 岩手町

## 豊かな自然に包まれた町

岩手町は、岩手県の中中部から北部に位置する、人口約1万5千人の町です。人間が健康的で文化的な生活を営む上で最も適しているといわれる北緯40度線上に位置し、県都盛岡市の中心部からは北へ30km。国道4号と東北新幹線、IGRいわて銀河鉄道が南北に貫き、町の交通体系の主軸を形成しています。また、東部には国道281号が陸中海岸へ連結。西部には主要地方道岩手平舘線、県道岩手大更線が八幡平市へと続き、東北自動車道西根IC、松尾八幡平ICへ連結するなど、鉄道・自動車両面で高速交通網の利便性が高く、県の北部における重要な交通ネットワークを形成しています。

町の総面積360・55kmのうち、約76%が山林・原野となっており、緑と広い空を感じられる豊かな自然に包ま

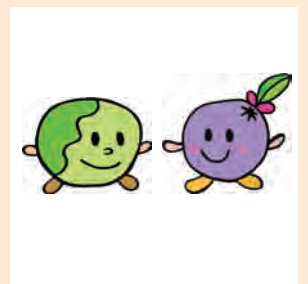
れています。地勢は、南東から北西にほぼひし型に広がり、東部を走る北上山地は全般に複雑で東西に高く、西北に低い様相をなしています。西部には盆地状の一方井地区があり、北部と西部ではその地形の違いから異なった趣を見せています。

## 『石神の丘美術館』の誕生

岩手町には、早くから芸術の情熱を醸成する文化的風土がみなぎっていました。昭和32年、故齋藤忠誠氏を中心に岩手町在住者を主体とした美術集団「エコール・ド・エヌ」が結成。岩手町から盛岡、東京、韓国、パリなどにも発表の場を広げるなど充実した活動が行われていました。

昭和48年からは町特産の黒御影石を主材に「岩手町国際石彫シンポジウム」を開催し、世界各国から石彫作家を迎えました。作家たちは約2カ月間

ご当地キャラクター



「たまなぼうや」(左)と  
「ブルーベリーナ」(右)

にわたり町内に滞在し、ワークショップなどで町民と交流を深めながら作品を制作。制作された作品は町に寄贈され、町役場庁舎前の石彫公園や町内の公共施設などに設置されました。その作品数は130点を超え、「彫刻によるまちづくり」の礎になっています。

人々の心に語りかけるような作品を制作する作家たちの情熱と、その志を支える町民。そのような文化の薫り高いまちづくりが背景になって、平成5年に野外彫刻美術館「石神の丘美術館」が誕生しました。石神山の緩やかな傾斜に開かれた美術館を歩けば、季節を追って咲く山野草が笑顔を見せ、自然の中でさまざまな彫刻がやさしく語りかけてきます。

### 地域の風が行き交う美術館

平成14年7月には、美術館に隣接する道の駅「石神の丘」が完成しました。これを機に美術館も常設展や企画展ができるギャラリーと創作活動を体験できる工房などを整備しリニューアル。全国的にも珍しい、道の駅併設の美術館として生まれ変わりました。

リニューアル後の美術館は、「質の高い芸術文化の発信拠点」、「町民が美

術に親しむ場」をテーマに、博物館、資料館としての役割も担うなど幅広く活動を展開。岩手町出身の作家や岩手県にゆかりの作家の展覧会を開くとともに、岩手町埋蔵文化財展、町の小学生や高校生の作品展を毎年開催するほか、コンサートやワークショップなどを開き、美術に限らず音楽など広い芸術領域に触れられる機会を創出しています。

より地域に根差し芸術文化を発信する美術館を町民も一体になって盛り立てます。美術館のサポーター「石神の丘美術館友の会」は、屋外展示場の清掃や植栽などをボランティアで実施。また、町内の茶道愛好者が野点の会を開くなど、石神の丘美術館は、地域の風が行き交う美術館として、豊かな未来づくりの拠点になっています。

### 芸術との出会いを予感させる『アートロード』

平成14年12月には、東北新幹線盛岡―八戸間が開通。本町のいわて沼宮内駅―東京駅が最短で3時間弱で結ばれるようになりました。

このいわて沼宮内駅から「石神の丘美術館」までの歩道などには、彫刻

や休憩用のベンチなどを配した「アートロード」が整備され、道行く人々の癒しの空間となっています。

いわて沼宮内駅に降り立ち、駅前の広場に出ると真っ先に目に飛び込んでくるのが高さ8mの石彫「ウォーター・マーク」です。岩手町を源泉とする東北一の大河・北上川その北上川の四季を石柱の四面に表現し、石柱を取り囲む二つの壁は、奥羽山脈と北上高地を象徴しています。豊かな山々から自然の恩恵を一身



①作品名「ウォーター・マーク」  
雄大な北上川の流れを表現する岩手町のシンボルモニュメントは、アートロードの起点として人々を迎えます。

### アートロードの石彫作品



②作品名「名犬シナモン」  
岩手町をロケ地として撮影された福祉映画「ホーム・スイートホーム」に出演する「シナモン」がモデル。  
③作品名「ニホンカモシカ」  
自然豊かな町内に多数生息する「ニホンカモシカ」は、眼下の「北上川」の悠久の流れを見つめ、石の上にとたずんでいます。



▲道の駅「石神の丘」は、産直施設、 レストラン、農産加工施設などを備えるほか、併設する「石神の丘美術館」との相乗効果で、連日多くのお客様でにぎわいます。

に集めて太平洋に注ぐ、北上川の雄大なスケールと千変万化する水の表情を表現した作品です。岩手町のシンボルモニュメントとして堂々とそびえ立ち、駅に降りた人々を迎えています。

このウォーター・マークを起点に、石神の丘まで約800mの道のりにたまたむ動物たちの彫刻は、美術館までの道しるべになるとともに、人々を

アートの世界へいざない、素晴らしい芸術との出会いを予感させてくれます。美術館に隣接する道の駅「石神の丘」は、平成14年7月24日にオープンし、平成24年には10周年を迎えました。青森から東京を縦貫する東北の大動脈・国道4号に直結する同駅は、駐車場や道路休憩施設としての役割はもてるること、岩手町の物産観光を発信

する拠点として大きな役割を果たしています。美術館との相乗効果もあり、町内外からの来場者数は、開業以来10年で420万人を超えました。

同駅の産地直売施設に入ると、自然光が差し込む明るい店内に、色とりどりの農畜産物が並んでいます。これらはすべてが岩手町産です。町の主要産業である農業では、町内の畜産農家と耕種農

家が連携して堆肥などを循環活用し、地域内の資源の活用と環境に優しい農業を実現する「耕畜連携」を推進。特産キャベツ「いわて春みどり」を筆頭に、レタス、ホウレンソウ、ピーマン、ダイコン、ナガイモなどが栽培面積県内トップクラスを誇り、岩手町は全国有数の「野菜総合産地」としてPRしています。産直施設の利用者は、今朝畑で収穫された新鮮な野菜類が所せましと並ぶ店内に、野菜総合産地・岩手町の姿を感じることができるでしょう。

これら豊かな町産食材は同駅のレストランと農産加工施設の「茶屋っこ」で味わうことができます。産地消2



④作品名「いわてレッドデータブック」  
岩手県内に生息する希少な野生生物のリスト「いわてレッドデータブック」から、ほ乳類26種を石の引き出しにしまいいこんでいます。

⑤作品名「トウホクノウサギ」  
伸び上って遠くを探すような仕草が愛らしい「ノウサギ」は石神の丘美術館入口付近で訪問者を歓迎します。

つ星の「レストラン石神の丘」では、季節ごとに変わるコース料理をはじめ、「春みどりラーメン」や「石神長いもそば」、「ブルーベリーカレー」など、町の特産品を使用した特色ある多彩なメニューを提供します。一方、「茶屋っこ」では、農産加工組合員が真心を込めて手作りした、懐かしい母の味と手打ちの十割そばが人気。ご当地ソフトクリーム「春みどりソフト」は、ご当地の限定品です。また、産直施設、レストラン、農産物加工施設が三方を囲む中央の広場では各種イベントが開かれ、町内外の人と人が交流する場所になっています。

道の駅「石神の丘」は、岩手町の情報発信と交流の拠点です。岩手町に來たら、ぜひ、お立ち寄りください。

### さらなる発信を目指す『ベジパウダー』

産直施設や地産地消のレストランなどを通じて、野菜総合産地・岩手町を発信し、町の農業振興につなげようとする取り組みの一つに、「農家応援プロジェクト商品」があります。

商品は、キャベツ焼酎「キャベ酎」、石神長いもそば、「ブルーベリーカレー」、ブルーベリーリキュール「石神の恋ごころ」の4つ。いずれも岩手町産の原料を使用した石神の丘のオリジナル商品です。このうちの「キャベ酎」は、道の駅「石神の丘」開業10周



▶石神の丘オリジナル商品は、岩手町の農産物を原料に使用した「農家応援プロジェクト商品」です。



年を記念し、プレミアム版を限定発売しました。「北緯40度のまち」にちなみ、アルコール分を40%にしたプレミアム版「キャベ酎」は、その名も「甘藍酎」。「甘藍」とはキャベツの和名です。キャベツ産地として100年の歴史があり、かつて南部甘藍というブランドのキャベツを擁し、日本一の産地として栄えた岩手町の歴史がパッケージに表現されています。

さらに、野菜の加工による六次産業化をテーマにした「いわてまち石神の丘美食工房プロジェクト」が動き出しました。このプロジェクトは、岩手町産野菜をドライ加工した食材「ベジパウダー」を製造して付加価値を高め、レストランのメニューや農産加工

品に活用して彩り豊かなご当地商品を開発しようとするものです。「生産」「加工」「流通販売」の機能をすべて備える道の駅「石神の丘」ならではの六次産業化の取り組みとして大きな期待が寄せられています。これにより野菜総合産地・岩手町のさらなる発信を目指します。



▶▶野菜の付加価値を高める「ベジパウダー」。彩り豊かなご当地商品を開発しようとさまざまな試作品が作られ、市販化されています。



「ベジパウダー」は発売以来好評を博しており、パウダーを使った商品やメニューの開発も進行中。新たな岩手町名物が次々と誕生しています。

企画商工課 佐藤 亘  
(平成25年3月25日付第28034号)



# 健康長寿の町「おがの」をめぐって 花と歌舞伎と名水のまち

## おがのまち 埼玉県 小鹿野町



### 小鹿野町の概要

小鹿野町は埼玉県の西北部に位置し、東は「秩父夜祭り」で知られる秩父市と、西は群馬県の神流町かんなまちに接しています。

古くは、江戸と信州を結ぶ重要な街道の宿場町として栄え、埼玉県内では「川越」に次いで2番目に「町」として町制を施行しました。江戸との交流が盛んであったことから、様々な影響を受けながら独自の文化が育まれます。特に、「町じゅうが役者」と言われる農村歌舞伎の「小鹿野歌舞伎」は、二百数十年の伝統をもち、「歌舞伎のまち・おがの」としても知られています。また、日本百名山のひとつ「両神山」や平成の名水百選の「毘沙門水」、日本の滝百選の「丸神の滝」、と多くの百選があり、カタクリや日本一の園

地を誇るセツブンソウ自生地があるなど四季折々に花咲く、美しく豊かな自然に恵まれた町です。

平成17年10月に隣接する両神村と合併し、現在に至っていますが、合併後の面積は約171km<sup>2</sup>、人口は13,157人（平成25年4月1日現在）で高齢化率は30・2%、75歳以上は17・3%という状況です。特に山間の小集落は高い高齢化率を示しており、町内の66行政区のうち、8つの行政区が「限界集落」と言われています。しかし、鉄道も無い、山あいの町ですが、後期高齢者の一人当たりの医療費は埼玉県内で1番少ない、なかなか元気な町です。これまでに小鹿野町が取り組んできたいくつかの事例から健康長寿の町「おがの」を紹介します。

小鹿野町町章



◀日本の滝百選「丸神の滝」



### 国保町立小鹿野中央病院

健康づくりの始まりは、昭和28年に町立病院(国保町立小鹿野中央病院)を開設したことから始まったと言えます。当時1万3千人程度の小さな町としては、先駆的とも言えることで、当初は医師5人、病床38床でスタートし、その後昭和51年に建て替え、平成14年に増築を行いました。約60年が経過した現在は、一般病床45床、療養病床50床の地域のニーズに合った、そして地

域医療の中核病院としてしっかりと根付いています。また、この町立病院は小鹿野町が取り組んでいる「保健・医療・福祉」が一体となつて機能する「地域包括ケアシステム」の重要な一翼を担っています。

### 健康づくりの推進

これまで、町で取り組んできた健康増進、高齢者の福祉に関する事業の一例ですが、先ず減塩運動と食生活の改善があげられます。昭和56年から10

年間、都内にある栄養専門学校との協力を得て、食生活の実態調査を行いました。昔の家庭で作るみそ汁は、塩分が多く、しょっぱかった。当時の三大疾病の一つであった「脳卒中」の死亡率が町において高かったのは事実です。集落ごとに持ち寄ったみそ汁を塩分測定し、その結果、やはり塩分がものすごく多いことが判明しました。それから、塩分を減らすように集会所に泊まり込んで指導が行われ、以後、減塩運動と生活習慣病の改善を展開しました。



▶輪投げ大会

次に、町では昭和51年より成人病予防健診(人間ドック)の助成を開始し、予防健診の必要性を啓発しました。また、町内に「成人病モデル地区」を指定して、健康増進を推進することも、町内全地区に地域の健康増進の推進役として「保健補導員」を育成してきました。平成25年度には231名の方を委嘱しています。



▶健康まつり(栄養士による料理教室)

昭和58年には、予防医療の拠点として厚生省(当時)の医療費削減のためのパイロット事業「ヘルスパイオ二



「アタウン事業」の指定を受け、輪投げ大会などの軽運動の推進や栄養改善料理教室、行政区ごとに「健康づくり座談会」などを始めました。これらの事業は発展的に形態を変えながら現在も開催しています。第28回となる町民輪投げ大会は、平成24年10月に「健康フェスティバル」ともに行いました。毎年100チーム（1チーム3名）が出場しますが、どのチームも日頃から練習していて、場所を取らずにできるとも良い運動となっています。

このほか、要介護者世帯の全戸訪問、70歳以上の健康調査、単身高齢者の全戸訪問などを実施してきました。

### 地域包括ケアシステムの構築

町では、これまで町民の健康増進、高齢者の福祉に努めてきましたが、平成4年にさらに強力に保健福祉の推進を図るため、保健、医療、福祉のサービスを一体的に提供する「地域包括ケアシステム」の構築に向けて調査研究を始めました。

各地の先進事例を調査研究するとともに、既に「地域包括ケアシステム」を構築し、先進事例であった広島県御調町にある「公立みつぎ総合病院」

現在の尾道市ですが、院長の山口先生から指導を受けるなど、小鹿野町に適したシステムの構築をめざしました。そして、平成14年に先述の町立病院の隣りに保健福祉センターを開設しまし

た。このセンターには、町の行政組織の一つである保健福祉課を置いたほか、在宅支援センターや訪問看護ステーションも併せて設置しました。こうして、保健、福祉、医療、介護サービスの部門が、ひとつの建物内に集約できたことで、今まで以上に部門間の連携がしやすくなり「地域包括ケアシステム」が大きく前進することとなりました。また、このセンターに勤務する8人の保健師は全て町の職員で、高齢者、要介護者のお宅を訪問し、生活習慣病などの健康相談に応じ、どのような医者に診てもらえばよいかを指導する体制が確立されました。こうして、町民（高齢者等）が訪問活動等による健康教育や健康相談などを通じて保健師などの専門職の話しを聞いたり、相談する中で無意味な通院をしなくなり、結果として、通院日数を減らす大きな効果となりました。

また、入院した方は入院する時点で、退院した時のことを考えて、関係者で協議し、例えば、どの程度の状況

になったら退院させ、自宅でのようなサービスをどのように提供し、支えていくかについて協議します。町立病院や在宅での介護サービスまで町が町営で提供しているところが、小鹿野町の強みであり、特色です。安心して退院できるシステムがあることが、入院日数の削減につながっているのだと思われま

このほか、介護保険制度の開始時から、町が事業主体となって介護サービスをを自前で提供するとともに、地域

包括ケアシステムの中に介護サービスも取り込んで運用しています。

### 地域で輝く高齢者

町で行う保健事業は、基本的には、高齢者のみならず、町民全体を対象に行っています。老人クラブ発祥の地といわれる小鹿野町には、20の老人クラブがあります。この老人クラブは、町の健康づくり運動を支えてきた団体でもあります。老人クラブごとに町の介



▶ステップ体操



▶小鹿野歌舞伎(屋台歌舞伎)



▲両神山麓花の郷ダリア園



▲町の花「セツブンソウ」

護予防施設である「いきいき館」に集まり、ステップ体操教室で運動したり、ゲートボール、グラウンドゴルフなど

で健康づくりを行っています。

このステップ体操とは、介護予防、転倒予防、生活習慣病の予防改善、大腰筋の強化を図ることを目的に、ステップ台を用いて行う有酸素運動とストレッチング体操のことです。この体操を2名の健康運動指導士のもとに行い、こうした教室に参加する高齢者の皆さんを老人クラブごとに自宅付近まで、町のバスで送迎し、一人でも多くの方に安全に参加できる方法を取り入れています。

このほか、「いきいき館」では、元気な高齢者、自立活動可能者、特定高

齢者の支援事業など、高齢者の介護予防事業を中心に「元気はつらつ教室」や「社交ダンス教室」を開催し、また、「健康づくり教室」では管理栄養士による料理教室やレクリエーション、参加者が楽しいおしゃべりをしながら、ゆったりとした時間を過ごすなど、高齢者が楽しみながら参加しています。

そして、小鹿野町と言えば「小鹿野歌舞伎」。町民の4人に1人が役者といわれるほどです。この小鹿野歌舞伎を支えているのが、元気はつらつの高齢者の皆さんです。かなりの高齢者でも役者として演じ、中学生や高校生にも指導・伝承しています。若い世代から頼りにされていることが、皆さんの誇りといきがいにつながり、町にはこうした地域で輝いている高齢者がたくさんいるのです。

また、小鹿野町は花の名所でもあります。冬は町の花であるセツブンソウ、ロウバイ、春はカタクリ、ハナモモ、夏は花ショウブ、秋はダリアと四季折々に咲く花の姿を楽しめます。なかでも平成21年にオープンした「両神山麓花の郷ダリア園」は小鹿野町の新名所です。10,000㎡の敷地に約300種のダリアが咲き誇る光景はま

さに圧巻です。見頃は9月上旬から10月下旬ですが、平成24年は3万人を超える人が訪れました。このダリア園は、地元の高齢者の皆さんが中心となって、地域の人々の手によって作り上げたものです。

### 健康長寿の町をめざして

小鹿野町では、このように行政、医療部門だけでなく地域の皆さんと一緒に、なつてさまざまな事業を実施し、結果として高齢者の医療費が埼玉県内で1番低い町となりました。これは、今日まで保健、医療、福祉対策を町の重点政策に位置づけ、その基本姿勢が揺るがず努力してきた結果であります。地域の特徴を的確に捉えて実施してきた事業、それらが有機的に作用し合っており、長い年月をかけてできた成果でもあります。

まだまだ課題もありますが、私たちは、さらに事業を継続し、そして改善しながら「健康長寿の町・おがの」をめざして関係者一同、邁進していきます。

小鹿野町長 福島 弘文

(平成25年8月19日付第28050号)

▼国内有数の広さを誇る森林公園。毎年4月29日の昭和の日には、県内各地からみどりの少年団らが集い「県民みどりの祭典」が開催される。

教育・伝統文化・スポーツ、子育て、健康福祉 関連施策

現地レポート

# もっともっと元気な町へ!!



## つばたまち 石川県 津幡町

### 津幡町の概要

石川県の真ん中に位置する津幡町は、古くから加賀・能登・越中の交通の要衝として発展してきました。国道8号バイパス（津幡バイパス）が供用開始となった平成に入ってから、毎年1,000人規模で人口が増え続け、昭和40年代には約2万2,000人だった人口は、現在3万7,500人を数えるに至っております。近年、石川県全体の人口が年々僅かに減少する中、我が町津幡が少しずつでも増加を続けているのは、県都金沢の北側に隣接し、中心部まで車で20〜30分という条件の良さもあることと思われ、平成23年11月、人口5万人を突破した野々市町の市制施行に伴い、石川県内では人口が最も多い町となりました。行政エリアの面積は110.44㎦で、東部には丘陵性山地が連なっており、

津幡町町章



ご当地キャラクター



「よしなかくん」と「ともえちゃん」

り、町のおよそ3分の2は中山間地域であります。西部には幅2〜3kmの平野部が広がり、県内最大の潟、河北潟に続いています。

### 森林公園や漕艇競技場

町の中央部には国内有数の広さを誇る石川県森林公園があり、昭和58年には昭和天皇をお迎えして全国植樹祭が、また、平成6年には皇太子殿下・雅子妃殿下をお迎えして全国育樹祭が開催されました。現在も当時の全国植樹祭を記念して、毎年4月29日の昭和の日には県内各地からみどりの少年団らが集い「県民みどりの祭典」が開催されています。

一方、町西南部には日本海側最大級の規模を誇る石川県津幡漕艇競技場があります。毎年8月には多勢の町民が参加し、つばた町民レガッタ大会が開催されているほか、中学生や高校生

◀日本海側最大級の規模を誇る津幡漕艇競技場



◀俱利伽羅合戦図屏風



◀加茂遺跡から発見された加賀郡勝不札



また、町の

中心部に位置  
します加茂遺  
跡からは平成  
12年6月、『加  
賀郡勝不札(か  
がくんぼつじ  
ふだ)』が発見  
されました。  
これは平安時  
代の嘉祥年間

(848

## スポーツで元気な町づくり

スポーツを通じて元気な町づくりを提唱されたのは前津幡町長の村隆一氏であり、町のスポーツ振興策は成果にも表れています。

特に駅伝競技での津幡町の活躍はめざましく、石川県では平成15年から金沢市はじめ県内19の全市町が参加し、「市町対抗ふるさと駅伝」が開催されていますが、これまでの9回の大会で5回の優勝を数えています。さらに2位、3位が各1回、4位が2回と常に上位の成績を残しており、その大きな原動力となってきたのが町立の中学校陸上部なのです。とりわけ津幡南中学

の大会など各種大会で利用されています。

## 俱利伽羅合戦の舞台

町東部の富山県との県境には、日本三大不動のひとつと言われ、初詣を中心に多くの善男善女でにぎわう俱利伽羅不動寺があります。その近くには、源平俱利伽羅合戦の舞台となった俱利伽羅峠があります。ここは、1183

年、木曾義仲軍が数百頭の牛の角に松明をつけて平氏軍を急襲した「火牛の計」で知られ、義仲軍4万が平維盛軍7万を打ち破る舞台となりました。この俱利伽羅合戦を境に平氏は衰退の道をたどることとなり、歴史の大きな転換点となった合戦と言われています。今、我が町では木曾義仲と巴御前を主人公にした大河ドラマの誘致を、町民を挙げてNHKに要望しているところがあります。

年(851年)の年号が刻まれており、その当時のおふれ書きであります。中には、農民は朝は(現在の時間で)午前4時には田んぼに行き、夕方は午後8時頃に家に帰りなさい。農民が好きなように魚、酒を食うことを禁ずる。など8条からなり、2年前に国の重要文化財に指定されました。歴史ある我が町の一端であります。



▲県内全市町が参加する「市町対抗ふるさと駅伝」。津幡町はこれまで9回の大会で5回の優勝を飾る。

◀毎年夏に開催される全国選抜社会人相撲大会



れる河北潟一周駅伝競争大会は、正月の大学生の箱根駅伝を上回る回数を誇り、平成24年は92回目となる全国一、いや世界一の駅伝大会です。また夏の全国選抜社会人相撲大会は、安土桃山時代からの歴史を誇る八朔大相撲を起源としており、昭和45年に現在の姿に変わり平成24年で43回目の大会となります。毎年全国各地から精鋭が集まり、内閣総理大臣杯獲得を目指し熱戦が繰り広げられます。

これからもスポーツを通じて元気な町・津幡を発信していきたいと考えています。

### 農業公園で紅葉の名所

平成26年度中の北陸新幹線金沢開業まで3年足らずとなりました。九州新幹線開業後の九州各地の観光客増は目を見張るものがあると聞きます。ならば、我が町でも……と期待が膨む中で、平成23年、農業公園整備に向けたプロジェクトチームを発足させました。

町内の子どもたちに果実の収穫の喜びを味わってほしい！イチゴやブドウ、ナシやイチジクなどなど、子どもたちが大きな口を開けて頬張る姿を想像するだけで楽しくなります。果物

校陸上部は指導者にも恵まれ、石川県中学校駅伝では毎年上位の好成績で何度も全国大会に駒を進めています。陸上以外でも、柔道や卓球、バレーボールなどにおいても津幡、津幡南の両中学校は奮闘し、全国大会へ出場しています。

また、町内にある唯一の県立高校・津幡高校には体育科があり、バスケットボール、なぎなた、柔道、ウエイトリフティングといった競技で多くの選手を全国大会に送り出しています。

町内では歴史あるスポーツの大会も開催されています。毎年11月に行わ

だけではなく、野菜も作りたい！白菜、キャベツ、ニンジン、大根などなど。近くにはログハウス風のレストランができないだろうか？そこで採れた野菜を素材にスープを作り、米粉で作ったパンを添えて昼定食はいかがでしょうか？

そしてまわりには2,000〜3,000本の紅葉を植えたい！町民の皆様は5,000円程度の出費をしていただいで、紅葉の木のオーナーになってもらいます。秋の紅葉だけではちよつとさびしいなら、夏の紫陽花もいいですね。また春の梅も農業公園の戦力になってほしい。そんな農業公園ができないか？という強い思いから生まれたものです。

そして、夢は徐々に大きくなりました。真っ赤になった紅葉のポスターを東京駅のコンコースに何枚も貼り出す。そのポスターには、津幡へいらつしやい！北陸新幹線金沢駅から20分!!。皆さん！津幡へ来てください。

### 科学のまちで町おこし

科学のまち、発信事業も津幡町の町おこしのひとつです。子どもたちから大人まで一緒に実験に参加して、科

◀科学の実験に取り組む子どもたち



学に強くなろうと平成23年度から町内小中学校でいろいろな行事を展開しています。科学教師のOBを嘱託職員に迎え、町、教育委員会そして現場の先生方が一体となって事業を推進しています。

平成24年度は、科学の小径（こみち）を整備に着手したいと考えています。わずか数十メートルの中でのいろいろなことが体験できるような、科学の小径を作って、子どもたちに楽しんでもらいたいと考えています。

そしてこの、科学を通じて石川県にユニークな町があるゾ！と県外にもアピールし、いつの日か、我が町

に修学旅行の児童・生徒が訪れてほしい！そして地元の子どもたちと一緒に科学の実験を楽しんでもらいたいとも考えております。夢はでっかく！この子どもたちの中から将来ノーベル賞受賞者が出ることを期待しています。

### 中学生海外派遣交流事業

津幡町では平成17年から中学生海外派遣交流事業を実施しています。毎年町内の10人の中学生を10日間、オーストラリアのクイーンズランド州タウンズビル市へ派遣しています。そして、現地のノーザン・ビーチーズ・ステイト・ハイスクールにお世話になり、6日間のホームステイを体験します。短い期間ではありますが、参加した中学生みんなが満足感いっぱい帰国している姿を見てうれしく思います。

また、このハイスクールとは将来的に姉妹校の提携をすることとしています。

### 町民の安全・安心！

平成23年の東日本大震災で、私たちは自然災害の恐さを改めて知りました。

津幡町では、これまで隣接する金沢市、河北郡内灘町、かほく市、それに富山県小矢部市との間で災害時相互応援協定を締結しておりました。しかし、あつてはならないことではあります。万が一大きな災害が発生すれば、被害が出るのは周りの市町も同じであります。

このため、福岡県遠賀郡岡垣町との間で災害時相互応援協定を締結することとなり、平成24年3月23日、岡垣町で宮内實生町長との間で調印を行いました。

◀福岡県岡垣町と災害時の相互応援協定を締結



ました。ちなみに岡垣町までは、直線で640kmあります。

町民の安全、安心、そして福祉の向上が私たちに与えられた大きな仕事であります。その中には、子どもたちに夢を与える教育をすることも入ります。また、若い人たちに雇用の機会を創出するための企業誘致も大事な仕事です。景気が低迷し続ける中、多くの難題を持ちつつ、住んでよかったと実感できる、町づくりに邁進したいと考えています。

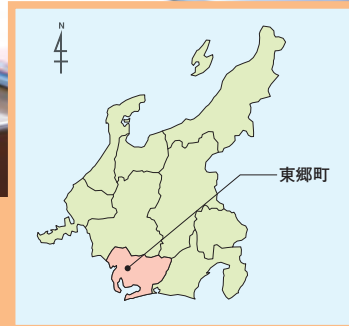
津幡町長 矢田 富郎

(平成24年5月21日付第28000号)

▶毎年10人の中学生をオーストラリアに派遣。タウンズビルにて



# 子育て支援ナンバーワンでまちづくり



とうごうちょう  
愛知県 東郷町

## 水と緑とボートのまち

東郷町は、愛知県の尾張東部地域に位置し、明治39年に尾張の「東のふるさと」という意味で「東郷村」として誕生しました。以来昭和45年の町制施行を経て現在に至るまで100年以上の歴史があります。

面積は18.03km<sup>2</sup>と小さな町で、尾張と三河の境となる境川流域の豊かな水辺や緑を有する農業のまちとして栄えてきましたが、名古屋市と豊田市の間に位置する地理的条件に恵まれ、高度成長期以降は両市の発展と共に絶好のベッドタウンとして発展し、人口は4万2千人余を数えるようになり、現在も着実に増え続けています。

現在は、周辺を全て「市」に囲まれた一郡一町で、小さくてもキラリと光る「住んでよかったといえるまち」

を目指し、住民と協働のまちづくりを進めています。そして、その実現のために、公募により集まった町民と町の職員で構成する検討委員会において、約2年をかけて条例素案の検討・作成を行い、平成25年6月に「東郷町自治基本条例」を制定しました。

また、東郷町には、50年前に開通した木曾御岳を水源とする愛知用水の中間調整池で、総貯水量900万トンの愛知池があります。ここには、愛知県では唯一の1,000mコースを7レーン有する公認ボート競技場があり、多くの全国規模の大会が開催されています。

東郷町はこの特色を活かして、選手寿命の長いボート競技を「町の生涯スポーツ」と位置づけ、町民の健康づくりを図りながらシガッタ（ボート大会）を開催して町民交流の場として活用しています。

ご当地キャラクター



「トッピー」

◀毎年8月に愛知池で開催される「町民レガッタ」



▶愛知池全景



まちづくりではキラリと光る三つの柱として、「子育て支援」、「健康づくり」、「賑わいづくり」を掲げて取り組んでいます。とりわけ、まちの将来を担う子どもたちが健やかに成長できるよう「子育てするなら東郷町」をキーワードに、子育て支援ナンバーワンのまちを目指して、様々な施策を展開してまちづくりを進めていますので、その代表的な取り組みをレポートします。

### 子育て支援ナンバーワンを目指して

#### 1. 安全・安心な居場所づくり、放課後子ども教室

小学校に通う児童に、放課後の安全・安心な居場所を提供するため、子どもにとって最も身近な学校施設を利用した「放課後子ども教室」を平成20年10月に開設、その後、3教室を開設し、現在は6小学校のうち4校で実施していますが、将来は全校で実施する計画です。

この放課後子ども教室は学校の余裕教室を利用し、授業のある日は授業後から午後5時30分まで、授業のない日は午前9時から午後5時まで、お盆、

年末年始、学校行事などでの閉所を除いて平日はほぼ開所しており、年間約220日間運営しています。

運営は学校とは全く切り離し、生涯学習課の指導員と地域のボランティアの方々で行われています。活動は「学び・遊び・体験・ふれあい」の四つに分類され、「学び」の時間では、授業のある日は一日30分、授業のない日は60分の学習タイムを設け自主学習を支援しています。

「遊び」の時間では、室内遊びや校

庭でドッジボールなどを行い、「体験」の時間では、主に地域の方々に講師をお願いし、お茶の作法やクッキングを楽しむなど普段体験できない活動を行っています。

また「ふれあい」の時間では、地域の方々や学校の近隣を散策して自然観察をしたり、児童館で活動している放課後児童クラブと交流を図るなど、教室外での活動も活発に行っています。そのほか季節に合わせたイベントや遊びの大会を開催し、現場の指導員が話し合っって児童の興味、関心を引き出しています。これらの活動には、主に1年生から3年生の児童が参加し、異学年や地域の方々との交流を深めています。

▶放課後子ども教室 指導員による本の読み聞かせ



教室の運営に当たる指導員は、子どもの参加票や教室だよりで保護者と情報共有を、また活動日誌を使って指導員間で子どもの情報を共有しています。学校側とは、定期的に連絡を取り参加児童の情報を提供すると共に、学校行事や利用施設の確認などスムーズな運営に努めています。



## 2. 文部科学大臣表彰のダブル受賞

平成24年12月には、こつした地域を巻き込んだ「放課後子ども教室」の活動が特に優れていると認められ、兵庫小学校の放課後子ども教室が、地域による学校支援活動推進にかかる文部科学大臣表彰を受賞しました。

また、諸輪中学校PTAの活動も高く評価され優秀PTAとして、文部科学大臣表彰を受賞するというダブル受賞の栄誉に浴しました。



▶ 放課後子ども教室 自主学习風景

## 3. 更に充実させる今後の取り組み

今後は更に活動内容を充実させ、各放課後子ども教室の特色を出すため、指導員には、子どもに対する対応力の向上を目的とした研修への参加を、保護者には放課後子ども教室の運営に積極的な協力を求めていく予定です。

また、活動内容の改善充実を図る目的で、放課後子ども教室のコーディネーター、自治会長、学校代表、PTA代表、町社会教育指導員を構成員と



▶ 中部児童館全景

する運営連絡会で当該年度の事業検証と評価をして、次年度の事業計画への反映を図っていきます。

## 4. もう一つの安全・安心な居場所づくり放課後児童クラブ

東郷町には、全ての小学校の近くに児童館を配置していますが、全6館で「放課後児童クラブ」を、前述の「放課後子ども教室」に先駆けて開設しています。ここでは主に小学生の低学年（小学校3年生まで）を対象に、日曜日を除く毎日、午後7時まで遊びを中心に子どもたちを預かっていますが、当然、地域の皆さんのボランティア活動の協力を得て運営しています。

## 充実した東郷町の子育て支援

### 1. 子ども医療費と不妊治療費の助成

子ども医療費は、平成24年1月から助成の対象を拡大し、入院・通院とも18歳まで所得制限なしで無料としています。これは、愛知県では初めてのことで子育て中の皆さんから大変感謝されています。

そして平成25年3月からは、既に実施している県内トップクラスの不妊治療費助成制度に加え、不育症治療費助成制度も愛知県内で初めて実施しています。

### 2. 安心子育てへの様々な支援

病気や病気回復中の、生後6か月から小学校3年生までの子どもを預かる「病児・病後児保育」では、働く親を支援しています。また、核家族化と社会環境の変化で要望の強い「一時保育」を保育園とは別に運営しています。そのほか親子の交流、子育て相談ができる「子育て支援センター」、町内外を問わず親子で遊べる「つどいの広場」を運営しており、つどいの広場の一角では、短時間の一時保育も行っています。また、保育園の送迎や家庭で一時的に子どもを預かる「とくごうファミリー・サポート」など、安心して子育てができる環境を整備しています。

### 3. 子育て不安を解消する、子育て支援力ワンセフー

子育て支援を進めるにあたって、財政支援や環境整備はもとより、心の通った子育て支援をより重視しています。子育て相談員として、子育て支援カウンセラーを子育て支援課に2名配し、子育てに不安を抱える家庭をフォローしています。主な事業として「5歳児すくすく発達相談」、「子ども相談」、「子育て支援訪問」、「子ども相談」などを実施しています。



▶コーディネーションントレーニング

### 4. 東郷町独自の5歳児すくすく発達相談

「5歳児すくすく発達相談」は、町内の保育園や幼稚園に通う5歳児を対象に、臨床心理士や発達障がい支援指導員等の発達支援スタッフと各園を回り、保護者へのアンケート等を基に、行動観察を実施しています。発達の気になる子どもには発達検査を実施して、子どもの個性を確認し、必要な支援を保護者に提案するとともに、就学に向けて、早期に小学校との連携を図っています。



▶「納涼まつり」での東郷音頭

きます。この取り組みは東郷町独自のシステムです。

#### 文科省に認められた、幼児期の体力づくり

現在、町内にある8つの保育園では、幼児期に必要な多様な身体動きや体力、運動能力の基礎を楽しく習得できるよう、先進的な「運動遊び」に取り組んでいます。この運動は、多様な動きの経験を通して、リズム感やバランス感覚など、身体の部位を調整して滑らかに効率よく動かす「コーディネーション能力」の向上に視点を置いています。

この先進的な取り組みが評価され、昨年、文部科学省が推進する「幼児期の運動促進に関する普及啓発事業」の調査研究の対象事業に採択されました。

#### 「東郷音頭」でふるさとを想う

民謡「東郷音頭」は豊かな東郷町を謡いこんだもので、盆踊りなど多くの町民に愛されています。

子どもたちが将来、ふるさと東郷

を誇りに思えるよう「ふるさと意識」の醸成を図るために保育園で4歳と5歳児を対象に、民謡「東郷音頭」の歌と踊りを教えています。園児と指導している東郷音頭保存会の皆さんとのふれあいが深まることにも、地域の盆踊り大会も大変活性化しました。

#### 今後の取り組み、子どもの権利条例

全ての子どもたちが、安全で安心して健やかに成長することができる町を実現するため「子どもの権利に関する条例」の制定に向けて準備を進めており、今年度中の条例制定を目指しています。今後も、子ども・子育て支援法の施行に伴う子育て環境の整備に努めつつ、子育て支援に関する住民ニーズの把握に努め、事業の拡充を図り、『子育てするなら東郷町』のフレーズが、さらに世間で定着するよう意欲的に進めていきます。

東郷町長 川瀬 雅喜  
(平成25年9月23日付第2854号)

▼毎年2月11日、12日に開催される田峰観音大祭(奉納歌舞伎は12日)

現地レポート



# 田峰観音奉納歌舞伎の 保存と田峯小学校 引き継がれる伝統芸能



愛知県 設楽町

## 自然豊富な設楽町

設楽町は、愛知県の北東部、三河山間地域に位置する北設楽郡に属し、東は東栄町、豊根村、西は豊田市、南は新城市、北は長野県根羽村と隣接しています。人口約5、900人、高齢化率は40%を超える過疎の町で、総面積273.96km<sup>2</sup>の約90%を森林が占め、豊川、矢作川、天竜川という三大水系の水源の町となっています。

1、000m級の山々が連なり、杉、ひのきの山々の中に新緑、紅葉を奏でる木々が多くあり四季折々の美しさを楽しむことができます。また、アマゴやアユなどの釣りシーズンには寒狭川(豊川)には多くの太公望が訪れ、釣果を競い合います。  
交通は、国道257号、420号、

ご当地キャラクター



「とましーなちゃん」

473号の3本の国道を基本に、道路整備が進められています。自動車社会の進む中、北設楽郡3町村をネットワークする「おでかけ北設」というコミュニティバスを運行しています。町村域を越え相互乗り入れをするというめずらしい運行体系をとり、児童生徒、高齢者など交通弱者のための生活の利便を図っています。

## 田峰観音奉納歌舞伎の誕生

田峰観音は、田峯小学校校歌にも♪緑の城址 夢が淵 田峰観音名も高くとと歌われ、地元では「かんのんさま」と呼ばれ親しまれています。

毎年2月11日と12日には田峰観音大祭が行われ、11日は田峯田楽(国重要無形民俗文化財)、12日は地元「谷高座」による歌舞伎が奉納され、県内

はもとより、県外、海外からも観光客が訪れます。

奉納歌舞伎は、90戸約300人の田峯地区に残っている伝統芸能です。奉納歌舞伎のきっかけとして、次のような霊験伝説があります。

『徳川4代将軍家綱の時代、田峯の日光寺が火災に遭い、その再建のために村人達が当時天領であった段戸山に

入り誤って木を伐採してしまった。その話を耳にした御油赤坂の代官が検分

にくることに成り、村人達は過ちを悔い、観音様に「村が3軒になるまで歌舞伎を奉納します」と願いをかけた。検分当日、旧暦の6月の土用というのに

雪が降り、代官は「こんな寒いところに木を伐りに来るはずがない」と引き返し、田峯は1人の罪人も出さずにす

んだ。その後、毎年、歌舞伎を奉納することになった。』

以降、300年以上にわたり、太平洋戦争中も途切れることなく、奉納歌舞伎は続けられています。

### 奉納歌舞伎の保存と田峯小学校

「谷高座」の座員は、

地元または田峯にゆかりのある青年が担っていますが、進む過疎化に抵抗することはできず後継者育成

成が大きな課題となってきました。そのため、「谷高座」は、昭和50年代前半、田峯

地区唯一の学校、田峯小学校に話を持ち込み、その担い手に小学生を見出しました。それまでの歌舞伎には関係者の子どもが子役として出演することはありましたが、小

◀田峯小学校の子供達による「白波五人男」



学校のすべての児童を対象としたことは画期的でした。以来、小学生による子ども歌舞伎が1幕から2幕、毎年上演され、人気を集めています。

小学生の頃から地元の伝統芸能「歌舞伎」に関わっていくことで、伝統芸能を守っていくという意識が醸成されており、成人になって仕事の関係で他町村に住んでも祭りには帰ってきて歌舞伎を演じる若者もいます。また、田峯地区に住んでいる若者たちは、自分の子ども達に自分が過ごしてきた時



▶「田峯観音」谷高山高勝寺



▶素人歌舞伎では珍しい「土蜘蛛」

間と同じように、指導者と立場を変えて歌舞伎の伝承をおこなっています。

### 奉納歌舞伎の広がり

地元の田峯小学校には、戦前に、国際協調の精神を育てることを目的にアメリカから贈られた青い目の人形「グ

レース」が現存しています。人形の追跡調査の結果、アメリカ合衆国オハイオ州デイトン市の学校から贈られてきたと判明し、昭和63年に田峯地区を挙げてこの人形の還暦祝いをおこない、これを契機にデイトン市に働きかけ「青い目の人形」を通じた草の根交流が始まりました。

平成2年には「青い目の人形アメリカ合衆国訪問」が始まり、青い目の人形「グレース」を里帰りさせるとともに、アメリカにおいて子ども歌舞伎を演じる他、現地の小学校への体験入学、ホームステイなどがおこなわれています。



▶現地小学校で記念撮影



▶体験入学の様子

この訪問は、3年に1度のペースで、これまでに8回おこなわれていますが、田峯小学校の児童たちがアメリカを訪問するだけでなく、アメリカの子どもたちも田峯地区を訪問し、交流が深められています。

これらの交流に対する行政からの資金的支援はなく、すべて田峯小学校PTAが休日を返上し、肥料となる牛糞詰めなどの作業を通じて地道に資金確保をおこなっている、今日まで20年以上交流を続けています。

▶アメリカ合衆国で演じられた子ども歌舞伎



### 「谷高座」と地域のかかわり

「谷高座」の活動は、歌舞伎の伝承や国際交流にとどまらず、イターンによる地域定住人口の増加にまで及んでいます。

平成10年に「谷高座」の活動に大きく影響する田峯小学校の存続について、地域の人々が検討をしていく中で

◀「菅原伝授手習鑑」 寺子屋の場



「子育て中の若い家庭を対象にして、新しい宅地を開発し、設楽町、特に田峯地区への永住者を募る」ということとなり、地域の合意を得て、田峯区を挙げての一大事業として取り組むこととなりました。

平成10年8月に田峯小学校PTAを中心とした「田峯21世紀委員会」を

立ち上げ、この委員会を中心に具体的な検討が進められ、平成11年には用地交渉や測量に入り、平成12年7月には造成工事が始まりました。

当初は、宅地造成はしたものの応募者があるのだろうかという不安のほろが強かったのですが、地域の小学校が少子化に伴う学校統合にならないように、地域の人々による小学校存続のための宅地開発事業が話題となり、新聞各社にその記事が掲載されたことで問い合わせが徐々に来るようになり、平成13年5月には分譲説明会を開くことができました。現在は、開発した17区画のうち14区画に家が建ち、あと3区画を残すのみとなっています。

この宅地の完成により、実際に田峯小学校児童数は増加しており、「谷高座」による奉納歌舞伎をおした地域の結束力の強さが伺われます。

## 今後の課題

田峯地区においては、田峯歌舞伎という伝統芸能が大きく関与して、伝統芸能の継承と田峯小学校の存続という大きな課題を乗り越えるため、地元がまとまり若者定住に自ら取り組み、その結果、地域の活性化だけでなく、田峯小学校自体の活性化も実現している数少ない良い事例のひとつです。

また、田峯地区では、田峯を知ってもらい交流人口を増加させることを目的に、田峯の四季や伝統行事の絵はがきを作成し広く配布するため、その絵はがき用の写真を広く募集するフォトコンテストなどの新しい事業にも取り組んでいます。

設楽町には、田峯歌舞伎以外にも多くの伝統芸能があり、それぞれ親から子、子から孫へと伝えられてきました。いずれも少子化に伴う後継者不足は大きな課

題となっていますが、どの地区もそれぞれ工夫をして伝統芸能を大切に守り続けていこうとしています。伝統芸能を継承しながら、地域の団結、地域の活性化につながっていくよう行政も協力していきたいと思えます。

(平成25年6月3日付第2842号)

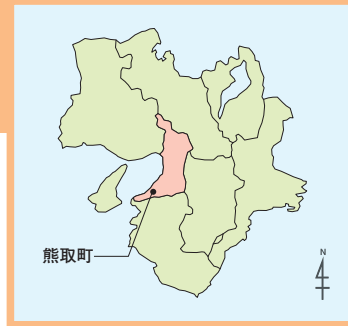
設楽町 総務課



▶芝居小屋の様子



くまとりちょう  
大阪府 熊取町



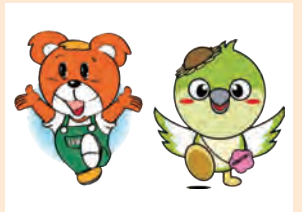
# 子育てしやすいまちづくり 子育てを応援する人がたくさん暮らすまち

## 都会の利便性と豊かな自然、 両方の良さを持つ暮らしやすい町

熊取町は、大阪都心部から車で約30分、関西国際空港からは車で約15分の距離で、利便性が高く大阪南部に位置する、人口44,361人(平成26年11月末現在)のまちです。

自然環境や歴史にも恵まれ、「大阪みどりの百選」「全国水源の森百選」にも選ばれた「奥山雨山自然公園」や「全国ため池百選」に選ばれた憩いの親水空間「長池オアシス」、重要文化財「中

### ご当地キャラクター



「ジャンプ君」(左)と「メジャーちゃん」(右)



家住宅」「来迎寺本堂」「降井家書院」、国史跡へ指定された「土丸・雨山城跡」など見どころもたくさんあります。気候も温暖で、1970年代より宅地開発が進み、郊外の良好な住宅都市として発展してきました。

快適で暮らしやすい風土に、大阪体育大学、大阪観光大学、関西医療大学、京都大学原子炉実験所の4つの大学、全国町村ではトップクラスの36万冊(児童書13万冊含む)の蔵書を誇る図書館等「学園文化都市」としての特徴も有しています。

## 協働による子育て支援の礎

もともと農業と織物業を主産業とした熊取町は、女性が働くことが日常的であったことから、保育行政に力を入れてきました。現在も保育所の待機児童は「ゼロ」で、保育所が子育て支援の中心的役割を担っています。また、

▶「学園文化都市」36万冊の蔵書を誇る図書館



▶重要文化財「中家住宅」



▶「だんじり祭り」



## 「待つ支援」から「届ける支援」へ 主体的な住民活動と柔軟な行政との「協働」で発展してきた子育て支援

トが行われています。

### 「待つ支援」から「届ける支援」へ 主体的な住民活動と柔軟な行政との「協働」で発展してきた子育て支援

(1) 「待つ支援」から「届ける支援」へ

主体的な住民活動と柔軟な行政との「協働」で発展してきた子育て支援ですが、1990年代に盛んであった「子育てサークル活動」を最後に、若い世代の主体的な地域活動は縮小傾向にあります。つながること

が苦手な若い世代は、次第に地域活動から遠のき、最近では、「つどいの広場」や「子育てサロン」等の子育て支援事業にさえも、足の向かない親子が少しずつ増加しています。

子どもの育ちにとって「地域社会」は重要な意味があると言われています。「地域」には「家庭」と異なる役割があり、子ども達が人間関係や社会性を身につける場として大きな意味があるのです。社会と隔絶された家庭の中だけでは、子どもは育たないのです。

地域では「だんじり祭り」「太極拳フェスティバル」「農業祭」等様々な行事が盛んで、地域コミュニティが子ども達を育む役割を担ってきました。加えて、宅地開発により人口が増加する中、新しい土地で頼れる知り合いがいない状況下で子育てを支え合うために、転入された親たちを中心に「文庫活動」「共同保育所」「学童保育所」等多くの住民活動が生まれました。「孤立による子育て不安」や「長時間保育の必要性」等子育て支援における新たな課題やニーズは、これら住民活動と協働することで発展を遂げてきました。「新たな公共」として「協働」という概念が注目されるずっと前に、住民と行政が協力し、子育てを支援していたというのが本町の子育て支援の始まりです。主体的な住民と柔軟な行政、先人の方々の努力による「協働」が本町の子育て支援の礎であるといっても過言ではないでしょう。

現在は、午後10時までの延長保育や、小学校1年生から6年生対象の学

童保育、保育所の送迎や一時預かりなどに対する会員制の子育て援助システムである「ファミリー・サポート・センター事業」、未就園親子の居場所として「つどいの広場事業」など、多様な子育て支援が、行政とNPO等との協働で実施されています。特に「ファミリー・サポート・センター事業」においては、他自治体において育児をサポートする「協力会員」が不足する中、本町においては十分な会員数を確保しており、年間200件を超えるサポー



▶ つどいの広場



▶ 「ホームスタート事業」ホームビジター養成講座の様子



▶ ボランティアにおける安全見守り活動



そこで、引きこもりがちな親子を対象に、悩みや不安を傾聴し、その成長を見守りながら、親子と社会をつなげていく子育て支援活動が必要となってきました。

「待った支援」から「届ける支援」へ、本町の大切にしてきた「協働」を活かした新たな取り組みとして「ホームスタート事業」を実施することになりました。

(2)ホームスタート事業の実際  
「ホームスタート」は、イギリスで

発祥したボランティアによる「訪問型子育て支援」です。本町では平成24年8月よりNPO法人に委託し実施しています。関西では初めての取り組みであるとともに、行政の保健・福祉分野とNPO法人の協働により、乳幼児健診や乳児家庭全戸訪問事業との連携を図り、要支援ケースについては子ども家庭相談へつなげるなど、重層的かつ継続的支援が行えている点に大きな特徴があります。

不安やストレスを感じている人なら誰でも申し込むことができます。訪問は、7日間の研修を修了した「ホームビジター」と言われるボランティアが行います。平成26年11月末現在、29名のホームビジターが登録しています。ホームビジターは週に1回、2時間程度、合計5回を目標に訪問を行い、子育ての悩みを聞いたり、一緒に家事や育児を行いながら、子育ての意欲や技術の向上を図ります。ホームビジターが週に1回、2時間程度、合

計5回を目標に訪問を行います。また、事業全体の運営、「ホームビジター養成講座」の実施、訪問を希望する親とホームビジターとの調整などは、NPO法人ホームスタート・ジャパンにおいて子育ての専門知識に関する研修を受講し認証を受けている4名の「オーガナイザー」が行います。平成26年11月末までに29名の申込みがあり、オーガナイザーとビジターによる訪問延べ件数は320回に上っています。

### (3)利用者やホームビジターの声

利用者からは「子どもと2人きりでずっと家にいるのはしんどかった。一番つらい時期に訪問してもらって支えてもらった。」「子どもとの遊び方がわからなかったが、ビジターさんが一緒に遊んでくれたことで、子どもとの関わり方を学ぶことができました。」「下の子が生まれ、上の子に関わってやれなくなっていた。ビジターさん

◀ ボランティアと野鳥観察する子ども達



んだ。「人との出会いを実感できる活動、自分も子育てを支えてもらったので、少しでも役に立てることがとても嬉しい。」など、活動する喜びの声がたくさん届いています。

利用者やホームビジターさんの声から、想いは必ず響き合うことを実感しています。そして「ホームスター」から「つどいの広場」や「子育てサロン」の利用など「地域社会」との橋渡しをすることは、親子どもが共に育ちあつたことを応援することであり、将来の子育てを応援してくれる人材を育てることもあつたと考えています。

### 主体性の喚起、「お母さん、お父さんによる子育て応援DVDの作成」

その他、子育ての当事者である親が、楽しく地域を学び、その主体性を喚起する取り組みとして、子育て応援DVDを作成しました。撮影ボランティアスタッフの指導の下、お父さん、お母さんが様々な子育て支援事業取材し、30分のDVDを作成、現在本町

ホームページで公開しています。議論と取材を繰り返し、子育て当事者の目線でもわかりやすい作品に仕上がっていますので是非ご覧ください。またこのDVDは、本町の住民として誕生されたお子様などに、お子様の名入れ刺繍タオルセットなどにも出産記念品として贈呈しています。  
(熊取町ホームページ：<http://www.town.kumatori.lg.jp/>)

### 最後に、子育てしやすいまちとは

「まち」は、そこに暮らす人々によつてつくられます。「子育てを助けてもらった経験」から「助ける経験」が世代を超えて循環し、子育てに優しい眼差しを向けられるまちであつて欲しいと思います。

子育てしやすいまちとは、地域の優しい眼差しの中で、自分らしく子育てができるまちであると考えています。

また、子どもの自立の根っこは、自己肯定感と言われています。自己肯定感とは「自分は大切な存在だ」「自分にはかけがえない存在

だ」と思える心の状態を言い、その獲得には、幼少期に「ありのままの自分」を受け入れられた体験が重要であると考えられています。自己肯定感は受容と共感の中から生まれるものなのです。熊取町には受容と共感の心で子育てを応援する人々がたくさん暮らしています。今後も住民と行政の協働により「自立した人育ち」をにらみながら、地道な子育て支援活動が続けてまいります。

熊取町長 中西 誠  
(平成24年12月17日付第2823号)



▶「熊取町公式 facebook」平成24年11月開設  
ジャンプ君(左)とメジャーナちゃん(右)



和歌山県 有田川町



# 有田川町 地域交流センター「ALEC」 本のあるカフェ十まんが館＋ミュージアム博物館

## 有田川町の概要

有田川町は紀伊半島の北西部、和歌山県のほぼ中央に位置する人口約27,000人の町です。町の中央部には高野山に源流を発する有田川が西に蛇行しながら悠々と流れています。古くよりみかん栽培が盛んであり、『有田みかん』の産地としても知られております。また、粒が大きくて香りが高い『ぶどう山椒』は生産高日本一を誇ります。

## 町のランドマークとひと…

平成21年4月、有田川町にちょっと変わった図書館のような施設をオープンさせて頂きました。それが『ALEC（アレック）』です。図書館のよくな施設…と表現させて頂いたのは、従来の図書館のイメージとは異なる施設だからです。ここは図書館と言つ

り、『本のあるカフェ』なのです。香り高い本格珈琲や紅茶などを飲みながら本が楽しめ、友達同士で会話が楽しめる、パソコンでネットもできる、そしてお腹が空けば本を横に置いてパスタやパニーニが食べられる、そんな公立では珍しい施設が『ALEC』なのです。

従来の図書館のイメージは、図書館に入るとまず目に付くのは司書の座ったカウンター。そして目を室内に移すと整然と並んだ書架、書架、書架…。そして静かに本を選ぶ人々。ずらりと並んだ書架の間には少しだけけれどテーブルとイスが置いていてみんな静かに本を読み、そして調べ物をしている…そんな光景をきつと浮かべるに違いありません。

しかし、『ALEC』は違います。入口からは長く明るいエントランス。紀州材を用いたそこにはクラシック

ご当地キャラクター



「ありりん」

カーが数台並んでいます。そしてエン

トランスを過ぎると広々とした空間が有りテーブルとイスが置かれて、前面ガラス張りの窓からはウッドデッキのテラスや芝生広場が一望できます。一見すると広いカフェのような光景なのです。隅の方には背の低い書架はあるけれど建物の空間の大部分は中央ホールです。そして、耳に入ってくるのは音楽です。有線放送でJAZZなどを流しております。お客様を眺めれば、お茶を飲みつつ仲良しグループで話している人、何やら打ち合わせのようなことをしているサラリーマン風の人々、本を読みふけている人、「コミッ



▶憩いの場所となっている「本のあるカフェ」

◀長く明るいエントランス



ク誌を何冊も積み上げて夢中で読んでいる青年、バスタに舌鼓を打っている若い女性達、窓際の席ではパソコンを使つてなにやらレポートを書いているような学生さん…様々な人々がそれぞれのスタイルでここを利用しています。

図書館とは「静かで、話しをしてはいけないところ」「館内では飲食が出来ないところ」というのが一般的なイメージですが『ALEC』は全く違います。音楽が静かに流れ、珈琲などのドリンク類やパニーニ、パスタなどの食事も出来る、まるで『カフェ』のような空間が『ALEC』なのです。もちろん図書館機能も併せ持つており

ますから約44,000冊の書籍、約36,000冊のマンガ(コミック誌)、そして月刊誌、週刊誌などが置かれています。専門書などの類はなく親しみやすい本が中心の施設なのです。カフェを館内に作ったり、クラシックカーなどを展示していたり、ミニ博物館を併設しているのはいろんな層のお客様に利用して頂きたいという思いからです。本好きの人が集まるころ、書籍や資料を利用するところ、それだけではなく、『憩いの場所』『お茶を飲む場所』『語らい交流する場所』『待ち合わせの場所』などにも利用できる新



▶クラシックカーが並ぶミニ博物館



たなスタイルの図書館づくりに挑戦しているのが『ALEC』です。人口27,000人の小さな町ですが、アレックに訪れて頂くお客様は月平均10,000人程度となっております。町の新たなランドマークにも成っているようです。

### web libraryを導入…

今回、また新たなサービスを始めました。それが『電子書籍』への対応です。近年、書籍・雑誌等の印刷媒体の売り上げは減少する一方です。平成

8年のピーク時には書籍雑誌売上は2兆6、500億円でしたが、平成23年では1兆8、000億円程度まで落ち込んでいます。ピーク時の実に68%です。このように印刷媒体は年々減少の一途を辿っているのが現状です。逆に『電子書籍』は成長著しく、平成27年度には売上は2、200億円超になると見られています。アメリカではアマゾン社の電子書籍売りが印刷媒体を上回りました。書籍形態や端末、そして文化の違いはありますが、アメリカではもう既にキンドルなどの爆発的な普及により電子書籍が一般化して

いると言えます。日本に於いてもケイタイ小説の台頭など若者には既に印刷媒体にこだわらないという傾向があり、電子媒体が印刷媒体と逆転する日も近いのではないかとさえ思われます。そんな現状の中、公共の図書施設としてもニーズへの対応、そして今後の図書館のあり方を考える時に、電子書籍の利便性、有効性を認め、これを積極的に活用していくことが時代への対応であるとして、新たなサービスを開始いたしました。

平成23年11月3日に和歌山県内では初の、そして町村では全国初の電子

書籍による図書サービスを開始いたしました。タブレット型(TPB)にも対応しております。ちなみに本格的なIPad対応としては全国初の試みとなっております。

電子書籍はご利用頂く住民の皆様がインターネットを介して私どものホームページ『有田川Library』に入ってきて頂き、電子コンテンツとしての書籍をパソコン上で読み頂くというものです。要するに、インターネット接続環境とパソコンなどの端末があればどこでも利用が可能というシステムです。

さて、ここで、電子書籍を導入することによる期待される効果を挙げてみたいと思います。

- ① 自宅や外出先からでも利用できる。  
会社などで遅くまで働き開館時間に図書館に来られない方や、物理的に図書館まで来ることが出来ない方、また遠方の方、交通弱者の方にも利用してもらえます。IDとパスワードさえあれば、世界のごくからでも電子図書を利用できる。
- ② 365日、24時間いつでも利用可能。

従来の図書館だと開館時間がないと利用することが出来ないが、イン

ターネットを使ってアクセスするだけで365日、24時間いつでも利用することが可能となる。

- ③ 音声やアニメなどデジタルならではの対応が可能。

印刷媒体であれば、例えば図鑑などでは動物の鳴き声や動きなどはわからないが電子媒体だと音や声を出すことが可能だし、図を回転させることも動画にして動きを表現することも出来る。また、障害がある方にも音声対応で読んだり、音でお知らせすることも可能。

- ④ 独自のコンテンツ、郷土資料などを提供できる。

町で作成した資料や広報紙、パンフレットなどの類から郷土資料までデジタル化することによって自由に閲覧することが出来、貴重な資料も電子化によって劣化しないので閉架する必要も無く誰もが閲覧できるようになる。

- ⑤ 返却忘れ、汚れ、そして盗難の恐れがない。

返却日は自動設定で返却忘れがなく、また電子媒体なので印刷媒体のような形のあるものではないので盗難されることもなく。

以上が期待される効果です。  
電子書籍には今までの印刷媒体に



▶町の新たなランドマークとなっている「ALICE」



▶様々な人々がそれぞれのスタイルで利用している。

出来なかつたこと、そして可能性が沢山あります。デジタルデータは劣化しないので古文書などの貴重資料をデジタル化すれば閉架することなく誰もが閲覧できるようになりますし、タイトルを付けることで検索もスムーズになり、資料整理も容易になります。絵画や図面、写真などの資料、パンフレット、チラシ類なども今まで高張っていた整理保存するのが難しかったのですが、デジタル化すれば収納場所が必要なくなり、且つ検索も容易になります。加えて、音声、動画、また立体化（3D等）にも対応できてよりリアルでわかりやすい資料となるばかりか、障害者の方への対応も可能となり、また効果音や各種言語への対応、注釈の添付や参考資料との連携も容易に図ることが出来ます。

まだまだ考えられることは無数に有り、工夫と使い方でより世界が広がるのが電子コンテンツだと考えます。全国どこの方でもフリーに閲覧できる本町ならではの特徴ある資料提供など情報の発信も含めて電子コンテンツの更なる利用形態を研究していきたいと思えます。

電子書籍は今後の図書館行政とは切っても切り離せない大きな課題である

ことは確実です。極論すれば、紙へ又は無くなり、電子コンテンツに取って代わる日もいつかやってくるかも知れません。電子書籍の登場は図書館のスタイルを大きく変えるでしょう。ただ、図書館の持つ情報の収集、資料提供という本質的且つ基本的な機能は普遍であろうと思います。私たちが早々に電子コンテンツへの対応を決めたのは今後のあり方への試金石でもあり、新しい図書館づくりへの新たな扉を開いたといつことでもあります。公共図書館に課せられた責務と社会的要請をもう一度見つめ直し、存在意義を今一度確かめたいと考えたいと思います。

### 平成25年11月、全国棚田(千枚田)サミットを開催…

さて、話は変わりますが、本町の代表する風景として『あらぎ島』があります。あらぎ島とは有田川の湾曲と浸食作用によってできた舌状の棚田で、大小54枚の水田が扇を開いたような独特な形をしております。その景観の美しさから、『日本の棚田百選』や第4回『美しい日本のむら景観』コンテスト』農林大臣賞を受賞するなど、全国的にも高く評価されています。平成25年10

月17日には風景の国宝と言われる『重要文化的景観』にも国の方から指定を受けております。

棚田のある風景はふるさとの原風景として日本人の心の中に刻まれてきました。幾重に重なり合った棚田は豊かな自然と稲作文化を語るには欠かせないものです。このすばらしい棚田の役割を見直し、先人達の知恵を学び、そして環境保全と農村文化を考えていくのが全国棚田サミットです。

有田川町では、『人、まち、棚田とも未来へ』と題し、平成25年11

8日から9日にかけて全国より多くの方々をお迎えして全国棚田サミットを開催させて頂きました。このサミットを機に棚田の美しさと機能を見直す仕掛け作りも進めて参ります。

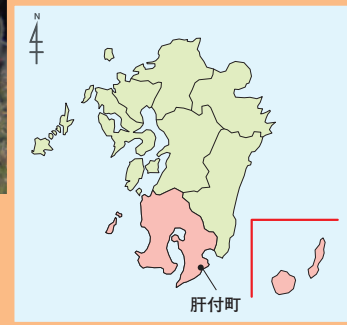
有田川町には美しい棚田、そして町のランドマークとなった『A L E O C』があります。有田ミカンの里だけではなく、これらもご覧いただけただらと思えます。是非ともお越しください、心よりお待ちしております。

有田川町教育委員会 教育部長 三角 治  
(平成25年1月21日付第2826号)



▶「あらぎ島イルミテラス2014」ポスター

# 歴史と未来が融合する町、肝付町



きもつきちょう  
鹿児島県 肝付町

## 夢が叶う 叶岳(かのうだけ)で1000段ウォーキング

平成24年3月26日、1000段階を登ろうと大勢の老若男女が集まった。1000段階とは、肝付町内之浦にある叶岳(標高187メートル)にこの程完成したウォーキングに最適な階段のことです。

この階段を登りきると、頂上にあるのが「叶嶽(かのうだけ)神社」です。何と言っても名前が前向きです。よその階段を登るより、よその神社をお参りするより、夢が叶いそうじゃないですか。

おまけに、この叶岳からの内之浦湾はまさに絶景、宿泊可能な「テージ」に泊り朝日が始まるのを待つのも良い。その言葉は、叶嶽神社の「叶」の文字、「ロウ」に見えるのは気のせい

かな？

この何とも欲張りな場所へ一度お越しになり、1000段階を登って、夢を叶えてみてはいかがでしょうか！

## 鹿児島県で一番元気な町になりたい。

夢が叶う町は元気であれば・・・と言いつつ、肝付町は県下1元気な町を目指して頑張っています。

本土最南端の鹿児島県大隅半島南東部に位置し、総面積は308.15km<sup>2</sup>と広大です。林野地帯・畑地帯・水田地帯に大別され、平均気温は17℃前後ととても温暖で、約3000mmの雨が降ります。

山もあります。町の中央部には900m級の山々(国見岳・黒尊岳・浦与志岳)が連なります。この三山縦走は、「三岳参り」と呼ばれ、登山初心者にも人気があります。

ご当地キャラクター



「いて丸」

こんな肝付町は平成17年に2町（高山町と内之浦町）が合併してできました。人口は平成24年3月現在、17,362人、高齢化率36・1%と少子高齢化が進んでいます。

### 九〇〇年の伝統、歴史の町 その時少年は神になる やぶさめ祭り

約九〇〇年の伝統を誇る流鏝馬は、狩衣装束に綾蘭立、薄化粧の若者が馬上から合計9本の矢を放ち、国家安泰、悪疫退散、五穀豊穡を祈願する神事です。

毎年10月第3日曜日、会場となる

四十九所神社前の宮之馬場には、この歴史絵巻を一目見ようと大勢の観客が詰めかけます。

射手は、町内の中学2年生が務めます。勇壮華麗な本番は見る人の心を打ちますが、射手は毎年替わるため、約40日間の練習で本番を迎える少年には計り知れない重圧がのしかかります。まったく、馬に触ったことのない少年は、まず馬に慣れることから始まり、両親、友達、保存会など多くの人たちの応援に支えられ、この大役を務めます。

この本番を終えたその時こそ、14歳の少年が神になる瞬間です。



▶高山やぶさめ祭（10月第3日曜日）

◀内之浦宇宙空間観測所



### 宇宙に一番近い町 そして「はやぶさ」の母港 そして『イプシロン』

内之浦宇宙空間観測所が開設されたのが昭和37年、平成24年2月には開所50周年を迎えました。

日本初の人工衛星「おおすみ」などを打上げたことで世界的にも有名です。そして、誰もが知っている小惑星探査機「はやぶさ」。平成15年5月、内之浦からM5ロケットで飛び立った「はやぶさ」は、平成17年小惑星「イトカワ」に到着。しかし、その後燃料漏れやエンジンの停止、通信途絶といった幾多の困難を乗り越え、平成22年奇跡の地球帰還を果たしました。実に、7年の歳月をかけた60億kmに及ぶ

壮絶な旅でした。

世界中に感動を与えた「はやぶさ」。平成22年12月、同観測所でカプセルが公開されました。形をかえた「はやぶさ」、母港内之浦へ感動の里帰りを果たしたので。そして、次はイプシロンロケット。「はやぶさ」を上げた世界最高性能の固体燃料ロケットM-Vロケットの後継機として開発され、平成25年、内之浦から打ち上げられます。人工知能、電子頭脳を持つ次世代型の、世界が注目のようなロケットです。

### ロケット開発の父 糸川英夫博士生誕百周年 記念事業 ～銅像建立～

我が国のロケット開発の父と呼ばれる糸川英夫博士は、大正元年7月20日に生まれました。そして、内之浦宇宙空間観測所の建設に当たっては、糸川英夫博士を抜きには語れません。

昭和35年10月24日、糸川博士が立ち小便をしながら、この地にロケット



射場の立地を決めた、この逸話があります。

それ以降、幾多の困難を乗り越え、これまで395機のロケットを打ち上げに成功し、27の人工衛星を誕生させました。

奇しくも観測所開所50周年の平成24年7月には糸川博士の生誕100周年を迎えます。本町では、「糸川英夫生誕100周年記念事業実行委員会」を立上げ、日本中の糸川ファン、宇宙ファンに広く呼びかけ、博士の銅像建立をはじめとした記念事業の実施を決めました。

11月10日、11日に開催されるJAXA内之浦宇宙空間観測所開所50周年記念式典に合わせて、糸川英夫生誕100周年記念式典を開催します。

### 銀河連邦・・・絆



銀河連邦は、宇宙科学の最先端技術を研究している宇宙航空研究開発機構（JAXA）の宇宙科学研究施設

設がある6市町（神奈川県相模原市、長野県佐久市、岩手県大船渡市、秋田

県鹿代市、北海道大樹町、そして肝付町）がユーモアとパロディの精神で、昭和62年に組織されました。それぞれの共和国が手を取り合い、相互の理解と親善を深めることにより、宇宙平和の一翼を担うとともに、人々の笑顔あふれるユートピアの創造を目指しています。

本町は「ウチノウラキモツキ共和国」、町長は共和国大統領です。内之浦宇宙空間観測所では、ロケットの打ち上げ、そしてそれらの追跡及びデータ取得等の業務を行っています。

平成23年の「3・11東日本大震災」は、銀河連邦の一員である大船渡市（サンリクオオファナト共和国）をも襲い、今復旧、復興に全力を挙げています。銀河連邦の各共和国、そして大隅半島四市五町（鹿屋市、垂水市、曾於市、志布志市、大崎町、東串良町、錦江町、南大隅町、肝付町）での支援は、これからも続きます。

### 博士の専門性を活かした地域おこし「町が研究フィールドになる」

研究者から提案される町の活性化策には多くの気づきがあり、地域に根ざした改革プランの創出につながる可

能性があります。

様々な挑戦を続ける本町は、平成24年度から若手研究者を応援するプロジェクトで、研究費助成と、その成果を活用した地域活性化に向け動き出します。

今回、「肝付町賞」として町が提案したテーマは、ズバリ「肝付町の農業の活性化」。一次産業が主体となる本町のような地方自治体にとって、新たな地域活性化策のモデルケースになるかもしれません。自然科学系のみならず、人文社会系を含む全ての専門家を対象としていて、実証実験やヒアリングなど、町内での活動・連携構築は町が全面的にバックアップします。この研究で得られる成果は、必ずや町の活性化に寄与するものと確信するところです。

### 宇宙大豆

「宇宙大豆」をご存知ですか？米国のスペースシャトルで、国際宇宙ステーションに滞在した大豆を、地球帰還後に植え付け、そして収穫したものです。本町では、この宇宙大豆プロジェクトにも取り組んでいて、平成23年植えた大豆は収穫され、平成24年の

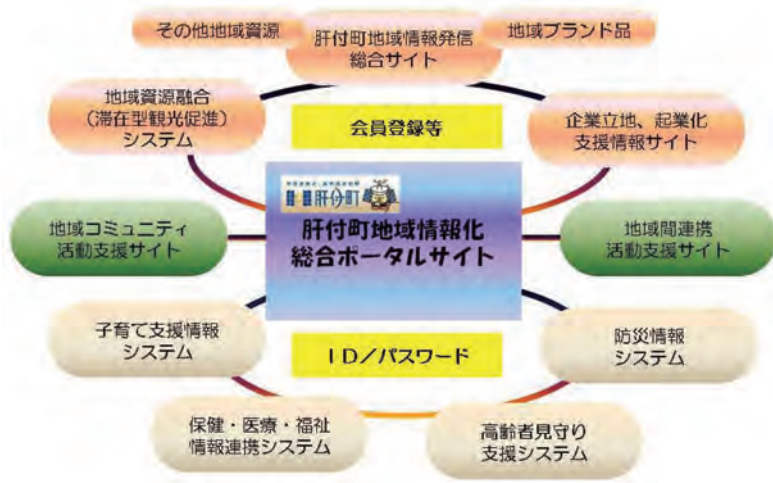


植え付けを待っています。

町は、東京の醸造会社と提携し、「宇宙に一番近い町の宇宙大豆」を使った商品開発に取り組み予定です。数年後には、皆様の食卓に、この「きもつき宇宙大豆」が上るかもしれません。

### 田舎だけど、最先端？『光ファイバーの町』

町全域が過疎地域の本町において、都市部と遜色のない情報通信網の確立は急務の課題でした。そこで、平成22年度、町内全域に、光ブロードバンドサービスを受けられる情報基盤を整備



しました。

現在、光ファイバーによる高速インターネット（「はやぶさネット」と名付けました。）は俄かに注目を集めています。

遠隔の集落においては、高齢者見守り支援システムの運用を実証的に行って、行政情報の配信や健康管理チェック、緊急放送の配信など、日常生活の支援を行っています。また、インターネット講座を開催するなどし

て、利用者拡大にも努めています。

今後は、このはやぶさネットを利用して地域に密着した住民交流の実施を進める一方、田舎（人口の少ないところ）だからこそ味わえる光ファイバーの速さを最大限にアピールして、ベンチャー企業などの誘致も図りたいと考えます。

また、町の魅力と民間情報の一体的な発信を実現するため、「総合ポータルサイト」構築に取り組みます。

このポータルサイトは、町の様々な資産（人・歴史・自然・伝統など）を町内外に発信することで、肝付町の全てをアピールできる「広告塔」にしていきたいと、取り組みの真つ最中です。農水産加工物など、町の特産品の紹介は勿論、ECサイトにより販売拠点を作り出すなど、新たな肝付ブランドで町の活性化を図ります。このポータルサイトは、官民が一体となって運営していくことが重要です。

町観光協会なども連携し、幅広い活用で情報発信に努めたいと考えます。平成24年、9月には運用開始予定です。是非、肝付町の総合ポータルサイトへお越しください。

▲うちのうら銀河マラソン（11月第4日曜日）



「えつがね」は秋から冬の味覚の王様で、贅沢感を味わえる高級食材として高い人気を誇っています。

内之浦地区には三つの漁港があり、8月20日過ぎの伊勢海老漁解禁に伴い、各漁師が一斉に網を入れます。「刺し網漁」という漁法で、日の出前に太平洋に面した磯の際で巧みに船を操り、夜行性の特徴を利用して漁を行います。年間10トン近い漁獲量は九州でトップクラス。

毎年9月開催の「内之浦えつがね祭り」には新鮮な味を求め、多くの観光客が訪れます。

肝付町企画調整課 永井 宏

（平成24年4月2日付第279号）

## 銀河マラソン

銀河連邦共和国の建国を記念して始まった「うちのうら銀河マラソン」。自然とふれあい、未来を創造し、走る事の喜びを味わいながら、仲間づくり、健康づくりを図るため、毎年11月第4日曜日に開催されます。

## えつがね祭り

本町内之浦地区では、古くから伊勢海老を「えつがね」と呼んでいます。



▲えつがね祭りチラシ（平成23年開催分）

▼町いっばいを白く埋め尽くすそば畑

現地レポート

# 日本一のそばの里びゅう



ほろかないちょう  
北海道 幌加内町

## 3つの日本一がある町

幌加内町は北海道上川管内、旭川市から北西45kmに位置し、面積は767km<sup>2</sup>と広大で、南北を石狩川の支流である雨竜川が貫流しています。冬は積雪が2mを超え、気温はマイナス30℃にもなる一方、夏はプラス30℃を超える日もあるなど自然条件の厳しい地域です。人口は1700人余りで、人口密度は全国の中で最小です。幌加内町には3つの日本一があります。その一つは北部にある朱鞠内湖しゅまろいぬです。戦時中の電力不足を補うことを目的に昭和18年に完成したダム湖で、周囲約40km、面積23・7km<sup>2</sup>、日本一の人造湖といわれています。幻の魚「イトウ」が生息する神秘の湖としても有名で、北欧を思わせる情景が訪れる旅人を魅了しています。

二つ目は、朱鞠内湖の北東に位置



▲朱鞠内湖の幻の魚「イトウ」

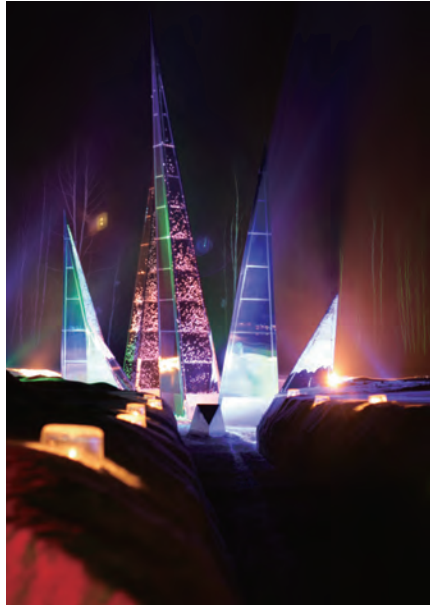
する母子里地区で昭和53年2月17日に記録したマイナス41・2℃の日本最低気温です。残念ながら気象庁の公式記録ではありませんが、北海道大学の演習林内の観測施設で記録しました。最低気温を記録した2月17日は「天使のささやき記念日」として日本記念日協会に認定され、毎年モニユメントのライトアップやセレモニーがおこなわれています。「天使のささやき」とはダイヤモンドダストのことで、凍てつく

ご当地キャラクター



「ほろみん」

◀2月17日を「天使のささやき記念日」としてモニュメントのライトアップやセレモニーが行われる。



日の朝に見られるダイヤモンドダストを、空から舞い降りてくる天使にたとえています。

三つ目はそばの生産量日本一です。そばの作付面積は約3200haで全国の約6%を占め、昭和55年以降市町村別では作付面積・生産量共に日本一を続けています。今回は、幌加内町の産業の中核に育ったそばによる地域づくりについて紹介します。

## そば生産の歴史

幌加内町では、昭和44年（1969年）から始まった米の生産調整（減反）を受けて、昭和45年（1970年）にそば栽培が始まりました。当時は減反

対策としてのそば栽培でしたが、何よりも冷涼で

昼夜の寒暖の差が大きい気候風土が、美味しいそばの栽培に適していたことから年々作付面積が増加し、昭和55年（1980年）には373haが作付けられ日本一になりました。その後も作付けは拡大し、平成24年（2012年）は3223ha、収穫

量は2976トンにも上り、全国の収穫量の約7%を占め、幌加内産のそばの出来によって値段が決まることから、国産そばのプライスリーダーとなっています。生産農家数は136戸で、1戸当たり作付面積は約24haとなっています。

## そば部会の取り組み

減反政策として始まったそば栽培ですが、小麦や大根、かぼちゃ、メロンなど、他の転作物物が厳しい気象条件のため良い成果を出せない中、そばは美味しいとの評価を受け、そばを幌加内町の代表的な農作物に育てようと、昭和61年（1986年）に「幌加内農

協そば部会」が結成されました。

そばは畑作物の中でも最も湿害に弱い作物のため、雨が続いて畑の排水が滞ると、たちまち大きなダメージを受けます。そのため国の機関である農業試験場や北海道の機関である農業普及センターの指導を受け、暗渠排水の整備を徹底しました。また連作障害を防ぐため、間作緑肥として赤クローバーの栽培による土壌改良や輪作体系の確立、乾燥調製施設の整備による集出荷の一元化など、高品質・安定生産に向けた取り組みを、そば部会として組織的に取り組んできました。この結果一時荒廃地が目立った農地の多くがそば畑に変わり、耕作放棄地がほとんど



▶大型コンバインでそばを収穫する様子

◀日本農業賞大賞を受賞



どなくなりました。この取り組みが評価され、平成15年には全国農協中央会の日本農業賞集団の部で大賞を受賞、翌16年には農林水産省第43回農林水産祭で内閣総理大臣賞を受賞しました。

## 新品種「ほろみのり」誕生

そばには様々な品種がありますが、幌加内町では、町独自の品種を作ろうと町農業技術センターを設けて専任の職員を置き、平成9年から品種改良に取り組みました。その結果、7年の歳月をかけて新品種「ほろみのり」が誕生しました。従来の「キタワセソバ」より背丈が短く、風雨による倒伏が少

ないため脱粒が少なく、甘みが強い上品な味と評価を受けています。平成16年に品種登録を受け、18年から本格的な栽培が行われています。

### そば乾燥調製施設の整備

生産者が丹精込めて栽培したそばも、収穫後の乾燥調製を間違えば、品質が劣化し評価の低い製品になります。大量に収穫される幌加内そばを一定の水分量に乾燥し保管する大規模な調製施設が必要です。町では平成12年に「そば日本一の館」と24年に「そば日本一の牙城」を国の補助を受けて建設しま



▶そばの乾燥調整施設「そば日本一の牙城」

した。これにより、収穫される約3000トン（約7万俵）のそばが3週間で乾燥調整できるようになり、高品質な幌加内そばのブランド化につながっています。

### 20回を数える新そば祭り

香り高い新そばが収穫される9月、幌加内町では「新そば祭り」が開催されます。日本で一番早く新そばを味わえるイベントとして全国に知られ、会場には、全国のそばの産地から有名店や地域そば同好会等が出店します。20回目の平成25年は、記念イベントとして「日本そば博覧会」「世界そばフェスタ」との同時開催となり、8月30日から9月1日までの3日間、ロシア、スロベニア、フランス、インド、中国、韓国など世界12カ国のそば料理をはじめ、大分県、広島県、兵庫県、福井県、新潟県、福島県、地元北海道、幌加内町など全国のそば産地から14店舗が出店し、6万人の来場者が訪れました。

今回の目玉行事は、「素人そば打ち五段位（最高段位）認定会」の開催でした。これは、全国麺類文化地域間交流推進協議会が実施している素人そば打ち段位認定制度（全国の認定者数は

◀毎年、町内外から多くの来場者が訪れる「新そば祭り」平成25年は8/30〜9/1に開催。



初段から5段まで約1万人）の最高段位の認定会で、3年に一度開かれ、今年が3回目になります。これまでにまだ18人しか認定されていない狭き門で、全国のそば打ち愛好者の注目の的でもあります。

20年前、美味しい幌加内そばをたくさんの人に食べてもらいたいという思いから始まったそば祭りですが、全国のそば産地や、そば愛好者、蕎麦屋さん等との交流を通して、地域間の友好交流の大切さを教えられ、皆さんのご支援で、日本を代表するそば祭りに成長することができました。平成25年

◀「素人そば打ち段位認定会」の様子



の20回を節目に、今後は新たな発想で、「日本一のそばの里」にふさわしいイベント開催を模索しているところです。

### そばが必修科目の幌加内高校

町内唯一の幌加内高校は、そばの栽培、歴史、文化、そば打ち、そば料理を授業に取り入れ、全員が手打ちそばの段位を取得します。平成25年4月、全国から11校が参加して東京ビッグサイトで開催された「第3回全国高校生そば打ち選手権大会」で、団体、個人共に優勝しました。卒業生の中には、



▲東京ビッグサイトで開催された「全国高校生そば打ち選手権大会」幌加内高校が団体・個人共に優勝

### そばに付加価値をつける

幌加内で収穫されたそばに付加価値をつけて販売しようと、町では「農産加工センター」を第3セクターで運営し、そば粉、そば麵を加工販売しています。そのほか、町内には8箇所の製粉工場ができ、それぞれ、全国の蕎麦店や手打ち愛好者向けに特徴のあるそば粉を生産して販売しています。そのほか、そばを利用した料理のレシピづくりや、幌加内高校生徒によるオリ

有名そば店に就職する生徒もあり、幌加内そばの名を広めてくれています。

ジナルそば料理の研究も進んでおり、今後の成果が期待されています。

町内の若手蕎麦店経営者を取り組んでいるのが「幌加内厳寒清流さらし蕎麦」です。江戸時代に徳川家にそばを献上するために考えられた「寒さらし蕎麦」の保存方法を5年の歳月をかけて研究し商品化しました。厳寒期の2月、清流に2週間そばを浸し、その後乾燥調整して6月から7月にかけて限定商品として町内各店舗で提供されます。また、その後は、雪の中で保管してきた「雪蔵そば」を7月から8月に提供するなど、幌加内オリジナルのそばを愛好者の方に提供し評価を受けています。このそばは幌加内に来なければ食べられないため、交流人口の増加に一役買っています。



▶寒さらしそば「清流さらし作業の様子

ばの品質を保持し、付加価値をつけるため、町では平成25年、約4万俵のそばを保管できる「雪利用型低温農業倉庫」の建設を開始し、平成26年10月に完成しました。これにより、年間を通して高品質なそばが全国各地に届けられることになり、「幌加内そば」のブランド力の向上に役立つことが期待されています。

### これからが本番「そばのまちづくり」

現在町では、地域振興室そば振興係を中心に「そば振興計画」を策定中です。日本一のそばの里を目指して10年先の夢を描こうと、そば生産者、そば関係業者、そば関係団体等の皆さんと話し合いを続けています。町民の1

割は自分でそばを打ちます。お客さんへのおもてなしは、そばをご馳走することです。「そばは人をつなぐ」といわれており、東北ではそばは晴れの食べものとして、お祝いの席で振舞われます。幌加内町でもそんなおもてなしのそば文化を育てたい。

美味しいそばを食べられる蕎麦店を増やして、「幌加内そば街道」ができれば、幌加内町に来れば、そば打ち体験ができ、そのそばをすぐに食べられる施設が欲しい。そばの歴史やそば文化を学べる施設が欲しい。真っ白いそばの花を売りにした観光ルート作りも始めよう。などなどたくさんの意見・アイデアがあふれています。

これからが本番のそばによるまちづくりの始まりです。全国のそば産地やそば愛好団体、そば関連業者さんと連携協力して、たくさんの人に訪れていただける「日本一のそばの里」づくりに邁進します。

幌加内町長 守田 秀生  
(平成25年6月24日付第2844号)

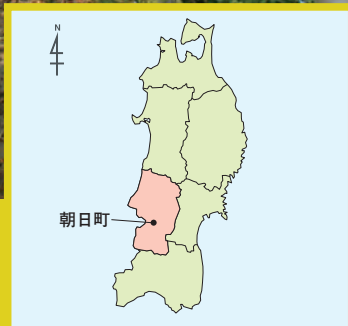


▲放草ロールでつくられた「そばの花展望台」  
広大なそば畑を一望できる。

▼町内のりんご農園。国内外で高い評価を得ている「無袋ふじ」

現地レポート

# りんごにこだわった町づくり 小さな町の大きな挑戦



あさひまち  
山形県 朝日町

## 朝日町の概要

朝日町は山形県の中央部に位置し、磐梯朝日国立公園の主峰・大朝日岳の東縁山麓地域にあります。町の面積は196・73km<sup>2</sup>で最上川が町域の南北を約21kmにわたって蛇行北流し、国立公園をはじめとする原生林野が町土の76%ほどを占め、豊かな自然環境と澄みきった空気に包まれ、世界で唯一の「聖気神社」のある町です。

最上川の両岸に沿った河岸段丘は、特産のりんごなどの果樹をはじめ農産物の栽培に適した肥沃な土地です。

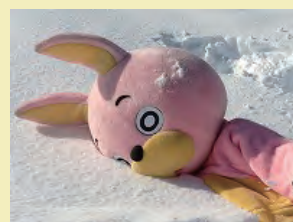
町の産業構造は第1次産業就業比率の減少、第2次・3次産業就業者の漸増で推移していますが、りんごを中心とする農業を基幹産業として位置づけ、りんごにこだわった町づくりを進めています。

## 朝日町りんごの歴史

りんご栽培の歴史は古く明治20年に遡りますが、朝日町りんごの銘柄が確立されたのは、昭和46年に全国に先駆けて「無袋ふじ※」の栽培技術確立し、中央市場で品質日本一の評価を得たことです。このことがはずみとなり、米の生産調整対策としてりんごを奨励すると共に、農業構造改善事業等で大規模な樹園地造成を全町的に展開し、朝日町農業の基幹作物として様々な振興方策が展開されてきました。

また、りんごにこだわった町づくりを進め、平成元年には「日本一りんごの町宣言」、平成16年には町条例で「朝日町りんごの日」を定めるなど、町民一丸となつてりんご振興に力を注いでおります。

ご当地キャラクター



「桃色ウサヒ」

※無袋ふじ：りんごは病害虫防除や着色管理の点から、袋をかけて栽培していたが、袋をかけなくても着色や味の優れたりんごを栽培する技術。ふじの品種でその技術を全国に先駆けて確立した。

## りんごは町経済のバロメーター

農業が基幹産業の朝日町にとって、りんごの売り上げは町経済を大きく左右するといっても過言ではありません。

かつては品質が良ければいくらでも高い価格での販売が可能な時代がありました。りんごの価格は全国的に大暴落の危機を迎えました。町ではりんご価格の暴落が様々な方面に影響がでることを懸念し、この危機を乗り切るために品種構成の見直しなどのりんご振興策に大規模な予算を投入しました。

特に中生種（9月下旬～10月収穫）は数多くの品種が農家にはらばらに導入され品種ごとの量は少なく、栽培技術の統一もなかったため品質は不揃いで、安定した価格での販売は難しい状況でした。このような状況をふまえ、品種

構成の適正化について農家の方と真剣に検討を行い、シナノスイートをはじめとする新品種の導入方針を決定し、町の財政状況が厳しい中、約三千万円がりんご振興に支出されました。苗木の導入、栽培技術の確立と普及、消費宣伝など農家・農協・行政が一体となってアクションを起こした結果、シナノスイートは路頭に迷ったりんご農家の救世主となり、今では中生種の核として農家所得の向上に大きな役割を果たしています。

## 攻めの農業戦略！

次なる挑戦は、沈滞するムードを払拭し生産者に元気を出してもらうため、輸出による所得向上をめざすという攻めの農業展開を目指しました。田舎の小さな町が単独で輸出を行うことなど夢のような話で、最初は各大使館に手紙を書いたり、フランス大使館に直接りんごを持ち込み輸出をお願いしたりと今となっては笑い話のようなこともありました。自分たちの足で行動しながら情報収集し、平成16年にはジエトロの指導のもと国内の商社を通

じて台湾に「ふじ」を輸出し、夢の第一歩を踏み出しました。

国内で高い評価を得ている当町のりんごは海外でも高い評価を得られるだろうと思っておりましたが、台湾の中では、りんごといえば絶対的に青森県がブランドになっており、当町のりんごは品質的には優れていても価格では買いたたかれ、改めて海外でのブランド戦略の必要性を認識しました。

平成17年には台湾でのブランド確立を前提に輸出を検討していたところ、前年の状況を把握していた山形県経済国際化推進協議会（現山形県国際経済振興機構）から高級百貨店での贈答品の販売を紹介され試験的に輸出を行いました。その結果、朝日町りんごの品質、食味、特に「蜜入り」が非常に高い評価を得ました。

りんごの時期には、朝日町りんごを紹介する中国語版のDVDの映像が



▶台湾での町長によるトップセールスの様子

売り場で放映され、生産者が自ら店頭に立つてのプロモーションや町長によるトップセールスを継続した結果、その品質が高く評価され、当町のりんごは台湾の消費者や流通関係者の間でトップブランドとして認知されるようになりました。

この台湾でのブランド確立を契機に、タイ、シンガポール、香港、フィリピンなど輸出国も拡大され、品種も



▶山形市で行われるりんごキャンペーン



ふじだけでなく、シナノスイート、王林、シナノゴールドさらにはラフラン入まで輸出できるようになりました。小さな町の大きな挑戦は、マスコミの目にも留まり、毎年現地でのプロモーションの様子が新聞等で大きく紹介されるようになりました。

### 輸出の波及効果

朝日町りんごは、無袋ふじ栽培技術の確立により市場で日本一の評価をいただき、生産者や市場関係者の間では銘柄産地としてのブランドが構築されてきました。しかし、このブランドもなかなか消費者まで浸透するものではありませんでした。朝日町では

りんごの素晴らしさを直接消費者に伝えるため仙台市や山形市で長年にわたり「りんごキャンペーン」を行ってきました。また、町内にも直売施設ができ、お客様が産地で直接りんごを買い求めることができるようになりました。

さらに朝日町りんごの輸出の話題は、毎年マスコミで大きく取り上げられ消費者の目に留まる機会が非常に増えたこともあり、秋になるとりんご購入のため朝日町を訪れる方が急激に増加し、最盛期には交通渋滞が発生するほど膨れ上がりました。流通関係者だけでなく消費者にも朝日町りんごのブランドは浸透したのです。

▶にぎわう朝日町産業まつり



▶産業まつりで行われるりんご釣り



町では農業、商業、工業、観光の産業が一体となり朝日町をPRする「産業まつり」を11月の「朝日町りんごの日」に開催しています。かつては町内のお客様が中心の2日間でも、000人程度の入込のイベントでした。

輸出が始まりマスコミで取り上げられるようになったころからお客様の数は増えはじめ、平成24年度は12,000人を超え、しかも町外、県外のお客様が中心の活気あふれるイ

ベントに大きく様変わりしてきました。お客様はりんごだけでなく朝日町の様々な産物や商品を買求め、さらに町内の飲食店等を訪れるようになり、町全体に大きな経済効果を生み出すようになってきました。

生産者がおいしいりんごづくりのために続けてきた地道な努力と、町民一人一人の朝日町りんごに対する誇りと自信が、交流人口の増加という大きな実を結んだのです。

◀町内のりんご農家が育てた「ふじ」を対象に毎年産業まつりと同時に開催される「りんご品評会」



### 強みを活かした町づくり

朝日町の最大の強みである農業を活かした町づくりの次なる挑戦は、付加価値をつけた農産物の販売や交流人口の増加による町の活性化です。

町では、国内経済が低迷し現実的に企業誘致も難しい状況をふまえ、雇用の創出を目的に朝日町産業創造推進機構を立ち上げ、農家の起業支援等の

対策に取り組み始めました。農産物の加工や、新たな農業展開を模索している農家を集め、マーケットや商品開発、衛生管理まで座学や実践研修を行いました。

その結果、特産のりんごを活用したジャムやスイーツ、味噌などの発酵食品、食肉加工、無農薬野菜の栽培そして肉質のよい放牧豚の飼育など多岐にわたる9つの小さな企業がたちあがり、地元での販売はもとより仙台圏を

中心とした販促活動を行っています。こうした活動は、りんごを中心とした農産物や加工品の有利販売だけでなく、町の資源を活かした観光と一体になり、交流人口の増加による町の活性化をめざすという発想に発展し、現在、総合交流拠点施設整備をめざし、町民による活発な意見交換が行われています。

また、農業後継者の確保は全国的な課題ですが、日本一のりんごを守り



▶朝日町産業創造推進機構による新商品発表会の様子

◀りんごを餌に放牧している「あっぱるニュー豚」



たいという農家が農業研修生を積極的に引き受ける組織を立ち上げました。このことにより日本一のりんごづくりをめざす若者が町外からも集まり、新たな農業後継者として大きな期待を背負ってりんごづくりに奮闘しています。朝日町の最大の強みであるりんごを活かした「小さな町の大きな挑戦」はこれからも続いていきます。

朝日町長 鈴木 浩幸

(平成25年5月13日付第2803号)

▼通称「トトロの木」。鮭川村曲川地区にある樹齢千年の曲川の大杉。

現地レポート

# ナンバーワン オンラインワン みんなで作る「むらびり」



さけがわむら  
山形県 鮭川村

## 観光資源を生かした 村づくりを目指して

鮭川村は、山形県の北部に位置し、昭和二十九年に鮭川村・豊田村・豊里村の三村が合併し、面積が122.32km<sup>2</sup>、人口4,900人、世帯数1,401世帯、人口密度は38/km<sup>2</sup>、1970年代には7,100人いた人口も減り、少子高齢化が進み現在は高齢化率は30.6%、3世帯同居率は山形県で一番となっています。

村の中心部には、村の名前の由来でもある、きれいな川で有名な鮭川が流れ、毎年秋には多くの鮭が遡上してきます。村の基幹産業は農業で、稲作・菌茸・花卉・野菜生産で、特に菌茸については、ナメコ・エノキダケ・ブナシメジを主とし、常時7種類のきのこを生産しています。特にナメコについては、市町村別の生産量にすると日本一を

誇っています。

美人の湯とも呼ばれる「羽根沢温泉」は、山形県内でも珍しい間欠泉で、泉質は含食塩重曹泉のPH8.4のアルカリ泉で肌がつるつるになる名湯です。

映画の「となりのトトロ」に出てくるトトロに似ていると言われ、全国から多くの観光客が訪れている「曲川の大杉」は樹齢千年の大樹で夫婦杉、縁結びの木、子宝の木とも呼ばれパワースポットとしても知られています。

村に伝わる「鮭川歌舞伎」は、山形県指定無形民俗文化財で、起源は安永2年に遡り、240年の長きにわたる地元に受け継がれてきた伝承文化で、毎年6月には定期公演も行われ、多数の観客で賑わいます。

村では、グリーンツーリズムを標榜しており、村内にコテージやキャンプ場、運動広場、ため池及びその裏山を散策路として整備した「エコパーク」、川遊びやビジターセンター・産

鮭川村村章



鮭川村産きのこキャラクター



「サッキー」

▼埼玉県「パレスホテル大宮」鮭川フェアオープニングの様子



**行政と民間が一体となって  
取り組む地域づくり**

地直売所としての機能がある「鮭の子館」、国土地理院の地図には載っていない、まぼろしの薄群のツアーも人気をよんでいます。また、全国でも数少ないギフチョウとヒメギフチョウの混生地でもありません。

鮭川村では、自立した地域づくり

を目指し、平成22年度から、行政と民間が一体となり、各分野の連携を強化しながら、地域資源を活用した地域活性化に向けた取り組みを推進するため、「鮭川地域資源戦略会議」を組織し、取り組みを実施しています。

鮭川地域資源戦略会議は、村内の商工会や企業等の民間組織、NPO法人等幅広い分野の団体により組織され、外部専門家等のアドバイスもいただきながら、地域資源を活用した新商品の開発や首都圏での村農産物の販売、都市との交流事業等の地域活性化に向けた取り組みを展開しています。

商品の開発事業としては、

村内の米地区、山の神地区をモデルに、NPO法人を中心に、その地域の自然環境の調査・保全活動を行い、豊かな自然環境の中で育まれた米を、環境保全米「山乃神・里の神」としてPRし、付加価値販売に繋げていく取り組みを行っています。また、村内羽根沢温泉で提供する料理開発として、鮭川村の主力産業であるきのこを活用した先付に九種の珍味を味わう「きのこ

九珍」の開発や村の伝統芸能「鮭川歌舞伎」の定期公演に合わせた幕の内弁当「花乃錦絵弁当」の開発・販売等の取り組みを行い、集客に繋がっております。

首都圏での村農産物等販売事業としては、東京都有楽町駅前交通会館で開催されております「交通会館マルシェ」への出店や首都圏ホテルと連携した「鮭川フェア」の開催などを行い、村のPRや村内農産物の消費拡大を図っております。また、そのような中、通年で、村内の食材を使用していただけのホテルも出てきており、シエフの方々に鮭川村におこしいたごいただきながら、直接生産現場を見ていただきながら、村内農産物の消費拡大に向けて取り組みを行っています。

都市との交流事業は、村の交流都市であります東京都東村山市や荒川区との交流事業として、村におこしいたごいただき、村内の観光地を巡っていただき、毎年秋に開催される「鮭川きのこ王国まつり」、「まるごとさけがわ鮭まつり」にご来場いただいております。

また、今後は、荒川区の小学校と地元小学校の交流として、地元の漁業組合

◀有楽町交通会館マルシェ出店の様子



の協力をいただきながら、鮭川村へ越上する鮭を荒川区で飼育し、鮭川で放流する「鮭の里親事業」も予定しており、さらに深い繋がりを築いていきたいと考えております。

都市からの誘客に向けた取り組みとして、平成23年度11月には、首都圏や仙台市の方々から、モニターを募り、鮭の採捕・採卵・受精体験などを行う「モニターツアー」を実施しました。22名の参加者が集まり、地元農家との交流会や鮭を使った「鮭の新切り」作りなどを体験していただきました。「鮭

▲平成二十三年十一月に開催した鮭川村モニタリングツアー



の「新切り」は、採捕した鮭を塩漬けにし、冬期間寒風にさらして作る村の伝統的な保存食で、二月に完成したものを参加者に送付し、大変喜んでいただいております。

### 全国唯一のきのこコンテスト

鮭川地域資源戦略会議の取り組みの一環として、鮭川村のきのこコンテスト村全体のPRを目的に、平成22年度か

ら「全国キノコ食味&形のコンテストin鮭川村」を開催し、平成24年には、第三回目を迎えました。

この大会は、日本国内で生産されているきのこを一堂に集め、その食味と形状を審査するもので、「消費者目線」で、きのこの食味を審査する大会は、全国唯一の取り組みとなっております。

鮭川村は、全国でも有数のキノコの産地で、年間約6千トンのきのこが生産されております。その鮭川村で、全国規模のキノコのコンテストを開催することにより、安全・安心なきのこ生産を行う農業者・農業団体を支援するとともに、国内産きのこの「美味しさ」や「安全性」等を広くPRし、商品価値の向上と消費の拡大に繋がっていきたくと考えております。

例年、市場関係者などのきのこの専門家や野菜ソムリエ、全日本司厨士協会等の食の専門家を審査員に迎え、全国から集まったきのこをプロの目線で審査を行い、部門ごとに最優秀一点、優秀一点、入賞一〜三点を決定します。コンテストの中では、特別講演として、きのこの健康パワーなどのPR

や調理方法などを実践するなどとして、きのこの消費拡大を図っております。

今後は、出品数の拡大と受賞作品の有利販売に向けた取り組みに力を入れていきたいと考えております。

### 更なるブランド化のために

農業生産者、商工業者の法人化や規模拡大などを、後押しするために組織した「鮭川地域資源戦略会議」、活動については前記しましたが、農産加工グループ、農業法人の立ち上げなど

少しずつ芽を出し始めています。6次

産業化が叫ばれている昨今、所得向上のためいろいろな付加価値をつけながら、独自の販路も拡大しブランド化にも力を傾注しています。

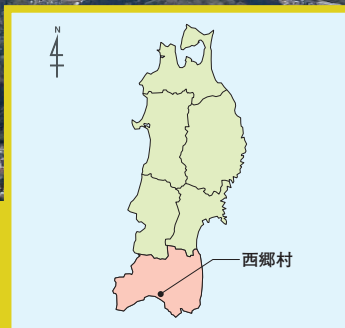
これまでも国の取り組みで、一村一品運動、地産地消運動、農商工連携など農業・農村の活性化の運動はいくつか展開されてきましたが、地元資源を最大限生かし、都市との交流も進め、観光も生かした、ナンバーワンでなく「オンリーワン」を目指した活動を推進しています。

鮭川村長 元木 洋介  
(平成24年10月8日付第28016号)

▶「全国キノコ食味&形のコンテストin鮭川村」ポスター

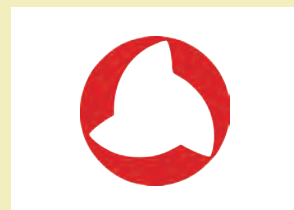


福島県 **西郷村**



# 「にしがう村夢プロジェクト」の取り組み こだわり産品と異業種人財活用で活性化

西郷村村章



## はじめに

福島県西郷村は、東北の玄関口として、東北新幹線新白河駅、東北自動車道白河インターチェンジがある交通の要衝に位置しています。人口20,000人を擁し、地の利の良さなどから企業立地も相次ぎ、地方の人口減少が問題となる中でも新しい住民が増え発展してきました。しかし、2011年3月の東日本大震災と、続く東京電力福島第一原子力発電所の事故により、西郷村でも深刻な実被害と共に風評被害とそこから生じる二次的被害に直面しました。その影響が今も地元工業者や農業関係者等に影を落としています。

## 風評被害に負けない！

このような中、復旧から復興への飛躍を期して、西郷村商工会が中心となり、地域経済の活性化に向けた新たな取り組みを開始しました。企業組合「にしがう村夢プロジェクト」の設立です。主な事業内容は、①特産品の製造及び販売、②観光交流イベントの企画及び実施、③公益事業の企画・管理運営の事務受託事業等です。城下町白河の西の郷 楽翁老中（松平定信）が愛した癒しの都づくりをコンセプトに、西郷村に多く生育している発汗作用のある山椒と、目の視力向上などの効果が、ブルーベリーの数倍ある夏ハゼ、そして恵まれた温泉資源等を生かして、県南地域（西郷村、白河市）独自の観光ツアーや体験プログラムの企画及び、特産品開発を行い、パッケージで提案

◀「雪割橋」 阿武隈川上流の雪割渓谷に架かるアーチ式の鉄橋



◀「にしごう村夢プロジェクト」 創立総会の様子



## 観光振興への取組み

最近、旅行社が企画する従来型の団体観光、極端に言うところ名所旧跡めぐりか宴会が目的の「マスツーリズム」に対して、地域住民がプロデュースする体験・交流・学習型の観光スタイルである「着地型観光」が注目されています。西郷村では平成24年秋、「着地型観光」の試行として、「外国人モニターツアー」を実施しました。これからの国際観光交流を想定して、外国人の意見も聞いてみたいとの思いもありました。約20人の参加者へのアンケート調査の結果、地元の人との交流が楽しかった、田舎生活の体験が良かった、自然の中での散策に癒されたなど地元のみめ細かいプロデュースに対する評価が高く、「着地型観光」の取組みの重要性が改めて認識されました。又、地元の幕末秘話を掘り起こした「西の郷 戊辰挽歌〜森要蔵 羽太に散る!」の野外劇が平成25年の夏の商工祭で開催され、大変な好評を博したことも「着地型観光」への期待の現われと感じています。

企業組合では、この「着地型観光」

の視点から更に徹底した地域資源の見直しと企業組合の役割を検討しました。その結果、地域に持続的に人を集め、最終的に2地域居住化・定住化に繋げるキモは、西郷村の豊かな自然と優れた歴史風土を生かして、癒し、健康に、生き甲斐を加えた本源的ウオンツを提供できるか否かにかかっているとの認識で一致しました。そして、生き甲斐、創出には、マイクロビジネスを多数創出し、地域住民はもとより首都圏人(退職した団塊世代など)



▶外国人モニターツアー記念撮影  
大高商工会会長(一列目中央)  
佐藤村長(二列目中央)

できる仕組み作りを取組んでいます。

当該地域の原発事故後の放射線量は、当初からほとんど問題ないレベルでしたが、福島県産を使えば消費者に敬遠されると考えた企業が、当該地域での野菜の生産基地を閉鎖する動きもありました。「我社では福島県産の食材は使っていません」といった発表が追い打ちをかけました。

大震災から2年が過ぎ、こうした風評被害に負けない!との意気込みで

発足させたのが企業組合「にしごう村夢プロジェクト」です。この企業への期待は大きく、観光客が減っている東北観光のけん引役にもならなければなりません。中小企業が異業種間で連携し、知恵とアイデアを出し合い、地域住民や避難民の方々にも積極的にアプローチを行い、新しい仕事作り＝雇用創出も目指しています。

▶山椒を核に特産品開発に取り組んでいる。



とも分かち合う仕組みを確立する事が有効であると考えました。即ち、癒しと、特産品 だけでは企業組合の持続的発展は難しく、生き甲斐を感じてもらおう為の、ほぼほどのビジネス作り の仕掛けが必要であると考えました。更に、観光交流だけにフォーカスした取組みとせず、観光交流を更に発展させ、2地域居住、定住化までを見据えたシナリオが必要であると考え、

### 組合員の得意技

今後の活動指針となる「企業組合の持続的発展とマイクロビジネス創出に向けて」のタタキ台をまとめ、共有しました。

このようなかで企業組合は、マイクロビジネスの創出支援も大きな役割の一つとし、改めて組合員メンバーの

得意技を吟味してみますと、自然保護のプロ、伝統的またぎのプロ、植物学のプロ、森の案内のプロ、癒し・もてなしのプロ、木工技術のプロ、ソバ打ちプロ、豆腐作りプロ、6次産業化プロ、水耕栽培のプロ、加えて、1丁のプロ、センサ応用のプロ、経営指導のプロ等広範囲の異業種プロの人財バンクであることが判明しました。西郷村は、昔から志に燃え自分を信じて事を起こす開拓者として入村した人が多い地域であり、改めて、多様な中小企業群の塊であることが認識されました。これらの異業種プロの技術を組み合わせることで特産品ビジネスをはじめとして、エコ・癒しビジネス、スマートアグリビジネス、小規模再生エネルギービジネス、センサ活用ビジネス等の、地域ニーズに合致した住民参加型先進マイクロビジネス創出の実現性が高まりました。

### 特産品開発

観光客に西郷村に来てもらうには、なんとと言っても魅力的な特産品が欠かせません。企業組合では特産品として、当地に沢山見られる「山椒」や「夏八

ぜ」をコンセプトにした商品の開発に乗り出し、山椒ラーメン、山椒ドレッシングを開発しました。最近NHKの番組、ためしてがっくんで山椒の薬膳効能が放映され、山椒料理に対する人気が高まったことも功を奏して、平成25年夏開催された西郷村商工祭に出店し売り出したところ、とても評判が良く、将来が楽しみな商品に育つてくれることを願っています。

### 今後の課題

基本的には、観光交流・特産品開発を更に発展させ、2地域居住、定住化までを見据えたシナリオ「企業組合の持続的発展とマイクロビジネス創出に向けて」の着実な実践と見直しを繰り返しながら企業組合活動を推進していきます。発足してまだ6ヶ月であり、十分な実績を積むことは出来ていませんが、行政との連携も含めて、下記の課題を克服しながら一歩一歩着実に歩んで行きたいと考えています。

- ① 「着地型観光」を地についたものにする為の人材養成とコンテンツ充実
- ・ 人材養成―地域の語り部、もて



なし実践地元民、得意技連携を  
促進する異業種メンバー

・体験型コンテンツの充実―田舎  
暮らし、エコ生活、モノ作り、野  
菜作り他

・村内観光ルート及び循環交通手  
段の確立・整備

・エコ体験施設及びエコビレッジ  
の整備

②山椒ラーメン・ドレッシングに  
続く地元固有こだわり産品開発

・山椒応用商品―山椒餅、山椒ス  
イーツ他

・山椒以外のこだわり産品―夏八  
ゼ応用産品他

③異業種メンバーの組合せによる  
新しいマイクロビジネス創出の  
促進

・IT活用―スマートアグリビジ  
ネス、小規模エネルギービジネ  
ス、センサ活用ビジネス他

・モノ作り―木工活用こだわり産  
品ビジネス他

・特産品の六次産業化ビジネス

④ITを活用した本格的販促体制  
の構築  
・ホームページ、フェイスブック他

### 独自の地域活性化モデルの 確立

「本源的ウオantz」を提供する活性  
化方策として、「地域に触れてもらう」  
↓「地域を体験してもらう」↓「地域  
に定住してもらう」の3つのステップ  
を設定し、手段として、「特産品・観  
光交流」↓「キャンプサイト・クライ  
ンガルテン開設」↓「エコビレッジ(又  
は分譲地)への定住」の3つのステッ  
プを、放置山林を中心とした地域資源  
をフルに活用して実現し、且つ、各ス  
テップで顧客(首都圏人等)のアイデ  
アも活用しつつマイクロビジネスを立  
ち上げ、「癒し」と「生き甲斐確保」  
を車の両輪で同時進行することを狙い  
とする新しい地域活性化モデルの確立  
を目指したいと思います。

そして、これらの推進には、西郷  
村の歴史・伝統である開拓者魂、進取  
の精神を抛り所として進めていく所存  
です。

西郷村長 佐藤 正博  
(平成25年9月30日付第2855号)

自然活用新しい地域活性化モデル(案)  
(山林を活用して健康・癒し・生き甲斐の“本源的ウオantz”を提供する新しい地域活性化モデル)

ステ ップ	(1)“地域に触れてもらう” (スポット集客での地域資源発信)	(2)“地域を体験してもらう” (通年集客の仕組み作り)	(3)“地域に定住してもらう” (本源的ウオantzを満たすエコ生活提供)
地域 資源 活用 した 取 組 み 内 容	<ul style="list-style-type: none"> <li>■地域資源活用した特産品創出</li> <li>■地域資源活用した観光交流</li> <li>+</li> <li>■IT活用地域発信</li> <li>+</li> <li>■ゆるキャラ等</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■放置山林活用した通年集客仕組み作り(健康・癒し空間提供)</li> <li>・キャンプサイト開設(通年集客)</li> <li>・エコ体験ワールド整備</li> <li>・田舎暮らし体験プログラム整備(間伐、農業、モノ作り、食品作り等)</li> <li>・クラインガルテンへの進化(2地域居住体験)</li> <li>■生き甲斐確保の スモールビジネス創出</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■自然の中での定住エコ生活</li> <li>・放置山林活用した アクティブ・エコ・ビレッジ開設</li> <li>・極力そのままの自然を残した 健康・癒し空間整備</li> <li>・農業汚染の少ない里山の山川に 昔の自然を再現(ホタル・カジカ・ 薬草・岩魚・山菜・キノコ等)</li> <li>■ほどほどの再生エネルギー活用促進</li> <li>・太陽熱・地中熱など</li> <li>■スモールビジネス増殖による 若者呼び寄せ</li> </ul>
ま き 甲 斐 確 保 の 創 出	<ul style="list-style-type: none"> <li>■特産品栽培・加工・販売ビジネス</li> <li>■IT活用販促ビジネス</li> <li>■IT活用農業システム</li> <li>・IT活用ハウス野菜契約・販売システム</li> <li>■IT活用エコ生活システム 他</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■放置山林再生ビジネス</li> <li>■キャンプサイトサポーター</li> <li>■クラインガルテンサポーター</li> <li>■体験プログラムサポーター</li> <li>■IT活用ビジネスの進化</li> <li>■首都圏人のアイデア実現ビジネス</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■エコ・ビレッジサポーター</li> <li>■里山回復ビジネス</li> <li>■再生エネルギー・スモールビジネス</li> <li>■木工ビジネス ■モノ作りビジネス ■薬草ビジネス</li> <li>■スマートビレッジ推進ビジネス(緊急救命通報ビジネス等)</li> <li>■首都圏人のアイデア多数実現ビジネス</li> </ul>

▼「吾妻山」山頂から見る富士山 眺望は、関東富士見百景にも選ばれている。

現地レポート



にのみやまち  
神奈川県 二宮町



# 二宮ブランドで産業振興 〜農業再生に向けたオリーブ栽培への取り組み〜

## 二宮町 どこか懐かしい湘南の片田舎

二宮といえば、新春恒例、箱根駅伝のテレビ中継地点で有名な二宮・押切坂をランナーが駆け抜けていく町です。

二宮町は、神奈川県南西部、湘南地域の西端に位置し、JR東海道線で東京から約70分、横浜から約40分という都市近郊の通勤圏にある町で、町の東西には東海道本線、東海道新幹線、国道1号線、西湘バイパスと小田原厚木道路が走り、交通アクセスの良さから、都市近郊のベッドタウンとして発展してきました。町の立地は、東は大磯町、北は丹沢連峰を背に中井町、西は中村川をはさんで小田原市、南は相模湾に面しています。

町の形状はおおよそ三角形

で、南部は東西の幅3・3km、北に進むにしたがって狭くなり、南北は3・8km、総面積9・08kmの中に、人口約29,300人が暮らしています。

海・山・川の豊かな自然と年間を通じて寒暖の差が比較的少ない二宮は、豊富な山や海の幸によって、自然に健康に必要な栄養を取ることができ、人々



▶箱根駅伝(押切坂)

二宮町町章



◀多くの観光客が訪れる  
吾妻山「菜の花ウォッチング」



の生活そのものに「健康長寿」という  
基盤があることで、昭和初期から「長  
寿の里二宮」とも称されてきました。  
町のランドマークは「吾妻山」です。  
JR二宮駅から徒歩20分ほどで辿りつ  
く山頂は、相模湾、箱根の山々、三浦  
半島から伊豆半島までを一望できる最  
大のビューポイント。人々を魅了する  
眺望は、「関東の富士見百景」にも選  
ばれています。

毎年1月には、早咲き菜の花が見

ころを迎え、富士山と同時に楽しめる  
景色がメディアでも多く取り上げられ  
ることから、1月上旬から2月上旬に  
かけて開催する町をあげてのおもてな  
しイベント「菜の花ウォッチング」の  
開催期間中には、県内外から多くの観  
光客が訪れます。

### 二宮ブランドで産業振興

都市近郊という立地条件と、恵ま  
れた自然資源を持つ二宮町ではありま  
すが、これといった大きな産業がなく、



▲二宮ブランドロゴマーク



サラリーマンからの税収が町の基幹収  
入となっているのが現状です。

農業・漁業は高齢化と担い手不足、  
商工業は中小零細企業が大多数を占め、  
商業環境においては商店街の空き店舗  
が年々増加していくといった、多くの  
自治体が抱える悩みは、二宮町も例外  
ではありません。

このような状況にあつて、二宮町  
では、平成19年度から、新たな産業振  
興策として、「二宮ブランド」づくり  
に挑戦しています。

二宮ブランドづくりの目的は、農

業、漁業、商工業、観光の各分野が連  
携した取り組みを行うことにより、産  
業の再生とともに、通年で観光客が訪  
れる観光プランと食を結び、町そのも  
のイメージアップを図り、経済の活  
性化を目ざすことにあります。

そして、地域ブランドづくりを成功  
させるためには、町民や産業に携わる  
皆さんに地域ブランドに対する理解と  
認識を深めていただくことが大切です。  
そのため、まずは平成19・20年度  
を開発研究期間として、町民や各団体  
を巻き込んだフォーラムの開催、アイ



▲町の特産品を使用した二宮ブランド商品  
(上から)たまねぎドレッシング、さば棒寿司、  
ピーナッツフィナンシェ

「デア募集やワークショップなどを実施し、町全体に二宮ブランドづくりの目的を浸透させていきました。」

アイデア募集では、76点の応募をいただき、ワークショップにおいて、それぞれの意見と応募いただいたアイデアを総合的に捉え、地域資源の整理と評価、二宮ブランドのプロジェクトの検討などをおこない、その結果を二宮ブランド戦略の基礎としました。

2年間の開発研究期間を経てまとまった二宮ブランド戦略は、①売れるものづくりとして新商品を開発する、②町のイメージアップを図り、情報を発信することにより人を呼び込む、③観光開発により、人を招き、観光交流を促進する。この3つの視点で事業を実践することで、二宮らしいブランドを構築するということです。

いよいよ戦略がまとまったことで、平成21年度からの取組みは、「開発研究」から「推進」へとシフトし、「健康長寿（アンチエイジング）のまち」をテーマに、ブランド戦略における3つの視点で実践してきました。

特に、ものづくりでは、町の特産物である「みかん」「たまねぎ」「落花生」「原木しいたけ」「海産物」を使用した商品や、観光資源である「菜の花」、

町のイメージでもある「健康長寿」をもとにストーリー性を持たせた商品が開発され、農商工の各団体の代表により組織した二宮ブランド認定審査会の審査を経て、現在までに約50種類の認定商品が誕生しています。

### 第一次産業の再生へ

ここまで、順調に商品開発から認定までのプロセスを確立してきたこと



▶「海の朝市」で体験できる地引網

で、農業者・漁業者と商工業者との小規模な連携は徐々に生まれてきていますが、農業・漁業の生産力が弱く、特に少量多品目栽培が特徴の農業においては、生産量が加工・販売のニーズを満たせない状況にあります。

そこで、平成22年度からは、二宮ブランドの土台となる農業・漁業の再生についても取り組みを開始しました。

漁業については、定置網、さし網、地引網などの沿岸漁業が中心ですが、漁港が未完成のため、漁業就労環境が悪く、漁業者の減少が深刻な状況です。

そのため、インフラ面を中心とした漁業就労環境の向上とともに、担い手を育成するための「漁業塾」を開催し、新たな漁業就業者を生み出しています。

また、漁業者と農業者・商業者が連携した「海の朝市」を新たに立ち上げ、二宮漁港周辺の活性化と、地産地消による消費拡大に取り組んでいます。

◀漁業の担い手育成のための「漁業塾」



一方、再生への課題が山積の農業においては、①農産物の価格低迷や有害鳥獣被害による離農と担い手不足、②離農の進行による農地の荒廃化、③農地の荒廃化による有害鳥獣の増加。これら負の連鎖を断ち切るため、遊休荒廃農地解消への補助や、鳥獣被害対策、さらに農業所得向上のため付加価値の高い新たな特産物の普及奨励などを実施しています。

## 湘南オリーブプロジェクト

付加価値の高い新たな特産物の普及として着手したのは、神奈川県が品種改良した柑橘の新品種「湘南ゴールド」や、二宮町の先人、二見庄兵衛氏が明治6年に横浜で南京豆を外国人から譲り受けて栽培したことから関東一円に栽培が広まったとされる「落花生」。この2品種を奨励することになりました。

このように、農業再生への取組みを進めていく中、再生への希望は、意外にも身近なところにありました。それが「オリーブ」です。

オリーブは、国産が希少で付加価値が付けやすく、イノシシなどの鳥獣被害もほとんど無い、そして気候温暖で健康長寿の里でもある当町にイメージが重なる。

そんなオリーブの栽培に、数年前から地元の農業法人が着手しており、収穫できる程まで成長を見せていたのです。

町では、この取り組みに着目し、早速、オリーブの調査研究を開始。オリーブの産地である香川県小豆島町をはじめ、オリーブを生産している自治体や

企業を対象に、栽培や加工・販売のノウハウを伺い、平成24年度を「オリーブ元年」として、オリーブを活用した100年産業の創造を旨とした「湘南オリーブプロジェクト」を始動させました。

オリーブ元年となる平成24年度は、農業者への栽培普及に加え、神奈川県農業技術センターと農業者団体、町の

3者が連携した共同研究圃場を開設。農業者への栽培普及は、年度目標であった400本をはるかに超える1,000本近い普及に成功し、共同研究においては、7種類60本の苗を植栽し、手さぐりながらも順調に研究を行っています。

今後、この研究をもとに、町の気候風土にあった品種の選定や栽培方法の確立を図り、平成38年までの15年間で、5,000本の栽培とともに4haの遊休荒廃農地解消を、また、概ね30年後となる平成55年には、1000トンの生産量

を目標として、戦略的に栽培を普及していく予定です。

湘南オリーブプロジェクトでは、栽培普及による遊休荒廃農地の解消や農業所得の向上だけではなく、本格的な収穫が始まる見込みの平成28年度を皮切りに、段階的に収穫量が増加していくことを見据えて、農商工連携や六次産業化を含めた加工・販売組織のあり方や販売方法、販売先の見込みを立てた加工・販売戦略、

また、「健康長寿」「気候温暖」「湘南」などのキーワードとオリーブを結びつけた観光・イメージアップ戦略なども盛り込んでいます。

これらを並行して進め、「オリーブのまち二宮」を確立することで、高付加価値化へとつなげることも今後の重要課題です。

まだまだ、先の見えないオリーブプロジェクトではありますが、成果を急がず、着実に推進していくことで、農業再生だけでなく、その先にある産業活性化の波へと繋げることができるよう、歩を進めていきます。

### 小さいながらも足腰の強い町へ

二宮町は未だ発展途上の町。農業・漁業の再生や商工業の活性化、そして、人を呼び込む観光。これらを点ではなく線で結びつけ、大きな面にしていくための「二宮ブランドづくり」を継続的に進め、小さいながらも、わざわざ来たい、そして住みたい。そんなキラリと光る足腰の強い町を目ざして、今後とも挑戦を続けます。

二宮町 都市経済部産業振興課  
 (平成25年1月28日付第28827号)



▶農業再生に向けて期待されるオリーブ栽培



わ の うち ちょう  
岐阜県 輪之内町

# 「食」を通じた2つの取組 「輪之内ブランド」構築にむけて

## 輪之内町の概要

輪之内町は、岐阜県の南西部に位置し、長良川・揖斐川の二大河川に囲まれた低湿地の輪中地帯にあります。かつては幾多の水害に見舞われてきましたが、先人の英知と努力で克服し、その清流に育まれた豊かな自然と培われてきた風土を活かし、輪中文化を受け継ぐまちとして発展してきました。人口は10,028人(平成22年国勢調査)で、企業の進出や宅地の増加などにより、緩やかながら増加し続けております。面積は22・36㎢、うち約半分が農地であり、「ハツシモ」という品種のお米の産地です。

1954年に仁木村、福束村、大藪町が合併して輪之内町が誕生して以来、町制60周年を迎える平成26年は、ケーブルテレビの「輪之内スマイルチャンネル」を地域活性化や防災など

多面的に活用したり、企業誘致活動を継続して推進するなど多彩な事業を行い、「任んでいて良かった、これからもずっと任み続けたいまち」の具現化に取り組んでいます。

## 取組の動機

「輪之内ブランド」構築にむけた取組は、「食」をテーマに輪之内町を代表するような特産品をつくれなにかという就任以来の熱い思いがきっかけでした。「輪之内らしさ」を実感していただけるもの、輪之内のイメージができるものが少ない中で、これぞ我が町の特産品と呼べる物を作ろうということになりました。一方、農業者を中心とした町民の間でも、稲作に適した気候、良質な水で栽培される輪之内町産品が「輪之内町産」として消費者の元に届いていないという現状をなんとか打開し、「輪之内町産」として広く流

輪之内町町章



通させることができないかという思いが次第に高まっていました。こういった共通の思いを実現するために次の2つの取り組みを行いました。

## 取組の経緯

### ☆輪之内スイーツの開発

輪之内産の食材を使用した商品開発を進めるため、平成20年9月に特産品開発プロジェクトチームが発足しました。町民有志で構成された2チームと町職員で構成された2チーム、計4チームの編成で、当初は具体的なジャンルに拘らず各チームで開発を進めました。翌平成21年1月に各チームの開発品の試食会を行い、味や見た目の他、商品化ならびに恒常的に販売できるかなどの観点から、町職員の考案したハツシモ米を混ぜ込んだ「お米アイス」と「フクユタカ」という品種の大豆の豆乳を使用した「黒ごま豆乳プリン」に絞り込み、この2品を商品化し町のPRに活用していくことになりました。2品とも「スイーツ」であることから、この時に「輪之内スイーツ」の言葉も誕生しました。

### ☆ハツシモのブランド化

前述したように輪之内町は「ハツシモ」という品種の米の栽培が盛んです。「ハツシモ」は流通量が少なく、ほとんどが岐阜県内で消費されるため「幻の米」と呼ばれることもあります。大粒でモチモチとした食感が魅力で、冷めてもおいしいといった特徴もあり、首都圏や関西では寿司米としての需要があります。しかも、徳川幕府時代に幕府の直轄地となっていた現在の輪之内町は、「御膳粉」といわれる江戸城で食される米を供出していた歴史があります。しかし、輪之内町産の出荷量はそれほど多くないため、「輪之内町産」として他産地と区分されて市

場に流通することはありませんでした。そこで平成25年に江戸時代には江戸城でも食べられていた良質な「輪之内町産」ハツシモを独自のブランドとして販売できないか、という農業者からの声をきっかけにし、独自のルートで全国に通用する米としてブランド化を目指すことになりました。

## 取組の内容

### ☆輪之内スイーツの商品化と認定制度

「輪之内スイーツ」として2品を選定しましたが、商品化は簡単ではありませんでした。当初から公設公営ではなく民間の力を活用



▶「特産品製造販売業務提携覚書締結式の様子」(木野町長(左))

することを目指していましたが、施設面などでのハードルが高いこともあり、なかなか取り組んでくれないところがありました。

しかしプロジェクトチームの皆さんが、開発品への誇りと町を良くしたいという強い郷土愛を持

◀輪之内スイーツ第一弾 豆乳リゾットジェラート



ち続けて、町内外のイベントで試食や臨時販売を地道に続けていたところ、イベントで知り合った隣市のジェラート店が取り組んでくれることになりました。地元の厳選素材を使ったジェラートが有名なお店で、コンセプトが合致し、情熱を評価していただけたことが決め手になり、平成23年2月に輪之内スイーツ第一弾としてハツシモ米とフクユタカ大豆を使った「豆乳リゾットジェラート」が、さらに1年後には「贅沢黒ごま豆乳プリン」が発売されました。

町と事業者が提携して特産品が発売されたとして新聞などメディアにも大きく取り上げていただきました。

▶「生産者・販売者・行政の三者の協力で推進」木野町長(中央)



この「隣市のジエラート店」が町民の心を動かし、輪之内町民として負けてられないと新しい特産品を考へる店が次々と現れて、輪之内スイーツとして認定して欲しいという声が増えてきたため、これを体系化するために「輪之内スイーツ認定制度」を創設しました。

認定制度は町産農産物を使用することが条件ですが、それ以外にも味や見た目、食感など商品のクオリティーだけではなく、「地域活性化に資するイベント等に積極的に参加できるか」

「輪之内スイーツ認定店として相互に協力できるか」など、申請者のまちおこしへの熱意ややる気も認定の審査対象となります。これらの条件を満たして「輪之内スイーツ」として認定できるかどうかを町民や有識者、栄養士など多様な人材で構成された認定委員会で試食やヒアリングをもとに審査し、認められた店・商品だけが「輪之内スイーツ」として販売することができます。平成26年2月現在、4店舗16品目「輪之内スイーツ」として認定され、店舗ではもちろん、町内外のイベント

で積極的に販売をし、PRに努めています。

#### ☆徳川将軍家御膳米の誕生

日本国内にはたくさんある米の品種と銘柄米があります。その中で輪之内町産の「ハッシモ」を一つのブランドとして消費者に認めてもらうことは並大抵のことではありません。そこで後発のブランドをより広く消費者に認知していただくために輪之内町の歴史を活用しようということで、かつて江戸時代に徳川幕府の直轄地であり、江城へ米を供出していた史実に注目しました。

輪之内町のある美濃地方の「美濃米」は古くから天皇の大嘗祭の米として使われていたり、江戸市中でもおいしい物の代名詞とされたように「うまい米」として評価されていました。その美濃地方の輪之内町内で栽培された米が「御膳米」として江戸城で食べられていたほど良質なものであった歴史を後世にも伝え、伝統的な米作りを引き継いでいくために「徳川将軍家御膳米」という名前ブランド化し、趣旨に賛同して「徳川将軍家御膳米」を栽培する宮農組合を組合員として生産組合を設立することになりました。

◀収穫したばかりの徳川将軍家御膳米 大試食会の様子



ブランド化するにあたり、新たな販売ルート確保するため販売業者を探すこと、ブランド米として高品質でしかもそのレベルを維持するという課題が浮かび上がりました。そこで「徳川将軍家御膳米」を独占して販売することを条件に販売業者を選定し、栽培に取り組み全ての宮農組合が同じ品質で提供できるよう輪之内の良質な地下水を使用して、肥料にもこだわり、安心安全な米を提供するために、農業を通常より30%削減するなど厳格に定め



られた栽培方法を全組合員に徹底・管理することによってその課題をクリアしました。

また、生産者・行政・販売業者の3者が協定を締結し、生産組合は良い米の出荷、業者は販路の開拓、行政はPRなど後方支援と役割を分担して、「徳川将軍家御膳米」がブランド米として認知され、流通するようになっています。

行政としてはPRのため、田植えや稲刈り、大試食会などのイベント実施や名古屋、東京で開催される物産展等での販売支援を行っています。

### 現状と課題

☆輪之内スイーツのブラッシュアップと認知度向上

輪之内スイーツは前述したように4店舗16品目が認定されています。最初に輪之内スイーツが認定されてから



▲認定店舗だけが使用できる輪之内スイーツロゴマーク

▲徳川将軍家御膳米パッケージ



るよう商品をブラッシュアップして磨き上げるのが課題です。そしてカテゴリとして「輪之内スイーツ」を認知してもらえよう、レベルの高い認定品目数を増やしていくことも必要です。

☆「ハッシモ」の浸透と用途の拡大

「徳川将軍家御膳米」

4年が経過し、近隣市町では認知度も上がってきました。また最近では「かわばたくん・もろこちゃん」という輪之内町のキャラクターにちなんだまんじゅうが発売されたり、たい焼きやクッキーを開発したいという町内の事業者も出てきました。今後「輪之内スイーツ」の認定を目指しているスイーツの候補も着実に育ってきています。

しかし、既存の認定品も含めて、認知度を更に向上させるためには、より多くの消費者に「食べたい」と思ってもらわなければなりません。インターネットの普及でおいしいスイーツの情報は溢れていますし、遠くの場所からでも取り寄せることができます。この中から輪之内スイーツを選んでもらえ

とをアピールしたり、「徳川将軍家御膳米」という日本酒のような加工品を作るなど、用途の拡大も課題です。

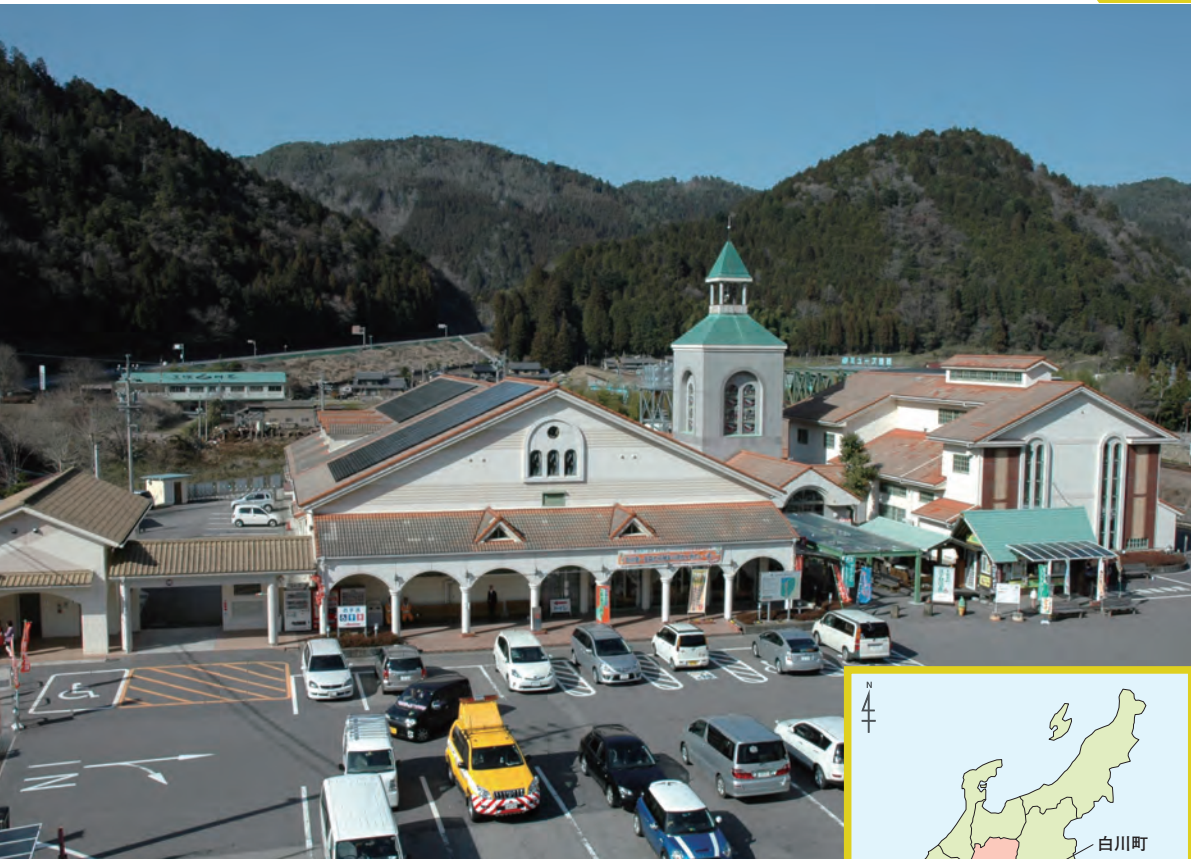
両方について言えることですが、輪之内らしい特産品を「輪之内ブランド」として認知してもらうためには、行政だけではなく、意欲ある町民、事業者が主体となって取り組んでもらわなければなりません。そのために輪之内町としては今後とも「仕掛けづくり」に取り組まなければと考えています。

輪之内町長 木野 隆之

(平成26年3月3日付第2871号)



▲輪之内町キャラクター「かわばたくんファミリー」



しらかわちょう  
岐阜県 白川町

「水源の里の恵みいっぱい 活力みなぎる  
人たちが暮らすまち 美濃白川」  
白川町第5次総合計画キャッチフレーズ

はじめに

私の町には高速自動車道がありません(信号やコンビニはありませんが…)。

岐阜県・白川町 よく世界遺産の白川村と間違えられます(今回の原稿依頼のあった時も、もしかしたらと思いましたが、おかげさまで白川町のことを町村週報で全国の町村に知ってもらえることは、誠に光栄の至りです)。

本町では、今から40年以上前、昭和43年8月に観光バス2台が、集中豪雨により川に転落し、106名の命が奪われました。国道41号が2車線改良されてから間もなくの事故でした。時の佐藤総理大臣も視察に来られました。この事故が「飛騨川バス転落事故」で、天災か人災かで最高裁判所まで争われ、結果、道路管理者の責任が認定され、国が賠償金を払うこととなりました。この事故により、全国の道路で

は防災工事が積極的に行われるとともに、保険制度も創設されましたが、この時以来、国道41号においては、雨量規制が行われ、度々大雨による通行止めが行われます。バス転落現場には慰霊碑「天心白菊の塔」が建立されておりますので道路管理者の皆様は一度御参りください。

白川町は、55年前の昭和の大合併で、5ヶ村が合併した町で、当時の人口は18,000人余ありましたが、現在では1万人を切り、9,830人(平成24年3月1日現在)の町です。面積は238㎢と広大で、山岳地帯はなく、5本の河川(白川、赤川、黒川、佐見川、飛騨川)沿いに、点々と集落があり(65自治会)町民が暮らしています。

農林業が主体の町ですが、2万haの森林のすべてが民有林で、国有林は町の周辺には多く存在しますが町内には1坪もありません。戦後植林された

ご当地キャラクター



「ちゃこ」

森林は、「東濃ひのき」の銘木を産出し、町内には多くの製材・建築会社があり、主に軸組工法による和風建築を行い、白川大工と東濃ひのきの家として、名古屋周辺で建築しています。また、昭和40年代に農業構造改善事業で行った茶園整備により「味と香りの白川茶」の生産振興に取り組み現在に至っています。白川茶は一村一品の先駆けと自負しております。

平成の町村合併は、1市7町村で協議を進め、合併議決・調印の目前で、中心市の合併反対により頓挫し、合併にいたりませんでした。以来6年、行政改革と緊縮財政により、時代の要請に遅れないよう、懸命な町づくりを推進しております。全国の皆様に紹介するような町づくりは行っておりませんが、くつしか紹介したいと思えます。

### 零細な水田農業を守るために

日本は、過疎地域と都市の格差を容認し、都市に暮らす人たちは、過疎地域を日本の重荷と感ずるようになってしまっていると思います。その1例が、コンパクトシティー構想です。人口が少なく投資効果が小さい過疎地域の住民を都市周辺に移転させ、道路・

水道・下水道を効率よく整備するという考えですが、過疎、山村は無人にして、自然に戻せば良いのでしょうか？

日本の国土は、緑に覆われた豊かな森林と生まれたての空気、そしておいしい水が循環する楽園です。この国土は、自然にできた訳ではありません。数千年の歴史の中で、山を育て、自然を破壊しない棚田を作り、その恵みを受けて、山村に人々が暮らし、地域を守ってきたからだと思えます。都会の人たちに山村に来て暮らせとは言いませんが、目の前の効率や採算や経済効果ばかり言わないで、山村に暮らし人々にも感謝して、山村の重要性を認識してほしいと思えます。私たち山村



▶集団営農組織による大豆の刈取り

に暮らす者は、都会で一生涯懸命に経済活動をして、日本を支えていただいていることに心からお礼を申し上げます。

さて、本題である過疎、山村の農業を守るにはどうしたら良いかということですが、私は「個の農業から集団の農業へ」ということを、平成17年頃から主張し、集落営農組織の育成を図ってきました。その理由は、農業従事者の高齢化と、後継者不在による農地の荒廃です。立派な水田も、1〜2年耕作しないと大変な状況になります。そして、農業機械が高価であり、作業ごとに別々の機械が必要で、常に機械の更新に山の木を売ったり、農閑期に働いた現金収入を投入する必要があると思います。反面、米価は下落傾向にあり、1日働けば米1袋が買える時代となりました。それぞれの個人の農地を守ることに限界があり、農地の耕作権を皆で出し合い、営農組合をつくり、共同で管理すれば、ある程度集落の農地は将来にわたって守ることができるのです。更に転作も統一することができます。ちなみに白川町の水田の平均耕作面積は15a程度です。極めて小規模な経営面積ですが、50人、60人と集まれば10ha程度の耕作面積となります。今白川町では、10組合、水田面積100

haの集落営農組織が結成され水源の里を守っています。

### 「美濃白川産大豆100%のとうふ」という名前の豆腐

集落営農組織が拡大し、転作も統一され、大型機械化も進めることができました。転作物物の主体は大豆にしています。トマトや野菜、花などを栽培している農家もいます。そして、その大豆をJAを通じて販売すると、極めて安価であり生産も遅いので、加工しようということになり、佐見地区に女性起業グループ「佐見とうふ豆の力」を立ち上げ豆腐加工場を建設し、平成



▶「佐見とうふ豆の力」での豆腐作り

21年8月に製造販売を始めました。市販の豆腐との兼ね合いもあり、原価ギリギリの1丁150円で1日300〜400丁（製造限界）を製造しほとんど完売しています。油揚げ、寄せ豆腐、湯葉、あげ豆など新商品の開発もしています。

現在、8名ほどの地区の女性が働き、小遣い程度しか稼げませんが、働き場としても効果をあげております。

### 「光ケーブルによる情報・通信網の整備」

「光は1秒間に地球を7周半。バケツ1杯の情報から太陽1杯分の情報が流れる。いよいよ光ケーブルの時代が来る。」今から10年以上前に当時の総務省審議官の月尾嘉男氏から聞きました。以来、白川町の情報化は光ケーブルしかない決めていました。しかし、

莫大な投資が必要で通信会社と交渉しましたが、白川町では投資効果がないと断られました。その後、国において地デジ化の推進が図られ、平成23年7月という目標もできたため、ケーブルテレビによる対策を図ることとし、民設民営、光ファイバー網の全町整備を目標とし、5年以上の年月をかけて整

◀見守りシステムのアンケートに答える利用者



備計画町民説明会、既設共同アンテナ組合の解散などを進め、合わせて防災行政放送の個別受信機を設置することとし、平成22年9月に町内全戸への光ケーブル引き込みを完成しました。

テレビはデジタル放送が見えるようになり、私の念願であった光ファイバーによる「e・しらかわちっこと」で高速インターネット利用が全戸で可能となりました。

※「e・しらかわちっこと」は「e」はelectronic（電子的な）、「i」は「良い」という意味を併せ持ち、チャットは、白川町の特産であるお茶と「ちっこと」（すべに）高速通信が可能であることを表し、茶の間に居ながら町内から世界中までの情報・サービスを利用できる情報基盤整備のことです。

### 「ICT活用・老人見守りシステム等」

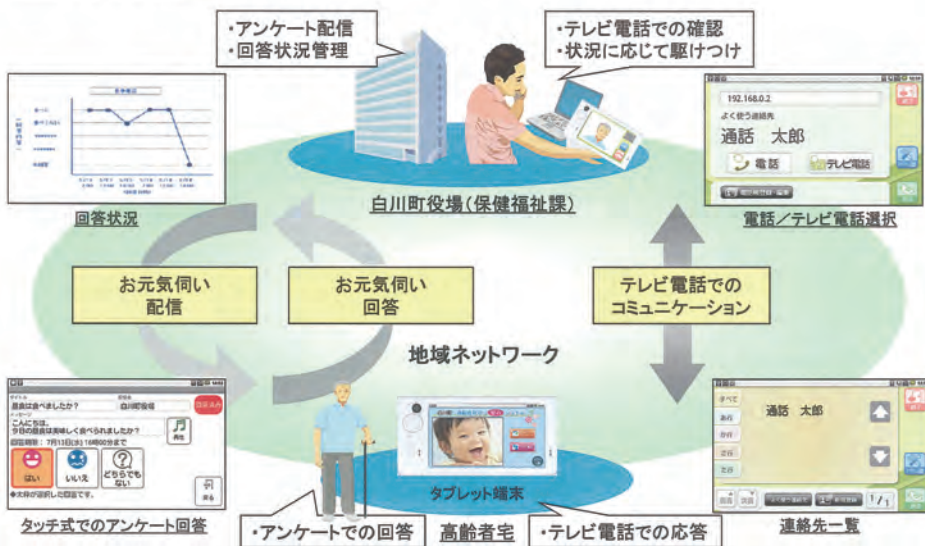
白川町の高齢化率は38%を超えています。しかし、高齢者の人口は10年後もあまり変わりません（人口が減少するので高齢化率は上がります）。問題は、独居老人や老人世帯が増加することです。現在も独居老人は300世帯を超えています。とても元気な方もみえますが、心配な方も多くおられます。そこで、

今回の光インターネットを活用してテレビ電話とインターネット自動通信により、独居老人の見守りができないか実験を始めました。

現在30世帯に設置しましたが、平成24年度は50機増加して本格運用を目指しています。今のシステムは、毎朝自動に「朝ごはん食べましたか？」などの簡

単な質問が送られ、押しボタンにより返事をもらい、安否を確認します。返事がない場合には、テレビ電話で呼び出し、状況を確認するシステムです。今後は、センサーなどによる安否確認もできればと考えております。また、河川監視カメラの設置（5

#### 白川町システム概要



台)、道の駅、クオーレの里などへの防犯カメラの設置(4台)も完成し、運用することになります。

「情報化ICTコンソーシアム」にも積極的に参加し、全国の先進事例や新しい技術も取り入れていきたいと考えております。光ケーブルの整備により、情報通信基盤においての過疎と都市の格差は無くなったと思います。ケーブルテレビの加入率は97%となっていますが、インターネット利用は32%とまだまだ低く、積極的な利活用を推進しなければなりません。テレビでは専用チャンネルによる「めざまししらかわ」や「ウィークリーしらかわ」などの番組で、特に子供たちの元気な活動の様子や、町内の各種イベントの状況を放映し、多くの町民がテレビ出演し、大きな効果をあげています。

### 「新エネルギーシステムによる道の駅の充実」

白川町には、平成5年、国内で一番早い時期に道の駅の指定を受けた「美濃白川ピアチェーレ」があります。人・物・情報の発信基地として大きな効果をあげています。また、国内の大きな災害の時、防災機能を持った

道の駅の役割が評価されつつあります。ピアチェーレも断水時、停電時でも水洗トイレとして利用できる防災トイレに改修してもらいました。太陽光発電(21kW)の設置も行いましたが、平成

24年度には、新エネルギーシステムのモデル施設とするため、燃料電池の整備、急速充電施設と電気自動車の導入、蓄電池設置などを計画しています。また、老朽化した温泉施設を道の駅内に移設し、平成24年2月にオープンしました。この温泉は加温する必要があり、木質ペレットボイラーを導入しています。

この道の駅内には、女性だけで運営する「てまひまグループ」と「白川育ち野菜村チャオ」を併設しており、それぞれ相乗効果を発揮して経営しています。

### 「水源の里を守るう、活性化しよう」

本町は、合併当時18校あった小学校が、先人の決断により小学校5校、中学校3校に統合されました。保育園は町立5園、私立1園あります。しかし、今、白川町で産まれる子供は、年間50人前後しかいません。

平成23年樹立した第5次総合計画では、今後10年間は、学校・保育園も現状維持することとしております。地域のあらゆる活動の拠点は、学校が中心になると考えるからです。しかし、どんどん子供の数が減少していくと、学力のこと部活動のことなどでPTAは混迷します。地域の想いと親の考えは違います。

また、空気がきれい、水がおいしいだけでは暮らすことはできません。山や農地から暮らしが成り立つだけの収入がなければ子育てもできません。



▶豊かな国は豊かな水源の里から

病院や買い物ができなければ老人も住めなくなり。過疎、山村における生活の原点を見つめなおし、インターネットなどの新しい技術も積極的に活用し、更には、移動販売車や、ドクターヘリなどによる生活基盤の整備が充実すれば、もっともつと山村暮らしをする人々が増加すると思います。

平成24年の11月2日、白川町で全国水源の里シンポジウムを開催します。「上流は下流を想い、下流は上流に感謝する。」をキャッチフレーズに結成している全国水源の里連絡協議会(会長 大分県佐伯市西島泰義市長)が中心となって進める限界集落からの脱却について考えてみませんか?

基調講演は、本誌にも度々登場しておられます小田切徳美先生を予定しております。

全国の過疎地域指定市町村数は、776で全体の45%となっており、そこに住む人口は総人口の8・8%に過ぎませんが、その面積は57%を占めています。特に国土を守るためには、過疎、山村の存続が必要であると思えます。みんなで知恵を出し、汗をかいて頑張りましょう。

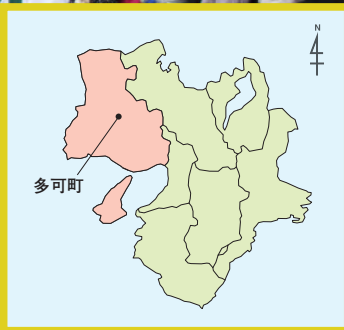
白川町長 今井 良博

(平成24年4月9日付第2799号)



現地レポート

# 多可町の魅力 「まち・ひと・もの」を大発信！ 「FB良品TAKA」と「お見合い大作戦」



兵庫県 多可町

## 多可町の概要

兵庫県多可町は平成17年11月1日に3町の合併（中町、加美町、八千代町）により誕生した。町の人口は23,042人（平成25年1月末）で、東西13km、南北30km、総面積は18.5km<sup>2</sup>である。兵庫県の内陸部に位置し、周囲を中国山地の山々に囲まれた多自然居住の町。1300年の伝統と歴史を持つ日本一の手すき和紙「杉原紙」、酒米の王様「山田錦」、国民の祝日「敬老の日」の3つの発祥の地でもある。直線距離で神戸から45km、大阪から70km、自動車ですれぞれ約80分という距離にあり、人の温もりや田園風景を残す田舎の魅力を持ちながら、都市部との交流も多い「美しく便利な田舎」である。

## 住民満足度の向上に向けて全力

多可町では、毎年、住民満足度調査を実施している。総合計画の基本施策について重要度と満足度を問い、その差を分析し、進むべき方向と講じるべき政策を検証しているのだ。ギャップ度（重要度が高く満足度が低い）1位は、過去3回の調査ともに「新たな産業と雇用の創出」であった。あらゆる手段で企業誘致を試みてはいるものの、「インターチェンジから15分以内を立地条件とする企業が多く、なかなか進出までには至っていない。中山間地域の弱小自治体において、産業と雇用の空洞化対策は共通する課題である。多額の補助金をつぎ込む自治体の企業誘致策も今や曲がり角を迎えている。ならば、地域経済の活性化は、既存事業所の所得向上と多可の風土を活かした地域産品のブランド強化にかかってくる。

ご当地キャラクター



「たか坊」

関西初：自治体運営型ネット  
通販システム「FB良品TAKA」をオープン

多可町では、既存企業が規模拡大や雇用の機会創出等地域に再投資した場合に補助金を交付するなど、地域の経済域を僅かでも拡充する施策を行ってきた。

また関西で初めてとなる自治体運営型ネット通販システム「FB良品TAKA」を平成24年12月にオープンした。これは、佐賀県武雄市が開発され

た通販システムで、自治体の信頼性のもと、顔の見えるフェイスブックを活用して特産品を販売する画期的なシステムである。

インターネットが生活のあらゆる場面に普及している今、楽天やアマゾンに代表されるネット通販の市場規模は急拡大している。

多可町には厳正な基準をクリアした認証特産品だけで80品目もある。そこに民間の売れ筋産品を加えれば、商品のラインナップはその何倍にも増えてくる。町内でも極一部の事業者はネット



▲ FB良品TAKAオープンセレモニー・記者発表

通販で成功されているが、高額な利用料金と検索ヒット率の低さから、途中撤退や参入躊躇の話もよく耳にする。

「FB良品」の一番の目的は地元農家や商工業者への支援にある。

自治体がシステムを運営するため、出店手数料は無料で、販売手数料も民間の通販サイトと比べて格段に安い。小規模事業所や個人でも気軽に出品できるのが最大の強みでもある。

ネット通販の強みを活かす

これまで、多可町の風土産品の多くは、アンテナショップ、道の駅、まちの駅などの実店舗販売に頼ってきた。実店舗販売には、実際に商品を手にとってもらいその素晴らしさをアピールできるという大きな利点があるが、お客様に実店舗までお越しいただ

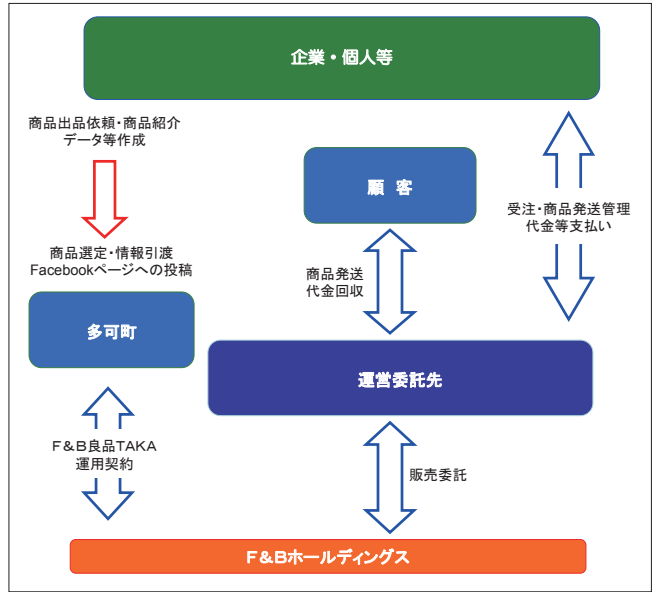


▲ 町の魅力と温もりを元気いっぱい発信ぜひ一度ご覧あれ!!

「FB良品TAKA」 <http://taka.fb-ryohin.jp/>  
「多可町公式facebook」 <http://www.facebook.com/takacho.jp/>  
問合せ先 多可町役場 地域振興課 TEL：0795-32-4779

くことがその前提となる。一方でネット通販は、24時間年中無休で注文を受け付けているので、実店舗に行く暇がない時にはかなり重宝する。さらなるメリットは、商品に対する豊富な「口コミ」情報にある。「口コミ」による宣伝効果は意外と大きい。「FB良品」は全国の先進自治体が核となり、「地域自慢の良品」を全国に向けて発信し、「口コミ」によるファン拡大と地域の所得を向上することを狙いつつある。

◀ F&B良品TAKAの仕組み



世界へ広がれ  
「宙の駅」F&B良品TAKA

私は、多可の風土産品を全国、そしていずれは世界へと広めていきたいとの強い思いから「F&B良品TAKA」の通称を「宙の駅」と銘打った。

ネット通販には送料の発生や商品到着までに時間がかかるなどの弱点もあるが、より早く、安く、便利に…と大手通販会社は進化を続けている。即日配送や丁寧な梱包、より低廉な送料に向けた企業努力を惜しまない。

ネット通販の便利さは

世代を超えて浸透し、順調に業績を伸ばしている。またネットスーパーの利用者も年々増加し、高齢者など「買い物弱者対策」の視点からも通販業界は大きな注目を集めている。

「F&B良品」も参加自治体が一体となって知恵を出し合い、よりお客様に利用していただきやすい通販サイトとして充実させていくことが今後の大きな課題と考えている。

多可町では「F&B良品TAKA」の積極的な展開により、地域の収益構造を前向きに変革させていきたい。

併せて町の知名度アップを狙う

多可町は、平成の大合併で新しい町名を付したことから、その知名度不足が一番の泣き所である。事実、どこへ行っても「多可」の町名は浸透していない。町自体がそうならば、町内の各種団体や事業所にとってのウィークポイントも同じであろう。

私は、合併当初より「情報発信の

強化」を重点課題と位置付け、あらゆる通信手段を駆使して多可町の魅力

「まち・ひと・もの」を発信してきた。私自身も「町の知名度アップに少しでも繋がれば…」との思いから、2年前からフェイスブックとブログを活用している。もちろん、町ではホームページに加え、公式フェイスブックや公式ツイッターも運営している。

ホームページの月間アクセス数1万件に比べ、フェイスブックのアクセス数は37万件を超えている。

さまざまな角度からの攻めの情報発信が功を奏してか、最近では他市町の方から「多可町は元気なまちですね」と声を掛けられることが増えてきた。

TBS系テレビ「もてもて ナインティナイン」を招致  
婚活支援の背景には…

地方自治体が「婚活」を支援するようになつた背景には、未婚化・晩婚化の急速な進行がある。今後、未婚化・晩婚化が一層進み、生涯未婚率（一度も結婚しない方の割合）が男性で30%になる世の中がすぐそこまで来ているという。要因の一つとして、産業構造の変化などによって、正社員になれない若者が増え、経済的な問題から結婚したくても結婚できない男性が増えて

いるのだ。

一方で、全国的な調査資料から一番大切なものとして「家族」をあげる人が増えている。結婚を望む未婚者の割合は9割にも上るとの結果もある。

一般的に自治体が婚活支援に税金を使うことに反対意見もあるが、地域の活性化という観点から私は重要な施策と考えている。

婚活番組への期待を込めて

ここ数年、各地で、自治体や商工会による婚活・合コンイベント等趣向を凝らしたさまざまな取り組みが行われている。多可町においても、お見合いパーティーや食事会、マナーアップ講座に力を入れてきた。

しかしながら「自治体主催の婚活」への抵抗もあつてか、なかなか参加男性が集まらないというジレンマもあつた。そんな折、見つけたのが「お見合いイベント開催地募集」の記事である。

TBSテレビ「もてなイ」の企画で、嫁不足に悩む市町村の概要を記載して応募するものであった。申込み市町村はたくさんあり、お嫁に来てほしいと願う状況はどれも似たり寄ったりである。

合格を祈る思いで連絡を待った。



## 「もてナイー」 招致が決定

そして平成24年11月上旬、遂に開催決定の嬉しい知らせが役場に届いた。

1月19日（土）～20日（日）の番組収録に向け、参加男性の募集、会場の選定など慌ただしくことを進めていった。テレビ局からは番組の仕様に合うようさまざまな注文が入ってきたが、すべてに「何とかやってみよう」と、必死に対応していった。

「多可の花嫁お見合い大作戦」と銘



▶ 歓迎セレモニーで豚汁をふるまう地元婦人会

打った今回の企画は、関西では初めての開催であったこともあり、町内20人の男性に対して、想像をはるかに超える636人も独身女性の申し込みがあった。番組史上最多の記録と聞いており、（男性人の魅力もさることながら）これほど多くの女性に「多可町」を好んでいただけなのだ。しかし残念なことには当方に636人の女性全員を一度に受け入れできる宿泊施設等の態勢はなく、実際には98人の女性にお越しいただくこととなった。

## まちの紹介映像が全国放映で…

一番気を遣ったのは、参加女性が多可町に到着された際の歓迎シーンである。どこの市町でも1,000人を超える規模で出迎えられると、このときの印象がカップル成立率を左右するとの説明を受けた。

新聞折込や町のケーブルテレビなど多方面から、住民の皆さんに歓迎セレモニーへの参加を呼び掛けた。

ありがたいことに、町内7小学校では児童たちが歓迎の手旗制作に協力してくれた。婦人会や商工会婦人は寒い時期の撮影を心配し、役員総出で豚汁の炊き出しも計画された。

皆の思いが天に届いたのか、冬晴れの爽やかな青空のもと、町の人口の1割を優に超える3,000人も住民が歓迎セレモニーに集まった。

セレモニーでは地元中高生の吹奏楽をはじめ、和太鼓や神楽舞、ダンスに加え、多可町ならではの播州歌舞伎の上演など、参加者200人を超える催しが華を添えた。

商工会青年部員をはじめ本当にたくさんの方々にお世話になって「多可の花嫁お見合い大作戦」は成功裡に幕を閉じることができた。15組（成立率75%）もの素敵なカップルが生まれ、

一回で喜んでいる。

そして2月12日、多可町の魅力をふんだんに盛り込んだ「もてナイー」3時間スペシャル番組が放映された。

## テレビ番組招致の効果は

年末から町内は「もてナイー」の話題で持ちきりで、その余韻は今でも残っている。全国ネット婚活支援番組は、合併町である多可町住民の「心の合併」に大きく一役買ってくれた。

私は番組史上最多となった参加人数もさることながら、町内男性陣の意識に積極性と社交性が備わったことを評価している。

全国各地の独身女性に、多可町が「自然が美しく綺麗な町」「都会に近くて便利な田舎」「優しい人が多い町」…との好印象を与えたことも嬉しい誤算だ。

合わせて住民の皆さんが「客観的に自分の町を見直す契機」ともなった。ご応募いただいた女性陣からは「多可町が気に入ったので、このようないイベントがあればぜひ誘って欲しい」との嬉しい声も多く寄せられている。

「ポスト・もてナイー」をどう展開していくのか、熟考中である。

多可町長 戸田 善規

（平成25年3月18日付第28033号）



▶ 300年の歴史と伝統を誇る播州歌舞伎を上演



# 産業創造と活力創出「みさとカレッジ」

## みさとちょう 島根県 美郷町



### 美郷町の概況

美郷町は、平成16年10月に、邑智町と大和村の2町村が合併してできた、人口5,300人余りの中山間地域の町です。

島根県のほぼ中央部に位置し、町内を中国地方随一の江の川（総延長194.0km）が大きく蛇行しながら貫流しています。江の川の沿岸部や谷間に集落が形成されています。北西部には標高200m前後の平坦地が広がり、南西部には標高300m前後の丘陵地帯が広がっています。また、東部には標高400〜700mの急峻な山々が中国山地へと連なっています。総面積は282.92km<sup>2</sup>で、島根県の総面積6,707.294km<sup>2</sup>の4.2%にあたります。特産品としては、江の川の鮎やイ

ノシシをブランド化した「山へじり」などがあります。「山へじり」とは、日本で獣肉食が禁忌された時代、山間部などではイノシシを「山鯨（肉の食感が鯨肉と似ているため）」と称して細々と、あるいは堂々と食べられており、「薬喰い」の別名からもわかるように、滋養強壯の食材とされています。

ここ美郷町では、今でも数多くのイノシシが生息しており、農作物などを荒らす害獣として駆除されていますが、天然の自然薯や樫の実などを食べ育てたイノシシの肉質は、歯ごたえも良く、めったに味わえない名物として地元の人に愛されています。

その一方で、イノシシの肉は処理が難しく市場に出すことが困難とされてきました。しかし美郷町では、独自の処理方法で臭みを排除し、冬場の脂のある肉はもちろん、夏場でもヘル

ご当地キャラクター



「みさ坊」

シーにおいしく食べることができるようになりました。今では「おおち山くじら」のブランド名のもと、高級食材として全国各地の有名店でも取り扱われ、人気の特産品となっています。

### 国勢調査の結果から定住対策を重点施策に

さて、本町では、日本の産業構造の大きな転換から、これまで農林業に続く主産業であった建設土木業の衰退、縫製を中心とした製造業の撤退などから、雇用及び生産所得の減少を余儀なくされ、町内の若者は仕事を求めて都市部へ転出していきました。

この結果、平成17年の国勢調査では、人口減少率が県下ワースト1位という結果となったことから、定住対策に特に力を入れて事業に取り組んできたところです。

特に、40歳以下の夫婦で小学生以下の子どものいるご家族をターゲットにした、「1戸建て若者定住住宅」の建設は功を奏し、平成19年度から平成23年度までで28戸を建設、126人の方々が入居しています。

この結果、県内で4歳以下の子供

が増えた地域が非常に多いという結果が出ています。合わせて、育児の負担を軽減することを目的に、保育料の軽減対策にも取り組み、第2子までは国の基準の4分の1、第3子以降は無料にするなど、定住対策に力を入れてきました。

### 定住から産業・雇用へ

ところが、やはり仕事がなければ、いくら住宅や手厚い子育ての制度があ

っても、安心して暮らすことができないという課題は残ったままとなっています。

少子高齢化の進行から、町の担い手となる人材が不足してきたこと。また、文化・伝統芸能・慣習・古来からの技などについても、このままでは誰にも伝承されることなく、忘れられてしまう状況も危惧されるなど、これは町にとつてたいへん大きな損失であると考えました。

これらのことから、将来の美郷町

**みさとに来たれ!**  
**未来の社長**  
みさとカレッジ  
第1回 起業コンテスト開催  
賞金 **100万円**  
&  
創業時支援補助 **1,000万円** (上限)  
応募締切 **3/30** 金 必着  
詳しくは裏面をご確認ください

審査委員長: 藤石 寛二 氏 - 株式会社いとり 代表取締役  
審査委員長: 沖野 健 氏 - 美郷町 町長  
審査委員: 鎌ヶ 健 氏 - 美郷町 副町長  
大判 利雄 氏 - 美郷町 商工会 会長  
佐藤 俊雄 氏 - 美郷町 工業振興会 会長  
十倉 純子 氏 - 株式会社アップル・ロールモータル研究所 代表取締役

お申し込み  
お問い合わせ  
「みさとカレッジ」運営事務局 (美郷町役場 企画課内)  
〒999-3902 美郷町 中央本町1-1-1 2F  
TEL 0855-75-1211 FAX 0855-75-1218  
Eメール takahashi-fake-shi@town.chinane-misato.lg.jp

▶ 第1回起業コンテストポスター

を担っていく人材と産業を一体的に育て上げる仕組みとして「みさとカレッジ」を設立し、将来の美郷町の持続・発展を図ることとしたところです。

### 人と産業を一体的に育てるために

みさとカレッジは、平成22年度から平成27年度までを期間として策定した、美郷町過疎地域自立促進計画、及び平成23年度から平成27年度までを期間として策定した美郷町第1次長期総合計画の後期基本計画に、重点プロジェクトとして位置づけました。

そして、「人に投資し、人を育て、人による町づくりを進める」ことをテーマとし、次の5つの視点をコンセプトとしました。

- (1) 将来の美郷町を担っていく人材と産業を一体的に育てあげる。
- (2) 起業家・担い手は、地域内外から本気でやる気のある人を募る。
- (3) 高度な知識と技を身につける。
- (4) 生産・加工・流通・販売など、付加価値の高いサービスを学び実践する。
- (5) グローバルな視点を持ちながら、

町の歴史・文化等を継承し事業を創出する。

これらのコンセプトに基づき、具体的な事業推進の手法として、「専科」・「研修科」・「普及科」の3つの「科」を設定して事業を展開することとした。

### ○各科の概要

#### (1) 専科

専科は、美郷町内での起業促進を図ることを目的として実施します。

この起業にあたっては、早急な取り組みが必要なことから、第1段階として、地域の課題解決や資源活用などに主眼を置いた、美郷町内での起業を目的として、平成24年4月に「第1回起業コンテスト」を実施しました。

コンテストは、①地域課題解決、②地域資源活用、③経営革新の3部門により実施し、入賞者には賞金100万円を授与するとともに、起業に向けての支援（実現プログラムの作成・プランのブラッシュアップ・起業資金支援助成（上限

◀第1回起業コンテスト審査会の様子



1千万円)を行います。

条件としましては、美郷町内で起業すること、美郷町に定住すること。また、みさとカレッジ研修生及び美郷町の住民を優先的に雇用することとしています。

4月に行った第1回起業コンテストでは、平成24年2月から募集を開始し、26件の応募をいただきました。この中から5件を選定し、公開でプレゼンテーションを行ったところ、次の3件が入賞をし、す

でに起業をされたものも含め、年度内にすべて起業をされる予定となっています。

3件の入賞プラン

①トルコギキョウ栽培で若者定住・法人型担い手育成モデルを目指して

②休耕地を活用した薬用植物栽培の6次産業化

③配食サービスから始まる付加サービスの提供

#### (2) 研修科

研修科は、地域課題の解決や地域資源の有効活用などを目的として、町がテーマとして設定した次の6つのプロジェクトに沿った事業プランを提出していただき、書類審査・面接（プレゼンテーション）審査を行います。

①温泉活用プロジェクト

②薬草関連プロジェクト

③長寿社会に生きるプロジェクト

④産品づくりプロジェクト

⑤交流観光プロジェクト

⑥地域エネルギープロジェクト

入賞者は、町で用意する研修先で1年程度の研修を行っていただ

きます。この間は生活支援費として月12万円を支給いたします。

研修終了後に、再度プランを提出（卒業試験的な位置づけ）していただき、これをさらにブラッシュアップをしますと、専科と同じように、起業資金の支援を受けることが可能です。

なお、研修生の受け入れ先には、月10万円の指導料をお支払いします。



▶起業された(株)ヘルシーぶらす

▶ 研修生募集ポスター

(3) 普及科

普及科は、誰でも参加することができ、オープン参加型講座で、カルチャースクールのなものとして、全体の底上げ的な位置づけとしています。また、専科・研修科の入り口としても考えているところです。

平成24年度は、次の5つのコースを設定し、起業・就業はもちろんのこと、文化・伝統・技などの伝承者の育成などにも力をいれていきます。

① 銀の道学習コース

受講対象者は、町内外・年齢・性別を問いませんし、受講料も無料としています(ただし、実習のための材料費等は負担いただく場合があります)。

② 薬草・健康コース

また、各コースの受講定員は20名としています。

③ ミツバチ普及コース

また、各コースの受講定員は20名としています。

④ 食品加工コース

また、各コースの受講定員は20名としています。

⑤ 観光サービスコース

また、各コースの受講定員は20名としています。



▶ みさとカレッジ プレ・オープニングフォーラムの様子

この普及科の開始に合わせて、平成24年9月30日(日)には「みさとカレッジ開校セレモニー」を挙行いたしました。

セレモニーでは、みさとカレッジの趣旨やコンセプト、これまでの取り組みなどを紹介したほか、石見銀山資料館の仲野館長による開校記念講演を行ったところです。

このように、みさとカレッジは「専

科」「研修科」「普及科」の3つの柱で進めていくわけですが、単に起業のための補助金を出す。人を集めて講座を行う。ということでは、まったく特徴のないものとなってしまいます。

みさとカレッジの特徴は、「専科」「研修科」では、より良い起業をするために、プランの段階からブラッシュアップの支援を行い、起業後もフォローをしていく体制をとっていることです。

「普及科」につきましては、単に講座を聞いて「よかったよかった」で終わることなく、実践を通じて、確実に形になるものとしていくことや、底辺を広げるだけでなく、指導やマネジメントができる人材も育成していくことを目的としているところが特徴です。

このみさとカレッジは、人と産業の活力創造システムとして立ち上げました。しかしながら、まだスタートを切ったばかりです。

今後は一層、地域産業と地域の活力が活性化するよう、みさとカレッジの仕組みも含めて確立していかなければならないと考えているところです。

美郷町長 沖野 健  
(平成24年10月22日付第2007号)



# 次世代に水産業を伝えるために 〜愛南町の水産振興〜



あいなんちょう  
愛媛県 愛南町

## 愛南町の概要

愛南町は、平成16年10月に、5つの町村（内海村、御荘町、城辺町、一本松町、西海町）が合併して誕生しました。

四国の西南地域、愛媛県の最南端に位置し、南は太平洋を臨み、西は豊後水道に面している自然環境に恵まれた農山漁村で人口約2万5千人の町です。「愛南町」という町名には、愛媛県の最南端にあり、町民がこの町を愛し、地域や人を愛して皆が仲良く助け合って、元氣な町になって欲しいという願いが込められています。

「愛媛県」、「愛南町」と愛いっぴいの町です。

愛南町の基幹産業は農林漁業で、特に水産業は、巻き網、カツオ一本釣りの漁業をはじめとする漁船漁業と、マダイやブリ類、真珠、真珠母貝、カキ、ヒジキなどの海面養殖業など、多種多

## ご当地キャラクター



「な-しくん」

様な漁業が行われており、「日本の漁業の縮図 愛南町」と言われています。

カツオの水揚げ量は本町深浦漁港が四国一の漁港であり、養殖生産量は年間約2万トンに達し、全国市町村別でマダイが2位、カンパチが5位、ブリが8位と日本でも有数の水産業が盛んな町です。

愛南町の水産業も、他の産地と同様に、長引く不況で消費減退による魚価低迷、燃料・養殖餌料の高騰、後継者不足・高齢化による就業者の減少などにより、非常に厳しい漁業経営を余儀なくされています。

愛南町では、昭和57年には約400億円あった生産額が、平成21年には260億円まで落ち込みました。その結果、就労機会が減少し、地域経済も衰退し、過疎化が進行しています。このような中、愛南町の重要産業である水産業を振興するために、行っている愛南町の取組の一部を紹介します。

## 愛媛大学南予水産研究センター設置事業

愛南町誕生直後に、町内にあった大手企業の製造工場が撤退し、約600人の雇用が失われました。新たな企業誘致を進めましたが、鉄道も高速道路もなく、空港まで2時間半を要し、「陸の孤島」と呼ばれる立地条件ではなかなか厳しい状況です。

そこで、地域に根ざした一次産業の活性化を図る取組を開始しました。その中の一つとして、「企業誘致」から「人材誘致」へ。すなわち、人材を誘致、育成することにより、関連産業の集積を図ろうという取組で、平成



▼平成20年4月に完成した愛媛大学南予水産研究センター

20年4月に愛媛大学南予水産研究センターを誘致しました。

研究施設は、町村合併により使用しなくなった旧西海町庁舎（現愛南町西海支所）の空きスペースを有効に活用しています。

ちなみに、この事業は総務省の平成21年度市町村活性化新規施策100事例で紹介されています。

現在、愛南町に常任している同センターのスタッフは、教員11名（内臨時7名）、事務員4名（内臨時3名）、学生研究員21名、研究助手9名の45名です。この内8名が地元からの雇用で雇用の受け皿にもなっています。

ここでは、水産現場に近いという利点を生かし、生命科学部門、環境科学部門、社会科学部門の3つの研究部門が、漁業者の意見を聞きながら、現場に則したさまざまな研究を行っており、成果も挙がってきています。

また、研究だけではなく職員、学生が地域行事に積極的に参加しており、継続が厳しくなっていた地区の秋祭りを盛り上げるなど、地域コミュニティの維持にも活躍しています。

### 愛南型食育を基盤とした地域づくり事業

この事業も、市町村活性化施策

100事例（平成22年度）で紹介された事業で、「ぎよしよく教育」が核となっています。

愛南町における「ぎよしよく教育」は、全国各地で展開されている魚食普及と、近年、重視されている食育推進の統合を前提に、地域に根ざした総合的な水産版食育です。具体的には、従来の魚離れ対策としての表記の「魚食」ではなく、ひらがな表記することで、多様な意味を持たせ、魚の生産から消費・文化までのフードシステムとして捉え、幅広い意味を持たせたものです。7つの「ぎよしよく」として、

- ①「魚触」…魚に触れる体験学習
- ②「魚色」…魚の種類や栄養など特色を知る学習
- ③「魚職」…とる漁業を知る学習
- ④「魚殖」…育てる漁業を知る学習
- ⑤「魚飾」…魚文化の学習
- ⑥「魚植」…魚をめぐる環境を知る学習
- ⑦「魚食」…魚の味を知る学習

があり、ただ単に魚を調理して試食するだけではなく、魚にまつわる諸事象を細かく体系的に学習し、水産物と地域を理解する教育です。

このコンセプトは愛媛大学南予水産研究センター若林教授らが提唱したもので、愛南町は、当初から「ぎよしよく」教育発祥の地愛南町



▲東京都の小学校で行われた「ぎよしよく」出前授業

という標榜のもとに多角的に実践してきました。現在、町内の各保育所、幼稚園、小学校、中学校では、義務「ぎよしよく」教育として町水産課職員、漁協職員、漁業者が「ぎよしよく」教育の授業を実施しております。また、平成20年度以降は、町内のみではなく、町外からの「ぎよしよく」教育授業の依頼が増加し、平成22年度からは、東京都と「ぎよしよく」普及交流事業を行っており、東京都の小学校でも「ぎよしよく」教育の出前授業を実施しています。

また、愛南町の水産物のPRと

◀「ぎよしよく」の体験学習  
刺し網漁の模擬体験



◀地元小学生が考案した  
「愛南ぎょレンジャー」



るものと考えています。

とができ、地域の良さを再認識し、地域の教育力の向上を図り、地域外に対しては、水産業界関係者はもちろん、全国の地方自治体、小学校をはじめとする教育機関、さらには、一般消費者に向けた「ぎよしよく教育」を通じた情報発信をすることが愛南町の水産業振興につながる

### ICT活用による次世代型水産業の確立と普及促進事業

他の産業に比べ、水産業のICT（情報通信技術）の利活用の取組は非常に遅れています。しかしながら、漁業者や漁業協同組合、行政、大学など関係団体間で、必要な水産情報を共有し、双方向のコミュニケーションを活発化すれば、水産に関する業務の大幅な改善と効率化が期待できます。そこで愛南町では、平成22年度に総務省の情報通信技術人材育成活用事業交付金を受け、水産業の課題を解決する一助として、ICTを活用して、

持続的な漁業生産が行える環境を整備することにしました。

具体的な内容は、「水域情報可視化システム」、「魚健康カルテシステム」、「水産業普及ネットワークシステム」の3システムから構成される「愛南町次世代型水産業振興ネットワーク」の構築及び普及促進です。

まず1つ目の「水域情報可視化システム」は、漁業者が水質情報、赤潮情報などの環境情報をいつでも、どこでも確認できるというシステムです。漁業を行う上で、

環境情報は必要不可欠なものです。これまで、大学、町、漁協がそれぞれ調査・測定を行い、漁業者には紙媒体で連絡し、管理も測定機関毎に管理するという状況でした。

このシステムにより、漁業者へ多くの情報をいち早く伝達することができるようになり、また、関係者間の情報共有が図れ、管理、解析も容易

になっています。

次に「魚健康カルテシステム」についてですが、魚病ということとあまり良い響きではありませんが、魚も当然人間と同じように病気になるります。

愛南町での魚病による被害は年間5億円程度あり、大きな問題となっています。そこで、魚類養殖業の振興を図るため平成18年度から魚病診断室を設置し、町、漁協職員が魚の診断を行い、死因を究明し、適切な管理や処置及び予防の指導や出荷魚の検査などを



▲「水域情報可視システム」  
水質情報などの環境情報をウェブ上で確認できる。



▼魚病診断を行う様子

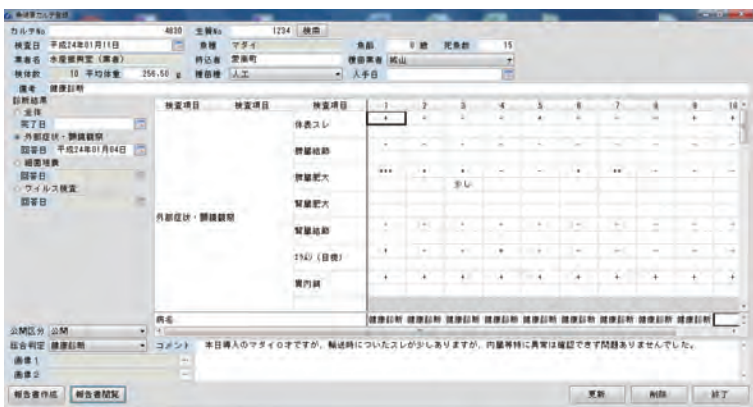


行っています。年間約15、000尾の診断を行っており、その診断情報は症状や遺伝子検査など膨大なデータとなるため、一部の情報が管理できていない状況でした。

そこで、魚病診断の現場に電子カルテシステムを導入することにより、漁業者への診断情報の提供、データの管理、解析が容易になりました。

最後に「水産業普及ネットワークシステム」ですが、これは、漁業後継者などの人材育成や愛南町の水産業や「ぎよしよく教育」の情報発信のための「ピアザ愛南ぎよしよく」というホームページです。

ここには、愛南町の水産業、「ぎよしよく教育」、情報や愛媛大学南予水産研究センターの研究情報を掲載しています。



▲ 魚健康カルテシステム

中でも力を入れたコンテンツが、「ぎよしよく学校」です。これは、小学生向けに作成した「ぎよしよくクイズ」で入学式から始まり、7つの「ぎよしよく」について勉強して、「愛南ぎよしよくキッズマイスター認定証」を取得し卒業するという流れになっています。

クイズの問題は愛媛大学南予水産研究センターの学生、教員、愛南町の

小学校教諭、町職員が協力して作成し、解説には、地元の漁業関係者、愛媛大学南予水産研究センターの教諭、漁協職員などが出演しています。

教科書に沿った問題もあり、楽しく学習できるようになっていますので、是非ご覧ください。

このように「水域情報可視化システム」、「魚健康カルテシステム」により、情報共有とデータを活用し、科学的根拠に基づいた水産業の推進を図り、一方で「水産業普及ネットワークシステム」により人材育成や愛南町の水産業のPRを行っています。

これらのシステムを総合的に、かつ、戦略的に活用することで、IC



▲ 「ぎよしよく」教育の情報発信のためのホームページ「ピアザ愛南ぎよしよく」

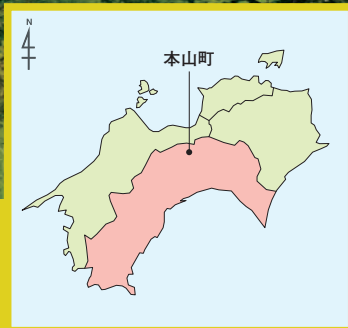
による戦略的な地域水産業を実現し、次世代につながる愛南町の水産業の振興を図っています。

愛南町では今回紹介した事業をはじめ、水産業関係者が集まり水産振興の方向を決定する懇話会や研究成果の発表などを行う水産フォーラムの開催など、水産業振興に関するさまざまな取組を実施しています。

今後、試験研究から生産、加工、販売まで産官学民が一体となった愛南型水産業モデルづくりを進め、水産業の振興、ひいては愛南町全体の活性化を図っていきます。

愛南町長 清水 雅文  
(平成25年4月22日付第28033号)

# 西日本で生産されたお米が日本一に 「土佐天空の郷」のブランド化と 地域活性化



もとやまちょう  
高知県 **本山町**

## 本山町の概要

本山町は、高知県の中央北部、四国山脈の中央部に位置する人口3,916人（平成24年3月末現在）の町です。面積の約91%を森林が占め、町の東西に日本三大暴れ川・吉野川が流れ、上流には「四国のいのち」早明浦ダム、南岸地域に広がる棚田、吉野川支流の清流汗見川をはじめ、自然豊かで風光明媚な特徴のある地域を形成しています。

## 本山町の歴史

町の歴史は古く約8千年以上前にさかのぼります。西日本屈指の縄文遺跡である「松ノ木遺跡」があり、発掘された遺跡から、この地での米づくりは、弥生時代に始まったと言われます。また、本山町は早くから歴史の舞

本山町町章



台として登場します。戦国時代、土佐七人衆とつたわれた豪族の一人・本山氏がこの地に本山城を築き、支配の拠点とします。四方を囲む山地が自然の要害となるこの地は、築城に格好の場所だったのです。しかしその後長宗我部氏に破れ、配下に置かれます。

山内一豊が土佐に入国してからの藩政時代には、野中兼山がこの地を支配。「本山掟」と呼ばれる厳しい訓戒が存在したとも言われる一方、兼山は白髪山から伐採した木材を吉野川で運び、借金の返済に充てるなど敏腕を振るいました。これにより本山町は、剣山山北部・嶺北地方の中ではもっとも早くからひらけた土地であり、今でも農林業、畜産などが行われています。

## 土佐天空の郷のブランド化と現在までの経緯

四国山系の中央に位置する高峻の

地「本山町」で、長い年月をかけ切り開かれた水田は、現在まで農業文化とともに伝承されてきました。その9割は棚田で形成され、古くから変わらぬいづかな風景は見る人の心も和ませます。これまでひとつひとつ不整形な棚田で、農家の地まぬ努力とお米作りに適した環境に育まれ、美しく品質の高いお米が生産されてきました。

そして本町のお米が初めて最高の評価を受けたのが、ブランド米「土佐天空の郷」として出品されたお米日本一コンテスト2010（全国36都道府

県・397点）でした。東北を始め日本の産地が上位を占める中、土佐天空の郷が日本一となる最優秀賞を受賞。西日本初の快挙でした。この受賞が、本山町で農業に取り組んできた方々に自信と勇気を与え、その後の米づくりや地域の活性化に積極的に取り組む原動力となっています。

#### ①本山町特産品ブランド化

##### 推進協議会の発足と取り組み

平成20年2月に設置された本山町特産品ブランド化推進協議会（農家・



▶ブランド米「土佐天空の郷」お米日本一コンテスト2010で最優秀賞を受賞

◀大石・吉延地区の棚田風景



県・町・商工会・農業公社）では、町を知ってもらい、特産品を全国に売り出していく足掛かりとして、農産物の中で最も困難と言われるお米のブランド化に着手しました。

具体的な取り組みとしては、町内外の親子に参加してもらい「田んぼの生き物調査隊」を開催し、多種多様な生態系を知ってもらうとともに安全安心なお米づくりが続けられていることが証明されました。さらに産業文化祭では魚沼産コシヒカリや長野県産ミルキーQueenなど有名産地と本山町産

米の食べ比べを実施し、そのアンケート結果では本山町産が美味しいと答えた方が最も多く、生産者の自信にも繋がる結果となりました。

その後も、専門家の講演会や先進地視察、試験栽培などを重ね、ついに平成21年「土佐天空の郷」は誕生しました。栽培面では、生産者全員にエコファーマー認定を義務付け、環境保全型農業に取り組んでいます。毎年土壌診断を実施し、お米づくりに適した土づくりを行い、特別栽培米の基準（科学合成農薬・化学肥料当量比5割減）で生産を行っています。さらに高知県



▶大石地区の棚田風景

◀美しい棚田風景



◀田んぼアート制作



◀田んぼアート「坂本龍馬」



◀田んぼアート「土佐天空の郷」



の特色を活かした室戸海洋深層水濃縮ミネラル水稻栽培の取り組みを進め、お米の甘みを向上させてまいりました。

品質においても、食味分析機による採点、通常より大粒のお米を揃える米選機、着色粒や被害粒を取り除く色彩選別機を行程に取り入れるなど、厳しい基準で高品質なものへ仕上げています。

また、現在、日本で最も美しい村連合加盟や土佐天空の郷によって全国から注目を集める中、お米などの農産

物だけでなく棚田の風景や環境の良さを十分に消費者へアピールし、地域全体を好きになってもらう「本山町のファンづくり」の取り組みも進めています。

## ②観光地となった棚田

「土佐天空の郷」の知名度が高まり、棚田には観光客や写真家、視察など多くの人が訪れるようになってきました。

なかでも吉延地区・大石地区の棚田は吉野川の支流、檜の川両岸に奥深

くまで広がり、棚田のパノラマを一望でき、「この風景は、まさに日本の原風景、人々の心を和ませ魅了する」と絶賛を頂いております。

これまでは耕作条件の悪さから農家の頭を悩ませてきた棚田は今、町の代表的な観光の拠点として注目を集めています。

協議会では、高品質米の生産に取り組むだけでなく、消費者との交流イベントなど様々な活動を行っています。全国から土佐天空の郷取扱店を招いた

産地見学ツアーや水田の果たす役割やその大切さを子どもたちに伝える勉強会なども開催してきました。

さらに、「天空の芸術祭」と題して、観賞用稲を使った田んぼアートの制作、棚田の一面を会場にした棚田コンサート開催など、農家と消費者とのふれあいで心に残る棚田「土佐天空の郷」の創造を目指し、取り組みを続けています。

今後はこのように米のブランド化に取り組む事により棚田の保全や地域

活性化に繋げ、様々な分野への波及効果  
を期待して取り組んでまいります。

### その他の取り組みとして 汗見川の清流保全と交流体験

町の北部に位置する汗見川は、吉野川に合流しております。流域には、「土佐の名水40選」が二ヶ所あり、ます淵、お釜、おつげ淵などの景勝地や川にちなんだ伝説・昔話が今も残っております。

流域には三波川帯の地層で、中でも高知県の天然記念物に指定された藍閃石に包まれた枕状溶岩や、県立自然公園「白髪山」にあるヒノキの白骨林などは、見所の一つです。年間を通じて秋の紅葉、春の川岸にはキシツツジ、夏には流域でのキャンプ、川遊びなど、県内外から多くの交流人口が訪れています。

流域にある6地域では、この清流を保全しようと昭和47年に「汗見川を美しくする会」を設立。毎年4月に住民全員が参加して、清掃や桜の植樹、道路沿いの支障木の伐採、草刈り作業など環境保全や景観保全活動を進めています。また、交流体験事業にも取り組み、「キシツツジ体験ツアー」や夏



▲「汗見川清流館」廃校となった小学校を改修し宿泊施設として運営

場には、「高知・本山汗見川清流マラソン大会」を開催しています。そして平成20年からは、廃校となった学校施設を宿泊施設として、地域の活性化団体が主体となり運営を始め、農林業体験や地域食材の提供、交流事業の受入なども進めています。

### 日本で最も美しい村連合加盟

平成23年10月に北海道で開催され

たNPO法人「日本で最も美しい村」連合の臨時総会で本山町の連合への加盟承認が決定されました。

これは「棚田景観と特別栽培米土佐天空の郷」や「汗見川流域の景観と環境保全、自然や施設などの地域資源を活かした活性化」などを高く評価いただいたものです。

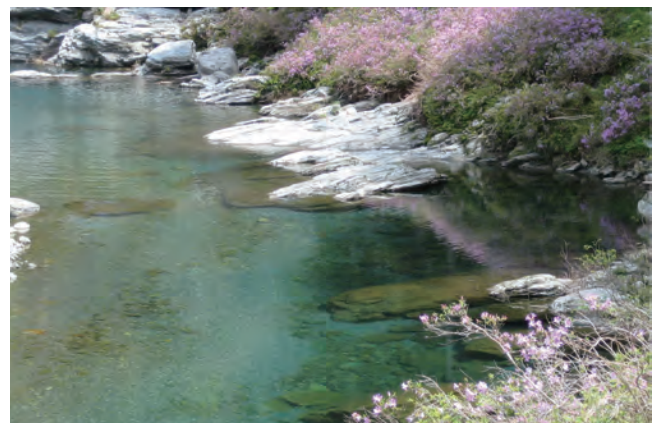
今後は、町内の豊富な地域資源を活かした取り組みを更に推進しながら、美しい地域づくりを進めてまいります。

本山町 政策企画課

(平成24年9月3日付第2812号)



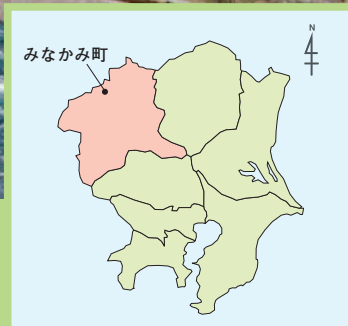
▶四季折々に美しい姿を魅せる汗見川





# 水を守り森林を育む利根川源流の町

〜関東の水瓶を自負して〜



## 群馬県 町 ちなみ

### みなかみ町の概要

みなかみ町は平成17年10月1日に月夜野町、水上町、新治村の2町1村が合併して誕生しました。群馬県最北端に位置し谷川連峰を県境として新潟県と接しています。東京の中心から直線距離で150kmであり、高速道路の利用では、月夜野ICと水上ICの2つのインターチェンジが町内にあることから約2時間で到着します。また新幹線では上越新幹線の上毛高原駅があり、東京駅から1時間20分と首都圏からのアクセスに大変恵まれています。

谷川岳に象徴されるように山岳が多く、2,000m級の山々に囲まれた町の中央を利根川の清流が流れ、その周辺には18の温泉郷が点在する自然豊かな町です。

### ご当地キャラクター



「おいでちゃん」

町の面積は約780km<sup>2</sup>であり、その9割は林野で約70,000haにおよびます。この広大な山林に利根川は育まれ、その貴重な「利根川の源流」を守るため、町全体で水源の涵養や保全などの活動をしています。また、利根川の流域を含む都市住民との交流などを通じ、水の大切さと水源地の魅力を伝える活動もしています。

### 森を育み清流を守る

5つのダム（矢木沢、奈良俣、須田貝、藤原、相俣）を持ち首都圏流域約3,000万人の生活と経済を支える利根川源流の町として、豊かな自然を守り育てるべくみなかみ町発足以来「谷川連峰・水と森林防人宣言」や「環境力宣言」を行ってきました。平成20年3月には水と森を育むまちづくり構

◀作業開始前の安全確認ミーティング



想「エコタウンみなかみ」を策定し、貴重な地域資源の活用と保全、交流活動を推進するため、平成20年10月に「利根川源流森林整備隊」を組織化しました。

整備隊の活動は間伐前の準備作業となる刈り払いや灌木類の伐採、作業の安全を図るための作業機械講習会、山野草研修など多岐に渡っています。

活動の中心となるのは、公募ボランティアで、登録人数170名余を数

◀隊員たちによる刈払い作業



え、年間活動日数15日〜20日、延べ参加者数約400人が活動に携わっています。

整備隊による作業終了後は、利根沼田森林組合や素材生産組合等林業の専門家が間伐を行い、販売収益を森林所有者へ還元するというサイクルを構築しています。このような連携により平成20年度の実績は60haほどでしたが、その後は毎年100ha以上となり平成23年度末までに累計375haの森林整

備を終えました。

今後は、共有地や大規模森林所有者を中心とした活動から、小面積の個人所有林を団地化する集約化事業に取り組むことで整備の促進を図りたいと考えています。

### 小水力発電への取り組み

利根川最上流に位置する町であることから、その水力と落差を利用して

昔から水力発電所が多く立地しており、首都圏の水瓶としてのダムにも多くの発電所が併設されています。2か所の揚水式発電所がありその発電出力は144万kwありますが発電電力としてその分を控除しても、水力発電所は12箇所が町内にあり年間おおむね10億kWhが発電されており、町内の推計消費量が9億kWhに比べて約1.2倍で使用量がらみれば電力の完全自給地域となっています。



▶ピコ発電プロジェクトに取り組み谷川地区の住民



▶設置された小水力発電機

このように地域の個性を大切に、身近なところで再生可能エネルギーを積み上げてゆく意識を醸成することは極めて大切なことです。このため平成21年度に環境省の委託事業としての

「小水力による市民共同発電実現可能性調査」に取り組みました。これをきっかけとして、谷川地区住民を中心に「谷川区小水力検討会」が設置され、「虹の谷」小水力（Tanigawa Project）が町と地域住民による協働事業として始まりまし

た。群馬県が開催する研修会への参加や実績のあるNPOとの勉強会を重ね、流量調査から設置まで地域の方の手作りでおこなっています。平成23年2月に完成し、現在は春秋500W、冬夏季100〜200Wの発電をしており、その電力は発電所付近の外灯と近くに架かる橋をイルミネーションで飾っています。

この発電所のすばらしいところは、地域住民の方たちが、自ら考え行動し設置運営しているところです。小水力発電に対し当初にも興味の無かった方達が、検討会に参加することをきっかけに興味を覚え、1から勉強し設置

運営している点だと思っています。町として今後は、2か所のピコ発電の設置と小水力発電所の検討を促進していくこととしています。

### アウトドアスポーツ振興 条例の策定

みなかみ町で、アウトドアスポーツが始まったのは、

今からおよそ20年前、利根川をゴムボートで下るラフティングが先駆けでした。利根川の源流には矢木沢、奈良俣、藤原などのダム湖があり、雪解けの水が4月から5月にかけてダム湖から放流され、大量の水が勢いよく流れます。水温は低いもののラフティングにとっては絶好のコンディションとなります。このよつなことから、外国でラフ

ティングの技術を習得した若者がみなかみ町で始めたのが始まりです。また、別の背景としては日本カヌー連盟が平成20年まで32回にわたり全日本カヌースラローム競技大会を開催してまいりました。同じように大学生が主体となって利根川をゴムボートで下る「日本リバーベンチャー選手権大会」が開催されてお

り、平成25年で第37回目となります。また、これらの大会が開催されていることが利根川の急流を生かしたスポーツの普及と人材の定着に大きく貢献してきました。今ではラフティングを行う事業者は14事業者となっています。河川環境を生かしたスポーツとして、5〜6年前くらいから利根川の支流の川を使ったキャニオニングやシャワークライミング、ダム湖を生かした



▶谷川連峰の雪解け水が流れ込む利根川で豊かな流れを楽しむラフティング



▶日本で唯一のブリッジバンジーは高さ40m



レイクカヌーが行われるほかパラグライダーやバンジージャンプ、冬にはスキー、スノーボードのほかにスノーシュートレッキングなども行われるようになっていきます。

河川の利用に関しては基本的に自由使用ですが、来町者に安心して体験してもらえよう、安全確保のためのルールづくりを行って安全レベルの向

上を目指そうという機運が高まりました。

平成22年にアウトドアスポーツの先進地であるニュージージーランドのクインズタウンへ町、議会、事業関係者の有志による視察研修を行い、みなかみ町のアウトドアスポーツの目指すべき方向と安全基準の早期確立の必要性を確認しました。

現在、前述のアクティビティーを含めると31のカテゴリーでアウトドアスポーツが展開され、30を超える事業者により「一般社団法人アウトドア連合会」が組織されています。

調査研究が進み、議会議員とアウトドア連合会が意見交換する中から平成24年の9月にはみなかみ町議会定例会で議会提案という形で「みなかみ町

アウトドアスポーツ振興条例」が制定されました。この条例の目的は、アウトドアスポーツの安全性を確保し、安心して楽しめる環境づくりを進めるとともに、自然環境の保護及び保全にも配慮してアウトドアスポーツの振興を図ろうとするものです。

平成25年4月1日に条例を施行し、アクティビティーごとに組織されている組合が運用していたそれぞれ

の運行規定などを踏まえて、関連する規則や規程なども整備致しました。

現在みなかみ町でアウトドアスポーツを体験されている人数は13万人とも15万人とも言われており、条例の効果的活用によってさらに安全で質の高いアウトドアスポーツを実現し、日本における第一級のアウトドアスポーツタウンを目指して行きたいと考えています。

みなかみ町長 岸 良昌

(平成25年2月11日付第2682号)



▶ならまた湖で探検気分を味わうレイクカヌー



▶自然の滝や沢を滑り台のように滑り、滝壺めがけて飛び込み、溪谷を下るリバースポーツ、キャニオニング



おしままち  
東京都 大島町



# 島の価値・魅力の再発見と 新たな観光地づくりへの胎動

## 〜伊豆大島ジオパークと観光特派員のとりくみ〜

### 東京から一番近くて大きな島

伊豆・小笠原諸島（9町村・11有人島）に属する大島町は、古くから伊豆大島の名で知られてきました。

1986（昭和61）年の噴火・全島民避難、火山島故に幾多の自然の営みを繰り返しながら、一方でかけがえない豊かな環境を育んできました。かつて縄文人が島を拓いて以来、先人達は知恵と勇気をもって困難を乗り越え、悠久の歴史を刻んできたのです。

首都圏から伊豆半島に一番近い火山島であり、高速ジェット船は東京（竹芝）間を1時間45分、熱海間をたった45分で結ぶなど、本土との交通は他島に比べて大変恵まれています。

その名の通り伊豆諸島で一番大きな島でもあり、周囲約52km、島を一周

する道路（都道）は約45km、ちょうどフルマラソン並みです。面積は約91km<sup>2</sup>、山手線内の1.5倍程の広さです。島のほぼ真ん中に約10km<sup>2</sup>のカルデラがあり、その中に標高758mの中央火口丘<sup>11</sup>三原山がそびえています。東側の一部に断崖地形が続きますが、それ以外の沿岸や平地に集落が点在しています。

1955（昭和30）年に、旧六ヶ村が合併し大島町が誕生、2015（平成27）年には町制施行60周年を迎えようとしています。

### 観光の衰退・過疎化から プラス1へ

戦前・戦後を通じ観光地として知られるようになった大島町は、高度成長と離島ブームに乗り、1973（昭和48）年にそのピークを迎えました。

この年の来島者数（来島者とは海空路の交通機関利用者、離島故に正確な数であるが島民も含まれている。実際の観光やビジネス等の客数は約7割と推測されている。）は83万人台でしたが、その後はバブル期の一定の増加を除き減少を続け、3・11東日本大震災のあった2011（平成23）年には、1950年代以来初めて20万人を切りました。

人口も減り続け、1952（昭和27）年には約13,000人を数えて



▶ つつじ満開の三原山

いましたが来島者数と同様、一時期上昇傾向にあったものの今は8、433人（平成25年1月1日現在）と、8,000人を切るのも時間の問題となり、2010（平成22）年には過疎地域に指定されるに至りました。

こうしたもとで大島町は、町政を貫く基本姿勢として、「三つのとりくみ」を示し、町民に協力をよびかけました。①プラス・ワン、②見える化、③協働のとりくみです。

その趣旨は現実を直視した上で、まずあらゆる減少に歯止めをかけ、一人一步と着実に成果を生む。その成果はもとより町政のあらゆる分野を見える化し、共有する。その為にお互いに汗をかき、その協働の中で夢やビジョンを語り合いましょ、というものです。

先に来島者数が20万人を下回るという厳しい現実を示しましたが、2012（平成24）年は約1割アップで20万人台をすべに回復することができました。3つのとりくみの成果と単純に結びつけることはできませんが、町民をはじめ関係者が共に汗をかいた結果と捉えることができます。確かにプラス・ワンの成果が見え始めて

きたのです。

そしてその中で大きな役割を果たしたのが伊豆大島ジオパークと観光特派員のとりくみでした。

### 島の価値・魅力の再発見 ー伊豆大島ジオパークのとりくみ

2009（平成21）年、大島町で開かれた「火山防災講演会」で講師が何気なく語った「ジオパーク」という言葉から、そのとりくみは始まりました。



▲ジオパークPRポスター

「ジオパーク」という響きに長期的な低迷が続く観光再生の起爆剤となるのではとの期待感もあり、その年の12月には日本ジオパークへの認定申請を決定。こうして官民一体となった地域活性・観光復興プロジェクト「伊豆大島ジオパーク構想準備委員会」が動き出しました。そして2010（平成22）年9月、伊豆大島ジオパークは関東地方初の日本認定を受け「準備委員会」は「推進委員会」となりました。その後の主なとりくみを紹介します。

### △ジオガイド講習▽

家族・友人知人に語れば立派なジオパークガイドというコンセプトで募集。13回の講座に延べ490名が参加。

### △教育▽

島内小中学校6校の校外学習、高校への出前講座など、次代を担う世代にジオパークを知ってもらうためガイドを派遣。

### △防災▽

いざという時は防災の担い手というコンセプトで気象庁伊豆大島火山防災連絡事務所の合同火山調査観測にガイドが同行。

### △三原山・山頂ジオパーク展▽

10数名のガイド有志が山頂に設置した会場で解説やバーチャルジオツアーを実施。訪問者は累計3、500名を超える。

### △観光・環境まちづくりとジオパークフォーラム▽

東京都の補助事業を活用し、専門家の協力を得て開催。

第1部「ジオパークを楽しむ」「火山

島伊豆大島 そのなりたち」、第2部

「伊豆大島はTOKYOのジオパーク」

「伊豆大島 自然の恵みと低炭素社会」

これらのとりくみを通じて有料ツアーを実施するガイドも多く生まれま

した。利用者は累計で1、000名を超え、その満足度も高いものとなっています。

また講習修了者の中から継続的なジオパーク学習を目的とした「伊豆大島ジオパーク研究会」が自主的に発足。今後の活動が期待されます。

### 島と人、人と人とを結ぶ —伊豆大島観光特派員の とりくみ

2006（平成18）年から2力年

にわたり、「大島観光産業活性化戦略」という事業が実施されました。東京都・東京諸島観光情報推進協議会から委託を受けた活性化戦略プロデューサーが、情報の提供と計画づくりのお手伝いをするというものです。もちろんその主役は大島町であり何よりも町民でなければなりません。したがってプロ

デューサーの提案に応える形で観光協会を中心に大島観光振興実行委員会が組織され、7つの部会にかつてない人員が結集しました。これを機に、旧

6ヶ村で最も小さな集落＝泉津に住む元気な女性たちが集う「笑つ会」を中心に既に地域イベントとして定着した「桜がぶまつり」が生まれるなど、一定の成果がありました。

伊豆大島ファンの輪ひろがる

# 伊豆大島 観光特派員

訪れて気づく大島の魅力。素敵な思い出みんなに伝えよう。  
【伊豆大島観光特派員制度】は大島ファンを応援、つなげていく制度です。  
伊豆大島ファンの輪ひろがっています。

特派員は島外の方なら誰でも登録できます  
◎島外、◎島内、◎専業主婦を想定して大島町観光協会へ1日1名募集し、登録料を免除させていただきます。  
※「伊豆大島」の文字がなくても大丈夫です。登録料を免除させていただきます。  
※「伊豆大島」の文字がなくても大丈夫です。登録料を免除させていただきます。

3つのお得  
大島観光協会が1〜2割引!!  
大島町観光協会が5割引!!  
伊豆大島観光協会が5割引!!

【お問合せ・申込み】大島町観光協会  
電話 04992-2-1446 FAX 04992-2-1371 mail kankou@town.oshima.tokyo.jp

▲伊豆大島観光特派員募集ポスター

分析することが大切です。一方、現在も活動している部会もあります。当初、旧6ヶ村の魅力を再

発見し地区毎の活性化策を検討しようと始まった「地区別懇談会」のメンバーたちです。その趣旨には賛同しつつも「今必要なことは一人でも多くの観光客に島に来てもらうこと」と熱く語る部会長につられ議論を重ね、伊豆大島観光特派員制度の発案に辿り着き、2011（平成23）年から事業が始まりました。

しかし今やほとんどの部会が活動を止めている状況であり、早急に委員会そのものの見直しをしなければなりません。しかもそれはプロデューサーというよりも島側の責任として捉え、

大島町には御多分にもれず「観光大使」（大島町では「御神火大使」と呼ぶ）があり、貴重な協力をいただいています。観光特派員のコンセプト

◀ガイド有志による山頂ジオパーク展



◀ガイド養成講座フィールド講習(地層大切断面)



は観光客の誘致・増客をめざし、島外にいる出身者、関係者(過去に島で働いていたことのある方)、伊豆大島を慕つリピーターの方々に観光特派員として登録してもらい、島内外みんなの協力で幅広く人脈を広げ、その輪を国内外に広げていこうというものです。もちろん各種割引もあります。観光特派員から紹介されたお客様を島側がいかにおもてなしできるか、ということが重要です。途中から部会名を「観光客誘致部会」と変えたこともあり、町の予算付けも少ない中で手づくりの

しおりや資料の発送を続け、今や登録者は5、229名(平成25年5月20日現在)に達しています。

### 新たな観光地づくりへ

伊豆大島ジオパークと観光特派員のとりくみに共通しているものは何か。それは

①島の価値、魅力を町民自ら再発見し発信する。②そのために自ら体験し学び、そして汗をかくリーダーを育てる。③最終的には関係者や観光業者

に止まらず、子供からお年寄りまで誰もがどこでも自らの言葉でジオパークを語りお客様をもてなすとりくみであることです。

この間、伊豆大島ジオパークに関わる公式HPの開設、PR用DVD、スマートフォン専用アプリ、GIS(観光地理情報システム)を活用したデータミュージアムなどの新たなとりくみも始まっています。これまでにない情報発信力となることは確かです。頼もしい限りです。

特に防災という視点では(島にいる以上)「観光客の皆さんも町民です」

との立場からの対策が求められており、そのためにもこれらの情報発信力の活用は欠かせないものです。

そして5、000名を超える観光特派員の存在は、その実証のとりくみに大きな力となることも確かです。やはり最後は、人だて改めて感じるところです。

大島町の新たな観光地づくりへの胎動を本物にするために引き続き力をつくすものです。

大島町長 川島 理史  
(平成25年6月10日付第2843号)

## 伊豆大島観光特派員による 古典落語の夜



**桂ひな太郎**

【生年】1948年(昭和23年)10月14日  
【出身地】東京都目黒区  
【所属】桂文楽事務所



**柳家喜多八**

【生年】1948年(昭和23年)10月14日  
【出身地】東京都目黒区  
【所属】桂文楽事務所



**桂文楽**

【生年】1948年(昭和23年)10月14日  
【出身地】東京都目黒区  
【所属】桂文楽事務所

**平成25年5月11日(土)**

【開場】午後6時  
【開演】午後6時半  
【会場】総合開発センター

【お問い合わせ】  
☎ 04992-2-1446 (大島町役場観光産業課)

主催：大島町観光振興実行委員会・観光客誘致部会  
後援：大島町、大島町教育委員会、(社)大島観光協会、伊豆大島文化協会  
協賛：東海汽船株式会社

大島町は、伊豆大島観光特派員の活動の中心として、観光客の誘致に努めています。

▲観光特派員考案により、大島にて『落語の夜』を開催

▶毎年20万人もの観光客が訪れる「神明の花火大会」



# 町営温泉「つむぎの湯」を活用した 節電・外出支援事業

～家庭の節電と高齢者の積極的な外出促進をサポート～



いちかわみさとちょう  
山梨県 市川三郷町

市川三郷町町章



ご当地キャラクター



やすらぎづくり～日本一の  
暮らしやすさを目指して～

市川三郷町は、山梨県の甲府盆地  
南西部の「旧三珠町」、「旧市川大門町」、  
「旧六郷町」の3町が合併し、「面積  
75・07km<sup>2</sup>の町として平成17年10月に誕  
生しました。

南アルプスを源流とする釜無川と、  
秩父山系を源流とする笛吹川が合流し  
富士川となる左岸に位置しています。

四季折々の自然が楽しめる四尾連  
湖や芦川溪谷、歌舞伎文化公園、ぼた  
ん回廊や桜の名所、花火、和紙、印鑑  
などの地場産業、大塚人蔘やとうもろ  
こし「甘々娘」に代表される農産物、  
市川の百祭りなど、町には誇れる産業  
と観光資源が数々あります。特に町を  
挙げて行われる「神明の花火大会」に  
は、毎年20万人もの観光客が訪れ、大  
いに賑わいます。

人口17,111人、世帯数6,074戸、65歳以上の高齢者数5,519人(平成22年度国政調査結果)であり、高齢化率32.3%と全国的にも高い数値となっていますが、町の掲げる標語「やすらぎの郷」・「日本一の暮らしやすさを目指して」ということで、高齢者福祉や健康づくり事業には特に力を入れています。

今回の舞台となったのは、町の最南端にある町営の温泉施設「つむぎの湯」です。「つむぎの湯」は「いきい



▶太くて長く、濃い鮮紅色で独特の風味と甘さがある大塚にんじん



▲六郷地区の印鑑彫刻の技術は、全国から高い評価を得ている

きセンター」と併設する温泉施設であり、温泉入浴を活用した町民の「健康増進」や「高齢者福祉」の場であるのと同時に、六郷地区の地場産業である「印鑑」、農産加工品「あんびん」等の農産物のPRなど地域活性化の拠点となっています。

平成23年の東日本大震災以降は、本来の施設運営に加え、国民的な課題である「節電」問題と地方が抱える「高齢化社会」の諸問題へのアプローチを試みた事例として、町民の方々はもとより、数多くのマスコミ関係からも注目していただきました。

特に「つむぎの湯」という施設が、節電事業を通して「高齢者の憩いの場」としての機能を果たしたことは、町が目指すところの「やすらぎの郷」への第一歩であったのではないかと考えております。

## 一般的な節電対策について の疑問

平成23年は、行政・企業・個人が「節電」という課題に向かって試行錯誤した年であったと思います。

市川三郷町でも地方自治体としての「節電」という責務を遂行するために、職員が一丸となって取り組みました。5月からは、職員によるピークカットプロジェクト推進委員会を立ち上げ、本庁舎や支所、出先機関等の各種施設の節電を成功させるため、様々なアイデアを出し合い、目標数値に向かって取り組むことにより、目覚ましい成果を上げました。

そんな中、町営施設の中でも集客・「コミュニティー」施設の類となる「つむぎの湯」では、既成の節電対策を実施することは、職員間やつむぎの湯に勤務するスタッフの間でさえ賛否両論となりました。

ただ、実際に施設に勤務している私達としては、高齢者の方々の利用率が多い施設であることから、「過度の節電だけは絶対に避けたい」というのが本音でした。ましてや入浴施設ということもあり、風呂上りの休憩する利

用者に快適な環境を提供することこそ、年間を通して絶対不可欠な行政サービスではないかとさえ考えておりました。「熱中症予防」という健康面からもエアコンの設定温度を下げることは必要最低限としなければなりません。また、高齢利用者に対する安全面からも、照明を暗くすることも不適當だと考えました。

さらに、各種イベントやキャンペーンを自粛し、人々が外出する機会を失うことは、経済活動を抑制する結果となってしまう…という景気悪化に陥ることも懸念しました。ただ、この時期、特に震災直後ということもあり、被災地や被災者の方々のことを考えると複雑な心境でもありました。

## 節電事業ならぬ節電支援事業のスタート

そこで考えたのは、施設の「節電対策」ではなく、来館者への「節電支援対策」でした。

施設自体の節電は、ほぼほぼ……。むしろ家庭の節電を強力に支援する側となることです。快適な環境を整えた「つむぎの湯」へ数多くの人々を集め、家庭での電力使用量を抑えよう！とい

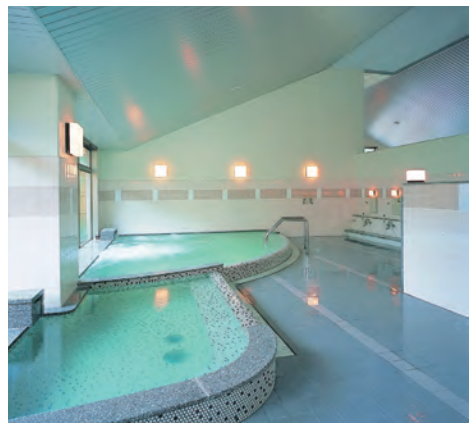
◀ つむぎの湯施設全景



◀ 露天風呂



◀ 内風呂(大・小)



つむぎです。  
つまり、一箇所に数多くの人が集まることにより、トータル的かつ効率的な意味で地域の大きな節電ができるのでは…。人々が各家庭で個々に電力を消費するより、「つむぎの湯」とい

う施設に集まることが、全体的には、より効率的な節電ができるのではないかと考えました。

しかしながら、この「電力を共有化しよう」という考えは、平成23年は、なかなか一般化しませんでした。

もちろん全国には、同様な考えにもとづき「夏は涼しい公共施設を活用しよう」という取り組みをされた自治体や民間店舗もありました。ただ、節電というと、家庭では節電グッズ・エアコンの活用、職場では、エアコンの設定温度抑制や照明の間引き、勤務時間のシフトなどが一般的な対策となり「外出して家庭の電力消費を抑えましょう」とは考えにくかったため、なかなか浸透しませんでした。

さらに、これの先進事業例となる自治体を探すことすら苦慮した記憶もあります。インターネットなど各種情報媒体をフル活用し、やっと数箇所を探し出しましたが、とにかく夏期の実施前の照会であったこともあり、電話でのやりとりの中では、担当者の事業実施への不安や懸念、自信のない様子が感じとれました。

ある程度の資料が整った時点で「市川三郷町つむぎの湯における節電事業計画書」を作成しました。もちろん先進事業例がない時点での作成であったことから、不完全な計画書でしたが、これをベースとして町長や上司と相談・検討したうえで、7～9月の期間限定の「節電支援キャンペーン(後に

「節電・外出支援キャンペーンに改名）」という形で事業はスタートしました。

数多くの方々に「つむぎの湯」に来館していただき、可能な限り長時間滞在を促し、家庭電力の節減に努めてもらうという趣旨にて、「利用料金の割引」(3時間利用料金にて1日利用できること)や「節電ポイントカード」(10回の入浴来館で1回の無料サービステ典)の発行による方策を軸としての実施となりました。いずれも、町長専決による規則に定められた利用料金の減免措置となります。

つむぎの湯 節電・外出支援キャンペーン強化期間

**7月1日(日)～9月17日(月)**

COOL SHARE

① 節電ポイントカード (1回の入浴につき1ポイント付与+16ポイントで無料入浴)

② 休電・交流スペースとしての各部屋の開放 (開放時間は、基本的には10時～16時(10時～16時)まで)

入浴1回につき1ポイント。ポイント16個で無料入浴。カードの発行は8月31日まで、無料入浴の有効期限は9月17日まで。

1	2	3	4	5
6	7	8	9	10
11	12	13	14	15

有効期限：10時～20時 発行日：7/20

みんなで強いのとに強まるよ

- ・節電マドモアゼの感想に書ける
- ・お風呂の掃除が楽になる
- ・お風呂の掃除が楽になる
- ・お風呂の掃除が楽になる

▶ 夏期強化期間ポスター



## 節電事業をきっかけとした 予期せぬ効果

「節電支援キャンペーン」の成果は大きく、7～8月の利用者数は対前年比1割を大きく超えました。施設の有効活用の点や施設を利用された家庭の節電成果を考えると、夏期の節電事業は成功したと思えました。

ところが、キャンペーンも終盤に近づいた9月、つむぎり湯のスタッフ



▶休憩・交流スペース(多目的室)にてくつろぐ来館者

から「このキャンペーン、もう少し継続できないでしょうか?」という提案があったのです。最初は「電力ピークであった夏期が終わるのに…なぜ?節電支援キャンペーンの役割は終わったのでは…」そう思っていました。

ところが、館内の休憩室を見回したところ、キャンペーン前には見かけなかった来館者がチラホラ。しかも楽しそうにお茶を飲みながらグループで団欒している様子を見ることができました。ごく当たり前の光景とも思えましたが、よくよく見ると、キャンペーン前には数少なかった数多くの小グループにより「つむぎの湯」が憩いの場でありコミュニケーションの場として活用されはじめたことに気づいたのです。まさに小さな「コミュニティー」の自然発生です。

さらに、各グループの方々に聞いてみると、「節電支援キャンペーン」は、近所の一人暮らしのお年寄りまでも誘い出すきっかけとなったようです。これこそ施設の運営コンセプトを遂行したこととなり、高齢者福祉で言うところの「外出支援」(介護予防事業でいう高齢者を引きこもりにさせたり、寝たきりにさせない対策)が今回の節電事業の副産物として、また、予期せぬ

▶節電・外出支援キャンペーンポスター

平成25年7月1日(金) ～ 平成26年4月1日(土)		平成25年9月31日(日)	
町内大人1日利用料	600円 → 300円	町内者・町外者とも200円(大人) → 200円(子供)	200円(大人) → 100円(子供)
町外大人1日利用料	700円 → 400円	町外大人1日利用料	400円 → 300円
町外小人1日利用料	300円 → 200円	町外小人1日利用料	400円 → 300円

つむぎの湯 山形県西田町大字に遡町教育館0540 TEL 0556-20-2851

効果として形となったのです。

これにより「節電支援キャンペーン」は、9月以降も年度末の3月末日まで「節電・外出支援キャンペーン」と改名して継続延長することとなりました。

## まさかの年度繰越しキャンペーンへ…

7月から翌年3月までの間、延長を重ね継続したキャンペーンは、好評のもと9ヶ月で終了する時期となりました。その間には、運営者側の私たち

は、利用者の方々に逆に施設運営の方向性と公共施設としての存在意義を学びました。

これで、ある程度の事業を達成できたと考えていた3月…。年度の最終となる定例町議会(厚生常任委員会)の席で、数多くの町議会議員から「つむぎの湯の節電・外出支援キャンペーンは次年度も継続すべきだ…」という意見をいただきました。

町当局としても、町民の代弁者である町議会議員からの意見は、まさに町民の声であり、数多くの町民や利用者がこのキャンペーンの価値を高く評

▶ 峡南地域クールシェアマップ

## 峡南地域でクールシェア

山梨県の中南部にも、数多くの避暑地ともいえる施設やスポットは数多くあります。この夏の暑さ対策と家庭の節電対策を兼ねて、クールシェアスポットを活用しましょう！

**みんなで涼しいところに集まろう**

- ・家族でひとつの部屋に集まる
- ・自然が多い涼しいところで過ごす
- ・公共施設を活用する
- ・カフェ、レストランなどを活用する

以下の施設は、この夏、環境省が推奨しているクールシェア事業の協力施設です。冷房の効いた快適環境を提供している所、本番が多く涼しく過ごせる所など、クールシェアスポットとしての条件を備えている施設やコアです。  
※図は、7月25日現在でクールシェアマップへ登録されている施設を載せましたが、この地域や県内にも、まだまだ多数のクールシェアスポットがあるはずです。是非とも自分に合ったスポットを見つけてお楽しみください。



クールシェアスポットとしての登録申請は、とて簡単です。節電に対する電機と利用者への配慮を確保する環境を整えていれば、上記のような地図情報として紹介することができます。この夏だけなく、新たな節電事業として今後継続されるはずですので、是非とも登録の検討をお願いします。詳しくはクールシェアの公式サイトを参照ください。

### 他施設との連携強化〜クールシェア事業の推進〜

備してくれていると捉え、財政状況も勘案する中、慎重に検討。その結果、平成24年度末まで1年間の繰越し継続延長していくこととなりました。

平成24年度は、新たな節電対策として環境省が推奨する「クールシェア」（涼しさを分かち合う・涼しさの共有化）という節電事業が、同様な取り組みにて一般化されつつあります。

この事業は、環境省のチャレンジ

25キャンペーン（クールビズ・ウォームビズ・うちエコー）の中の取り組みとして、平成24年度から本格的に全国展開しているものであり、もちろん「つむぎの湯」も協力施設として、またクールシェアマップのスポットの一つとして登録をさせていただきました。

クールシェアに代表される節電支援事業は、「つむぎの湯」単独での実施には限界があることから、現在、該当する町営施設や近隣施設をピックアップする中、連携強化を図っている状況です。

もちろん、施設によっては電力依

◀ クールシェアステッカー



存度が極めて高い施設、集客施設ではない場合などは、この種の事業には適していませんが、国内の電力供給が安定するまでの当面の間は、施設にマッチした節電対策を実施していくことが必要だと考えています。

平成23年から節電支援事業を実施している「つむぎの湯」としては、町営施設を中心として、近隣の民間施設でも協力体制のとれる施設への呼びかけをはじめました。

平成24年7月末日現在で、同六郷地区にある町営のフィットネスジム「ニードスポーツセンター」、町の誇る自然と観光の避暑地「四尾連湖」の2

◀ ニードスポーツセンター



つの湖畔荘など、町内外合わせて5施設が地域の「クールシェアスポット」としての協力連携体制を整えることができました。

今後、地域に節電支援スポットを増やすことこそ、昨年から事業を実施している「つむぎの湯」としての目標であり課題とも考えております。

これが、やがては、地域住民ひとりひとりの節電意識の向上に繋がるものとなれば幸いです。

市川三郷町いきいき健康課

つむぎの湯支配人（主幹係長）

保坂 秀樹

（平成24年8月27日付第2801号）



やまのうちまち  
長野県 山ノ内町

# 地域特有の自然資源（自然エネルギー） を活用したまちづくり 「エコのまち」「元気活力あふれる産業のまち」を目指して

## 人と自然を育み、次世代へ つなげる温もりのあるまち

山ノ内町は、長野県の北東部、上信越高原国立公園の中心に位置する四季折々の素晴らしい自然に恵まれた町です。志賀高原・北志賀高原の高原エリアに加え、湯量豊富な温泉地として知られる湯田中汝温泉郷エリアを有し、日本を代表する観光地として年間を通じて多くのお客さまをお迎えしています。中でも「地獄谷野猿公苑」は二ホンを間近で観察できる人気スポットとなっています。『温泉に入るサル』として有名で、昭和45年に米国「LIFE」誌の表紙に掲載され海外にも報道されたことから、平成10年長野冬季オリンピックの際にも世界中の関係者が訪れるなど、「スノーモンキー」として広く世界に知られる名所となっています。

年間の寒暖の差が大きい内陸性気候であること、また全域が特別豪雪地帯に指定されているように冬季の降雪量が多いことから、高原エリアは避暑地・スノーリゾートとして、平地においては高品質の果樹生産に適した地象となっており、こうした自然条件を活かした観光業と農業が町の主要産業となっています。なお、志賀高原については、国連教育科学文化機関（ユネスコ）が自然と文化の共生、自然資源の持続可能な利用促進などを目指して進める「人間と生物圏（MAB）」計画の中心事業である「ユネスコエコパーク」にも登録されています（国内では5カ所のみ）。

当町は平成22年度より過疎地域に指定されました。少子化や若者世代の町外転出による人口減少、人口年齢構成の高齢化は近年特に進んでおり（平成24年3月末時点の住民基本台帳人口…13,824人、高齢化率…33.）

山ノ内町シンボル



2%)、また産業分野においても昨今の社会経済情勢の影響を受け、観光地延利用者数・観光消費額の減少、農業従事者の減少と高齢化・遊休荒廃農地の増加が進んでいるなど、まちづくりにおける様々な課題が増大傾向にあります。こうした状況が地域活力の低下を招いている大きな要因となっていることから、町民や地域との協働により積極的な対策を講じながら、自立のまちづくりを一層推進していく必要があります。

こうした中、平成23年度を初年度とする第5次総合計画、平成22年度からの6年間を計画期間とする過疎計画をそれぞれ策定し、少子化・高齢化社会への対応、地域ブランド力の強化と基幹産業の活性化などをまちづくりの重点課題に掲げ、町の将来像「人と自然を育み、次世代へつなげる温もりのあるまち」実現に向けた諸施策に取り組んでいるところです。

最近の取り組みでは、「志賀高原ユネスコエコパーク」を地域振興に活用していくため、志賀高原周辺に限られている範囲を町内全域に広げる構想を進めています。現在は、自然を重点的に保護する「核心地域」、自然教育などに利用できる「緩衝地域」だけが設

定されていますが、人が住み経済活動を行うことができる「移行地域」の設定を目指しています。これにより町の農産物を「ユネスコが認める農産物」としてアピールできるなど、当町の新たな魅力の一つとなることから今後実現が期待されます。

### 新エネルギービジョン (基本理念)

美しく豊かな自然環境に恵まれた当町は、様々な自然からの恩恵を受けて発展を続けてきましたが、今日の地球温暖化問題やエネルギー問題は、このかけがえの無い財産である自然環境のみならず、私たちの日常生活や産業活動に対しても脅威を与えるものとなりつつあります。豊かな自然環境・安全安心な日常生活・安定した産業活動を今後も維持・発展させていくためにも、地域資源を活用した自然エネルギー施策の推進に積極的に取り組んでいくこととしました。

まず平成21年度に、町内の自然エネルギー賦存量や利用可能量の調査・把握、地域に適した導入推進プロジェクトの検討・具体化などを目的とした「新エネルギービジョン(初期ビジョ

ン)」策定に取り組みました。信州大工学部から学識経験者として2名の先生方を派遣いただくなど協力をいただき、また町基幹産業である観光業・農業の関係者、町民代表者、長野県の環境施策担当者などに参画をいただきビジョン策定委員会を組織、1年間かけて調査検討を行いました。

委員会では、自然エネルギー施策推進にあたっての基本理念について再検討を行いました。1つ目に「自然の恵み(エネルギー)を最大限有効利用する工場のまち」として、町に豊富に賦存する自然エネルギーを極力無駄に



▶新エネルギービジョン策定委員会の様子

せず最大限有効利用することにより、実際に環境負荷の低減を図り地球温暖化防止・自然環境保全・化石燃料削減に貢献していく。工場のまち・やまのうち」を目指していくこと、また2つ目に「自然エネルギー施策推進による環境に配慮した元気活力あふれる産業のまち」として、観光や農業をはじめとする町の産業分野において、自然エネルギーの有効利用により環境への配慮を広くアピールしながら他地域との差別化やイメージアップを図るなど、環境に配慮した元気活力ある産業振興に取り組んでいくことを掲げました。これらの理念については、自然エネルギー施策推進により目指す町の将来像として位置づけるとともに、その将来像のもとに「町の地域特性に合致した」「地域振興に資する」「町民・事業者・行政の協働による」事業推進を3つの基本方針とすることを確認しました。

### 4つの重点プロジェクト

初期ビジョンでは、町の地域特性や自然エネルギー賦存量等の試算結果などを踏まえ、今後さらに重点的に検討を進めていくべきものとして4つの

重点プロジェクトを選定しました。起伏激しい地形と豊富な流水を有効利用する「小水力発電プロジェクト」、町の観光資源でもある温泉と雪を有効利用する「温泉熱利用プロジェクト」「雪氷熱利用プロジェクト」、また太陽光発電と太陽熱利用による「太陽エネルギー利用」の4つを選定しました。

この中でも「温泉熱利用」と「雪氷熱利用」については、他地域に無い町特有の賦存エネルギーであること（II地域特性）、貴重な観光資源でもあること（II地域振興）から、将来像や基本方針に合致する自然エネルギーであると位置づけることができ、今後優先的に具体的取り組みを進めていくべきものとなりました。

### 温泉熱利用プロジェクト

初期ビジョンでの検討内容をさらに詳細化することを目的に、平成22年度に温泉熱利用に係る詳細ビジョンを策定、翌23年度から温泉熱利用促進事業として具体的取り組みをスタートしました。まず町内の温泉利用関係者を対象とした「温泉熱利用普及拡大セミナー」を開催し、設備メーカーから実際の設備導入事例等について紹介い

◀温泉熱利用普及拡大セミナーにて個別相談会を実施



▶補助金で温泉熱利用設備（チューブ式熱交換器）を整備



ただくとともに、参加者とともに、参加者との個別相談会を設けました。またセミナー開催を契機に、町内の温泉利用施設や温泉引湯住宅において温泉熱を利用した省エネルギー設備を導入する方に対しその経費の一部を補助する「温泉熱利用設備導入支援補助金」制度を創設。温泉熱エネルギーのさらなる普及拡大に向けた支援策としました。

これまでの実績ですが、当町の温泉特有の恵まれた条件「高温かつ豊富な湯量」を活かし、8軒のホテル・旅館等での設備導入がありました。当初、温泉熱の有効利用には大規模な設備投資が必要ではないかと想定していましたが、比較的簡易なシステム・安価な投資費用で導入できることがわかりました。浴槽は、源泉かけ流しであっても、シャワー・カラ用に水道水を灯油等により加温して給湯する必要があることから、熱交換器により温水を作って貯湯・給湯するシステムへ代替することで、化石燃料の大幅な節減や温室効果ガス削減に寄

▶「雪氷熱利用に係る詳細ビジョン」

与しながら、約1年前後で投資費用を回収できるという驚愕の結果となりました。その他にも、有り余る温泉熱を利用して客室等建物内の暖房に利用しているケースもあり、公共施設でも新設保育園の床暖房と温水プールの熱源として利用しています。温泉熱利用の利点としては、24時間天候に左右されず安定的に熱源を取得できること、また日々の管理も簡単なことであり、導入した方々からはたいへん好評です。

将来的には温泉ハイナリー発電がさらに安価に導入できるよう技術革新されれば、毎日大量に噴出している既存の温泉源湯を利用した発電事業という道も開かれるのではないかと感じています。

### 雪氷熱利用プロジェクト

平成23年度に「雪氷熱利用に係る詳細ビジョン」を策定しました。またビジョン策定と並行して雪山方式による屋外での「貯雪実験」にも初めて取り組み、平成24年3月に約500トンの雪山を造成、特殊なシートで覆って



▶約500トンの雪山を造成した「貯雪実験」(雪山の高さ約6メートル)

◀真夏の雪遊び広場に喜ぶ子どもたち



8月まで貯雪し、「真夏の雪利用」と題してイベントを行いました。友好提携都市である群馬県玉村町の花火大会会場にて雪灯籠100基を作ってデコレーション、農業体験で当町を訪れた都内小学生約100名に雪遊び広場のプレゼント、渋温泉夏祭り会場へ雪を運搬して雪遊びコーナーを設置など、「真夏の雪」という非日常を体験していただく企画として好評でした。今回の実験により多くのノウハウも得られましたので、平成24年度の冬には更に知名度ある「志賀高原の雪」の貯雪に取り組みしました。

また現在、雪そのものを冷熱エネルギー源として利用する農産物等貯蔵

施設「雪室」の建設に向けた詳細設計を進めています。平成25年度には雪室を整備し、果樹やそばをはじめとした当町の農産物等の付加価値を高めるための貯蔵実験や新製品の開発等にも取り組みました。

### 今後の課題

現段階では専ら行政主導により、「工」のまちづくりを推進している状況ですが、今後、地域における自然エネルギー普及拡大を図るためには、基本方針の一つ「協働による自然エネルギー導入推進」に掲げたとおり、地域(町民や町内事業者等)による積極的な施策への関与と、自主的自発的な取り組みを引き出していくことが必要であると考えています。そのための環境づくりなど「行政の役割」についてあらためて整理し、効果的な取り組みを展開していかなければならないと感じています。

また国や県など関係機関においても様々な施策や取り組みが行われていますが、これら機関との協議調整を密にしながら、明確な役割分担のもと、町として必要かつ効果的な取り組みを選択して進めていく必要があると考え

ています。そのための情報収集や関係機関との意見交換、学識経験者とのつながりなども大切にしていきたいと考えています。

「地域特有の自然資源(自然エネルギー)を活用したまちづくり」と題して、当町のこれまでの取り組み経過や今後の課題などについてご紹介しましたが、サブタイトルにもあるとおり、本施策については単に温暖化対策・エネルギー分野だけでなく、自然エネルギーを核とした「工」のまちづくり、とりわけ産業振興につなげていきたいという思いを常に意識して取り組んできました。今後についても、自然エネルギー施策をまちづくり政策の大きな核と位置づけ、その効果がさまざまな分野へ波及されるような取り組みを進めていきたいと考えています。

当町では取り組みを始めたばかりであり、他地域と比較しても実績も誇れるものもありません。まずは自然エネルギー推進に対する町内の意識醸成に地道に取り組みながら、町民・事業者・行政による協働体制の構築を図り、着実な取り組みを進めていきたいと考えています。

総務課企画財政係 湯本 貴光

(平成24年10月29日付第28-18号)



ひがし い す ちょう  
静岡県 東伊豆町

# 豊かな自然と文化が調和するまち

## 豊かな自然と文化が調和するまち

東伊豆町は、富士箱根伊豆国立公園の一角である伊豆半島の東海岸に位置し、天城山系の山々と相模灘を望む風光明媚なまちです。鉄道でのアクセスは、首都圏から直通の特別急行で2時間程度であり、比較的に良好であるといえます。また、道路は海岸線を走る国道135号に加え、富士山や箱根の山々を一望できる伊豆スカイライン、伊豆縦貫自動車道や国道414号などによるルートがあり、自然環境に恵まれた地域の中で爽やかな風を感じながら、心地よいドライブを楽しむことができます。

本町は、趣の異なる6つの温泉場を擁し、街中は湯煙が立ち上る豊かな

温泉が売り物で、眼前に広がる伊豆七

島を眺めながら浸かる温泉は格別なものがあります。伊勢海老やサザエ、天

草などの海の幸と、柑橘類や山菜など

の山の幸にも恵まれており、特に地域

ブランドであるキンメダイは、古くか

ら地元の祝い事をはじめ、郷土料理の

食材として親しまれており、観光客に

も好評を博しています。また、一方で

雛のつるし飾りにみられるように伝統

文化が息づいており、自然と文化の調

和を図りながら、魅力あるまちづくり

に取り組んでいます。

## エコリゾートタウン 東伊豆とは

現在、本町では、静岡県と共同で「エコリゾートタウン東伊豆」を進めています。これは、地球温暖化や自然保護

東伊豆町町章



▶町営風車全景



などの「エコ」をバランスよく推進するとともに、グリーンツーリズムや着地型観光を活用し、その大切さやすばらしさを楽しく伝えていくものです。

本町は、海から山へと続く急峻な地形をしており、昔から水力発電など

の自然エネルギーが活用されてきました。明治44年、稲取水力電気株式会社  
が創立され、ドイツのシーメンス社製の発電機を使って412戸の家庭に718灯が点灯されたとの記録が残っており、取水口は町指定文化財として

大切に保護されています。また、昭和2年からは、最大出力が2,900kWの民間事業者による水力発電所が稼働しています。

本町は、風況にも恵まれた地域であり、この自然のエネルギーを有効に活用すべく、平成15年12月から町営風力発電所を稼働し、定格出力600kWの風車3機により、一般的な家庭が1年間に消費する電力の1、100世帯分に当たる約400万kW

アワの電力を毎年発電しています。発電した電気は、全量を売電し、当初予算ベースで年間77,800千円の売電収入を得ており、一部は、町民が住宅用太陽光発電システムを設置する際の補助金として地域に還元しています。

クリーンエネルギーである風力発電ですが、騒音問題や常に安定した発電を供給することが困難といったデメリットがあります。しかし、発電に際し二酸化炭素を排出しないことや再生エネルギーの中では比較的低コストパフォームンスに優れているといったメリットがあり、他の発電方法と組み合わせ、電源のベストミックスを図ることが望まれます。

自然エネルギーの活用に加え、環境保全について啓蒙を図っていくことも重要であり、毎年夏休みには、環境教育の一環として風車見学会を15日間開催し、風車のしくみや地球温暖化について説明するとともに、風車の内部も公開しており、参加者にエコの大切

◀風車見学会の様子



さを伝えています。

また、全国的にもまだ珍しい温泉熱発電の設置や誘致に力を入れていきます。温泉の熱で沸点の低い液体を沸騰させタービンを回すこの発電は、湧き出た温泉を利用するため、源泉にも影響はなく、安定供給できるので現在期待されている発電方法の1つです。

このように水力、風力、太陽光、温泉熱など様々な自然エネルギーを1つの町で見学できるようにし、ガイド育



成や新エネツアーなどの商品化を進め、楽しく環境教育ができるよう取り組んでいるところです。

さらに、町内児童への環境教育、電気自動車・急速充電器の購入・設置、風力発電施設の町内業者によるメンテナンス体制づくりに向けた調査研究など、まちづくりで新たなエコシステムの構築を目指し、波及効果を図るチャレンジを続けています。

### 里山を守るー稲取細野高原ー

「草原を燃やすというエコってご存知ですか？」これは平成20年に開催した全国草原シンポジウムin東伊豆のコンセプトです。ここで言う「エコ」は地球温暖化ではなく、山焼きを行って草原を維持することで、その環境に順応した生き物、そして、その生態系を守るというものです。



▶細野湿原散策の様子

町内では稲取地区の山間部に広がる稲取細野高原を、百年以上前から山焼きで維持し、里山環境の保全に努めています。この高原は広さ125haで、東京ドーム26個分、箱根千石原の7倍の広さを誇るススキの草原で、エリア内には、静岡県の天然記念物に指定された4つの湿原群が存在し、貴重な湿原植物が自生しており、山焼きを継続することでこれらの環境も守られてきました。また、

草原を覆い尽くすススキは、家畜の飼料や畑の堆肥とするなど、昔から地域住民の生活とも切り離すことのできないものでした。

この雄大な地を多くの方にPRすることで、里山環境を保全することの大切さや自然と触れ合うことの素晴らしさを感じていただくため、平成23年よりススキ見学ツアーなどを行い、また、平成24年にこの地がジオサイトとして認定されたことも相まって、

平成24年は期間中の1ヶ月に1万人を超える方にお越しいただきました。

近年、高齢化の進行などにより、畑や草原などの環境を維持できなくなるケースが増えています。このように、里山を守り続けることも大切なエコなのです。

◀毎年10月に開催される「ススキイベントアートコンテスト」制作風景



この他にも、熱川地区では、荒れた雑木林を町民が手作りで再生した大川自然椿園をはじめ、自然環境の保護保全に取り組んでおり、大川温泉やぶ椿園散策会やホテル観賞イベントなど、エコと観光の共生に取り組んでいます。

## 古着のリサイクル ― 雛のつるし飾り ―

稲取地区には、桃の節句の際、雛段の両脇に「対の」「雛のつるし飾り」を飾る風習があり、山形県酒田市の「傘福」、福岡県柳川市の「なびもど」、当町の「雛のつるし飾り」を含めた3つを「日本三大つるし飾り」と称しサミツ

トも開催されました。このつるし飾りの起源は江戸後期とされ、当時、雛人形を購入できない家庭が、わが子の健やかな成長を願うため、古着の端切れで幾種もの人形をつくり、雛人形のかわりとしてそれを糸で吊るして飾ったところから始まったとされ、親から子へと代々受け継がれてきました。

この伝統文化を多くの方に知って

もらうため、毎年1月下旬から3月までの間で「雛のつるし飾りまつり」を開催しており、一時は25万人の観光客が訪れるなど、当町を代表するイベントに成長し、今では伊豆半島だけでなく全国的にも知られるようになりました。本町の主産業である観光を支える柱のひとつに成長したイベントですが、物を粗末にしないという地域住民の工

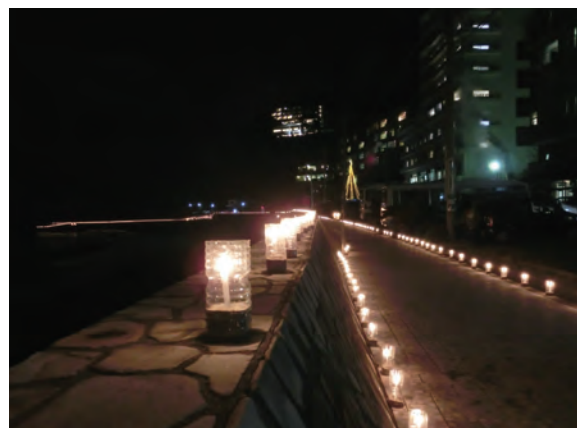
コに対する意識が生んだ風習です。

## さらなる「工」 を指して

この他にも現在、バイオマスへの取り組みとして、全町で

使用済み天ぷら油を回収し、生成されたバイオディーゼル燃料をマイクロバスや給食配送車など、一部の庁用車で燃料として利用しており、また、使用済みのペットボトルを再利用

◀ 使用済みのペットボトルを再利用した  
キャンドル



用し、キャンドルイベントを行うなど身近な生活環境での「工」も推進していきます。

「草原を守る」取り組みや、「雛のつるし飾り」のように、資源を大切にすることを考えや文化を育み、今後、新たな事業に挑戦をしながらガイドなどの人材育成に努め、難しい環境教育ではなく、誰もが楽しみながら「工」の大切さを学べる観光地を目指していきたいと考えています。

東伊豆町長 太田 長八

(平成25年5月20日付第2840号)



▶ 京の七塔・ZEST会場「日本三大つるし飾り」



▶ 雛のつるし飾り 雛の館「むかい庵」

▼林野庁「森の巨人たち百選」に選ばれた「コブ杉」

現地レポート



秋田県 **上小阿仁村**

# 現代アートと活力あるむらびつら

## 安全・安心な村

上小阿仁村は、秋田県のほぼ中央に位置する南北に長い山あいの村です。太平洋に源を発する小阿仁川が村の中央を流れ、途中、支流を合わせて米代川へと流れていきます。北部は平地で南部は山林が多く、総面積256.82km<sup>2</sup>の92.7%が山林原野で占められており、うち75%が国有林となっており、かつては、林業が盛んで、天然秋田杉の産地として知られており、平成12年に「森の巨人たち百選」に選ばれたコブ杉や約720本の天然杉が立ち並び「自然観察教育林」があります。小阿仁川沿いに20の集落が点在し、人口は2,600人余りで、高齢化率がおよそ45%と県内一の高さとなっています。農業が盛んで、村の特産物である食用ほおずきやスッキーニ、良質なあきたこまちなどが生産されています。

村内には鉄道はなく、村北部を斜めに走る国道285号のほか、県道214号、37号によるルートがあり、車でのアクセスとなります。

村全域に光ケーブル網を構築しており、高速通信によるインターネット環境を整備しています。また、光ケーブル網を活用し、村独自のネットワークによる村内通話料無料のテレビ電話がほぼ全戸に設置されています。テレビ電話機能のほか、画面を配信することができ、村のイベントや災害時の避難勧告などの行政情報の配信のほか、高齢者世帯や一人暮らし世帯への見守りサービスに活用されており、安全・安心の村づくりの一翼を担っています。全集落に設置している防災広報無線と連携させているため、無線による放送内容がテレビ電話でも流れ、タイムリーな行政情報が、一度にほぼ全戸へ発信される仕組みとなっています。

上小阿仁村村章



## 大地の芸術祭初の飛び地開催地

上小阿仁村の最奥地にある八木沢集落。国道285号から、県道第1号の萩形ダムへ向かう県道1229号をおよそ9km進んだ8世帯16人が暮らすこの集落が平成24年夏、「第5回大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2012 飛び地開催 KAMIK OANIPROJECT秋田2012



▶今年度展示している作品

として、7月29日から9月14日までの55日間、集落内や公民館、棚田に現代アート作品が展示され、大きな注目を浴びました。

「大地の芸術祭」は、元々、新潟県十日町市と津南町で3年に1度行われる、国内でも最大級の規模を誇る野外アートイベントであり、出展作家である、秋田公立美術大学の准教授の方とのつながりにより、平成24年夏、大地の芸術祭初の飛び地開催が上小阿仁村八木沢集落で開催されました。



▶平成25年度行われた伝統芸能イベントで八木沢番楽を披露する中学生

会期前より、約160人が参加して行われた「清掃ワークシヨップ」や、「作品制作ワークシヨップ」、会期中に実施した各種イベントなど、多くの村内外の方々の協力のもと、事業が進められました。来場者の目標を5、000人としていましたが、およそ2倍となる、延べ9、114人の来場者が集落を訪れ、現代アートと八木沢集落のもつ里山の原風景との融合に共感しました。

## 地域の方々とのかわり

初めての開催としては成功であったといえますが、今後の継続へ向けて、たくさんの課題が残りました。その中でも、地域の方々の関わりが非常に重要で、大きな課題であることに気づかされました。

前述のとおり、会期前に実施した、会場である八木沢集落の「清掃ワークシヨップ」には、村内外含め、約160人の方々が参加してくださいました。村として初の取り組みとなるアートイベントに、地域の方々は「何かあるのか」「何をしているのか」という不安が大きかったはず。八木沢集落の方々からも、説明会を実施し

◀会期前に行われた清掃ワークシヨップ  
(右) 八木沢公民館 左 旧沖田面小学校



▲秋田市の竿燈祭でパレードし「KAMIKOANIプロジェクト秋田」をPR



▶作品制作ワークショップ（八木沢公民館）



ていても、これから起こる未知のイベントに対して「たくさんの方が来るはずがない」という声が上がりました。

また、集落には商店がなく、来場者のため、会期中の土・日・祝日に公民館でカフェを開くことを決定しました。このカフェの出店者についても村内業者・団体で手を挙げてくれるところがなく、村外の業者で対応し、村内の4つの婦人団体にその手伝いを兼ね、村の特産物や野菜などの販売を依頼しました。

会期が進むにつれ、連日のように地域の新聞で特集が組まれるようになると、来場者数も増え、イベント開催日には、終日の来場者が、およそ1,000人を数える日もありました。徐々に集落の方々や、地域の方々も事業に対して関わりを深め、活動を行っていたことが増えてきました。

## KAMIKOANI プロジェクト秋田2013

平成25年は8月10日から10月14日までの66日間、「KAMIKOANIプロジェクト秋田2013」として開催しました。作家数も増え、15人の作家が八木沢集落内や公民館、棚田に作

品を展示しました。また、新たに、平成18年度に廃校となった旧沖田面小学校を会場に、作家が滞在して作品を制作する「アーティスト・イン・レジデンス」事業を展開。8月末まで5人の作家が村へ滞在し、作品の制作活動を行い、八木沢集落内や、旧沖田面小学校に展示しました。

会場である八木沢集落までは、村の中心部に位置する「道の駅かみこあに」から旧沖田面小学校を経由し、1日4往復する無料のシャトルバスを



▶滞在する作家3名によるトークショー（旧沖田面小学校）

土・日・祝日に運行し、平成25年は、地域の方々の関わりを重要視し、様々な機会を見つけて事業のPRを行ったり、カフェ出店者の公募を行ったりしてきました。

しかしながら、まだまだ、課題は多く、地域の方々から様々な意見をいただくことが多々あります。今後、地域の方々に事業に関わりを持っていただき、課題を一つひとつクリアしながら取り組んでいきたいと考えています。

## 活力あるむらづくりへ

この「KAMIKOANIプロジェクト秋田」は取り組みを始めたばかりですが、秋田県で国民文化祭が行われる平成26年度までの継続実施が決定しています。現代アートや芸術の力を活用しながら都市と農村間、世代間の交流人口の増加を図り、自然を生かした活力あるむらづくりを目指してまいります。

上小阿仁村長 中田 吉穂  
（平成25年9月9日付第28553号）

# 「土祭」から始めるプロモーション 〜風土と工芸、人と暮らしの魅力を形に〜

ご当地キャラクター



[mashikotto]

▼益子町のアートイベントの祭「土祭／ひじさい」は、第1回が2009年9月19日（新月）－10月4日（満月）に、前・土祭が2011年9月11日（歳旦）に、第2回が2012年9月16日（新月）－30日（満月）に開催され、第3回を2015年9月13日（日／新月）から28日（月／満月）に予定している。写真は、特設の舞台で行われた芸能の様子。



ましこまち  
栃木県 益子町

## 農業と窯業・土の里、益子

広大な関東平野の中心・東京から北東へ車を走らせ2時間を過ぎる頃から、視界に広がる空の裾になだらかな山の連なりが見え始めます。栃木県益子町は、関東平野の北の端に位置し、同時に、八溝山系を中心に東北へと連なる山々の南の端でもあります。人の暮らしのすぐ隣にありながら豊かな自然を残す里山、はつきりとした四季。その風土の中で、古くから農業と江戸時代末期に始まった窯業という、「土」に依り暮らしに密着した産業が、人の手によって丁寧に営まれてきました。窯業においては、今では窯を持つ陶芸家は400人を超え、年に2回開催される陶器市は、春秋合わせて毎回60万人を超える集客があります。また、

欧米を中心とした工芸界においては、陶芸家で人間国宝となり、民藝運動の旗手でもあった濱田庄司の名とともにMASHIKOの地名は広く知られるところとなっています。

## 陶芸の町の、その先へ。

「益子町は、核となる観光の目玉があるからいいですね」とよく言われることですが、時として、それはマイナスの要素になる可能性も持っています。多くの観光客を集める陶器市にしても「年々、来場者の財布の紐は固くなる一方で」と嘆く声があり、益子駅から陶器店が並ぶ通りまでの間にある、かつてはさまざまな小売店が軒を並べた旧市街地区は、シャッターを下ろす店が増え、活気をなくした状況にあることは否めません。そのような状況

において「現状を変えていかなければ」という思いで策定したが、2005年の「益子再生計画」です。「10年先、20年先を見据えて、益子にもう一度、元気と活力を取り戻したい」という願いで、「環境」「健康」「文化」の3本柱を立て実行項目を策定しました。「文化」分野で「世界に誇れる文化都市、益子」を具体化していくための1つのイベントとして計画されたのが、2009年に第1回、2012年に第2回目を行った「アースアート・フェスタ 土祭」です。

土の祭と書いて、「ひじさい」と呼びます。あえて、土の古来の呼び名「ひじ」を用いたことにも象徴されるように、今までにない視点から私たちの町をとらえ直し、外に向けて発信していく、という試みです。アートによる地域起こしとしては、規模の大小やコンセプトなどの面でも実にさまざまなアートイベントが全国各地で展開されていますが、益子町が目指したものは、小さいながらも益子ならではの個性が光る祭です。中央からアーティストを招聘して街中に作品を配置して終わり、というのではなく、この土地の風土

から、この土地にゆかりの作家たちによって立ち上がる表現です。作り上げていく過程も、イベント会社など外部の力に頼るのではなく、役場職員と住民の官民協働で、この土地の人々が心を入れて作り上げていく「祭」としてのイベントでした。

第1回は、「あらゆる生命の源である土」「民藝以前の益子」をテーマとし、旧市街地のシャッター通りを会場にしました。そして第2回は、「土」から一歩進み深めて、「風土、歴史、自然環境」をテーマとし、エリアについては、陶器店が並ぶ通りや、1994年建立と言われる神社が佇む益子の懐深く入り込んだ地域にも会場を広げました。歴史ある神聖な場所とはいえ、ふだんはあまり訪れる人もいない所に、人の手を入れて息を吹き返させ、地元の人もスタッフも来場者も、そこから生まれる表現を分かち合い、先人の遺産を未来に繋げていく、という願いがありました。

### 地球の上の小さな共同体として

東日本大震災では、益子も多くの被害を受け、あらためて「幸せな暮らしとは？」「今日の延長上にある未来とは？」について考えることが多い日々が続きました。官民あげて復興への道を歩み、2回目の土祭への準備を進める過程で、「これからの暮らし方について考える手がかりを創出していく」と、「マシコ・アース・ヴィレッジ」という新しいコンセプトを加えました。

### 2012土祭

準備と会期中の様子。公式ウェブサイト <http://niji.sai.jp/>



▶ 百本以上設置した「のぼり」も、間伐した竹や布を使って手作り。

▶ 1994建立の神社では、境内とその周辺の森を散策しながら楽しめる「音」の展示を行いました。



▶ 歴史ある酒屋さんの奥座敷では、自然と命をテーマにした立体作品を展示。

先人たちの知恵、技術の背景にある思想などを学び直し、「益子から提案できる、暮らし方」を表現しようという試みです。間伐の竹で作ったテント、飲食ブースで使用した非電化冷蔵庫、夕方からの演奏会を行う広場に灯した和紙と竹の提灯などは、地元住民や近隣の高等学校の生徒さんたちとワークショップで制作しました。

### 都市生活者の共感を呼んだ土祭

土祭は、明日の町づくりのための実践とチャレンジの場であり、また、これからのプロモーションを考えるためのマーケティングの場でもありました。特に第2回目の土祭で集計した来場者アンケートの結果は貴重なデータとなりました。

4段階の選択肢で問いかけた満足度調査では、「とても満足52・4%」「まあまあ満足40・5%」との数値で93%の方に概ね満足の評価をいただきました。居住地の内訳で見ると、近隣では宇都宮市やつくば市など、また東京都内の数値が高く、大都市の方ほど土祭の世界観に共感し満足いただいている

様子が、フリーアンサーの記述からもうかがえました。

「とても楽しめました。土地と作品の良さをどちらも活かした展示だと思えます。よりその世界に入り込むことができました。また訪れたいです。(東京20女)」「新旧がまじりあっていて、別世界を感じられて美しかった。迷っている皆さんが親切に声をかけてくださり、地元の人祭を盛り立てようとする気持ちが伝わりました。(東京60女)」

アンケート以外にも、ネット上で個人ブログやTwitter、Facebook上であげられた情報もできるだけ拾い、感想を収集しました。それらをもとに、益子町PRのメインターゲットとした属性モデルを「首都圏で働き、工芸やデザインに感性が高い30代の女性」と考え、次年度からのプロモーション事業の参考としました。

益子に関心を寄せてくださる人達が求めているものと、益子が持つ「資源」が、土祭をきっかけに、とてもいい感じで重なり合ってきている。そこに小さいながらも確かな手ごたえを感じました。それらをどう整理して、町

の訴求として伝えていくか。益子町のブランディングを再構築することを課題として、2013年4月、観光商工課内の土祭事務局は新設されたタウンプロモーション係へとバトンタッチ。次に、益子町プロモーション事業、初年度の取り組みについてお伝えしたいと思います。

### 故郷の次に大切な町へ

都内から車や電車で2時間ほどの場所。リフレッシュできる自然環境に恵まれ、体に優しい食事ができる気味の利いたカフェがあり、大量生産品ではなく、人の手のぬくもりがある手仕事の品が買えるような場所。メディアが喜びそうな、そんな田舎町は、益子以外にも、いくつもあります。

町のPRを行っていくにあたっての1つのゴールイメージは、「首都圏で暮らす人にとって、自分の故郷に次いで、何でも訪れたい大切な町として位置づけられること」です。

「大切な町」になるためには、

消費行動から一歩踏み込んだところで、心のつながりを築くことが必要だと考えます。例えば、そこに暮らす魅力的な人と出会い繋がれる町、訪れるたびに知るたびに、これからの自分の生き方や暮らし方の手がかりが得られる町、自然や古い建物などの環境に都会暮らしで忘れかけていたような原風景を見出せる町、短時間でも地に足がついた体験ができる町…。まだまだ漠然とし



▶地元高校生と観光ボランティア団体が一緒に事前研修をして、観光客の方々をガイドしました。



▲伝統芸能や演奏会の舞台や屋台を設けた広場では、観光客や町民が一緒に暮れ時の時間を楽しみました。



ていますが、今後、さまざまな事業を通して深めていきたい課題です。

## ふたつのチャレンジ

「何度でも訪れたい大切な町」を目指して、初年度は都内での益子町PRの展示イベントを行い、益子発信の雑誌の創刊準備を進めています。

「渋谷に土を。益子の森を。」を

キャッチコピーとして、5月29日から6月10日までの13日間、渋谷の駅ビルに隣接した新しい商業施設「ヒカリエ」の8/CUBET.23というギャラリー

で、益子のプロモーション展示を行いました。「土」「森」「人と祭」をテーマにしたインスタレーションです。

使用したギャラリーは、毎年11月に公募を行っており、土祭を通して益子町がメインターゲットと考えている層にPRできる場所でもあり、感度が高く周囲への影響力も高く、有効なフロアを創出してくださる層が集まるフロアでもあります。

観光商工課土祭事務局（当時）で企画書を提出しプレゼンを実施。自治体のPRとしては前例がないとのことでしたが、12月に審査をクリアし、年明けから企画制作チームを組織して、打ち合わせを重ねながら準備を進めてきました。企画制作については土祭と同じく、外部のディレクターや展示のプロ集団に外注するのではなく、役員職員と益子在住の作り手たち、益子や土祭ゆかりの都内在住の写真家などの協働プロジェクトで行いました。展示が始まってからは、ご来場いただいた

アート関係者の方などから、クオリティが高いとお褒めの言葉を頂きました。

会期中は、タウンプロモーション系の職員がシフトを組んで連日在廊し、来場者の方に対しての案内は、掲示するキャプションやサインボードに任せることなく、作品はもちろん、益子町や土祭についても、できるかぎり話しかけ、直接お伝えするようにしていました。その会話や、会場に置いた感想ノートなどから来場者の声を紹介しています。「益子町は陶芸だけの町ではないんですね」「益子は心の処方箋」「行ってみたいくなりましたー」など、嬉しい言葉が並びました。

会期中2回目の日曜には、隣接するイベントコートで「益子の食卓市」も開催しました。「暮らしのまんなかにある食卓まわりのさまざまなものが益子では丁寧に作られている」ことをアピールする市で、陶器だけでなく、木工品、染織、野菜、果物、加工品、天然酵母のパンなどが並び、終了時刻までにぎわいを見せていました。

同じフロアのD&D DEPARTMENTが運営するd47食堂では、タイアップ

企画として、益子の野菜を用いて益子焼の器で提供する「益子定食」をメニューに加えていただきました。好評につき、会期終了後も8月1日までに延びました。

## 益子発、人と暮らしを伝える雑誌の創刊

2つ目の事業として、平成25年9月に益子町発信の本（年2回発行の雑誌スタイル）を創刊します。土祭と同じように、外注丸投げはしないで、官民協働の編集チームで企画から編集・制作までを行い、土祭データから想定したメインターゲットの方たちが集まる首都圏の店舗や施設、書店などで頒布していただく予定です。

目的は、先に述べた「故郷に次いで大切な町」として益子町を好きになっていただくため。この一言に尽きます。では、何を伝えるか？「益子の人と暮らし」を伝えます。どんな風に伝えるか？「情報ではなく情景」として伝えます。情景。これは、民間の事業との差別化としてのキーワードです。益子町は、自主的にイベントなど



ギャラリー入口の左右ウィンドウには、益子の原風景ともいえる大正～昭和初期の写真パネルと昔の窯道具などを展示した。中央に見えるのは、CUBE2に、人と祭の写真とともに設置した土舞台。供物台には益子で採れた麦や野菜を。

2013都内でのPRイベントの様子

2013都内でのPR

を行う企画力と情報発信力がある陶芸家の団体がいくつかあり、また、生産者や作り手を中心となって行われる「市」も盛んで独自の情報発信を行っています。観光協会だけでなく、地域コミュニティや民間の任意団体も益子のさまざまな情報を独自のスタイルで

発信しています。

イベントや店舗、商品などの「情報」を発信していくのが民間メディアとするならば、町の役割は、益子町の本質的な魅力をしっかりと伝え発信していくことだと考えます。この土地の風土と、そこに暮らす人、人の暮らし。その様子を丁寧に細やかに拾い、描き伝えていくことを「情景」という言葉で表現しています。

テレビでもネットでも紙媒体でも、次々に新しいモノゴトが伝えられる情報過多の時代です。まず、情景（＝本質的な魅力）を伝えることで共感をもって受け入れられ、基本的な信頼関係が築けたら、その相手から発信される観光情報も、受け流すことなく、キャッチしていただけたらと思います。

これからさらに多くの方々と出会い、大切な場所として心に留めていただけたらようなPR活動を展開していきたいと考えています。

益子町 観光商工課土祭事務局  
（平成25年7月15日付第2847号）



◀「森」の部屋。暗くした空間に益子の森の写真を大きく展示し、栃木の山中で命を落とした鹿の骨や角から彫られた彫刻作品を展示。益子の森で採取した鳥や虫の声、沢の音などで制作した音も流した。



▲連携イベント、「益子の食卓市」。30人あまりの出店者が来場者との会話をしながら益子町と益子で作られる農産物や加工品、陶磁器、工芸品をアピール。



▲「土」の部屋。多彩な色と表情を持つ益子の土で作った急須と光る泥団子。什器も益子の土を用い左官仕事で制作。登り窯の窯出しの時に聞こえる「買入の音」を採取・編集した音を流した。



群馬県 **神流町**



# 神流マウンテンラン&ウォーク

## 少子高齢化日本一の町が創った 日本一のトレイルランニングレース

### 神流町の概要

本町は、群馬県の南西部に位置し、関東一の清流とも言われる「神流川」が流れ、林野面積が町総面積の88.3%を占める自然豊かな町であります。

また町の中央部を東流する神流川の両岸は、極めて急峻な地形が連続し、支川が複雑に入り組んでいることから、その間のわずかな緩斜地に集落が点在しております。

産業については、農林業が主体であった産業形態も資材価格の低迷や従事者の高齢化、後継者不足等により衰退してしまい、商工業においても四方を急峻な山々に囲まれていることから広大な用地の確保が難しく、僅かな平地に中小企業が点在しているのみであります。

交通については、町の中央を走る国道462号が交通の大動脈となっており、これに3県道が接続し、併せて

国道299号が埼玉県へ通じております。本町には鉄道はなく、唯一の公共交通機関である路線バスが、自家用車を利用できない交通弱者の足の確保、通勤、通学など地域住民の日常生活に欠かせないものとなっております。また、近隣の市街地、最寄駅までは車で1時間程度を要しております。

このことから、進学・就職を機に転出する町民も多く、過疎化・少子高齢化が急速に進行し、町の高齢者比率は53%を超えております。国立社会保障・人口問題研究所が発表した「将来推測人口」によると、2035年には神流町の高齢化率が日本一となると推計されました。

### 取り組みの動機と経緯

本町は、人口2,242人（平成26年2月1日住基）の小さな町ですが、観光客を温かく迎え入れる人情味あふれる町民と、雄大な自然という2つの



## 取り組みの内容

大きな財産がありますので、これらを核として、観光事業の充実や都市交流の促進などを積極的に推進し、町の活性化へと発展させることができる活性化策を模索しております。

そんな中、群馬県藤岡行政事務所（現藤岡行政県税事務所）職員と鍋木毅さん（当時、群馬県庁職員。現プロトレイルランナー）が来庁し、町の活性化を目的に「トレイルランニング大会」の提案を持ちかけてくださいました。

しかし、聞いたこともない言葉にそこにいた誰もが「トレイルランニングって何？」という状況でありました。話を伺ってみると「トレイル」とは、登山道や林道など、場所の高低に関わらず、舗装されていない未舗装道を意味し、そこを走るスポーツを「トレイルランニング」（以下「トレラン」といふ。）と呼ぶことがわかりましたが、大会を開催するに当たり参加費を支払ってまで山の中を走る人がいるのかと半信半疑の状態でした。

ただ、詳細を聞いていくうちに、先に述べた大きな財産を最大限活かせるのではないかとということで、トレイルランニングを通して町の活性化を目指すこととなりました。

「トレラン」というものがどのようなスポーツなのかは理解できませんでしたが、何の知識もありませんので、これを大会にするためには非常に多くのことを検討しなくてはなりませんでした。

そのため、町民の方にも「トレラン」を知ってもらうことから始めようと、実行委員長に神流町長、プロデューサーに鍋木毅さんを迎え、17の地域団体が参加する実行委員会を発足いたしました。

何もわからない状態ではありましたが、群馬県藤岡行政事務所の全面的なバックアップをいただきながら、「神流町らしさ」を全面に押し出したオリジナルの大会を作り上げるため連日会議を開催し、来町者を歓迎する様々なアイデアが提案されましたので、実際に行っている特徴的な取り組み内容についてご紹介いたします。

### ●コース設定

トレイルランニングに欠かすことのできない、コースの選定と整備です。

現在は、50kmを含めた3つのカテゴリーがありますが、当初は27kmと40kmの2つのカテゴリーでした。長距離

の山道を周回コースとするために、山に詳しい町民や、高齢者に古道を聞いて、何日も何日も山に入り、既存する登山道と併せランニングコースをつないでいきました。古道といっても、崩落や倒木などがひどい箇所がたくさんありました。さらに希少植物がある山道で大勢の選手が走ることから、自然保護団体にも協議し助言をいただきながら、コースとして使用できるかを判断、その後大会に適した距離になるようコース設定をしていきました。

コースが決まったら、町内外からもボランティアを募り、倒木の撤去や草刈り、選手が道に迷わないよう自印のリボンや案内板等を設置するコース



▶「トレイルランニング」コース選定

整備を行いました。ほとんど人の入ることのない古道や道のないところに道を作ったりしましたので、初めのコースづくりは大変苦労しました。しかし、各山々をつなげた道が整備できたことから、この大会以外にも登山道として利用が可能となり、観光面でも活用できるようになりましたので、現在は、ハイキングコースとしても多くのお客様に利用していただいております。

### ●エイドステーション

コース上には、エイドステーションといわれる選手の休憩所を設けております。そこでも「おやき」や「柚の



▶標高1000mに配置された「持倉エイド」（休憩所）

甘漬」など地元の食材を使ったものを提供しております。また、コース上で一番の人気エイドが、標高1000mに位置する「持倉」という集落でのエイドです。

持倉集落は、人口12人、高齢者比率100%のいわゆる限界集落ではありますが、おじいちゃん、おばあちゃん達がその畑で作り、採れたものを使った手打ちそばや花豆が選手全員に振る舞われるため、これを楽しみに参加される選手の方もいらっしゃいます。

### ●ゴールゲート

本大会では、空気を入れて簡単に



▶杉のゴールゲート

できるドーム型のゲートは使わず、昔神社のお祭りなどで使っていたという「杉の葉」のゲートを造っております。

材料となる杉の葉は、町内の間伐した杉を所有者から譲っていただき、トラックや工具なども町民の方の協力により造り上げております。

大会当日は、このゲートをバックに選手全員のゴール写真を撮り、後日ゴール写真入りの完走証を完走者全員に配布しております。

### ●参加賞

選手に配布する参加賞についてですが、押し花のプレート、木製ネームプレート、地域振興券を配布しております。

押し花のプレートは、商工会女性部の方が中心となり作製していただいておりますが、材料となる押し花も何カ月も前から準備し、一つ一つ押し花絵を作り、プレートにしていきます。

木製のネームプレートは、ナツツバキ（シヤラの木）を使用します。資材の提供、材木の切断など、町民の方のご協力をいただき作製します。記念にオリジナルロゴの焼き印を押します。これを一人一人書き入れ、配布しております。

▶手作りのネームプレート



押し花のプレートもネームプレートも一枚一枚作製するので、非常に時間のかかる作業ではありますが、町民の方が、記念になればと心を込めて作製してくれます。

地域振興券は、参加費の中から1000円分を選手にキャッシュバックし「1000かな」という大会期間中限定の地域振興券として発行しております。

「神流マウンテンラン&ウォーク」は「地域の活性化」が最大の目標でありますので、極力町内で買い物をしていただくことを考案したものです。

### ●大会前日イベント

本町にお越しいただくせっかくの機会ですので、神流町また田舎というものを体験していただくとう豆腐作りやこんにやく作りなど5つのメニューの「山村体験」を用意しており、希望される選手には体験をしていただいております。

また、選手を迎え入れ、歓迎したいということでウェルカムパーティーを開催しております。ここでは、町内のお母さん方を中心に神流町の郷土料理を振る舞い、お袋の味を選手へ提供させていただきます。お酒は、手作りの竹コップ・竹徳利を使用し、「イワナ



▶ウェルカムパーティー

の骨酒」など飲み物でも神流らしさを追求し、提供しております。

こうした町民の方の温かい歓迎が人気を呼び、ウエルカムパーティーを目的に大会に参加される方もいらっしゃるようです。今では、会場である小学校体育館内を歩き回ることができないほど、参加希望者が増えております。

### ●民泊制度の導入

本町には、宿泊施設が3件（旅館1軒、民宿1軒、公共の宿泊施設が1軒）のみであり、前日からの参加を希望する多くの選手を受け入れることは



▶ 町村と選手との交流が生まれる民泊

困難な状態でした。そんなとき町民の方から「うちに泊めてもいいよ」という言葉をきっかけにボランティアという形で民泊制度を取り入れ、今では40件ものお宅で選手の受け入れをしていただいております。

また、この民泊制度を通し、町民と選手との交流が生まれ、大会以外にも新たな交流が始まりました。

### 現状と今後の課題

平成21年に第1回大会を開催いたしました。が、人情味あふれる町民の温かなおもてなしが人気となり、回を重ねるごとに700名の定員が半数分で締め切りとなってしまっただけでなく、大会となりました。ランナーのためのインターネットサイト「ランネット」でも、4年連続トレイルランニング部門全国1位の評価もいただいております。

これだけの高い評価をいただけるのも、神流町の子どもから高齢者、男性、女性がそれぞれ得意分野を活かし、それを実行しながら大会に関わっていただいたことや、大会を成功させる以上に来町された方を歓迎したい、楽しかったと気持ちよく帰ってもらいたい、そんな町民の方の気持ちの賜物だと痛

感じております。

また、こういった町民の方の取り組みが評価され、平成24年度には過疎地域自立活性化優良事例として総務大臣表彰を受賞いたしました。

今までは各種事業やイベントにおいては、比較的行政主導で物事を進めることが多くありましたが、神流マウンテンラン&ウォークを通じ、行政主導から町民主導へ移管のきっかけづくりにもなったと感じます。さらには人情味あふれる町民・地域と行政が一体となったイベント作り、一過性でない、年間を通じた交流人口の増加など、こういった多くのことを感じ、実践することができました。

冒頭で申し上げたとおり、本町は高齢者比率が53%を超えており、過疎化・高齢化が進行する限り、高齢者比率の増加や人口流出は益々深刻な問題となっております。

本大会の一番の目的は「町の活性化」です。ただ、活性化といっても町が元気になることが活性化なのか、財政が潤うことが活性化なのか、人口が増えることが活性化なのか。最終的な目的は列記したものを全てクリアすることだと思えます。

過疎地域ではありながらもイベントだけではなく、日常生活でも一人一人ができることを行い、町外の方との交流が広がり刺激を受けることは、町への誇りと元気を持つ「活力ある町」へとつながり、それを継続していくことにより町民主体の地域活性化につながっていきたく強く思います。

（平成26年3月10日付第2872号）

神流町長 宮前 鉄十郎



▲ イベント終了後の記念写真



とうのしょうまち  
千葉県 東庄町

# 「歴史を活用した地域活性化・観光事業」 の取り組み ～「天保水滸伝」おらが町の物語～

## 東庄町の概要

都心から車で東に向かい2時間ほど走ると、利根川の雄大な流れにたどり着きます。千葉県東庄町は利根川の下流域、関東平野の東端、豊かな自然を有する水郷筑波国立公園内にあります。利根川の堤防に立てば360度、視界を遮るものはなく、初夏には水稲が緑のじゅつたんのように広がっています。

古くから「東」の荘園として稲作が盛んで、江戸時代には米作りと醤油の醸造、また、江戸への利根川水運の拠点のひとつとして、船荷の積降ろし、荷物の集積所として栄えたと言われています。また、歴史と伝統が今も引き継がれ、

20年に一度「東大社式年神幸祭」というお祭りがあり、荘厳な時代絵巻が繰り広げられます。

昭和30年神代村、笹川町、橘村、東



▲20年に一度開催される「東大社式年神幸祭」は、900年の歴史が息づく時代絵巻

東庄町イメージキャラクター



「コジュリンくん」

城村の1町3村が合併した、東西9km、南北10・5km、面積46・16㎢の豊かな自然に囲まれた町です。中央が東総台地の丘陵部で南部、北部に傾斜して低地が広がり、中央の丘陵部は畑地帯、北部南部の低地は肥沃な水田となっております。

海に近いことから急激な天候の変化も少なく、年間平均気温は15℃前後と温暖な土地柄です。この温暖な気候を生かした、イチゴの栽培が盛んで、イチゴ狩りに多くの観光客が訪れ、大粒のイチゴ「アイベリー」が高い人気を集めています。

### 地域活性化への取り組み

東庄町では、町を活性化する事業の推進を図ることを目的に、平成21年度から「地域活性化事業補助金制度」を実施しています。

この事業は、「町を元気にする」知識とアイデアを募集するもので、地域の活性化に向けた起爆剤として利用してもらうことを目的としています。事業の内容は問わず、住民代表で構成する審査会で審査され、認められると

事業実施の補助金が交付されます。

年度別の事業費は、平成21年度は2事業で380万円、平成22年度は3事業で490万円、平成23年度は3事業で140万円、平成24年度は5事業で725万円の補助金を交付しており、地域の活性化を図ってきました。

代表的な事業としては、広大な利根川河川敷を臨時飛行場として利用し「RC（ラジコン）航空ショー」を3回実施、いずれも2万人を超える集客



▶東庄音頭ぼんおどり会

◀大相撲夏合宿のひとつま（赤ちゃんの土俵入り）



事業となりました。

また、相撲が地域の祭事と一体になっている土地柄でもある関係から、8月の2週間にわたり大相撲力士の夏合宿を招致している団体の「出羽海部屋笹川夏合宿」が事業化になり、相撲のまちをPRし、早朝の朝稽古にもかかわらず町内外から大勢の方々が見物に訪れています。他には、「コンサートや東庄音頭を踊るぼんおどり会、よさこいオリジナル曲の作成など、いろいろ

るな事業に取り組んでいます。更に町の観光協会がこの補助金を活用して、観光ガイドブック「るるぶ東庄」を増刷し、各種イベントや行事において町の観光PRを行っています。今後も知恵とアイデアを生かし、町を元気づける活性化事業を応援していきたいと考えています。

### 町の魅力を発信し観光ガイドブック「るるぶ特別編集 東庄」

多くの自治体が東日本大震災以降、地域経済の低迷や多くの課題を抱え、益々厳しくなる財政の状況下で、とかく各自自治体からの情報発信が難しくなってきたところですが、東庄町では、平成23年度、緊急雇用創出事業を活用した「観光ガイドブックるるぶ特別編集 東庄」を作成しました。この観光ガイドブック作成事業は、わが町の魅力を、近隣4市との広域観光の魅力と合わせて全国に発信したものです。そこには、近隣地域と一体にならないければ観光事業が成り立たないという小さな自治体の特徴も現れており、



「るるぶ特別編集  
「東庄」



短所を長所に変えるべく地域全体の観光振興を目的として作成しました。

この町を含めた近隣の観光資源をガイドブックとしてまとめた「るるぶ特別編集 東庄」を発行し、広く内外にPRしたことにより小さな町でも情報発信ができるという自信が付き、更なるPRに乗り出しました。

「天保水滸伝NEO」の誕生から

浪曲、講談、映画などで大正時代から昭和40年代まで広く全国に知られた「天保水滸伝」は東庄町が舞台となっ  
ています。登場する任侠の男たちの多くは、この地方の村々に実在した若者たちであり幕末という混乱の時代を生

きた物語です。

この物語を若い人にも知ってもらおうと、平成24年度の緊急雇用創出基金事業を活用し、天保水滸伝をアニメで制作し、千葉テレビにおいて放映する事業を実施しました。

しかし、アニメでこの天保水滸伝



▶アニメ 天保水滸伝NEO

の物語の内容をすべて盛り込むことは

収録時間の関係上困難であったため、まったく新しい内容で「天保水滸伝NEO（ネオ）」というアニメを作成するとともに、アニメのキャラクターが町の見どころをレポートするという形で制作、天保水滸伝と町の観光PRを一緒に千葉テレビで

5回にわたり放映しました。

そして、平成25年度は、東庄町商工会が、「浪曲や講談という伝統芸能に親しんでもらい、町の歴史・観光として天保水滸伝を広く内外へPRしよう」と、「天保水滸伝浪曲・講談会」を町公民館大ホールで開催し、町内外から大勢の観客が来場しました。この浪曲・講談会は地域活性化事業補助金を活用して実施しています。

## まちぐるみ観光おもてなし 推進会議の発足

さて、観光ガイドブックの作成やアニメを使った観光PRなど、工夫を凝らしながら、町、観光協会、商工会、観光いちご組合、農業団体等で協力し

ながら観光振興に取り組んできた結果、町民の間にもよつやく観光客を迎えたいという意欲が芽生えてきました。まだ観光客へのおもてなしについて具体的にとのように取り組むのが効果的なのか、知識が十分ではありません。そこで、県の観光補助事業を利用して、観光客へのおもてなしについて

造詣の深い専門家を招き、町をあげて「おもてなし運動」を行うにあたっての留意点等について講演をしてもらい、具体的なアドバイスを受け、官民一緒に町を検証する「観光おもてなし推進実行委員会」を発足させ、「まちぐるみおもてなし推進事業」を実施していきます。

これにより観光客

を迎えるにあたっての「おもてなし」が向上することを目指し、また、観光PRの「仕掛け」として、新しい観光ガイドブックにスマートフォンを使うことで動画が見られる新たな仕様により、話題性のある観光マップを導入しました。

観光ガイドブックの動画による効果で、観光客に旅館や飲食店等を身近に感じてもらい、心の触れ合いを大切にし、地元特産品を使った料理、お土産品

の販売促進や、これまで素通りされていた町の中を歩いてもらうことで観光客の滞在時間を増やしたいと考えています。

この観光ガイドブックに動画が現れる新たな仕様により、天保水滸伝のアニメ化を手掛けた次の展開が始まっている「アニメ 天保水滸伝 NEO」を活用していき、若年層に関心を持ってもらうチャンスとしていきます。更には天保水滸伝のもう一方の舞台である旭市と連携し遺跡めぐりや、主人公の共有などを通して広域観光を推進していきます。

今後の展開としては、東庄町の「おもてなし力」を向上させるとともに様々な角度からサービスの向上や観光地ブランドを確立してリピーターを獲得し、販売や商業ベースでの事業効果を上げたいと考えています。

観光事業に限らず、地域の活性化事業、様々なイベント等で「まちづくりは、地域で暮らす人々による支え合い」を念頭に町民と行政が力を合わせ一体でまちづくりを進めていきます。

東庄町長 岩田 利雄

（平成25年10月7日付第2856号）

▶自転車で千葉県を周る「ツールドちば」ご一行様を「おもてなし」

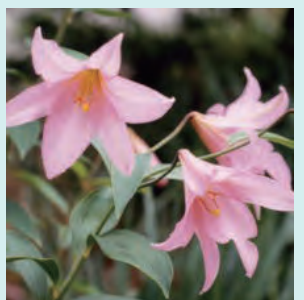




せきかわむら  
新潟県 関川村

# 村民融和のむらびつり 「大したもん蛇まつり」と「コミュニティ活動」

関川村村章



村の花「ユリ」

## ヨリユリで湯の里

関川村は、県都新潟市の北東約60kmに位置し、村の中央を流れる荒川が日本海へと注いでいます。村の面積は東京23区の半分以上にあたる299.61km<sup>2</sup>という広い面積ですが、荒川流域の一部を除き起伏が激しく、約88%は山林原野。緑美しい農山村です。荒川沿線には高瀬・鷹の巣・雲母・湯沢・桂の関の5つの温泉が湧き出て、えちごせきかわ温泉郷を形成しています。村の中央には国重文・渡辺邸や佐藤邸など18世紀の街並みが残っており、古くから交通の要所として栄えた米沢街道を今に伝えています。村の主幹産業は農業とサービス業。稲作を中心とした兼業農家が多く、農業と観光の村です。自然豊かな環境を守り育てながら5つの温泉資源の活用を図り、歴史、

伝統を次代に継承し香の高い文化を育みつるおいに満ちた美しい村づくりを目指しています。

## 大したもん蛇まつり

### ①まつりの見どころ

長さ82・8m、重さ2トンの大蛇が、村内を練り歩きます。「世界一長い手作り蛇」として2001年にギネスにも認定されたユニークで豪快な大蛇のパレードが、まつりの主役です。500人も村民が、交代しながら大蛇を担ぎ上げ、村内をパレード。見物していても十分楽しめますが、飛び入りも大歓迎。長さ25mの子ども用小大蛇も一緒に練り歩きます。

### ②大蛇の作り手

大蛇は、頭部のほか胴体は54のパーツに分かれます。胴体は、竹とワラを材料にして村の54の全集落が分担して制作しています。竹は約200本、約

▶ 大したもん蛇の制作風景



30アール分のワラを使用。竹で骨組みを作り、そこにワラをロープでつけていきます。ロープの編み方によって蛇のウロコを表現しています。集落の皆さんが幾日も集落センターなどに集まって制作したものを、まつり当日につなぎ合わせます。大蛇は傷み具合をみながら3〜4年ごとに制作。これまでに8体の大蛇をつくっています。

### ③まつり誕生秘話

むらじくりは人づくりから——。人材発掘（育成）を目的に村が開塾した

「せきかわふるさと塾」の塾生の発案で、1988年にまつりが始まりました。村にはこれまで、村民全員が参加して楽しむ村全体のまつりがありませんでした。情報化社会の波に押され、田舎のもつ良さである地域の連帯感が薄れつつあるため、村民一丸となって取り組めるまつりを考案。都会にはない村の良さを引き起こし、それを肌で感じ、村に生きることの喜びと自信をもってもらうことがねらいでした。

### ④なぜ大蛇？

村は、1967年（昭和42年）8月28日、羽越大水害に見舞われ、多くの犠牲者を出しました。その水害を風化させることなく、水害で得た教訓を後世に伝える契機にしようとして、まつり創設にあたり考えられました。

また、村には「大里峠」という伝説があります。この伝説は、禁断の蛇の味噌漬けを食べた若い人妻が、蛇に化身され、やがて大蛇に成長し、自分のすむ場所をつくるため、荒川をせき止めて関川村を大湖にするというもの。この伝説は、見方によっては大水害

◀ 羽越大水害に見舞われた村の中心部（下関）



を物語にしたものとも言われています。

このようなことから、「大里峠」と「羽越大水害」の二つをテーマとし、水害発生日前後にまつりを開催。また、大蛇の長さもこれにちなんで、82・8mとしています。竹とワラを材料にして制作しようと考えしたのは、せきかわふるさと塾生の豊職人のアイデアによるものです。

## まつりを通じた交流 まつりサミット in 関川村 10月6日（日）に開催

大したもん蛇まつり発足から25周

◀ 「大里峠」紙芝居の上演風景



年目を迎えた巳年の今年、10月6日に関川村で、まつりサミット in 関川村を開催することとなりました。これは、全国各地から知名度の高いまつり団体が一堂に会し、交流を深めようというもの。近隣市をはじめ20程度のまつり団体を招致する計画です。

まつり開催にあたっては、若者たちがプロジェクトチームを組織して、その内容を検討。村には人材発掘の場にしようという狙いがあります。まつり当日の成功だけではなく、その過程を重視し、産業振興と人材発掘に力を注ぎます。

▶会津若松市街での大蛇パレードの様子



大したもん蛇まつりは、年1回の開催ですが、そのほかにも県内外のまつりに参加し、大したもん蛇パレードを行っています。とくに、政令指定都市・さいたま市で開催されるイベント

### 大したもん蛇まつりの経過など

- 1988年 8月 第1回目開催  
日本イベント大賞奨励賞受賞
- 1989年 10月 ふるさと東京まつりに参加
- 1991年 8月 丸山大橋開通記念パレード  
(市町村道アーチ橋日本一)
- 1995年 8月 新潟ふるさと村(新潟市)
- 1997年 6月 羽越水害30周年記念パレード
- 2001年 1月 21世紀巳年元旦記念パレード
- 2001年 4月 新潟総合スタジアム・ビッグスワン  
(新潟市) 新潟緑の百年物語
- 2001年 6月 「竹とワラでつくられた世界一長い大蛇」としてギネス認定



- 2002年 6月 ワールドカップ・ウェルカムパレード(新潟市)
- 2003年 10月 咲いたまつり2003(さいたま市)
- 2004年 4月 第8回ふるさとイベント大賞受賞  
(祭り・イベント部門賞)
- 2006年 11月 新潟日報文化賞受賞
- 2008年 10月 まつりサミット(さいたま市)
- 2009年 9月 トキめき新潟国体オープニング  
セレモニー(新潟市)
- 2012年 5月 ふくしまフェスティバルin会津
- 2012年 8月 第25回目開催、第8代目完成

### 大学生との交流も10年

国際ボランティア学生協会(IVUSA)との大したもん蛇まつりを通じて交流も10年が経過しました。この協会は、国内外で社会貢献活動をして

には何度か参加し、交流を深めており、まつりサミット開催はこれの縁によるものです。  
また、平成24年6月には、ふくしまフェスティバルにも参加しています。これは、東日本大震災による原発事故の風評被害を払拭しようと、全国からまつり団体が集結したものです。会津若松市の市街を大したもん蛇が練り歩き、沿道に集まった福島市民と一体となつて、大蛇パフォーマンスを披露しました。

いる大学生のNPO法人。1200名の学生が登録していて、毎年8月になると100人から150人の学生が村を訪れ、まつりの準備や当日の運営に携わっています。

また、大したもん蛇まつりだけではなく、冬のまつりや体育協会行事、お年寄りの地域の茶の間などにも顔を出し、年間を通じて学生の視点での交流が続けられており、村に対するビジネスプランの提案なども……。民家や公共施設の雪処理ボランティアも検討されています。

### 村の原点は、 集落とコミュニティ

関川村を元気にするには、コミュニティ組織の母体である54の集落が、



◀学生と交流を深めた雪ほたる祭

それぞれ持っている有形無形の資源を自らの発想と実施に向けた努力で前進させる必要があるという考えから、「むらびくり54作戦」と称した集落の計画づくりを行っています。計画

◀地域活性化事業申請の公開審査会



また、地域コミュニティには  
 自主防災組織の役割も担っていた  
 だけでなく、必要があることから、消防団  
 組織の見直しを行い、7つの分団  
 を3分団にしたうえで9つの「地  
 域隊」を設け、コミュニティ組織  
 と連動した活動ができるように再  
 編成しています。

村では、地域づくりを推進す  
 るため補助率3／10～7／10の  
 「むらびりびり総合推進事業補助金」  
 を用意しています。人材育成事業  
 や地域連帯事業、施設整備事業、  
 環境改善事業、むらおこし実践活  
 動事業、自主防災組織支援事業な  
 ど、あらゆる活動を支援。通年の  
 活動費もこの補助金によって交付  
 しています。

書の成果品よりも、策定までのプロセ  
 スや計画づくりに関わった住民同士の  
 つながりを重視しています。  
 そして、54の集落を9地区に括つ  
 た地域コミュニティを、昭和50年代後  
 半以降平成10年までに組織化させ、「地  
 域力」の維持・向上を図る母体として  
 の役割を担っています。

地域コミュニティには、ひとつの  
 集落ではできないこと、行政では実施  
 できない事業等に取り組んでいくこと  
 が求められています。

さらに地域活性化の機運を高めよう  
 と村税の約1%にあたる700万円を  
 予算化し、補助率100%も認める特  
 別事業を平成22年度から実施。応募の  
 あつた事業提案は、公開審査によつて  
 その可否や補助額を決定するしくみで、  
 住民代表等がその審査にあたります。

地域のすべての問題について行政  
 が細かく対応するには限界があり、村  
 と地域コミュニティ・集落などの協  
 働という考え方を推進しています。

自立10年  
 キラリと光る村づくりを

昭和29年8月、関谷村と女川村が  
 合併、新しく関川村が誕生しました。  
 関谷・女川両村は、自然や歴史、産業、  
 経済、文化、民俗などあらゆる面にお  
 いて共通点をもち、一つとなって自治  
 体の強化を期そうとする合併は、極め  
 て自然の成り行きでした。

以来60年、豪雪、大地震、大洪水  
 など未曾有の大災害に襲われ甚大な被  
 害を被りましたが、村民のたゆみない  
 努力によって困難を克服。緑に囲まれ  
 た美しい郷土は立派に再生しました。  
 村の中央を東西に横断する国道  
 113号線を中心とした交通網も整備  
 され、村営温泉も加わって形成したえ  
 ちごせきかわ温泉郷などの観光資源も  
 豊富であり、山と川といで湯の里とし  
 て、発展しています。



▶村の中央を荒川が流れ日本海へと注ぐ

21世紀に入り、にわか  
 吹き荒れた国主導による市町  
 村合併の嵐は、全国の自治体  
 をその渦中に巻き込みました。  
 しかし、関川村はこの奔流に  
 流されることなく、自立の道  
 を歩むことにしました。国の  
 構造改革と地方分権の推進に  
 よつて、地方財政は極めて厳  
 しい状況に置かれています、  
 これをひとつのチャンスとと  
 らえ、小さくてもキラリと光  
 る村にするために、村民と行  
 政がともに手を携え、一丸と  
 なってむらびりに取り組ん  
 でいます。

関川村長 平田 大六

(平成25年4月15日付第2837号)



# 笠置ファン獲得へ！ 全国ご当地鍋フェスタの取り組み



かさぎちょう  
京都府 笠置町

## 笠置町の概要

京都府相楽郡笠置町は、府南端に位置し、大阪から約1

時間、奈良から約30分の距離にあり、都会から遊びに来られる方が多い町です。また、面積は23・57km<sup>2</sup>となっており、その8割を森林が占めています。人口は昭和22年のピーク時の約3、300人から減少が進み、現在は府下で最も少ない約1、550人となり、高齢化も進むなど、高齢率は41・4%（平成26年3月末と、府

下で2番目に高い割合となっています。

笠置町は観光が主な産業となっており、木津川の自然を活かしたカヌー、ボルダリング等のアウトドアスポーツ



▲虚空菩薩蔵磨崖仏：制作から千年以上の年月が経過しても形を残している貴重な磨崖仏です。



総務省の「過疎集落等自立再生対策事業」を活用した地域活性化事業「笠置町 探られる里プロジェクト」から生まれた冊子

<http://www.town.kasagi.lg.jp/machi/kanko/ikikatatyou.html>

や鎌倉倒幕を企図した後醍醐天皇の挙兵・籠城の舞台となり、紅葉の名所でもある笠置山、きじ鍋・ボタン鍋等の味覚等が観光資源となっており、さくら名所百選に選ばれている府立笠置山自然公園の桜も見所の一つです。また、笠置山頂の笠置寺は日本最古最大の弥勒磨崖仏があり、同じく、虚空蔵磨崖仏もあります。そして、笠置寺は東大寺のお水取りの起源とされており、

大寺の二月堂と関連がある正月堂があります。

笠置町はこれらの観光資源を活かし、さらなる発展のために新しい取組みやイベントを企画し、笠置町探られる里プロジェクトや全国ご当地鍋フェスタなど様々な事業に取り組んでいます。

### 笠置町探られる里プロジェクトで魅力を発信!!



▶活性化ワークショップの様子

「笠置町探られる里プロジェクト」は、総務省の「過疎集落等自立再生対策事業」を活用し、町内外から集まった参加者とstudio-L（代表：山崎亮氏）、京都府の協力を得て平成25年度から実施している取組みです。町内の地域資源を見直して新たな魅力を発見し、多くの人々にそれらの魅力を発信・紹介する冊子「笠置のイカした生き方帖」をまとめました。

平成26年度には、財団法人自治総合センターの「コミュニティ助成事業」の採択を受け、これまでに発掘した笠置町の魅力や地域資

源を基に、持続可能な地域づくりを進める新たな試みとして、ワークショップ及び社会実験「かさぎーカッサイー」を開催しました。10人程度のチームを4つ編成し、観光客などを対象に、笠置の食材を使ったバーベキューや風車づくり、手軽に参加できる写真コンテスト、地域住民による笠置にまつわるお話、飛鳥路地区の伝統文化しめ縄づくりを行うなど、笠置の「いいところ見つけ、いいところ磨き」を行いました。

全国ご当地鍋フェスタも含め、これまでの活動を通して得られた実績や人の繋がりを活用し、持続的なプラットフォームを構築し、息の長いまちづくりを進めていきます。

### 食文化のまちづくりを目指した全国ご当地鍋フェスタの取組み

笠置町では、「全国ご当地鍋フェスタ」を毎年開催しています。

平成23年に開催された第26回国民



◀活性化フィールドワークの様子

文化祭京都2011を契機に、平成22年にイベントとして、近畿地方からご当地鍋を招致したご当地鍋フェスタを開催しました。そして、翌年の国民文化祭開催年には、全国各地からご当地鍋自慢を招致した全国ご当地鍋フェスタを開催しました。

笠置町では、過疎化や高齢化が進む中、観光入込客の減少が続いている



ことから、地域活性化の一環として名物料理である「きじ鍋」に着目し、これをPRする場として全国ご当地鍋フェスタを開催し、食と地域の文化交流を図ることにしました。

きじ鍋が笠置町で提供されることになったきっかけは、町内にある旅館

の亭主が笠置にあつた食材を求めて辿り着いたのが「きじ肉」であったことに始まると言われています。

きじ肉はたんばく質が多い一方、脂肪が少なく、鶏肉よりもカロリーが少ない高級肉です。きじの味に惚れこんだ旅館の亭主が地道な努力とPR活動により旅館の名物料理となり、現在では、町内全ての旅館できじ鍋が提供されています。

平成22年のご当地鍋

フェスタでは、町内の旅館等で提供されているきじ鍋をイベントを通じて販売するのは、町として初めての試みでした。この試みは、いかに低価格で高級なきじ鍋を美味しく来場者に食していただけのかを商工会女性部等の方々が研修や試作を行い、どのようにPRや販売ができるかを検討してきた結果、現在、きじ鍋の販売は大変好評を得ることができています。

全国ご当地鍋フェスタ

では、きじ鍋を中心に全国からご当地鍋を集めて、来場者による投票でグランプリを決定するイベントをはじめ、全国のご当地グルメの出店販売やご当地キャラのステイジイベントやキッズイベントなど、多彩なイベントで来場者を盛り上げていきます。

国民文化祭を終え、笠置町では、今後も全国ご当地鍋フェスタを継続して実施していくため、平成24年7月に全国ご当地鍋フェスタ実行委員会を新たに立ち上げました。そして、平成26年12月7日（日）には、西は大分県から東は静岡県まで合計21団体の鍋が集まる、第5回全国ご当地鍋フェスタ「鍋ーグランプリ」を開催しました。

今後も笠置町の恒例イベントとして全国ご当地鍋フェスタを周知し、これをひとつのきっかけとして観光客の誘致を図り、地域住民一体となって盛り上げ、「きじ」を地域の大切なブランドとして、魅力ある地域づくりを目指す。



◀きじ鍋の販売を行う笠置町商工会女性部のみなさん

指しています。

このように、笠置町ではまちづくりや地域活性化に向けて、様々な事業を通じ、町の自然を最大限に活かして、観光振興及び地域の活性化に取り組んでいきたいと考えています。

笠置町長 松本 勇

（平成25年3月11日付第2832号）



▶全国ご当地鍋フェスタの様子

▼中国地方最高峰を誇る「大山」<sup>だいせん</sup>。伯耆町から見る山容は伯耆富士とも呼ばれる。



鳥取県 伯耆町

# 全国ご当地バーガーの祭典 「とっとりバーガー・フェスタ」の試み 〜食と交流を通じた地域活性化に向けて〜

## 地域資源を活かした 観光づくりを目指して

伯耆町は、平成17年1月1日、西伯郡岸本町と日野郡溝口町との2町が合併し、面積が149.45㎢、世帯数及び人口が世帯3,733世帯、人口12,612人、65歳以上の高齢者3,485人、高齢化率27.6%、14歳以下1,534人（平成17年4月住民基本台帳人口）で、少子高齢化と人口減少が顕著で、そのうち、65歳以上の独居老人世帯は、460世帯、12.3%となっています。

鳥取県西部に位置する中国地方最高峰である「大山」の山麓には、自然環境に恵まれ、スキーや登山など、多くの観光客が訪れる観光地として、また、大規模なリゾート開発によるゴルフ場・リゾートホテルをはじめ、各所に点在する別荘地やペンション村など、

多種多様な施設が点在しています。伯耆町内だけでも、ゴルフ場5箇所、リゾートホテル1棟、ペンション26軒、別荘地も2,500区画を超え、法人の保養所を含めた別荘は大小含めて800軒あまり立ち並んだリゾート観光地となっています。大山山麓には、年間100万人以上の観光客の入り込みがあり、特に、伯耆町内は、別荘のオーナー及びペンションの固定客など、来訪者のリピート性は高いです。

また、大山を背景に、雄大な土地が広がっており、澄んだ青空から注がれる太陽の光と、大山から流れ来る名水、そして、大山の火山灰の真つ黒な土壌「黒ぼく」から生産される白ねぎ、白菜などの農産物や黒ぼくの牧草で育った伯耆和牛の畜産物などの特産品は地域の自慢です。

大山山麓の自然豊かな黒ぼく地帯で生産される農産物は、おいしいと言われていますが、生産者の高齢化、後

伯耆町町章



継者不足で一定量以上のロットが確保できなくブランド化まで至っていない状況です。町営の特産品直売所等も運営していますが、生産者の高齢化によって出荷量が伸び悩んでおり、観光客やリピーターなどへの地域特産品の販路確保・拡大など多くの課題を抱えているのが現状です。

### なぜ、大山で「とっとりバーガーフェスタ」なのか？

地域食材を活用したご当地バーガーといえは、「佐世保バーガー」が

有名ですが、伯耆町でも町内事業者有志により、大山周辺の食材を活かしたご当地バーガーの開発が進められ、伯耆和牛のフィレステーキを挟んだ「大山バーガー」が平成21年に商品化され「大山・榎水高原」の観光施設で販売を開始しました。

「大山・榎水高原」は、冬のホワイトシーズンはスキー場、春から秋にかけてのグリーンシーズンは天空リフトがあり、大山（標高1,709m）の中腹900mの展望台からリフトで気軽に米子、境港、島根半島、日本海の雄大な景色を一望できる名所です。



▶大山榎水高原で開催されたバーガーフェスタVOL.1

バーガーは、この様な大山の自然環境の中で、豊富な地元食材を手軽にテイクアウトして楽しむことができ、来訪者に対して地域食材の消費拡大による地域振興を図るアイテムの一つであると言えます。

このご当地バーガーをさらに活用し、観光地「大山・榎水高原」への誘客と地域食材の消費拡大を図ることを目的に、平成21年度にとっとりバーガーフェスタ実行委員会を立ち上げ、「ご当地バーガー」が一堂に会する食のイベント「とっとりバー

ガーフェスタVOL.1」が大山榎水高原で計20店舗の出展により開催されました。

関西圏・山陽圏へのプロモーション活動や各種情報発信が功を奏し、2日間で県内外から約2万人の来場がありました。初回ということもあり、試行錯誤のうえ手作り感満点のイベント運営でしたので、会場のキャパシティ、交通渋滞、周辺施設との連携など多くの課題が残りました。

平成22年度の「とっとりバーガーフェスタVOL.2」は、規模を拡大して伯耆町「大山・榎水高原」の他に、



大山町「大山寺」と江府町「奥大山」を加えた3会場で開催されました。

「大山」のすそ野に位置し隣接するこの3町は、「大山環状道路」と呼ばれる道路で繋がれ、四季を通じて観光客が往来する観光地を形成しています。また、見る位置や時期によって様々な態様を呈する「大山」は、この3町にとって最大の観光資源であり、伯耆町・大山町・江府町の3町で開催することにより、「大山」のPR効果を高め、「とっとりバーガーフェスタ」を通じて県外からの観光客の誘客促進を狙いとしたものであります。

▲「とっとりバーガーフェスタVol.1」ポスター

この「とっとりバーガーフェスタVOL.2」では、県外32・県内28の合計60店舗が出展し、2日間で約6万5千人の来場がありました。

前夜祭として「バーガーサミット」が開催され、出展者間の交流と懇親を図り、出展者間の連携・意見交換・情報発信を行う組織として「全国ご当地バーガー連絡協議会」が立ち上げられました。



▶「大山バーガー」県産黒毛和牛の分厚いステーキを贅沢に使用

この組合せによって無限の可能性があり、今後も、全国各地でご当地食材を使った「ご当地バーガー」の開発・商品化が進み、この「全国ご当地バーガー連絡協議会」において情報を共有し、各出展者の技術力向上を図り、「ご当地バーガー」を通じて全国各地において地域振興に繋がることを期待しています。

平成23年度に開催された「とっとりバーガーフェスタVOL.3」では、一般の来場者と特別審査員の投票により「全国バーガーグランプリ」を決定することになり、県内20店舗のバーガーで鳥取県予選会が別日程で開催され、県外28・県内10の合計38店舗が出展し、開催されました。

この年のバーガーフェスタは、9月の台風12号により大山には各所に災害の爪痕が残る中の開催でした。奥大山会場地へのアクセス道路が土砂崩れにより寸断されたため、3会場開催を見送り、出展者38店舗を大山寺1会場に集めてバーガーグランプリが開催され、実行委員会スタッフの苦勞のおかげで、大過なく終了しました。

## 終わりに

過去3年間で、イベントの規模や内容、 프로모ーション活動・情報発信の手法等により、イベントへの誘客・集客効果が高くなることは実証されましたが、イベントを運営する上で、会場、駐車場、アクセス道路等インフラの規模に見合ったイベント規模が望ましく、このバランスを保つことが重要であることを実感させられました。

また、出展者、来場者、周辺の観光事業者それぞれが満足したイベントとなるためには、課題や改善すべき点は多々あり、まだまだ地域に根付いたものに完成されていないのが現状です。

さらには、イベントが大きくなると、イベントの開催が目的となる嫌いがありますので、あくまでもイベントは集客・誘客と地域PRの手段として、本来の目的「ご当地バーガー」を通じて観光振興と地域食材の消費拡大による地域振興を図って行きたいものです。

平成24年度、「とっとりバーガーフェスタ2012」は、4か所で連携して次の日程で開催しました。是非、皆様にも参加いただき、鳥取と全国のご当地の味をバーガーで楽しんでいただければ幸いです。

（平成24年6月11日付第28003号）

伯耆町 商工観光課

ただけは幸いです。

### 全国ご当地バーガーグランプリ（本選）

日時：平成24年10月7日（日）

8日（月・祝）

10：00～16：00

会場：大山寺 博労座駐車場

（鳥取県大山町）

### ◇全国ご当地バーガーグランプリ

鳥取県予選会

日時：平成24年8月25日（土）

16：00～20：00

会場：とっとり花回廊ゲート前特

設会場（鳥取県南部町）

### ◇大山・榎水高原天空オリエンテーリング

日時：平成24年7月7日（土）

11：00～

会場：大山・榎水高原

（鳥取県伯耆町）

### ◇奥大山オータム・バーガー・フェスタ

日時：平成24年11月3日（土・祝）

10：00～15：00

会場：奥大山スキー場

（鳥取県江府町）

「とっとりバーガーフェスタ」ホームページ <http://www.tottori-bf.jp/>



あ き お お た ち ょ う  
広島県 安芸太田町

# ヘルスツーリズムの推進と地域振興 〜「ひと・森・癒し安芸太田」森林セラピーのまち〜

## 【安芸太田町の概要】

本町は、広島県の北西部に位置し、国の特別名勝である三段峡、恐羅漢山や深入山をはじめとした美しい山容を誇る西中国山地国定公園を有する、豊かな自然環境に恵まれた小さな町です。町の南側は広島市に接しており、広島市中心部から直線距離にして約30km、中国自動車道・広島自動車道・広島高速4号線（広島西風新都道路）の利用により、自動車の移動で約1時間の圏内にあります。このため、中山間地域にありながらも広島都市圏の観光・レクリエーションエリアとして、都市住民との交流が多い地域です。

## 【町の経緯と歴史】

平成16年10月1日、私たちの新しい町「安芸太田町」が誕生しました。安芸太田町の「安芸」は「安芸の国」

を意味します。「安芸」の名称は日本書紀（720年）の中で「安藝」の国名が初めて登場し、また風土記（出雲風土記と推察される733年）には「四方の貢物、飽き足れり、因て飽國（あきのくに）と名けらる」と記されているようです。一方、「太田」は、本町を源流域とし、広島市を経て瀬戸内海に注ぐ太田川から名を取っています。

## 未来戦略会議の立上げ

安芸太田町は、平成16年10月の合併以降、地域活性化に取り組んできましたが、少子高齢化による人口減少は歯止めがからず、毎年100人以上の人口減少が続ぎ、平成24年4月には合併時に約9,000人であった人口が7,300人余となり、町の存続の危機ともいえる状況となっています。

そのため、町では、平成22年度に町の未来戦略を構築するため、官民協働による「未来戦略会議」を立ち上げ

ご当地キャラクター



「もりみん」

ました。

具体的には、町内にある地域資源【人材・観光資源・農林水産物】を生かして、「楽しく健康的に生活できる地域社会の構築」と「地域産業の再生・活性化」を目指したプロジェクトを検討・実施していくものとし、町内の個人・関係団体の実務者で組織した3部会（集落再生・町民活力向上部会、観光再生・情報発信力強化部会、産業再生・新産業創生部会）において、数回にわたる活発な議論が重ねられ、平成23年2月、早急に取り組むべきまちづくり事業について提言を受けました。

その結果、「健康・癒し」をキーワードとした安芸太田町ブランドの確立を目指すこととしました。

平成23年4月、観光再生・情報発信の体制強化策として町の玄関口、中国自動車道戸河内IC出入口にある道の駅「来夢とごうち」に、町観光協会と併設して商工観光課を新設することにも、町観光協会の事務局長を全国公募により採用し、地域ブランドや観光情報・定住情報などの効果的なプロモーションを実施する仕組みづくりや人材の育成に取り組みました。

平成23年7月には、官民協働のヘルスツーリズム推進協議会を発足し、「森林セラピー」、「田舎民泊体験旅行」による誘客と交流の仕組みづくりを新たに開始しました。農林産物の直売と6次産品化を図る新たなビジネスチャンスは、町民に収入と生きがいを提供し、訪れる人も住む人も活き活き元気で生活できる町づくりの実現に繋がります。これにより、町の魅力が向上し、町のファンが増加で入込み観光客・観光消費額が向上する環境と経済の好循環を目指すとてしています。

### 観光振興の主要な取組み （ヘルスツーリズムを中心として）

#### ① 森林セラピーの取組み

##### ○広島県初の森林セラピー基地認定

森林セラピーは、森の中に身を置き、歩行や森林内レクリエーションなどの方法によって、心身の健康維持・増進、疾病の予防を目指すもので、いわば「一歩進んだ森林浴」です。それを支える森林セラピー基地は、森の香りや空気の清浄さ、美しい森の色彩や景観などが人の生理に及ぼす効果について医学実験による検証を終え、お墨付きを得ている癒しの森です。

安芸太田町は平成24年3月24日、広島県初の森林セラピー基地に認定されました。

##### ○森林セラピー®基地グランドオープン

人は、日々の都会のストレス社会に疲れたとき、森の中に身を置くことで、心身ともにリフレッシュし、再び明日を生きる糧を得ることが出来ます。

里山の案内人である「あきおおた里山ガイド」が、4つのセラピーロードと多彩なセラピーメニューを用意して、来訪者の皆様を癒しの森に誘います。

平成25年5月25日と26日には、待

望のグランドオープンを迎えました。

現在、プログラムのさらなる構築や、里山ガイドの研修などを重ね事業全体の魅力アップに取り組んでいます。

##### ○4つのセラピーロードとモニターツアーの開催

「森林セラピーロード」として「恐羅漢山」「深入山」「三段峡」「龍頭峡」の4コースが認定を受けています。

平成24年9月から11月に開催したモニターツアーでは、森林セラピー体験のほか、町の地形や文化・歴史を活かした森林ヨガや陶芸体験、ハーブ石鹸づくりなどの体験メニューを提供してきました。

ツアー終了後に実施したアンケート結果を検証し、プログラムをブラッシュアップしていきます。

##### ○あきおおた里山ガイドの育成

里山の案内人である「あきおおた里山ガイド」は現在第1期、第2期が終了し46名が修了しています。今後里山ガイド100名の育成を目指しています。

##### ○イメージ戦略

森林セラピーをアピールするためプロモーションビデオを作成し、ホームページで紹介しています。併せて、キャッチ「ピーとごち」を

### 安芸太田町森林セラピー基地 グランドオープン 平成25年5月25日（土）～26日（日）



安芸太田町森林セラピー  
イメージキャラクター：もりみん

たに開始しました。農林産物の直売と6次産品化を図る新たなビジネスチャンスは、町民に収入と生きがいを提供し、訪れる人も住む人も活き活き元気で生活できる町づくりの実現に繋がります。これにより、町の魅力が向上し、町のファンが増加で入込み観光客・観光消費額が向上する環境と経済の好循環を目指すとてしています。



▲教育旅行で好評のラフティング体験

森・癒し「安芸太田」を決定し、「森の妖精」といわれる「ヤマネ」をモチーフにしたイメージキャラクター「もりみん」を紹介しています。

さらに、シンガポールライターの丸本莉子さんを町のイメージソングに認定し、同じくイメージソングに認定した彼女の歌う「ココロ予報」は、町の情景を歌った「空」とカップリングされ、平成24年12月5日にCDミニアルバムがリリースされました。

## ② 体験型観光への取組み

### ○ 修学旅行（教育旅行）誘致

平成24年度広島県が民泊受入れに関するガイドラインを整備したこ

とから、準備をスタートさせ平成24年2月1日、官民合同の安芸太田町田舎体験推進協議会を立ち上げ、本格的に民泊引受け家庭募集及び教育旅行誘致活動を開始しました。

当町民泊事業の最大の特徴は、スキームづくりこそ町において主導しましたが、運営は観光協会をはじめとする「町民」サイドが旧町村の枠を越えて連携し、主体的に取り組んでいる点にあります。と言いつのも、民泊受入れを最終目的とするのではなく、民泊事業を活用して高齢者の活性化や地域の再生に繋げたいという共通目的が、町と民泊に関わる町民の間で共有されているからです。

その結果、民泊引受け家庭で組成する民泊部会では、毎回非常に熱心な話し合いがされ、既に2度の視察、2度の試験受入れ、7度の研修会を実施しています。

一方、教育旅行誘致も順調で平成25年に2校、本格受け入れ元年となる平成26年度には5校の来町が決定しています。

小規模自治体単体としては極めて珍しいことですが、「安芸太田町人情田舎体験」として町民手づくりの民泊プロモーションビデオも完成

させています。

都市部の学生の教育に資し、引受け家庭や地域の活性化を促進し、町への経済波及効果が非常に大きい民泊事業は、中山間地の過疎高齢社会においては、数少ない三方良しの事業であると考え、強力に推進しています。

## ③ 欧米富裕層の観光誘致へ

観光施策の効率化を考えた場合、教育旅行素材や人材をそのまま活用できる点においてメリットがあると判断し、町観光協会が中心となり欧米富裕層をターゲットとした観光誘致を開始しました。

特に、周辺市町が中国・韓国に注力していることから、広域的な補完戦略としても欧米系かつ富裕層に向けた取組みが有効であると考えています。手つかずの豊かな自然や素朴な文化に加え、「人情味溢れる」本町町民の心ばえを前面に押し出した「交流型体験」視点こそ、他市町との差別化が出来ます。加えて、欧米系訪問者数が非常に多い広島市と隣接している点においても有利な状況にあります。

平成24年、町単独で1回、広島県との連携で3回、欧米系旅行会社やメディア招へいを実施し、特に、同年9

月実施した神楽ツアーは、単なる見学型では無く、地元神楽団との「交流」そして「体験」型にした結果、好評を博しました。

また、平成25年1月には、西日本最南端ともいえる豪雪地帯である本町のマイナスイメージを逆手に取った雪かきイベント等による欧米人誘致もおこなわれました。このように外国人誘致の組織を立上げ、一層の取組み強化を図っていく予定です。

## 元気なまちづくりへの挑戦

### ◆ 町民との協働のまちづくり

本町をはじめとする中山間地域においては、過疎・高齢化が猛スピードで進み、小規模集落においては自治機能の維持さえ困難となり、すでに一部集落では事実上の集落崩壊の状況を迎えつつあります。こうした地域の生き残りは、まさに町の生き残りでもあるとの危機感から、本町においては、平成23年2月の未来戦略会議の提言を受け、集落再生への取組みに着手しました。

具体的には、合併前の旧町村ごとに専従の地域担当職員を2名ずつ配置し、48自治振興会の相談相手となると

ともに、地域住民自らその地域の5年後、10年後を見据えた地域づくり計画：地域マスタープランの策定を呼びかけたところ、平成23年度、24年度で3分の1の地域から手が上がり、町と地域の協働による取組みの結果、現在6地域で策定が完了し、残る地域でも熱心な話し合いが重ねられています。

策定した地域マスタープランの実  
 画計画支援のため、『地域マスター  
 プラン推進事業補助金・地域マスター  
 プラントライアル事業補助金制度』を創  
 設して財政支援を行うとともに、平成  
 24年度からは地域おこし協力隊員4人  
 を地域に派遣して、地域活性化のため  
 の人的支援を図るとともに、周辺地域  
 の自治機能維持のための『集落支援員  
 派遣事業』にも取り組むこととし、併  
 せて地域マスタープラン策定・実施計  
 画支援のために、担当課である地域づ  
 くり課職員以外の一般行政職員全員に  
 よる集落支援活動「地域サポーター制  
 度」を平成25年度からスタートさせま  
 した。

また、協働のまちづくりは、町民  
 と行政が、その理念や方向性を共有し  
 てはじめて実りあるものとなることか  
 ら、平成24年度1年をかけて町職員が  
 作成した「協働のまちづくり基本方針  
 たたき台」をベースに、平成25年度は

学識経験者や自治組織の代表者、住民  
 代表等13人からなる協働のまちづくり  
 基本方針策定委員会で議論を重ねられ  
 このほど『みんなであつくり』を副題と  
 して、安芸太田町独自の「協働のまち  
 づくり基本方針」が完成しました。

### ◆協働による安芸太田町が めざす将来像について

自ら進んで地域の課題や問題を解  
 決していく意欲や能力が育つことで、  
 協働の担い手である住民、自治振興会、  
 各種団体、事業者、行政のそれぞれの  
 特性や能力を活かした取組みを行うこ  
 とで、みんなが生き生きと安心して暮  
 らせる安芸太田町を目指しています。

#### ①ウルトラマラソンを通じた 元気な地域づくり

毎年9月中旬に開催される、距  
 離88km、高低差854mを制限時間  
 13時間で走り切る「安芸太田しわい  
 マラソン」は、ゴール直前に、アー  
 チ式としては国内で2番目の高さ  
 156mを誇る温井ダムの481  
 (しわい)段を駆け上がるという過  
 酷なウルトラマラソンで、平成24年  
 に3回目を迎えました。

「しわい」とはこの地方の方言  
 で「過酷、しんどい」などを意味し



▲夜も明け切らぬうちから過酷なレースの  
スタート

ます。

人口7,300人余りの小さなこ  
 の町で開催されるこの大会には、今  
 年も南は沖縄から北は北海道まで全  
 国各地から400人余り、更には韓  
 国からの参加もあり、国際色も出て  
 きました。

特徴的なのは、大会を運営する  
 実行委員会のメンバーのほとんどが、  
 個人のボランティアということ。町  
 も大会当日は大会車両として公用車  
 と運転する職員を派遣しますが、関  
 与もそこまで裏方に徹しています。  
 それを補完しているのが、5kmごと  
 に設置されたエイドステーション  
 (無料休憩所)の運営や選手誘導員  
 に携わるコース沿線・沿線外の自治



▲雄大な自然のもとで気持ち良くウォーキング

振興会や町内事業所、消防団員の皆  
 さんです。

コース沿線から寄せられる選手  
 の名前を呼んでの声援やエイドステ  
 ーションでの地域のおもてなしは、  
 選手の皆さんに大きな感動と勇気を  
 与え、すでに多くの固定ファンをつ  
 かみつつあり、地域の皆さんも毎年  
 参加する選手との交流を楽しみに、  
 開催日を心待ちにするなど、このウル  
 トラ大会が元気なまちづくりにつな  
 がっています。

インターネットのマラソン専門  
 サイトの評価では、平成24年9月に  
 全国で開催された数多いマラソン大  
 会(ハーフ・フル・ウルトラマラソ  
 ン)の中で、参加選手による総合評





▲話題を集めているAKOポスター

実行委員会の  
 ました。  
 がたくさん聞かれ  
 しい」などの感想  
 もてなしが素晴ら  
 ルスメイト）のお  
 会、ぜんざい（ヘ  
 部）、漬物（女性  
 飴（商工会女性  
 気づけられた「梅  
 ッフの声かけに元  
 見ておいしい空気を吸えた」「スタ  
 846人の参加となりました。  
 参加者の感想は、「自然の景色を

「また来てみたい」と思っていた  
 けるような『心からのおもてなし』  
 に取り組んでみようと、町女性職員  
 全員をメンバーとした『安芸太田町  
 AKO』（AKO=あが、こがあ  
 ーという趣旨）が結成されました。  
 このAKOでは、町を元気にする  
 活動第一弾として、広島県観光プロ  
 モーション「おいしい!! 広島県」秋の  
 キャンペーンとして11月末まで展開さ

なしに取り組んでくれています。  
 このように、今本町は、新たなま  
 ちづくり、地域おこしの取組みが産声  
 を上げつつあります。こうした取組み  
 を活かしながら、今後ますます厳しい  
 状況が予想される中山間地域の小さな  
 町にあっても、心の温まるような元氣  
 を発信し続けたいと思います。  
 安芸太田町長 小坂 眞治  
 （平成25年1月14日付第28825号）

価第1位を獲得しました。全国に誇  
 るべき大会になりつつあることを大  
 変うれしく思います。  
 ②日本のウォーキング大会を  
 目指して！  
 本町では、平成14年から、「生涯  
 現役、死ぬときやばつくり、歩いて  
 棺桶まで」をスローガンにウォーキ  
 ングを普及しています。  
 健診結果でメタボリックシンド  
 ローム「内臓脂肪型肥満」に該当す  
 る町民を対象に有酸素運動（ウォー  
 キング）を指導し、運動習慣者にな  
 ってもらい「歩いて棺桶まで」を目  
 指しています。  
 また長期総合計画における健康  
 促進プロジェクトでは、全国規模の  
 ウォーキング大会の開催を掲げ、平  
 成19年度から毎年開催しています。

第6回目を迎えた平成24年の大会  
 は、町内16の各種団体が結成された  
 実行委員会方式により、10月6日  
 （土）、10月7日（日）の2日間開催し  
 ました。  
 メインとなる2日目の10月7日  
 は、西中国山地国定公園の草原状の  
 美しい山容を誇る深入山周辺に、30  
 km・20km・10km・ミニトレッキング  
 コースを設定し、平成24年は新たに  
 高齢の参加者や小さな子どもさんを  
 連れた家族のための2kmコースを設  
 けました。  
 当初参加者は1,000人を見込  
 んでいましたが、他のイベントも重  
 なったこともあり、最終的には  
 846人の参加となりました。  
 参加者の感想は、「自然の景色を

反省会では「団体が自ら関わり汗を  
 流すことは、ともにウォーキング大  
 会を支えている実感がある。これか  
 らも手づくりの大会を盛り上げてい  
 こつ」など多くの意見が出されまし  
 た。  
 これからも、心を込めた手づく  
 りの大会を合言葉に、日本のウォ  
 ーキング大会を目指し、たゆまぬ努  
 力を重ねていきたいと思えます。  
 ③町女性職員らによる手づくりのま  
 ちおこし ～こ女？たちの挑戦～  
 平成24年10月下旬、町の活性化  
 を考える町女性職員6人による特命  
 チーム「安芸太田町魅力UP↑女性  
 会議」を立ち上げたところ、わずか  
 その10日後には、小さな町でも、元  
 氣よく、楽しく、町を訪れる方々に  
 「また来てみたい」と思っていた  
 けるような『心からのおもてなし』  
 に取り組んでみようと、町女性職員  
 全員をメンバーとした『安芸太田町  
 AKO』（AKO=あが、こがあ  
 ーという趣旨）が結成されました。

れた県庁男性職員による『全力歓迎  
 課！』の理念と精神に倣い、広島県の  
 公認を得て町内10か所地元町民の皆  
 さんと共演する「おいしい！のお〜。  
 安芸太田町」観光PR動画とポスター  
 を、町観光協会や町内若手事業者等と  
 協力して手づくりで作成しました。ポ  
 スターは、町内の各公共施設に掲示し  
 てPRしているほか、PR動画につい  
 てはインターネット上にアップし、  
 ホームページからも見られるようにし  
 たところ、各メディアからも大きな注  
 目を浴びテレビや新聞等で大きく取り  
 上げられました。  
 町民の皆さんからも、楽しそうな  
 取組みで元気があっていいと評価いた  
 だいています。AKOでは、結成以来、  
 町内で開催されたイベントなどにボラ  
 ンティアで出演し、町のPRとおもて  
 なしに取り組んでくれています。

▼美しい鬼木棚田の風景



は さ み ち ょ う  
長崎県 波佐見町

産 業 体 験 型 観 光 に よ る ま ち づ づ け  
く 来 な っ せ や き も の と 自 然 あ ふ れ る 波 佐 見 へ へ

はじめに

長崎県波佐見町は、長崎県の中央北部に位置し、北と東を佐賀県に接する町です。東西10・5 km、南北7 km、周囲33 kmで総面積55・97 km<sup>2</sup>（山林約63%）です。人口15,237人、世帯数5,042世帯（H24・11月末）、高齢化率約26%で、長崎県で唯一海に面していない町です。

波佐見町は、400年の伝統をもつ全国屈指の「やきものの町」として栄えてまいりました。全国の一般家庭で使われている日用食器の約13%は波佐見町で生産されています。

農業の近代化にも力をいれ、水田面積650 haのうち約83%は区画整理済みで大型農機による作業とライスセンターを結んだ米麦大豆一貫作業体制が確立されています。

これによって生じる農家の余剰労働力は、地場産業である陶磁器関連産業への就労と結びつき、農工一体と

なつて発展を続けてまいりました。

また、平成22年には長崎キャノン（株）が進出し400年の歴史を誇る陶磁器産業、農業や温泉などとデジタルテクノが融合した共生のまちづくりを目指しています。

多彩なイベント

★年間とぎれることがない

各地域イベント

この陶磁器生産の町の最大イベントは「ゴールデンウィーク期間中に行われる「波佐見陶器まつり」です。約130社の窯元と商社が軒を並べ、多彩なイベントを開催し、毎年来場者が増え続け、期間中30万人を越す人出でにぎわいを見せます。今年で57回を数え、波佐見町が誇る看板イベントとして定着しています。

一昔前までは町外から集客する観光的なイベントとしては、この「陶器まつり」だけでしたが、20数年前から状況が変わってきました。



歴史とロマンが詰まった「コンプラ瓶」

▶波佐見陶器まつりの様子



そのきっかけは、山あいであり、陶郷の里として知られる中尾山にある窯元の若手メンバーの情熱でした。4月に開催されている「桜陶祭」は、当初は地域内の窯元の交流の場として始められましたが、年々趣向が凝らされ、現在では各窯元の工場を展示場として開放するなど、町内外のお客様と直接交流がもてるイベントとなり、今では2日間で約2万人のお客様が足を運ぶ大イベントとなりました。

▶ユニークなかかしの展示



公開するなど、やきものの販売はもとより、作り手と買い手の心の交流が持たれています。

このように地域から自主的に沸きあがってくるイベントが、町内各地で生まれてきました。

その一つである「鬼木棚田まつり」は、平成11年に棚田100選に選ばれたことをきっかけに始まり、毎年9月23日に開催され、こちらも年々趣向が凝らされ、現在では、地元鬼木地区全戸から出品されるその年の世情を反映したユニークな案山子たちが立ち並び、約1ヶ月間で、2万人近くの観光客が訪れる大イベントとなっています。

また、駅のない波佐見町で毎年人気ランキングの上位にランクされるJRウォーキングが開催されますが、そのお目当ても鬼木のユニークな案山子たちです。毎年、鬼木地区には、期間中町内外からユニークな案山子を一見しようと、多くの観光客が訪れます。

このように、桜陶祭や鬼木の棚田まつりは、県内はもとより、九州各地の方から楽しみにされているイベントに育ちました。

これらの地区の成功をきっかけに、その他の地区でも地域の特色を活かした「川内ほたる祭り」「ザー酒塾」「村



▶多くのやきもののファンで賑わう「桜陶祭」の様子



▶人気の「陶箱弁当」

木畑ノ原まつり」「笑楽井石祭り」「皿山器替えまつり」「峠の里まつり」などのイベントが、地区の有志によって立ち上げられています。このような取り組みが波佐見町の元気の源だと思えます。

## 「来なっせ100万人」

※「来なっせ」とは波佐見弁であり、「どこぞおいでください」の意味です。

陶磁器産業の落ち込みで町内の産業に活気がない中であって、「これらの動きを町全域に広げることができないか」、「町外からのたくさんの人に来



▲「笑楽井石」手作りピザ窯を使っのピザ作り



▲やきものと農業を組み合わせた陶農体験「ザ！酒塾」

このようにして始まった波佐見町のツーリズム事業は、試行錯誤しながら、現在では年間イベント「つんの」で波佐見 陶農の里 とつのう」として、やきもの体験、農業体験、また2つを組み合わせた陶農体験メニューを開発し、観光客の受入を行うまでに成長しました。

やきもの体験では、「ロクロ・絵付け体験」などの本格的なものから、「波佐見焼ストラップづくり体験」「やきもの貼り絵付け体験」など、お手軽に楽しめる体験まで色々な体験メニューが揃っています。

農業体験では「米作り体験」「梅漬け体験」「椎茸収穫体験」など、波佐見の豊かな自然を思う存分満喫できます。

また、やきものの煙突レンガのコースややきものの窯が変身したピザ窯で、親子や友人と一緒にピザ焼きができる「石窯ピザ焼体験」など「おいしい体験」も人気メニューです。

その他にも、波佐見町ならではの体験が、やきものと農業を組み合わせられた陶農体験です。その中で1番人気は、前述しました「ザ！酒塾」です。地域のイベントから生まれた体験メニューで、酒米の田植え・稲刈り体験をし、その米でできた酒を自分の手で作ったオリジナルの器でいただくという、なんと贅沢な体験です！ 1回目目が田植えと手びねりによる酒器づくり、2回目目が稲刈りと酒器の絵付け、3回目目がラベルづくりと新酒試飲会となります。1回申し込むと波佐見町に3回来て頂けるという仕組みになっています。

この他、蕎麦の栽培から蕎麦打ちまでの体験に、蕎麦ちよこ作りを加えた「ザ・そば塾」、大豆の栽培から味噌づくりまでの体験に、味噌甕（かめ）づくりを加えた「みそづくり塾」など、波佐見ならではの窯業と農業を組み合わせた「陶農体験」メニューを多くのお客様が満喫されています。

ツーリズム事業が盛り上がり始めた平成22年11月には、東京財団の後援を頂き、「第六回日本再発見塾in長崎県波佐見町」を開催することができました。

全国から120名の参加があり、「手づくりしてみらね 幸せに手の届くばい」と題して、「語る・探す・食す」をコンセプトに、やきものと農業の町・波佐見町でいろんな見学、体験を通して、外から見た波佐見町の他のまちにはない魅力的なところを発表していただき、地元の人が普段は感じない波佐見の良さをあらためて再発見

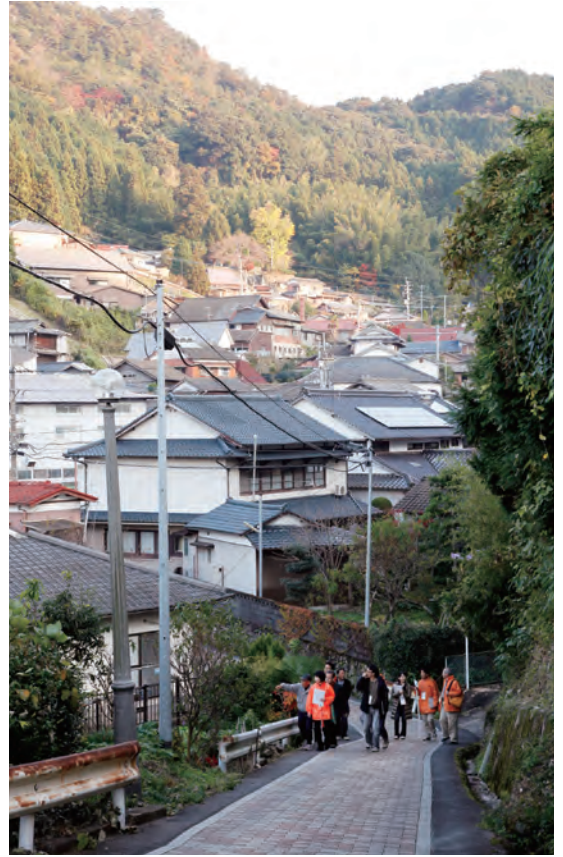
## 日本再発見塾



▲やきものの焼成窯を再利用したピザ焼体験

## 体験型観光花ざかり

てもらうって、町内を元気にできないか」とこのような考えが起きてきました。このころ、これまで観光産業とはあまり縁がなかった波佐見町において、陶郷中尾山や鬼木棚田、温泉、史跡等、もともと地元にある資源を活用して、観光交流人口を増やし地域が元気になるために「来なっせ100万人」というスローガンを掲げ観光に力を入れるようにしました。これらを受けてNPOグリーンクラフトツーリズム研究会などの団体や町、観光協会等一体となって、グリーンツーリズムとクラフトツーリズムを組み合わせたツーリズム事業が始まりました。



▲日本再発見塾

するという、大変有意義で意味のある塾を開催することができました。その後、地元主催で「波佐見再発見塾」が毎年開催され地域を再発見し、地域活性化に一役買っています。

### 待望の「はさみ温泉」復活！

地域の盛り上がりは、ついに温泉も復活させました。以前あった温泉センターが閉鎖され波佐見町から良質な温泉が途絶えていました。

そのような中、温泉を何とか復活させようと町が新しい泉源を掘削し、地元有志の皆さんが立ち上がり、はさみ温泉「湯治楼」（ゆじろう）が波佐見の癒しスポットとして平成22年4

月にオープンしました。とろみがあり、美肌がいいと評判のお湯で、3つの内風呂は全て源泉掛け流しです。さらに、このお湯に炭酸を封じ込め、全国的にも珍しい高濃度炭酸泉もあります。

緑の山々に囲まれて、川のせせらぎを聞きながら、ゆったりと過ごすひとときをアットホームなおもてなしで体感でき、地元はもちろんです。県内外からもたくさんのお客様が心と体の癒しを求めて来て頂いています。

併設の「陶農レストラン清旬の郷」では、地元の食材にこだわり、旬のおいしい素材を使った身体にやさしい料理が波佐見焼の器でいただけることあって、温泉同様人気のスポットとなっています。

### これからのまちづくり

このように地域の活力が産んだイベントも、最初は数名の参加からのスタートでした。

それでも地域の人たちは口を揃えて言います。「最初は数名でもいいんじゃないか」、「その最初の第一歩を踏み出すことが大切なんだ」、「踏み出さないことには何も始まらない」このような気持ちが地域を動かし、町民も巻き込み、イベントが定着化し、来訪者にも喜んでもらえるようになると思います。

そこまで来ると地域の自信となり、最終的には地元皆さんが元気になって

もらえると思っています。

これからも、地区の特徴を取り入れたイベントを企画し、地区の方と一緒にあって波佐見町を元気にし、PRできれば良いと思います。目標は、町内22自治会で、それぞれの地域の特色を取り入れたイベントを年間1回行ってもらい地域活力を観光に取り入れていければ面白いと思います。

地域が元気で、訪れるお客様と地域が交流を持ち、お互いが体験観光等で楽しめる観光と産業がうまく融合できる、訪れる楽しみがあるまちづくりを進めていきたいと考えています。

波佐見町長 一瀬 政太

（平成25年1月7日付第28024号）



▶農家レストラン清旬の郷



▶美肌の湯「湯治楼」



宮崎県 くにとみちょう  
**国富町**

# 「真冬のたなばた」及び「光り輝くまちづくり」事業

## 国富町21世紀まちづくりフォーラム まちづくりの希望の光として輝く冬のイルミネーションの取り組み

### 国富町の概要

宮崎県のほぼ中央で、宮崎市の北西に隣接する国富町は、豊かな緑と全国有数のきれいな水質である一級河川・本庄川などの清らかな水に恵まれた田園都市です。東西22km、南北18・8kmで面積は130・71km<sup>2</sup>、そのうち北西部の約3割が国有林になっています。北西から南東に向かって本庄、飯盛、高田原、六野原などの台地が展開し、その中の本庄台地の上に町の中心市街地が形成されています。

本町は昭和31年9月に本庄町と八代村が合併し、「国富町」として発足。次いで昭和32年3月に木脇村と合併し、当時人口2万4千人を超える県下最大の町として誕生しました。しかし、その人口も昭和45年には1万9千人まで減少し、その後持ち直して現在は2万9000人（平成26年現在）となっ

ています。現在も全国的な傾向と同じく、人口微減が続いています。出生率の減少、若い世代の町外への流出を食い止めるためにも、元気で魅力的なまちづくりを継続していくことが必要だと考えます。

### 21世紀まちづくりフォーラムの結成

「21世紀まちづくりフォーラム」(以下「フォーラム」)は、そういう元気で魅力的なまちづくりの団体として、平成5年8月11日に結成されました。まちづくりをテーマに、職場も年齢も異なる町民が参加し、誇りを持てる夢のあるまちづくりを目指そうと町内の各種イベント等へ参加し、さらに研究することにより、子どもから高齢者まで老若男女を問わず参加し楽しめる「元気のあるまちづくり」「夢のあるまちづくり」「美しいまちづくり」を

ご当地キャラクター



「しらたまちゃん」と「しらたまん」

指しています。また、先進地視察等により、メンバーの自己研鑽・地域交流にも努めてきました。そんな活動の中でも中心となるのが、フォーラムのメンバーが主体となって開催している「真冬のたなばた」事業。役場庁舎周

辺に11月下旬から1月中旬まで、毎年約10万球のイルミネーションを設置し、12月にはイベントも開催する手作りの事業です。さらに、この事業と連動するかたちで平成12年から町の補助事業として町商工会による「光り輝くまち

づくり」事業（宮崎市一國富町一綾町をつなぐ県道26号線宮崎須木線沿道街路樹にイルミネーションを約20万球設置）が開始されました。この二つの事業の相乗効果により、イルミネー

ションが輝く街の光景は、すっかり本町の冬の風物詩となっています。

### 真冬のたなばた実行委員会

真冬のたなばた実行委員会は、フォーラムが主体となって、町青年団、町婦人会、町商工会青年部、町内の高校生ボランティア、その他のまちづくり団体など、多彩なメンバーで構成され、例年イルミネーション設置とその管理・撤去まで、イベント運営のすべての作業を業者に委託せず、自ら行っ

てきました。クリスマス時期には、太鼓やダンスチームの出演によるステージイベントと真冬の花火大会を開催し、町内の家庭・企業を対象にしたイルミネーションコンテストの表彰も行います。見る人の心を暖かな光で癒すことをコンセプトとし、派手ではないが心に残るレイアウトを意識して設営しています。また、当日のフィナーレに行われる花火大会では、花火とイルミネーションの光の共演を楽しめ、イベントのクライマックスとして一見の価値があります。

### 真冬に心を温める光景

このイルミネーション設営とイベント運営は様々な団体が共同で作業することにより、お互いの協力・連携を高めることに役立っています。同じ町内のまちづくり団体同士が協力し合い、新たなイベントを生み出す効果もあり、イルミネーションコンテストは町内全域にイルミネーションを波及させてきました。また、イルミネーションイベントを町の風物詩として定着させた効果も高く、毎年、メディア等からの問い合わせが多くあり、遠くは首都圏や近畿圏などからも問い合わせ・写真提



▶ イベントでは花火、ダンスショー、太鼓演奏などが行われる。



▶ イベント開催に向けて作業を行う実行委員会メンバー。

供の依頼があります。事業の効果として、数値的にはつきりとしたものはありませんが、来場するカップルや友人のグループ、親や祖父母に連れられて「光のトンネル」ではしゃぐ子供連の様子には心温まるものがあり、イルミネーションの光のみならず、来場者を含めた光景そのものが訪れた人たちの心をなごませてくれます。

### 希望の光が輝く元気なまちへ

このフォーラム活動も、近年は町の人口減少や事業の長期継続によって参加者が固定化し、その発展性に陰りも見え始め、参加人数の確保に苦慮するという悩みを抱えています。そのため、さまざまなマンネリ防止策を検討していかねばならないのですが、今後そついった新たな取組みを継続して実施していけるかということも課題



▶イルミネーションの設置を行う実行委員会メンバー。

なっています。

平成22年は宮崎県内の口蹄疫被害への配慮による中止も懸念されましたが、鎮魂の意味も込めて例年通り開催しました。また、平成23年は東日本大震災による節電の影響により期間・時間を短縮して開催せざるをえませんでした。再生可能エネルギーによって得られた電力の環境付加価値分を証書化した「グリーン電力証書」の活用や太陽光発電の導入なども検討しましたが、まちづくり団体の手作りイベントのため予算的な限界や、また蓄電の面から困難な点もあり、今回の導入は見送りました。しかし、環境保護の観点から長寿命で省電力であり、また光に紫外線や赤外線をほとんど含まないという環境にやさしいLED球の導入などに、今後も引き続き積極的に取り組んでいきます。

また、平成24年（2012年）には古事記が編纂されてから1300年目を迎え、この年から日本書紀の編纂1300年目である2020年までを「記紀編纂1300年」として宮崎県全体で観光の活性化事業に取り組んでいます。そのことにリンクして、日本神話にちなんだ縁結び神社やパワースポットを巡る「宮崎恋旅プロジェクト」

も進行していますが、ロマンティックな光のスポットである国富町の冬のイルミネーションにも神話のファンタジーを絡めていくことができれば、とアイディアはふくらんでいます。

いまだにすつきりとした明るい未来が見えづらい時代ではありますが、わたしたち一人一人の心の中を暖かく照らすイルミネーションで日頃の小さなながらも確かな幸せを改めて感じ、それが光り輝くまちづくりへの希望の灯りとなっていくことを願ってやみません。

国富町 企画政策課

（平成24年10月1日付第2815号）







ひがしかくらちょう  
北海道 **東神楽町**

『知のネットワークづくり』と『地区別まちづくり計画』  
みんなで築く活力あるまちづくりへ

東神楽町の概要

人口約35万人を擁する道北の中心都市旭川市に接し好立地環境にある東神楽町は、先端医療をはじめ高等教育、金融経済、道路交通など様々な都市的機能を受受できる利便性の高い町です。面積は68・64㎢と小さな町ですが、人口は10,050人（平成25年12月末）で、旭川市のベッドタウン化が進んでいると言えます。本町を含めたこの上川盆地一帯は、良質で食味の良いお米が作られる屈指の米どころとしても広く知られています。また、施設園芸作物と組み合わせた複合型農業も盛んです。

東神楽町は、平成元年から本格的な大規模宅地開発に着手し、今日まで飛躍的に人口を伸ばして来ました。約5,700人だった平成2年の人口が、

平成12年には8,000人台、平成15年には9,000人を超え、明治27年の開拓から数え120年を迎えた平成25年10月には初めて、1万人に到達しました。また町内には、昭和41年に開港した道北の空の玄関である旭川空港が所在しており、首都圏はもとより台湾などアジア圏とつながる国際路線も通年連航しています。

このほか、本町は『花のまち』として全国的に知られています。平成12年の「全国花のまちづくりコンクール」では国内最優秀賞に輝き、それまでも幾多の成果を収めてきました。翌年には、カナダで開催された国際コンクールに日本を代表する自治体として参加するなど、昭和30年代後半から半世紀をかけ、暮らしや生活環境に花を取り入れた運動の成果が大きく開花、結実した瞬間でした。現在も、町のシンボルまた価値ある財産として、潤いある

ご当地キャラクター



「かぐらっきー」

景観づくりに活かされ来訪者の心を捉えています。

## 旭川大学との連携による包括協定『知のネットワーク』

近年、行政や地域の課題は複雑化・多様化しており、その課題解決に向けた一つの方策として、貴重な知的・人的・物的資源や機能を有した大学との連携による地域の活性化が期待されています。

一方、大学においても少子化による学生数の減少のほか、大学改革をめぐる動きの中で厳しい競争と経営環境におかれ、積極的な地域貢献や地域と連携・協力した大学運営が求められています。

東神楽町では大学や研究機関等と連携して「知のネットワークづくり」という新たな活力や知恵を取り入れたまちづくりを進めるため、旭川大学との調整を進め、お互いのさまざまな資源や機能を活用する中で、教育・産業・福祉などの分野において協定を締結し、連携・協力していくこととしました。

### ①連携・協力の経緯

東神楽町が最初の連携・協力の相手として旭川大学を選定した理由は、以前から学長とのあいだに親交があり信頼関係が結ばれていたこともありですが、旭川大学は隣市の旭川市に所在する地元の大学ということで、本町はもとより、圏域の現状や課題を充分把握し、理解していることなどによります。また、距離的に「近い」ということは、連携・協力を進めるにあたり、人的・物的な資源の移動など、時間やコストの面から考えて大きなメリットがあります。

旭川大学には2学部（経済学部、保健福祉学部）3学科のほか、大学院、短期大学部、地域研究所等があり、広範な分野での連携・協力が可能ということもあり、協定締結に先立ち、連携・協力が想定できる具体的な事業案について、職員からアイデアを募集するとともに、庁内に関係する課によるプロジェクトチームを立ち上げ、事業案や協定内容につい

て調整・推進することとしました。

プロジェクトチームでは、当面実施可能な事業の5つの柱として、(1)大学の教授等を町の事業の講師として招聘する、(2)大学の教授等を町の各種審議会・アドバイザー等として委嘱する、(3)大学の学生との連携・交流を進める、(4)大学の学生の実習等の受け入れ及び学習の場を提供する、(5)大学の研究活動への協力及び連携を図ることを掲げ、旭川大学と協議を進める中で基本合意に達しました。

協定書調印式は、平成24年8月21日に町関係者や旭川大学関係者が出席する中で厳粛に執り行われました。協定内容については、協力・連携項目が広範多岐にわたることから包括協定と



▶「協定書調印式」山本進町長(右)山内亮史旭川大学長(左)

し、(1)まちづくりに関すること、(2)人材の育成に関すること、(3)教育、文化及びスポーツの振興に関すること、(4)地域活動の活性化に関すること、(5)健康及び福祉の向上並びに子育ての支援に関すること、の5項目を協定書に盛り込んでいます。

### ②具体的な取り組み事例

現在、連携・協力事業を推進するにあたり、東神楽町と旭川大学それぞれに連絡窓口を設置し、相互の連絡調整を行っています。プロジェクトチー



▶健康づくり学習の様子

ムで当面実施可能な事業として掲げた柱のうち、平成26年度の具体的な取り組み内容は、次のとおりです。

(1)大学の教授等を町の事業の講師として招聘

まちづくりの講演会、幼稚園の保護者研修、高齢者大学の健康づくり学習、企業や団体の職員研修の講師等として招聘し、地域住民の高度化・多様化する学習ニーズに応えています。

(2)大学の教授等を町の各種審議会・アドバイザー等として委嘱

情報公開・個人情報審査会委員、食育推進会議委員、子ども・子育て支援行動計画策定委員会委員、マスコットキャラクター選考委員会委員等への就任を依頼し、専門的な見地から意見をいただいています。

(3)大学の学生との連携・交流

大学や短大の各ゼミの学生が、子育て研修会において幼児向けにパネルシアターを上演するほか、福祉施設において高齢者のサロン活動に参加する中で交流を深めるなど、

子どもから高齢者まで幅広い住民から喜ばれています。

このほか、学生の保育実習の受け入れやゼミの研究活動の一環として、東神楽町の魅力のある地域や特色のある飲食店などを紹介する地域マップを作成するといった取り組みも始まっています。

③今後の課題

今後の事業展開としては、大学の



▶高齢者のサロン活動に参加する学生

人的な資源のみの活用ではなく、大学が持つ物的な資源や機能を有効に活用していくことが考えられます。

例えば、自治体と大学間における施設の相互利用の可能性も検討する余地があります。さらには、自治体だけではなく、町内の産業団体や企業、地域団体などの多様な主体との連携を誘導することで、町の特産品や企業の商品開発に参画するなど、大学の研究活動を地域にフィードバックしていくことも可能であると思われます。

現在、東神楽町と旭川大学との連携・協力は始まったばかりであり、今後、広範な分野における事業が展開されていくこととなりますが、さらに活動を深化させるためには、その有用性をお互いが認識できることが重要です。

### 初の試み「地区別まちづくり計画」策定

①町内7地区ごとの計画を本年度中に

東神楽町では平成25年度、道内自治体の行政計画ではあまり類例の見られない「地区別まちづくり計画」の策定に取りかかりました。選挙公約の一

つでもあり、同時に、平成25年度から始まった第8次東神楽町総合計画の実行に際し、町の自主自立に係る戦略的施策の一翼を担います。住む人の数よりもより、地域活動の手法や抱える課題が異なる町内7地区公民館単位に協議検討の母体を設け、住民と役員が対等な立場で議論を交え協働して計画を立てようとの試みです。

これを基盤に、住民自治や協働の視点の理解の上で立つてまちづくりが



▶「地区別まちづくり計画」住民と役員が議論を交わす様子

推進されることが期待されるとともに、総合計画が掲げる主要目標の一つである「連携と協働で築く自主自立のまち」の実効が図られ、狙い通りまちづくりの目指す姿が浮き彫りになることを希望しています。平成24年10月に開かれた地区公民館長会議で、7つの地区に初めてその全容が下ろされ理解と協力を求めました。

②ポトムアップ方式で論議を深め「協働」理念を実践化

自治体運営の基本となる総合計画の策定では、町内各界の代表や団体各



▶「ワークショップ」の様子

層から選ばれた検討委員会が設けられ、事務局から示された基本方針や論議の基礎となる素案を土台に意見の交換を重ね、住民の声を反映していく仕組みが一般的です。総合計画は、各種計画書が従属する形の行政計画の要で、民主的なルールに則った計画と位置付けられていますが、依然として官主導の態勢から脱却できていないのも実情である意味、岐路に立たされています。

しかし、今回の「地区別まちづくり計画」の策定では、行政ベースとは逆の流れのポトムアップ方式を採用入れ、総合計画のビジュアル化と実践化を図ることを重視しました。

同じ自治体でも、地区ごとで成り立ちや歴史が異なり抱える問題も当然違うことから、地域の実状を熟知した住民と中堅町職員が一体となって本音で議論し、総合計画基本構想

との整合に配慮しつつ、課題の解決方法や役割分担、目指すべき目標を双方の理解を前提に創りあげていき、教本的性格の総合計画を動かし補完する実践的な効果の発揮を求めています。また、計画の策定作業を通じて住民と行政が相互の役割や責任を分担、確認



▶「ワークショップ」ひじり野地区

し、まちづくりに有益なことであれば自ら進んで取り組んでいくという具体的な行動段階の内容も盛り込んでいきます。

おわりに

東神楽町と大学との連携は、大学の教授等の知識や大学の機能はもとより、学生の若いエネルギーや斬新なアイデアは、地域の活性化に大きく役立つものと考えています。現在は旭川大学との包括協定を先行させていますが、今後はさらに他の大学や研究機関、民間企業等との連携・協力を視野に入れていきたいと考えています。

また、自治体では昨今、「住民と行政の協働（パートナーシップ）によるまちづくり」という手法が多用されますが掛け声倒れに陥りやすく、職員、住民それぞれがそうした「協働」の理念の具現化を図っていくための導きと仕掛けは非常に重要で、今回の地区別まちづくり計画にも、その役割を期待しています。

東神楽町長 山本 進

（平成26年2月17日付第28070号）



# 石川県の能登町



# 地域に埋もれた資源に光を当て、 地域主導型の公民館活動の展開 〜能登町公民館特色ある活動事業を通じて〜



▲宇出津港から望める立山連峰

## はじめに

当町は、平成17年3月1日、能都町・柳田村・内浦町が合併して誕生しました。能登半島の北東部に位置し、北は

珠洲市と輪島市、南西は穴水町に隣接し、東と南は富山湾に面して海岸線が続き、海岸線の大半は能登半島国定公園に含まれています。平成25年現在合併8年目であり、多種多様な文化・行事・神事などの地域間交流、または世代間交流やネットワークを活かした取り組みなど、町の融和を図った施策が求められています。

## 公民館活動について

当町には公民館が15館あり、それぞれ非常勤の館長1名、常勤の公民館主事1名が配置されています。この15館は、概ね小学校区ごと（閉校した小学校を含む）に公民館が配置されています。閉校した旧小学校舎をそのまま利用している公民館も少なくありません。また旧校舎の内5施設は、県内で

能登町町章



「のっとりん」

は珍しい公民館の「分館」として残されています。

各公民館では、文化・芸能・スポーツなどの各種教室やサークルのほか、地区の運動会や納涼まつり、敬老会の開催等、さまざまな活動を行っています。更に平成24年度から「公民館特色ある活動事業」がスタートしました。

これは各公民館が「地域の資源」を活かした活動を行うもので、奥能登に伝わる、「あえのこと」や「アマメハギ」などの伝承に関わる活動、環境や食をテーマにした活動、世界農業遺産を活用した活動など、すべての公民館で取り組んでいます。今後も全公民館で、特色ある活動事業を進展させ、活動の幅を広げたいと考えています。

### 公民館への支援

町からの支援は主に、予算と情報発信（広報誌、ホームページ、有線テレビ、メディアへの情報提供等）の2種類を行っています。特に前者については、平成24年度から公民館特色ある活動事業を新規に予算化しました。この事業は、1公民館当たりおおよそ10万

円を目安に、地域の文化や神事、行事など、地域の特徴を活かした活動を公民館で行うものです。

平成24年度は、全15公民館19事業、273千円を、平成25年度は、全15公民館19事業1、665千円を予算化しました。

### 公民館の事例紹介

公民館は、活動や交流の場だけではなく、地域の学びの場でもあります。町内15公民館下には、それぞれ特徴的な文化・神事・行事などがあります。これを地域づくりに活かすために、町は平成24年度から「公民館特色ある活動事業」を実施しています。その取り組みを通して、改めて公民館の意義や役割を伝えるため、ここでは、3つの公民館の事例についてレポートしましたのでご紹介いたします。

#### ①秋吉公民館

（事業名：アマメハギ交流伝承事業）

「秋吉公民館の自慢は、地域の皆さんが公民館活動にとても協力的な

ことです」と語る竹中省三館長。平成25年度、特色ある活動事業に取りかかった。

蓑作りでも「原料となるわらの提供やねいご（稲の穂が付いていた部分）抜きを協力を呼びかけたところ、予想以上の協力が得られて本当に感謝しています」と目を細める。

毎年2月3日、鬼の面を付けた子どもたちが蓑をまこって家々を回るアマメハギは、秋吉公民館地区だけに伝



▶ツツノコ、コバセ道具を使った蓑づくり

わる伝統行事で国指定重要無形民俗文化財。しかし、蓑の文化が今も残るこの地域でも、編み方を知る人は途絶え、現存する蓑は年々傷みが激しくなってきたという。「指導してくれる人がいるうちに、蓑作りを伝承しよう」と、アマメハギ保存会と話しました。竹中さんは町内で数少ない蓑編み技術を持つ堂下久子さん（78）に指導を依頼。住民18人が集まって協力しながら5着の蓑を新調した。「やってみると非常

持つ堂下久子さん（78）に指導を依頼。住民18人が集まって協力しながら5着の蓑を新調した。「やってみると非常



▶蓑づくり集合写真

に難しかったですが、参加者は熱心に協力的に取り組んでくれました。活動しながら、地域の文化を伝承していきたいという思いもさらに強くなりました」。秋吉公民館は平成25年度、地域との『協働』を掲げて活動している。裏作りも保存会との協働で取り組んだ。「公民館だけでできないことは、地域の皆さんと一緒にやります。公民館活動には住民の理解と協力が不可欠です。活動を通して意識をいかに変えていくか。その過程を大切に、これから活動を積み重ねていきたい」。長い年月で培われた住民と公民館の協力関係が、地域に活力を生んでいる。

## ② 鵜川公民館

(事業名：親子で作るミニミニにわか事業)

鵜川公民館は平成25年度、特色ある活動事業の予算を使って『ミニにわか』作りと鵜川地区の歴史を記したカレンダー制作に取り組んだ。「自分が住んでいる地域、育った地域に誇りと愛情を持ってもらいたい」と話す梅田真人館長。「自分が子どものころは、自作したミニにわかを引っ張りながら町内



を練り歩いていました」と振り返る。

ミニにわか作りには親子11組が参加。約3カ月かけて完成させ、にわか祭本番前の8月19日には、『ミニにわか祭』を行う町内を練り歩いた。「できるだけ本物に近い作りを教えることで、若い親たちににわか作りを知ってもらおうようにしました。子どもたちには、祭りの言い伝えなどを教えなが

▲ミニにわか集合



▲出来上がったカレンダー

ら一緒に町を練り歩きました」。

鵜川の歴史を暦にしたカレンダーは、公民館歴史教室のメンバーが文献を調べたり、寺への聞き取り調査などを行った。掲載する項目は、議論を重ねて120項目に絞り込んだ。「暦には、今は行っていない行事や祭礼のほか、久田船長や原勤堂など郷土の偉人の生没日、鵜川郵便局の開局日など、

館の活動が、郷土愛を育んでいく。

## ③ 小間生公民館

(事業名：久田和紙の伝統文化継承事業)

「久田和紙を守り、育てていくためには原料であるコウソの確保が欠かせません」。小間生公民館長であり、久田和紙の製法を受け継ぐ『みわ会』の

鵜川にとって大切な歴史が掲載されています。知らなかった地域の歴史を知ること、ふるさとを再発見するきっかけにしてほしい」と地区約500世帯に配布された。地域住民には好評だという。「公民館の役割は、地域を元気にすることと文化の伝承。そのための発信場所であること。タウン誌の制作や昔遊びの復活など、やりたいことはまだまだあります」と意気込む。地域を見つめ直す鵜川公民

▶和紙原料のコウゾの植栽



会長でもある谷内静雄さんは、特色ある活動事業でコウゾの移植・植栽を提案。6月8日に久田地区の休耕地200アールにコウゾの苗50本の植栽と、山に自生していた若木50本の移植に取り組んだ。

作業には、平成25年度から里山里

▶世界に一つだけの卒業証書



海交流を実施し、卒業証書用の和紙づくりを体験する柳田中学校と小木中学校の3年生が協力。みわ会メンバーや地元造園業者らと一緒に汗を流した。「移植・植栽したコウゾはおおむね順調に育っています。安定した原料確保のためにも300本を目標にした

い」と語る谷内さん。「荒廃地を活用することで、久田地区をコウゾの一大産地にしたい」と意気込んでいる。昭和63年に旧小間生小学校の体験学習として復活した久田和紙。小学校の閉校を控えた平成13年9月にみわ会が設立され、その技術を受け継いだ。「久田

和紙という眠っ

ていた地域の伝

統文化が発掘さ

れ、復活し、受

け継がれました。

地域に根差した

活動に光を当て

るのは、公民館

しかできません。

みわ会を公民館

活動の核に据

えて育成してい

くことで、久田

和紙の保存継承

をしていきま

す」。

高齢化や後

継者不足など、

抱える課題は決

して少くない。

「継承していくためには、地域の皆さんの理解と協力が欠かせません。そのためには公民館の規約を作るなど体制づくりも必要と考えています」。久田和紙という原石。地域を巻き込む公民館活動が原石を磨き、輝かせる。

### 今後の新しい動き

今まで公民館は、どうしても高齢の方が活動する場としての認識がありました。しかし、平成25年度の特徴ある活動事業の中には、婚活事業が始まり、若い未婚の男女も公民館活動に関わる予定です。今後は、子供や高齢者だけではなく、20代〜40代といった中間層にも公民館活動に加わる工夫をしていきたいと考えています。

この公民館特色ある活動事業を進めていく中で、地域住民のつながりが増え、町の融和が図られると共に、地域の自主的な取り組みを推進していきたいと考えています。

能登町教育委員会事務局長

小坂 智

(平成25年7月1日付第2845号)



▼「市田柿」は、平成18年に地域ブランドとして登録された南信州を代表する特産品

現地レポート

# 高森町の「PRR-DE」「FUN」 「LOVE」をデザインする 「タウンプロモーション」の取組



長野県 **高森町**



## 高森町の概要

長野県の南部、南アルプスと中央アルプスに囲まれた「伊那谷」の中にたえずおむたたちの町、高森町。昭和32年に市田村と山吹村が合併し、平成24年7月には町制施行55周年を迎えました。面積45・26km<sup>2</sup>の中に約13、500人の人が住み、天竜川をはじめとした豊かな自然と歴史文化に恵まれ、そして隣接する飯田市をはじめとした市町村を結ぶ幹線道路を中心に商業施設や工業団地も立ち並び「自然と都市が調和した」町です。

この恵まれた環境に囲まれた当町は、各種農産物の南限・北限の境界に位置し、一年中おいしい果物や野菜を収穫することができます。

## 「市田柿」発祥の里

その中でも当町の一番の特産品は「市田柿」です。平成18年に長野県で初めて地域団体商標登録（地域ブランド）を受けました。旧村名の「市田」を冠するこの干し柿の発祥の地は、ここ高森町なのです。

10月下旬から11月にかけて綺麗に色づいた市田柿の収穫が始まり、皮むき・柿つるしが始まります。以前は手作業であり本棟づくりの民家の軒先につるされた「柿すだれ」の風景はこの飯田下伊那地方の初冬の風物詩でしたが、今では食品衛生上の問題でその姿は減りつつあります。

加工技術は機械化されても先人たちの精神や知恵は受け継がれ、農家の

ご当地キャラクター



「柿丸くん」

皆さんの丁寧な仕事で、美しくおいしい市田柿が出来上がります。天竜川からの「朝霧」による適度な湿度、そして日中の温暖な気候の「乾湿の繰り返し」で、本来持つ糖分が白く表面に浮かび上がります。これが市田柿のおいしさの秘密です。

### 飯田下伊那地方（南信州）を取り巻く状況

わたしたちの高森町を取り巻く状況は大きく変化しています。高森町があるこの飯田下伊那地域は人口17万、面積は香川県に匹敵する地域です。

この地域は、少子高齢化や人口流出などの影響で1年間で約1、200人減少しており（平成22年度国勢調査結果より）課題の一つとなっています。平成17年には飯田下伊那14市町村で「南信州定住自立圏」協定を締結し、この課題解決に向けて一丸となって取り組んでいます。

この人口減少のような内部環境の変化に加え、2027年に開通予定の「リニア中央新幹線」、また愛知県、静岡県、そしてこの南信州地域を結ぶ「三遠南信道」の動きなど、外部環境の面でも大きく変化しています。

### 高森町のC-1「コミュニティ・アイデンティティ」を創ろう！

高森町では平成19年度より「たかもり★みらい議会（町内の小中学生による模擬議会）」を開催しています。担当職員の間で「高森町に住んでるって素晴らしい！ってみんなが思えるものを、何か作り出せないか」と悩んでいたところ、平成22年度に開催されたこの「たかもり★みらい議会」で「高



▶「たかもり★みらい議会」の様子

森町を元気にするためには、キャラクターを作って、たくさんの人たちと交流したらどうですか？」と小学生議員から提案を頂きました。

全国の自治体キャラクターを見ると有名なデザイナーや漫画家に依頼する事例は多く見られますが、高森町のアイデンティティの確立や誇りや自信を生み出すには「住民の皆さんに作ってもらわなくては意味がない」と考え、あえて町内在住・通勤・通学、そして出身者の方に限定し、約1か月かけてキャラクターとキャッチフレーズを募集しました。また選挙の際にも町民の皆さんを中心に委員になっていた

できました。その後は、町内の主要施設にて投票所を設置し、今度は町外から買い物等に来てくれる他市町村の方々も含め投票を行いました。実はこの投票を行ったのにも狙いがあります。住民の皆さんから応募された作品のどれもが高森町の自慢できるところや良いところ、また歴史や風土を背景にデザインされたものばかりだったからです。そのため投票というプロセスを設けることが高森町をPRできる一つの場となると考えたわけです。

最終的には、総数3000を超えて投票をしていただき、その投票結果

◀「たかもり★みらい議会」の様子



を判断材料に高森町のキャラクターとキャッチフレーズが決定しました。

誕生した高森町のキャラクターは『柿丸くん』。高森町の特産品である市田柿をモチーフにして、山と川をイメージした衣装を着ている元気な男子です。キャッチフレーズは『元気もりもり あったかもり』。いつまでも元気であつたかい心を持った高森町の人々をイメージしています。平成24年6月には着ぐるみも完成し、町内外を問わず高森町と市田柿のPRのため、奔走しています。

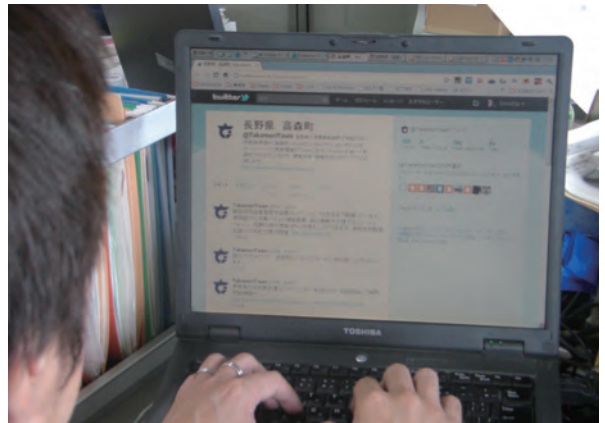
## AKY48!?

高森町に住みたい、という方々には「空き家情報バンク」制度を展開。通称「AKY48（空き家使用…あきやしよ）プロジェクト」です。町内から情報提供があった空き家と高森町に住みたいという人をつなげるプロジェクトです。ただし役場が行うのは主にWEBによる情報収集や情報提供のみ。実際の契約などの業務は町内の不動産業者の皆さんにお任せしています。行政と企業のそれぞれの長所を活かし、高森町に住みたい人を支援します。まだまだ成果は出ていませんが、今後も企業の皆様と協働し、情報発信を行います。

## SNSを活用した情報発信

また最近ではSNS（Social Network System）を活用した情報発信にも力を入れています。140文字までのミニブログ「Twitter」は飯田下伊那地方でも自治体の公式Twitterとしては一番初めに導入。WEBページの更新情報を中心に、町の最新情報をお知らせしています。桜の時期には開花状況を逐一報告。今年も

◀ SNSを活用した情報発信



多くの皆さんが高森町に来て下さいました。またYouTubeやUstreamなど、動画配信もスタート。先ほどの桜の状況をYouTubeにて公開したところ、おそろしく出身者と思われる方から「本当に懐かしい」とのコメントをいただきました。その他にも、天竜川でカヌーに親しむ様子や景観情報などを公開しています。

平成24年4月からは町長をはじめ、各課の担当課長による予算説明の動画を公開し、町CATVのアーカイブ的な側面も持たせながら、町の動きをPRしています。

## 「こんないいところ（景観）あったかもり」

もちろん町民のみなさんによるPRも活発です。リニア到来を見据えて、町内有志のみなさんによる「こんないいところ（景観）見つけ隊」という団体が発足しました。高森町の「守りたい、残したい景観」を考え、後世に伝えていきたい景観や建築物、そして作業風景までを写真におさめ、データベース化したものを広報やWEBに掲載しています。これを「こんないいところ（景観）あったかもり」というプロジェクトとして、展開しています。

今後は、集めた景観情報をもとに、リニア到来時代の高森町の土地利用、そしてあるべき姿につなげていきたいと思います。前述の町YouTubeでも「こんないいところ（景観）見つけ隊」のみなさんの景観情報を動画にてアップしています。

## 高森アルプスサーモン丼

「美味しい高森町を創ろう！」を合言葉に、高森町のご当地グルメを創るうとする動きも出ています。町内の飲食店の皆さんによって「高森町ご当地

グルメ検討委員会」が発足。ニジマスを掛け合わせたアルプスサーモンの切り身の色が、高森町の特産品「市田柿」の色と似ていることから、このアルプスサーモンを使った「高森アルプスサーモン丼」を開発。

今では、町内の7店舗にて、色も鮮やかで味も最高な丼を堪能することができます。町の収穫祭のみならず、近隣のイベントやテレビにも積極的に参加し、高森町の新しいご当地グルメを広めてくれています。



▶ 高森町の新しいご当地グルメ「アルプスサーモン丼」

今では「アルプスサーモン・バーガー」「アルプスサーモン・ライスコロッケ」も発案!これからの動きが楽しみです。

**TAKART (タカート)**  
**II TAKAMORI (高森)**  
**+ START (新しい出発)**  
**+ ART (創造)**

若い世代によるタウンプロモーションも活発です。平成20年に発足した町内の30歳代〜40歳代の異業種のメ



▲フリーペーパー「TAKART」

ンバーによる「TAKART」。

若さゆえの大胆な発想や行動力を活かしながら、町内の小学校の桜をライティングアップする「日本一の学校桜INキャンドルナイト」、天竜川をタイヤチューブで流れる「Water Tube Adventure」、昔ながらの市田柿の皮むきや柿つるしを子どもたちに体験させる取組などの活動を行っています。

平成23年には高森町のまちづくりやリニア時代の未来戦略、高森町の中心を調査するなど、独自の切り口で高森町

をPRするフリーペーパーを発刊。今後も何かを起こしてくれるような予感がしています。

### 課題

このようなタウンプロモーションを展開していますが、多くの課題もあります。今までの高森町は、ある意味恵まれた環境にあつたと言えます。自然と都市がうまく調和しているため、人口に関しては南信州全体で減少の中にありながら微増となっていました。そのよ

うな理由もあつてか、自分の町の特産品や景観などを積極的にPRする土壌や風土が育つてこなかったと言えます。また行政側も、効果的な情報発信の手法や外部人材や民間企業とのコラボレーションを可能とする組織体制や意識・スキル等が整っていないという課題があります。

タウンプロモーションは決して行政だけではできない分野です。行政の強みと民間企業や外部人材の強みを組み合わせ、それぞれの責任と役割の中で相乗効果を生み出しながらタウンプロモーションを行うことが重要です。そのために町内の民間企業との連携や外部から専門家をお招きするなど、町内外の異業種・異文化の人たちとのつながりが解決方法になると考えています。専門家や大学が持つ「学術的視点」「外部的視点」「若者の視点」の3つから、高森町にある、または埋もれている地域資源を発掘し、一緒に磨いていければと考えています。

タウンプロモーションは、気を付けていないと自先の派手さや利益を求めるあまりに、町としての本当に大切なものを失ってしまう危険性があります。タウンプロモーションの基本は「自分たちの足元にある『光』を『観』ること。それらを通じて「高森町に住む

ことを誇りに持ち(PRIORDE)、「高森町のファンになり(FUN)」、「高森町を愛してくれる(LOVE)」人たちの増やすことがタウンプロモーションだと考えています。だからこそ行政のみならず、民間企業、外部人材、近隣市町村や時には全く違う地域との自治体や団体ともつながり、多様な価値観や視点を「自分の町の写し鏡」として活かし、行政はその触媒としての機能やスキル等を習得しながら常に動いていくことが重要です。

高森町の宝を見つけ磨き、「PRIORDE」、「FUN」、「LOVE」をデザインする、そんな意識を持つて、今後も高森町のタウンプロモーションを進めていこうと思っています。

高森町経営企画室 清水 衆  
 (平成24年7月2日付第28005号)

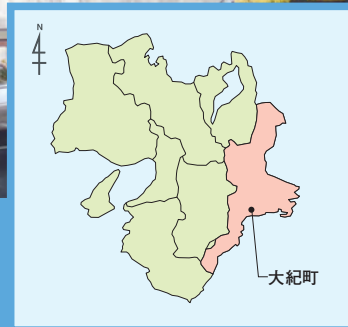
高森町公式WEB  
<http://www.town.takamori.nagano.jp/>

高森町公式Twitter  
<http://twitter.com/takamoritown/>

高森町公式YouTube  
<http://www.youtube.com/user/tkcanoe>

# 安心・安全なまちづくりを目指して 津波災害から生命を守る「錦タワー」

▶防災のシンボル塔「錦タワー」



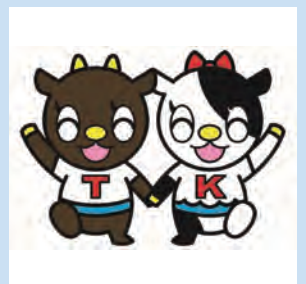
三重県 大紀町

## 大紀町の概要

大紀町は三重県の中南部に位置し、東西約24・8 km、南北約26・3 kmで総面積233・54 km<sup>2</sup>のうち約91%を山林が占め、地形は全般に急峻で町内を流れる1級河川の宮川や大内山川、藤川沿いに民家と耕地が散在する農山村部と海に面した僅かな土地に民家が集中する沿岸部からなる典型的な農山漁村です。その海と山が織りなす自然は豊かで美しく、町内のほぼ全域が奥伊勢宮川峡県立公園にも指定されており、風光明媚な町として知られています。

当町は、地勢、産業、生活文化、購買動向などの日常や広域行政の取組みなど共通点を有する大宮町・紀勢町・大内山村の2町1村が平成17年2月14日に合併して誕生し、人口が約1万人で、漁業、畜産業、林業、農業の第一次産業が盛んな海と山の幸に恵まれた町です。

ご当地キャラクター



「たいちゃん」と「きーちゃん」

町内には、伊勢神宮別宮の「瀧原宮」が鎮座し、全国でも有名な松阪肉七郎牛の生産地であり、酪農も盛んで大自然の中で育てられた乳牛により作られた乳製品は有名です。

また、沿岸部は熊野灘に面したりアス式海岸で豊かな漁場に恵まれ、ブリ大敷（定置網）漁は県内有数の水揚げ量を誇っています。

まちづくりでは、「人の命は何よりも大事」「子どもは町の宝、お年よりは町の誇り」を町是として掲げ、住民と行政が一体となって、人の命を尊び、子どもを育み、高齢者を敬う、助け合いの心に満ちたまちづくりを目指しています。

## 安心・安全な災害に強いまちづくり

平成23年3月11日に発生した東日本大震災では、日本周辺における観測史上最大の地震が発生し、想定をはるかに超えた巨大大津波が、東北地方と関東地方の太平洋沿岸部に壊滅的な被害をもたらし、多くの尊い人命が奪われたことは記憶に新しいところです。

当町においても、唯一沿岸部に位置する錦地区におきまして、昭和19年

12月7日に発生した東南海地震の大津波により、64名の尊い人命と多くの財産を失うという大変つらい経験をしました。

また、平成24年度に国の中央防災会議から発表された南海トラフを震源とする巨大地震による新たな津波浸水想定では、平均津波高13m、最大津波高16mという、これまでの想定津波高8mを大幅に超える愕然とするものでした。

このことから「いつ起こってもおかしくない」とされる大地震に備え、その惨禍を教訓として、住民一人ひとりの防災意識を高め、平和な住民生活を確保することを目的に、毎年12月7

日を「大紀町防災の日」と定め、町内全域を対象とした避難訓練を実施し、安心・安全な災害に強いまちづくりを進めてきました。

## 取り組みの内容

安心・安全なまちづくりの基本は「命」です。

当町の防災対策への取り組みは、この『命』の大切さを基本に考え、「人の命は何よりも大事・一人の犠牲者も出さない」ことを目標として、町村合併以前の旧紀勢町で昭和61年当時から、防災対策を進め全国に先駆けて「防災対策実行委員会」を組織し、国、県からご指導ご支援をいただきながら、町内各地へ住民の皆さんが安全で迅速に避難することができるよう、緊急津波避難所の整備をはじめ、防災教育等の啓発活動や各種訓練を実施するなど防災対策を推進してきました。

また、現在の大紀町においても「大紀町防災民会議」を組織し、防災対策事業の計画作成及び各種事業を継続して実施しています。この組織は町長を本部長として、町内全地区の区長会、婦人会、各小中学校、漁協関係者、消防団員、建設業者などの各種団体の代

表者の方など、多方面から幅広い方々で構成され、緊急性を要する災害時においても即時に対応できる、実効性のある組織編成となっています。

当町で唯一沿岸部に位置し、津波被害が予想される錦地区には、現在、約2,200人の方々が生活しています。

この錦地区では、津波からの緊急避難対策として、「地震発生後5分以内で安全に避難できる高台（海拔約20m地点）の確保」を目指し、現在31ヶ所の津波避難所を整備しています。

平成10年度に完成した緊急津波避難塔『錦タワー』は、津波発生時の緊急避難所としてだけでなく「災害は忘れたころにやってくる」のことわざどおり、自然の凄さ、災害の怖さを風化させることがないよう防災のシンボル塔として、また、防災活動の拠点として建設しました。

この『錦タワー』の構造は、鉄筋コンクリート造5階建てで、基礎部分は地盤改良によって約6mの深さにあり大変強固なもので、耐震設計もしっかりとされています。また、形状は大津波により流出する船舶等の衝突時の衝撃を緩和できるよう工夫され円柱状になっています。各階の用途は、1階が



▶「大紀町防災の日」避難訓練

公衆トイレと消防用倉庫、2階が地区住民の皆さんの憩いの場として活用できる畳敷きの集会室になっています。

3階が防災資料館、4階、5階が避難所となっており、最上階の5階で海拔20m20cmの高さとなっています。

また、停電時には最上階に備付けの発電機により非常用電源を確保することができ、救急箱、救命胴衣、救助用ロープ、毛布などの防災用備品を備えています。タワーへの避難用入口は、らせん状の外階段で最上階まで昇ることができ、タワーが面している全ての道路、どこからでも避難できる

よつ3ヶ所に階段入口が設置してあります。

この『錦タワー』は平成11年度に消防庁主催の第3回防災まちづくり大賞（消防科学総合センター理事長賞）を受賞し、現在では防災対策の先進地事例として、国内外並びに全国各地から官民間問わず多数の方々が視察に訪れ、又、国の防災資料としても活用されています。

そして、平成24年度には第2の緊急津波避難塔として『第2錦タワー』を建設しました。



▶第2錦タワー

この『第2錦タワー』の建設場所は、魚市場の近くに位置し、津波が最も早く到達する地区であり、山裾の高台にある津波避難所へは遠く、大地震により民家等が倒壊し避難路が寸断された場合に、市場で働く方や住民の皆さんが迅速に避難できるように建設しました。構造は鉄筋コンクリート造一部鉄骨造8階建てで、1階が3ヶ所の入口と消防用倉庫、2階が台風、大雨警報発令時などの避難室、6階、7階が津波時の避難室、最上階の8階で海拔23m80cmの高さとなっています。設備も『錦タワー』と同様に、停電時には最上階に備付けの発電機により非常用電源を確保することができるほか、救急箱、

◀釜土避難所と第2釜土避難所



救命胴衣、救助用ロープ、毛布などの防災用備品を備えています。最上階までは内階段で昇ることができ、錦地区が一望できる展望所となっています。

また、『第2錦タワー』の竣工に際しまして、鈴木英敏三重県知事より「命あればこそ 幸せも笑顔もおとすれ」のお言葉を頂戴いたしましたので、記念碑として敷地内に建立しています。この2つのタワーは、平常時には階段を利用しての健康維持など住民の皆さんの絆の場として、多目的に活用されています。

平成25年度に完成しました、津波避難所の第2釜土避難所、花園・新生町避難所をご紹介します。

◀花園・新生町避難所



第2釜土避難所は、既設の釜土避難所の高さが海拔11m27cmでありましたが、南海トラフ沖巨大地震の想定津波高に対応するために、海拔18m50cmの箇所に整備したもので、三重県が施工する急傾斜地崩壊対策事業と同時施工し、施設管理用通路を避難路として供用することで避難に要する時間が飛躍的に短縮され、また、整備費用の軽減も図りました。

また、花園・新生町避難所も三重県が施工する治山事業との同時施工により整備しています。

これらの津波避難所へ向かう避難路の整備については、民家が密集した錦地区の中心部であるため、地震によ

る民家の倒壊や屋根瓦の落下、ブロック塀の倒壊などにより避難路が寸断されることが考えられ、短時間で大勢の方が安全に避難していただけるよう、複数の避難路を整備する必要があります。

おかげ様で、避難所付近にお住まいの住民の皆様は温かいご好意によりまして、ご自宅の軒下を避難通路として無償で活用させていただき大変感謝しているところです。

それぞれの津波避難所へは、2つのタワーと同様に、停電時には備付けの発電機により非常用電源や避難路の照明を確保することができるとは、救急箱、救命胴衣、救助用ロープ、毛布などの防災用備品を備えています。

また、平成23年9月に発生した紀伊半島大水害で、当町を流れる大内山川が氾濫し多くの民家が床上・床下浸水の被害を受け、田畑や河川の堤防・護岸も甚大な被害を受けました。

河川災害復旧については、氾濫箇所の河川改良も含めて対策を施し、堆積土砂の影響も大きかったことから河川内の土砂の撤去などを実施しています。

その他ソフト面の取組みとして、毎年12月7日の「大紀町防災の日」

避難訓練では、昭和19年の東南海地震が発生した午後1時40分に、町内全域一斉のサイレンを合図に避難訓練を行っています。訓練では避難袋を背負った住民の皆さんが、最寄りの避難所へ避難していただき、避難所備付けの救急箱や懐中電灯、毛布など防災用品の点検や非常用発電機の使い方訓練しています。

避難訓練終了後には、町内各地の自主防災組織の皆さんが消火器を使用した初期消火訓練や防災専門の講師を招いて防災講演会も開催しています。

また、夜間に地震が発生し、大津波が来襲したことを想定した夜間津波避難訓練も実施しています。懐中電灯



▶民家の軒下を利用した避難通路

◀錦小学校登下校時避難訓練



を片手に昼間とは違い避難しづらい状況を体験していただくことを目的としています。

その他では、町内全6校の小中学校が毎月7日を学校防災の日と定め、学校での避難訓練をはじめ、児童生徒が登下校時に発生した、地震・津波からの避難のため、現在の位置から最寄りの避難所へ自主的に避難する訓練を行うなど、学校・保護者が一体となって防災教育に取り組んでいます。

又、錦地区の役場錦支所は海拔31mの高台に耐震性にも充分配慮して整備されており、停電時においても3日間程度の電力を賄える程の発電機と燃料を備えております。更に、支所に隣

接した海拔27mの位置には多目的ホールがあり、500名程度の避難者の収容並びに備蓄米を備え、更に隣接した海拔22mのところには保育園が整備されており、有事の際には併せて活用が可能となります。

### 今後の課題

これまで防災対策として避難所整備をはじめ、避難訓練の実施や防災教育等の啓発活動、住宅耐震化の推進など各種事業を進めてきましたが、防災施設の整備は平成25年度でほぼ計画が完了いたしました。

これからは東日本大震災の大津波を教訓に、粘り強い構造の防波堤などにより、少しでも町内に入る津波の威力を弱め、津波が到達する時間を遅らせることで、避難する時間を稼ぐことを目的とした減災対策の推進を図ります。

今後も地元住民の皆様のご理解とご協力を賜り、国、県の関係当局のご指導を仰ぎながら防災対策・減災対策に取り組んでいきたいと考えています。

大紀町長 谷口 友見

(平成26年1月6日付第28064号)





ふくさきちょう  
兵庫県 福崎町



# 「自律(立)のまちづくり」交付金事業」 柳田國男に学ぶ 福崎町

## 福崎町の概要

福崎町は、兵庫県の中央部、姫路市の北約20kmに位置し、人口は約2万人、面積は約46km<sup>2</sup>です。中国自動車道と播但連絡道路のICがあり、古くから交通の要衝として知られた町です。文化勲章受章者の柳田國男、吉識雅夫の2名を擁しているのが町の誇りです。

柳田國男は民俗学の父として広く知られています。吉識雅夫は造船工学の権威であり、この人の開発した技術によって大型タンカーの造船が可能になったと言われています。

福崎町の特産品は、大麦の一種であるもち麦を素材とする数々のもちむぎ商品です。もち麦は穀類の中でも高タンパク、高ミネラルで、βグルカンという食物繊維の含有率が高いため、注目されています。もちむぎ麵、もちむぎ素麵「福の糸」、もちむぎカステラ、お茶、焼酎などがあります。

## 自律の心を育て、参画と協働のまちづくり

柳田國男は「美しき村」の中で「村は住む人のほんの僅かな気持ちから、美しくもまぶくもなるものだといふことを、考へるような機會が私には多かったです。」と書いています。

この言葉はまちづくりの原点だと思っています。強制されることなく、ほんの僅かな気持ちでいいからよい町をつくらうと行動する人が増える町がよい町になっていくのです。この言葉を大切にして「自律(立)の心を育て、参画と協働のまちづくり」をメインスローガンに掲げました。そして、それを支える次の4本の柱をたてました。

ご当地キャラクター



「フクちゃん」と「サキちゃん」

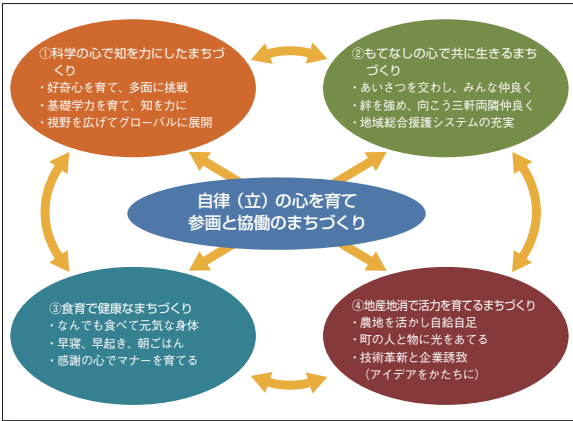
### 1. 科学の心で知を力にしたま ちづくり

計画を立て実行するには多くの知識と情報が必要です。その知識と情報は、偏見や偏りがあつては困るので、より多方面であることが大切です。

私は人生の中で二つの神話に裏切られた苦い経験を持っています。

一つは小学校時代の神風神話です。日本は神国なので神風が吹き戦争に負けることはないかと教えられ、信じた私はすっかり軍国少年となっていました。

二つ目の神話は原子力の安全神話です。原子力は安全で安価で安心なエネルギーだと言われ、兵器に使用するのはよくないが、発電には心配がない



▶自律(立)のまちづくり イメージ図

のではないかと思っていました。しかし、3・11の大地震による福島原発事故によって、この思いは吹き飛びました。「科学の心で」としたのは、この苦い思いを反映させたものです。

視野を広く持ち、グローバルに展開することが求められる時代になっています。

### 2. もてなしの心で共に生きる まちづくり

もてなしという行為は、相手があつて初めて成り立つ行為です。福崎町では二つの意味を持っています。

小さな町ですが、近年、孤独死が何件か発生しました。絆が弱くなりかけているのです。隣近所が声を掛け合い、仲良く助け合い、地域コミュニティを豊かにすることが求められています。



▶地区にある寺社や施設をみんなで歩いて地域の魅力再発見!

◀物知りの高齢者に伝統文化を学ぼう!



次に、観光客の少なさです。最近の県の統計によると、年間23万人で、県下市町の中で少ない方から3番目という惨たんたる状態です。交通の要衝として多くの人が交流するわけですから、神社仏閣、山や池も紹介して、もてなしの心で滞在時間を長くしてもらえ工夫が必要なのです。

### 3. 食育で健康なまちづくり

食育に力を入れるようになった動機は、町内の小学生の肥満率で、県下で一番高い数字が出たからです。肥満は健康によくはないと言われています。肥満対策を学校だけに任せず、町ぐるみで取り組むことにしました。

毎日の食事をただ漫然と繰り返すのではなく、栄養やマナーにも気を遣うように努めています。

### 4. 地産地消で活力を育てるま ちづくり

福崎町の地産地消は、農林産物に限らず、人、物すべてに光を当てることです。優れた知識技能の持ち主を探して「まちの先生」として働いてもらうこと、町外に出て活躍されている人の力を借りること、町の風物を再評価して活用していくことを重視しています。

### 自律(立)のまちづくり 交付金制度

まちづくりの計画は作りましたが、問題はどうか実行するかです。着目したのは、伝統的な集落組織です。集落には公民館や集会所があり、集落(自治会)を運営する執行機関の長を区長と呼んでいます。この集落の活動をとおして「自律(立)の心を育て、参画と協働のまちづくり」を実践してもらおうと考え、「自律(立)のまちづくり交付金」制度を創設しました。

#### 1. 交付金要綱

要綱のいくつかを例示します。

第一条 この要綱は、「自律(立)の心を育て、参画と協働ですすめるまちづくり」の理念のもと、自治会の創意と工夫、判断と責任に

よって、地域の特性に応じた魅力あるまちづくりを推進するために自律（立）のまちづくり交付金を交付して、自治意識と連帯感を醸成し、安全、安心で暮らしやすい自治会を形成していくことを目的とする。

第3条 交付金の対象となる事業は、基本事業及び自由事業とする。

2 基本事業は、自治会の各種団体の代表により構成された委員会を開催し、地域の現状と課題及びその取組について話し合い、その計画書及び報告書の作成に取り組みものとする。

3 自由事業は、前項において計画された自治会内のつながりを活性化し、第1条の目的を推進できる取組であること。

第4条 町長は、原則として、毎年



▶地域を花と笑顔でいっぱいによこす！  
播但線沿いの地域の活動

度定める予算の範囲内で、算出して得た額を上限に、自治会に対し交付金を交付することができる。ただし、次の各号のいずれかに該当する活動には交付しない。

- (1) 宗教の教義を広め、儀式を行い又は信者を強化育成する活動
- (2) 政治上の主義を推進若しくは支持し、又はこれに反対する活動
- (3) 特定の公職の候補者若しくは公職にある者又は政党を推薦若しくは支持し、又はこれらに反対する活動

## 2. 民主主義の学校

私はこの交付金制度を民主主義の学校と位置付けています。みんな若しくは各組織の代表が集まって、よく話し合い、計画を作り、予算を組み、みんなで行う。この繰り返しを持続的に遂行できることが大切です。

「自治会の中のあらゆる団体が、それぞれ意見を持ち寄り、話し合いの中で決められた内容であれば認める方向です。重要なものは、その結論へたどり着くまでの過程です。誰がどういった発言をして、どのような議論がなされ、その結論が出たのか、それがきちんと分かるように、参加者名簿と議事録をとっておいてください。」と伝えました。

## 3. 予算と町職員役割

平成25年度の予算は、基本事業100万円、自由事業1千万円です。各自治会への配分は、区長会に諮った結果、均等割40%、人口割60%となりました。最高額は617千円、最低額は166千円です。参加自治会は33自治会のうち31で、参加率は94%でした。平成25年度が初めてのスタートなので、事業推進の補助員として2～3人の町職員を各自治会に配置し、話し合い、記録、趣旨説明の手助けをしました。また、職員が集落に入り、町民と直接ふれ合い、町民の声を聴くことにより公務員としての自覚を高め、能力アップに役立つのではないかと期待しています。

## 4. 事業の展開

実際に取り組みを進める段階で、私の説明不足から、職員の理解にばらつきが見られ、何回か意思統一の場を持ちました。なかでも「みんなが集まって」の理解に差が出ました。自治会の役員だけで検討をしたり、記録が不十分であったりすることがありました。

11月に入り、平成25年度の計画の90%は終わり、各自治会での反省会が開かれています。その記録は集約されていませんが、反省と共に、平成26年



▲コスモスいっぱいの会場で、手作り料理、バザー、写生会など、イベント盛りだくさん！

度の取り組みを進めている自治会もあると聞いています。

近く町としても、反省会を兼ねた実践発表会を計画しています。実践報告をまとめ、多くの聴衆の前で発表することも、よい勉強になるのではないかと考えています。

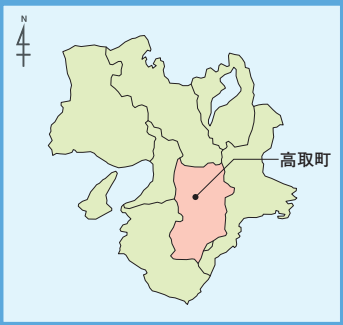
すべての記録は膨大ですが、町図書館には備えようと思っています。各自治会が出た声はまちづくりにとって大切な資料ですし、各自治会が互いに学び合い、次の計画づくりの参考にしたいと思っています。

私は、自治会の話題が4本柱全般にわたって取り上げられ、話し合いが展開され、実行に移されればよいなと思っています。

福崎町長 嶋田 正義

(平成25年12月16日付第20063号)

# シニア世代が光り輝く町



奈良県 **高取町**

## はじめに

高取町は、奈良盆地の南部に位置し、吉野地方への入り口となっており、自然あふれる緑豊かな環境に恵まれる一方、古代〜中世〜近世の歴史を物語る遺跡も数多く残り、それらが地域の住民によって大切に受け継がれている地域でもあります。

## 日本一の山城「高取城跡」

南北朝時代、豪族の越智氏がかきあげ城として築き、郡山城に入府した豊臣秀長の命により、1585年本多氏による大修築が始まりました。本多氏以後、譜代大名の植村氏の居城となり、幕末まで続きました。

標高583.9mの高取山山頂に築かれた高取城は、平地から高低差390mの難攻不落という視点から日

本一の山城といわれています。城内は周囲3km、郭内は周囲30kmの規模を誇り、「高取山全体が山城」と言っても過言ではない規模となっています。今は、石垣を残すのみとなっていますが、その大きさにかつての栄華が偲はれます。

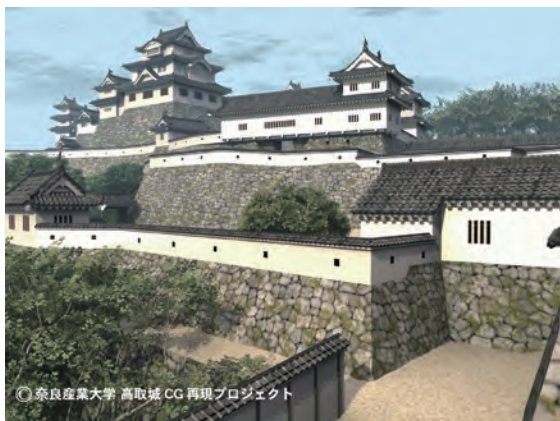


▶高取城跡

高取町町章



◀CGにより再現された高取城



©奈良産業大学 高取城 CG再現プロジェクト

◀全国から参拝者が訪れる壺阪寺



## 西国三十三カ所巡礼六番札所 「壺阪寺」

高取町内には、全国から参拝者が訪れる壺阪寺があります。壺阪寺は、眼病に靈験あらたかという観音信仰で知られ、三重塔と礼堂は国の重要文化財に指定されています。

壺阪観音の信仰によって盲目の沙弥が開眼治癒したという話が「日本感靈録」にあり、『壺坂靈験記』のもととなったといわれています。

『壺坂靈験記』は今から300年あ

まり前、壺阪寺のふもとに住んでいた沢市という盲目の夫と妻お里の夫婦愛をテーマにした物語。

沢市に献身的な愛を捧げたお里の願いが神仏に届き、観音様のご利益で沢市は目が見えるようになったというお話です。浄瑠璃をはじめ、歌舞伎や浪曲にも取りあげられ、明治期には全国で大変な評判となり、ついには海外にまで知られるにいたった名作です。壺阪寺には、さわると夫婦の仲が円満になるといいう「沢市の杖」や「お里・沢市の像」があります。

## 全国有数の古墳密集地

古代、明日香村と高取町の地域は、今来郡（イマキコホリ）と呼ばれ、今来人（古代の渡来人）の代表格であった東漢氏（ヤマトノアヤウジ）が大陸からもたらした新しい文化が栄えた地であったと言われています。その証拠に、高取町内には、大小あわせて約800基の古墳が点在し、日本でも有数の古墳が密集する地域です。

町内の古墳は、6世紀の初めから



▶国史跡に指定されている「市尾宮塚古墳」

7世紀の終わりにかけて築造されたものが多く、7世紀後半につくられた「東明神古墳」は草壁皇子（天武・持統天皇の皇子）の墓の可能性があるといわれています。

その他にも、国史跡に指定されている「市尾墓山古墳」と「市尾宮塚古墳」の二つの前方後円墳があり、当時の有力な豪族が葬られているものと考えられています。

## 「町家の雛めぐり」で観光客と住民の交流を

高取町の人口は、約7,500人と年々減少の一途をたどり、高齢化率は30%を超えています。かつて、300軒を超える商店があった土佐街道には、数えるほどの商店があるだけとなってしまいました。

さらに、私が町長に就任した平成20年度当時は、町の財政状況が「赤字再建団体」に転落する一歩手前の状態であり、このままでは高取町が衰退してしまつた危機的状況でした。

しかしそのようなか中、かつての賑わいを取り戻すべく、城下町に雛人形を展示し、住民との交流・体験を楽しんでもらうイベントをシニア住民が主

◀歴史的な面影が残る土佐街道



体となり始めることとなりました。  
高取藩2万5千石の城下町として栄え、高取城跡に向かってまっすぐ伸びる土佐街道。石畳とカラー舗装により整備した土佐街道は、その両側に水路が流れ、今なお江戸時代の面影が残る町家が並んでいます。

この町家の玄関先に雛人形を展示してもらおう「町家の雛めぐり」は、年々□□ミで観光客が増え、6回目を迎えた平成24年は、4万6千人を超える方に訪れていただきました。

また、10月から11月にかけて「案

◀「たかとり城まつり」火縄銃実演



山子めぐり」を、11月23日には「たかとり城まつり」を開催しました。いずれも我が町の歴史や文化を体感できるイベントとなっています。

### 住民と観光客のお話がヒット

「町家の雛めぐり」では、訪れていただく約8割がシニア女性です。「町家の雛めぐり」がシニア女性の人気を得た理由。これは同世代の住民が積極的に関わり、観光客と地域住民が雛人形をきっかけに互いに話しをすること

が出来ることだと感じています。

観光地でボランティアガイドの話を聞くと、より違った目線で見られる効果と同じで、地元住民と話をすることでこの地域の良さや特徴をより感じてもらえることができます。

また、シニア女性の中には、戦時中や戦後で「雛まつり」をする世情でなく、もう一度自分のための「雛まつり」として訪れる方もおり、同世代の住民と気持ちを共にすることができたことも一つの要因です。

他の有名な観光地では味わえない高取ならではの魅力を強みに、今後も「おもてなし」の心を大切に、イベントを盛り上げていきたいと考えます。

### 行政と住民の協力

高取町の高齢化率は30%を越えています。シニア世代にはこれまで培ってきた「経験・知恵・技術」が豊富にあり、またパワーもみなぎっています。この地元住民のかける思いに対して、行政はハード整備などでバックアップをしてきました。

かつこの行政主導ではなく、住民主導により運営するイベントを行政が支え、これにより地域がより活性化し、

継続したイベントとして成長することが期待できます。

### 今後の課題

3月1日～31日の1ヶ月間開催する「町家の雛めぐり」。その中心として活動している方々の平均年齢は70歳を超え、後継者の育成が課題となってきました。

また、リピーターの観光客が多いことから、毎年工夫を凝らすことにより飽きさせないイベントづくりが必要だと考えています。

行政としては、最寄り駅である壺阪山駅の整備や、お手洗いや休憩場所等の増設が今後の課題となっています。

高齢化が進む日本において、高齢者がいきいきと暮らす町の代表として、今後も光り輝きつづけたいと思えます。そのため、今後も地域の特性と魅力を大切にしながら、さらに元気で夢のある町づくりに向け、高齢者が光り輝く町づくり、観光の振興などに一層積極的に取り組んでいきたいと考えています。

高取町長 植村 家忠

(平成24年9月10日付第28013号)



つなぎまち  
熊本県 津奈木町



# アートを生かした住民による 住民のための町づくり

## 津奈木町の概要

津奈木町は熊本県南部に位置し、海と山の豊かな自然に囲まれています。温暖な気候のためさまざまな品種の柑橘類が栽培され、新鮮な魚介類も特産品となっています。総面積33・98km<sup>2</sup>の土地には展望所として整備された城跡の舞鶴城公園があるほか、江戸時代後期に架けられた大小さまざまな石橋が点在しており、才知に長けたいにしえの人々の生活を偲ぶことができます。

## 緑と彫刻のある町づくり

水俣病の被害地域でもあった津奈木町は、文化による地域再生を目指して昭和59年に「美術品取得基金」を創設し、佐藤忠良氏や岩野勇三氏など優れた彫刻家の作品を公共施設など町の

津奈木町町章



◀ 野外彫刻のひとつ 岩野勇三作「風ん子」



屋内外の要所に設置する「緑と彫刻のある町づくり」に取り組んできました。その数は現在では15体を数え、平成26年も新たな作品の設置を進めています。また、彫刻の設置と平行して公共施設に絵画を展示するなど、町民が美術と接する機会を設けることに努めてきました。これらの活動の集大成として平成13年に開館したのがつなぎ美術館です。

## 住民参画型 アートプロジェクト

著名な作家の作品展を開催するつなぎ美術館には、町外から多くの美術ファンが訪れました。交流人口の増加という点では町外からの来館は歓迎すべきことですが、町立であるからには町民の利用をさらに増やす必要があります。しかし、「緑と彫刻のある町づくり」の実績があるとはいえ、やはり都市部に比べれば美術に接する機会が少ないのが実情です。さらに、大人はすでに趣味嗜好が完成されており、新たに美術の魅力を理解してもらうことは容易ではありません。そこで、町民の日常と美術の距離を縮めて関心をもってもらうための方策を考へることになりました。

その結果、美術を作品としてだけでなく地域資源の再評価や地域の課題の解決を図る手段として機能させるプロジェクトが立案されたのです。これは、現代美術作家に津奈木町に通ってもらい、あらかじめ設けられたテーマに沿って町民と共に課題を探し、その解決のために地域資源を活用した表

現活動を考え実践していくというもので「住民参画型現代美術プロジェクト」

(平成24年に住民参画型アートプロジェクトと改称)と名付けられました。また、津奈木町を拠点に活動する諸団体のメンバーによる実行委員会を編成し、あくまでも町民向けの社会教育事業の一環として進めていくことになりました。そのため、招聘する現代美術作家には作品の質だけではなく実行委員や一般参加者に気づきを促すファシリテーターとしての能力も求められます。

最初の年は、誰もが参加しやすいように虹をテーマに地域で人々と共同でパフォーマンスなどの表現活動を行うレインボー岡山氏を招聘しました。最初の月にワークショップの内容を決め翌月はその準備をし、さらにその翌月に一般参加者を迎えてワークショップを実施します。これを季節毎に4回行いました。

春は町のランドマークでもある奇岩、重盤岩を舞台にした「重盤岩がキャノンバスだー」。山中を駆け巡りながら自然と人間の手による創造物の差異を体感しました。夏の「眼鏡橋 レインボー大作戦」では1000個の7色の

◀「津奈木ハートマン計画」



◀「TSUNAGI 光と風の回廊」



風船を最重要文化財でもある石橋から滝のように落としたあと、川面に浮かべて虹の橋をつくりました。秋は野外彫刻の中でも大きすぎて視線が上にかすほとんど視界に入らない野外彫刻を虹色に飾り付けて目立たせようとする「羽ばたけ 夢のつばさー」を実施しました。高所作業車の提供があるなど活動の輪は民間企業も巻き込みました。

いよいよ1年間の活動のフィナーレともなる冬。これまでの活動の楽し

さをすべての町民に伝えたいと思った実行委員は5000人の全町民が同時に手をつなぐパフォーマンスの実施を検討しましたが、やはり実現は困難でした。そこで考えだされたのが、可能な限り多くの町民の手形を集めてつなぎあわせ美術館内の壁一面に貼るという「津奈木をつなげー虹の橋」でした。レインボー岡山氏と実行委員は町内の幼稚園やさまざまな催し物にかけ虹をイメージした7色の画用紙1300枚に1300人分の手形を集め、町内



◀「大地のメモリア」



◀「TSUNAGIーハート！アート！パラダイス！」



▶「AKASAKIー海想日誌」



外で話題となりました。

2年目は山の木々をテーマにした「TSUNAGIー光と風の回廊」。この年から平成24年まではファシリテーターを務めるアーティストの個展を秋に開催しました。ワークショップと秋の展覧会を連動させることで実行委員や一般参加者が美術作品そのものへの興味をもちやすくなります。3年目は地域の陶土を使って町の未来像をつくり出す「大地のメモリア」。4年目は

閉校となった海の上の小学校を活用した「AKASAKIー海想日誌」。5年目は熊本県立劇場との共同事業で、町のオヤジたちが結成したオヤジダンスの公演の舞台美術を町民がつくりあげる「TSUNAGIーハート！アート！パラダイス！」。6年目となる平成26年は耐震問題により立ち入りができなくなった海の上の旧小学校に全国の人々の水曜日の物語を集めて転送により交換する「赤崎水曜日郵便局」を実施しました。

## よすふじ

実行委員の任期は1年ですが継続して務める委員も多く、その周囲の町民がさらにサポーターとして活動を支えるなど、プロジェクトは少しずつ町民の間に浸透してきています。このような地域に根ざした住民主体の活動が評価され、つなぎ美術館は平成25年度地域創造大賞（総務大臣賞）を受賞しました。

多くの人間が少なからず表現という行為に関心を抱いているという実感は住民参画型アートプロジェクトを通じて得られており、このことは美術が

◀「赤崎水曜日郵便局」



都市部の専有物ではないことを示しています。美術は通時性と共時性を兼ね備え、多くの人、物、場所をつなぐ能力を秘めています。

今後つなぎ美術館は、展覧会や住民参画型アートプロジェクトを通じて日常における美術の可能性を追究しながら地域の活性化に努めてまいります。

津奈木町長 西川 裕  
（平成26年1月13日付第2806号）

# 花と緑と水のまち



## 宮崎県 三股町

### 三股町の概要

三股町は、宮崎県の南西部に広がる都城盆地の東部に位置し、町の約72%が鱈塚山系に囲まれた平均標高250mの台地です。そして、九州山地の高峰、高千穂の峰をはるか西に望み、東は鱈塚山、雪が峯、柳岳、東岳の4つの峰が連なる鱈塚山系に囲まれ、これらの山地を背景に平野が広がる中、東西に大淀川の支流「沖水川」が貫流している自然豊かな土地柄です。町の人口は、25,286人（平成25年7月1日現在）となっており、県内で唯一人口が増加している町です。また、15歳以下の年少人口の割合が16.2%と県内でもその割合が一番高くなっております。

歴史的には、明治2年、薩摩藩士

で弱冠35歳の三島通庸公が都城の地頭として赴任し、三股建設の大事業を起し、教育振興をもつて開拓の大本としました。その頃、荒涼とした原野であった山王原地区をこの地の麓と定め、縦横に大道路を建設し、そして近隣集落から70戸を移住させ、政庁と学校を建設しました。わずか2年の在任期間ではありましたが、短日月に開拓整備したものは多く、三股発展の礎は三島通庸公にあるといっても過言ではないと言われています。そして、明治22年の村制施行により三股村、昭和23年に三股町となり、平成25年で町制施行65周年を迎えました。

本町の基幹産業は、農畜産業であり、温和な気候と肥沃な土壌が生み出す農畜産物の品質は高く評価されています。肉用牛、ひな、サトイモ、ラックキョウ、荒茶は全国1、800市町村

ご当地キャラクター



「くいまーるじゃんかんくん」

▶平成24年の全国和牛能力共進会で見事日本一に輝いた福永透さんの受賞報告。



の中でも100位以内に入る産出額を誇っています。特に肉用牛においては、平成24年10月に開催された「和牛のオリンピック」と呼ばれる第10回全国和牛能力共進会において、本町の肥育牛が宮崎県代表として出品され、二大会連続で日本一を獲得するなど、高い実績を残しています。

## 文教のまち

三股町には、小学校6校、中学校1校があり、昔から「文教のまち」と

呼ばれています。藩政時代、薩摩藩に属していたこの地域では、郷中教育と呼ばれる伝統的な教育が盛んに行われていました。「郷中」とは今でいう自治会組織のようなものです。その中で、年少者は年長者から武芸、学問のほか、社会生活を送るために大切なことを学んできました。明治初期になり、三島通庸は郷中教育をさらに振興し、「礼儀を正しくせよ」などの教育が徹底されていました。この精神を受け継いで三股町には独自の「あいさつ」があります。登校時には感謝の心をもって校門で一礼、授業前には心を落ち着けて黙想・座礼をします。また、無言清掃で学校を磨くとともに、心を磨くことを学びます。また、毎月3の付く日を「みまたの日」と定めて、「みまたの日」には三股の文化・歴史などを給食時間に放送して郷土を愛するところを育てています。このように「あいさつ」「無言清掃」「郷土学習」など、「三股ならではの」の理念をもとに義務教育課程の9年間を通して、継続した一貫教育を行っています。特に、郷土学習については、未来を担う子どもたち

ふるさとを想い、大切に育てる心をはぐくむため、伝統芸能を各学校で練習しています。地域の人々が学校を通して教えており、子どもたちと地域の大人を結びつける役割を持っています。まさに「これが学校と家庭・地域社会が連携して育てる『文教みまたの伝統教育』であると言えます。

平成22年11月24日、「文教みまた子どもサミット」が開催され、町内全児童生徒（約2,600名）が三股町の



▶町には各地区に古くから伝わる棒踊りや奴踊りなどがあり、今も子どもたちへと継承されている。写真は梶山棒踊り。

伝統について話し合いました。その結果、文教三股の歴史と伝統をもとにした三股町児童生徒憲章が制定されました。

町では、三股町児童生徒憲章をもとにして、文教みまたにふさわしい子どもを育てることで、人間性豊かな文教のまちづくりに取り組んでいます。

また、最近では教育用コンピュータの更新、書画カメラや校務支援ソフトの導入など教育の情報化も進めています



▶三股町立文化会館の長期人材育成事業として始まった、小学生から高校生による演劇ワークショップ「みまた座」。9期生本公演の様子。

す。

そのほか、地域における創造的で文化的な表現活動のための環境づくりに特に功績のあった公立文化施設として、三股町立文化会館が財団法人地域創造による「平成24年度地域創造大賞（総務大臣賞）」を県内で初めて受賞しました。平成13年の開館以来、劇団こぶく劇場と連携し、「戯曲講座」「演劇ワークショップ・みまた座」「まちドラ」「開館10周年記念演劇・おはよう、わが町」などを実施し、活力ある地域づくりに貢献したことが評価されました。ここにも、「文教のまち・みまた」の意気を受け継がれています。

## アスリートタウンみまた

さらに、近年では、スポーツ振興にも力を入れており、生涯スポーツや競技スポーツ等、様々な面からスポーツ振興を図るため、平成22年度にスポーツ振興計画を策定しました。町民一人一人が、健康で充実した生涯を送ることやスポーツ水準の向上を目的に、子どもも高齢者も、町民誰もが、それ

ぞれの体力や年齢、身体、目的に応じた身近な地域で「いつでも、どこでもいつまでも」スポーツを楽しむことができるよう「アスリートタウンみまた」の創造」をスローガンに掲げ取り組んでいます。特に、毎年夏に開催する「みまた町民総合スポーツ祭」では、自治公民館対抗のソフトボールをはじめ、グラウンドゴルフ、パークゴルフ、卓球、テニスなど、計16種目を行い、千人を超える参加者が熱戦を繰り広げています。また、誰でも参加できる持



▶ことしの町民総合スポーツ祭の様子（新弓道場にて）。

久走とウォーキングの大会として「チャレンジRUN&ウォーキング大会」も開催しています。持久走の部には、男子の部、女性の部、ファミリーの部など5つの部門を設定し、それぞれにレースを開催、ウォーキングの部門では三股町の自然や景観を楽しみながら参加者全員が7kmの道を歩きます。さらに、同時開催する「地区対抗駅伝」では、9つの地区の小学生から一般までの代表選手が力走し、地域間および世代間の交流促進が図られています。ハード面においても、平成24年に10人立ちが可能な南九州でも有数の広さを誇る県産材をふんだんに使用した町弓道場を新設するなど、「アスリートタウン三股」の基盤づくりを進めています。

## 自立と協働で創る 元気なまち三股

平成の市町村合併が進められる中、本町は自主自立の道を選択しました。自立の道は決して平坦なものではなく、経済・産業の環境変化、価値観の多様

化、地方分権の進展や地方の財政状況の悪化など町政を取り巻く環境もまた著しく変化しています。このような社会環境の変化や町民の要望を踏まえ、さらに、より良い地域づくりのために、町民と行政、企業、各種団体などのさまざまな活動主体が互いに連携し、協働の意識をもつことが不可欠だと考えます。このようことから、町では「自立と協働で創る 元気なまち 三股」を実現するため、町役場と町民がお互いに創意工夫しながら連携協力してまちづくりを行うルールとして「三



▶「クリーンアップみまた」で清掃作業を行う参加者の皆さん。

股町まちづくり基本条例」を制定し、平成25年6月から施行されました。現在も、町民一人一人がまちづくりの主役として、皆でつくる「まち」を目指してさまざまな活動をしています。

毎年7月には町内一斉の環境美化活動である「クリーンアップみまた」を実施しています。個人で参加される方のほか、ボランティア団体、各種民主団体、スポーツ少年団などが参加し、町内を流れる沖水川の河川敷や公園のごみ拾いなど、各地域で清掃を行っています。平成25年度も7月7日に開催し、67団体950名が参加し、約5トンものごみが集められました。1回の清掃作業で、毎回数トンのごみが集められ、参加者のごみの多さに驚くとともに、力をあわせて取り組むことの大切さを感じing一日となります。

また、町内には多くの自主活動グループやボランティアグループがあります。

上米地区の20代から30代の若者を中心に構成される「上米棒踊り若武者会」は、三股町の桜の名所である上米公園に冬にも「サクラ」を咲かせようと

▶子育て支援センターにて読み聞かせを行う「読み聞かせボランティアグループおきな木」



平成20年よりイルミネーションの設置を行っています。「地域を盛り上げた」という若者たちの一途な想いで始まったこの試みは、地域の協力で徐々にイルミネーションが増え、輝きを増しています。

子どもを狙った犯罪が増える中、学校のみならず、地域全体で子どもを見守り、安全を確保しようという動きは全国的にも広がりをみせる中、勝岡小学校地区みまもり隊は平成17年に発足しました。以来、児童の登下校時の見守り活動を続けています。同地区から始まったこの活動は、現在、町内の小

学校区全6校区で取り組まれており、町内の防犯意識の高揚に役立っています。

読み聞かせを通して地域の人々とのコミュニケーションを図ることを目的として結成された「読み聞かせボランティアグループおきな木」や、町の中心地である「みまたんえき（三股駅）」周辺地域に賑わいを再生させよ



▶三股駅周辺地域にぎわいを再生させようと集結したグループ（通称「えきにぎ」と公募したボランティアで創りあげた「キャンドルナイト♥みまたんえき」。昨年は8,000個のキャンドルに明かりがともった。

うと様々な想いをもって結集した有志たち（通称「えきにぎ」）、独居高齢者や認知症高齢者を見守る近隣の商店や宅配サービス事業者、急な残業や保護者の病気など少しの閑子どもをみてほしいという時などに住民同士で助け合う「ファミリーサポートセンター」など、どのグループも互いに認め合い支えあう地域づくりに貢献しています。

行政としても、毎年、地区別、自治公民館別に町民の皆さんに集まってもらい、座談会を開催しています。町の重点施策、各事業概要の説明、地域の実情を把握しながら、意見・提言を聴くことで、町民と行政が一体となったまちづくりに取り組むよう進めています。

今後とも「自立と協働で創る 元氣なまち三股」をスローガンに、町民の皆さまとの対話・交流を行いながら、町民目線で町民参画のもと、町政に果敢に挑戦してまいります。

三股町長 木佐貫 辰生

（平成25年8月26日付第2851号）



ひがしかわちょう  
北海道 東川町



# 「国道、鉄道、上水道」がないが 「北海道」がある ふるさと納税を活用した「ひがしかわ株主制度」〜写真の町「東川町」

## 1、はじめに

3つの道「国道、鉄道、上水道」がないが、他の都府県には絶対にならない「北海道」があると自慢しているのが、写真文化首都を宣言した「写真の町」東川町である。中心市街地から車で旭川空港へ10分、旭山動物園へ15分、北海道と東北地域で第3の人口を抱える旭川市へ30分、北海道最高峰大雪山旭岳（2291m）へは40分、と北海道の中でも最も条件の良いところの位置していると考えている。北海道で3つの道がなくと聞くと、馬と鹿がらしかいのではないのでは（これでは本当に馬鹿しかない）と想像する人もいるようだが、ここ10年間で350人程度増え、現在は人口約7,900人である。（別表1人口の推移参照）

## 2、「写真の町」宣言

昭和60年、元町長中川晋治と議会は「写真の町」条例を制定し、写真文化と国際交流を通じて、世界に開かれた自然と文化が調和し、潤いと活力に満ちた町づくりを目指して「写真の町」



▶国際写真フェスティバル授賞式

を宣言したのである。以来、写真の町の証として国際写真フェスティバルを、また平成6年からは全国の高校生を対象とした写真甲子園を実施してきている。この間、写真文化に関わる企業関係者や写真関係者との人脈形成が図られてきている。そして、平成26年3月には、写真文化と世界の人々を繋ぐ役割を担うことを決意し、「写真文化首都」を宣言した。

### 3、単独自立への道を選択

平成14年から16年頃にかけて合併

の議論が広く展開されていたが、東川町は平成15年に単独自立の道を選択し、「受身姿勢」から「積極姿勢」に意識を変え、町の素晴らしい条件を生かした取り組みがスタートしたのである。公務員は評論家ではなく、住民福祉向上を実現する立場で何をするか問う自覚が必要と、自らの意識を変え(Change)、目標に向かって挑戦する(Challenge) 積極的姿勢をもち、好機(Chance)を逃がすことなく施策の実現に当たる、USIの「Change Challenge Chance」の「動」精神で頑張っている。この



▶大雪山の主峰「旭岳」



▶田園風景

◀君の椅子プロジェクト  
(椅子は2012モデル)



よつな動きの中で、君の椅子プロジェクト、ユニークな婚姻届(後述)、学校の木製の椅子と机、子育て支援環境の充実、地域コミュニティ活動の支援、Montbelの誘致などが具現化している。また次代を担う子供たちが郷土愛を育む教育環境の整備を図る計画である。

### 4、ひがしかわ株主制度

(詳しくは「写真の町北海道上川郡東川町ホームページ」「ひがしかわ株主」をご参照)

◀平成24年4月にオープンした「Montbelショップ」

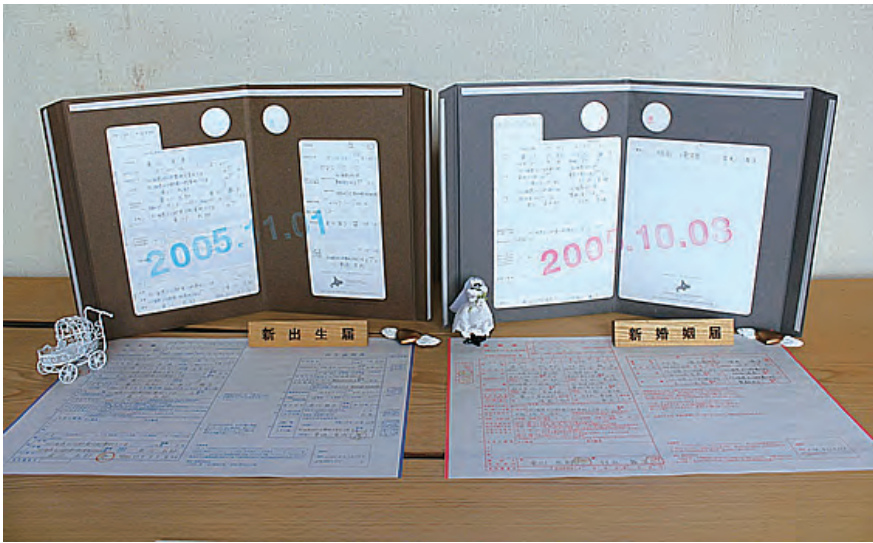


ア、動機「人口10,000人未満は合併?」

当時、市町村合併議論は人口規模の多寡によるものである。少子高齢化により日本全体の人口減少が進行する中で、農村地域での人口減少は一層の加速化が進み、農村の発展・成長は否定的であり、人口10,000人未満の町は合併しなければ地方交付税が大幅に減額され財政破綻すると捉えられていた。「大変だ、大変だ」と叫ぶだけで、問題解決に向けた動きが止まっていたのである。

町の歴史は明治28年に始まり、高々

▼本人の控えを家族の宝として保管できる、出生届(左)婚姻届(右)



120年ほどで、先人開拓者は私たちの想像を遙かに超えた厳しい過酷な労働環境の中、不撓不屈の精神で頑張り今日の礎を築いたのである。単に人口が少ない、地方交付税が減額されるだけの事由によって合併することが、本当に住民福祉向上に貢献することかと、疑問を多くの町民が持っていた。この

10,000人、この人口未満であれば強制的な合併となるのか、特例的な町村となり相当の権限はなくなるなどの情報が入ってきていたのである。町づくりの中での人口とは一体何であろうか。  
**イ、交流人口を人口に加算**  
 「写真の町」事業を担当していた職員は異口同音に「『写真の町』宣言20

年で築いてきた人脈がある」と常に言っていたのである。もし町の規模が人口10,000人を基準として示されるのであれば、人口の定義の中に交流人口を加えて抗弁することはできないだろうか。この交流人口を町民としてどのように定義するのか、かつ一定の町づくりを担う負担の証ができる仕組み作りを税務職員などへ指示していたのである。  
 町の人口目標を定住人口8,000人、今までの人脈などを生かした交流人口2,000人、

合わせて10,000人となるように考えていた。仮に「東川町さん、人口は10,000人未満ですよね」と問われた時、「いやいや、私たちには応援してくれる町民もいて10,000人です」と主張しよう。しかし、ありがたいことにこのような機会は来っていない。  
**ウ、ふるさと納税からの発想**  
 職員からはなかなか提案に至らなかった。それは交流人口の負担をどのような形にするのが良いのか、新税的なものか、協力金か、...などである。私も当時の総務省税務当局に「新税の可能性について訪問して直接教示を願いたい」と電話でお願ひしたところ、

「北海道庁へ行って相談してくれ、全国に3,000以上の市町村があり、いちいち相談に付きあえない」という返事が返ってきたが、当局は実に冷たいところだと感じた。数年の検討を経て、平成21年に「ふるさと納税」制度がスタートし、若手職員の中にプロジェクトチームを編成させ、一気に実現化に向かうことになった。  
**エ、なぜ「ふるさと納税」ではなく「ひがしかわ株主」**  
 町長就任中(平成17年)、職員から東京の民間会社へ研修に派遣してほし

いと申し出があり、3か月間派遣したことがあった。様々な刺激を受けてきたようである。

研修後、東京での深夜TVを見て平成18年には全国初となる婚姻届や出生届について本人の控えを家族の宝物として保管できる仕組みを実行した。デザイナーの藤本やすし氏と提携して実現したものである。話が外れたが、

研修中に民間会社の株主優待なるものを学び、行政などの中にも応用できないか考えているようであった。若手職員と議論の結果「ふるさと納税」を「ひがしかわ株主」と呼び、展開することに決定したものである。「税」という言葉は一般の人々にとって強制力のようなものをイメージし、自主性を感じないが、「株」は投資によって投資先の成長や発展が楽しみになり、参加している意識も高まるという発想で、遊び心がありユニークである。

## 5、投資した使途

投資いただいたものを何に充当するかが議論となったが、最終的に直接町民の福祉向上に寄与するものではなく、株主や国民の便益を向上させるものを優先し、その結果として町民の福



社向上に寄与するものとした。「ひがしかわ株主条例」を平成20年6月議会で議決し、特別町民の登録と投資による事業区分を次の通り定めている。

- (1) 写真の町振興事業、(2) 子ども連の育成事業、(3) 自然景観と環境事業、(4) 人に優しい交流事業

具体的には(1)関連では「写真アーカイブス事業」と「オーナーズハウス建設事業」で、オーナーハウスは株主などが東川町に家族や友人などと滞在できるハウスの整備である。(2)では

大雪山でクロスカントリースキーや複合競技に頑張っている「オリンピック選手育成事業」である。(3)と(4)ではEcoプロジェクトとして「水と環境を守る森づくり事業」では株主との交流を図りながら大切な水資源を保護するための植林活動を展開し、また「自然散策路整備事業」として国立公園内の散策路の整備を行っている。また平成23年からは平成26年に東川町が開拓120年を迎えることから記念事業を追加し、北海道が生んだ世界的な彫刻

家安田侃作品の展示実現に向けての整備を図ることにしている。さらに株主と地元農業者を結ぶオーナーズファームも始まっている。

## 6、今後の展開

現在、株主と投資額は別表2の通りであるが、2,000人の目標達成と合わせて海外の人々も特別町民とするような取組みも検討が始まり、既に数名は株主となっている。

本町では専門学校などと提携してアジア地域の人々を対象とした「日本語と日本文化体験学校」を開設しており、当該学生などとも連携したネットワーク化による観光振興を目指している。ローカルな人々との交流を重視したユニークな国際観光園づくりを目指したいものである。

「写真の町」東川町長 松岡 市郎  
(平成24年7月16日付第2807号)

別表1 人口の推移  
(住民基本台帳  
各年5月末登録者数)

年度	人口
1972年	7,875人
1982年	7,813人
1992年	7,192人
2002年	7,558人
2012年	7,898人

▶水資源を確保するための植林活動



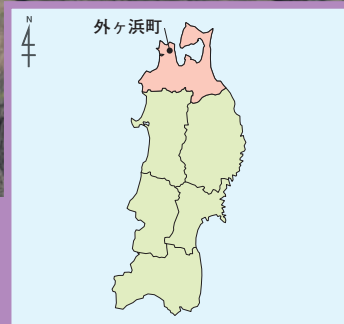
▲株主と地元農業者を結ぶオーナーズファーム

別表2 ひがしかわ株主登録者数

年度	登録者数	投資額累計	
2009年	415件	11,651,000円	3月末
2010年	881件	22,645,000円	3月末
2011年	1,276件	29,867,000円	3月末
2012年	1,867件	45,126,000円	5月末



そとが はま まち  
青森県 外ヶ浜町



# 「風の岬・龍飛」での挑戦 〜津軽半島彩北端龍飛ルネッサンス推進事業〜

## 外ヶ浜町の概要

外ヶ浜町は、平成17年3月28日に、「旧蟹田町」、「旧平舘村」、「旧三厩村」が合併した町で、青森県津軽半島の北東部に位置（東経140度38分、北緯41度2分）しています。

東は陸奥湾に面し、西は中山山脈を隔てて北津軽郡の市町村が隣接。南は逢田村と隣接し、北は今別町をまたいで本半島最北端の三厩地区があり、津軽海峡を隔てて北海道と相対。東西約27km、南北約25km、総面積229.92km<sup>2</sup>。津軽国定公園龍飛崎をはじめ、風光明媚な景観の観光資源や固有の伝統文化行事等を受け継ぎ、海と山と川の恵みとともに生きる町です。

## 龍飛崎における 交流人口対策の課題

龍飛崎は、平成22年に全線開通し



▲龍飛崎灯台

た東北新幹線新青森駅のある青森市をベースとした津軽半島周遊ルートで欠くことのできない観光エリアです。風光明媚で雄大な自然景観を誇り、県内有数の観光地に優るとも劣らない、本県を代表する観光スポットという高い評価をいただいています。昭和50年3月に国定公園に指定されて以来、青函トンネル基地のほか義経渡海伝説や演歌の名曲「津軽海峡冬景色」に歌われるなど全国的な知名度も高くなりまし

外ヶ浜町町章



た。しかし、青函トンネル工事の完成とともに人口が激減する等、大きな環境の変化にさらされ、昭和63年のJR津軽海峡線開業からわずか20年足らずで、交流人口対策面で様々な課題を抱えています。

そこで、東北新幹線新青森駅開業及び来たるべき北海道新幹線（仮称）奥津軽駅（隣町・今別町）の開業が新たな交流人口増加の絶好の機会と捉え、「風の岬・龍飛」で新たな取り組みを行っています。

## 1 龍飛嶺での新エネルギーへの挑戦

### (1) 風力発電

「豊かな自然環境と共生するまちづくり」と「地域特性を活かした産業が躍動するまちづくり」を掲げ、新エネ



▶(株)津軽半島エコエネの風力発電機

ルギー事業を展開しています。当町の第三セクターである(株)津軽半島エコエネが事業主体となり、平成23年6月には、年間平均風速が約10m/S以上という「風の岬・龍飛」の地域資源である強風を生かして、自然環境と共生する「竜飛風力発電所」が2基完成しました。新エネルギー事業の推進は、これから、ますます高まる電力需要や温室効果ガス等の影響による地球温暖化などの環境問題を解決するために重要であるほか、地域の活性化や産業の振興、環境教育の充実につながっていく可能性を多いに秘めています。

(株)津軽半島エコエネでは、青森県内の地元企業としては初めて大規模商業発電事業（2千kW以上）に参入しており、「竜飛風力発電所」に今回導入した風力発電機の検証を進めながら規模拡張を視野に入れ取り組みを模索しています。

### (2) 小水力発電

龍飛嶺といえば、昭和63年に開通した本州と北海道を結ぶ「青函トンネル」の工事現場の舞台となったことは有名な話です。この青函トンネル内の湧水は、JR北海道が地上へくみ上げて排水しています。町では、

その排水を利用して、「龍飛地区小水力発電所」を建設し、新エネルギーの新たな創出に取り組んでいます。発電された電力は、周辺にある龍飛崎シーサイドパークのバンガローやケビンハウスの電力として自家消費されています。

## 2 龍飛嶺での文化遺産への挑戦

龍飛嶺は、実は文化面でゆかりが深い場所です。津軽半島最北端という旅情を掻き立てる景観から、多くの観光客が訪れます。吉田松蔭詩碑や大町桂月文字碑のほか、歌手・石川さゆりの「津軽海峡冬景色」で全国的に龍飛嶺の地名が知れ渡るようになったことから、「津軽海峡冬景色歌謡碑」が既



▲龍飛地区小水力発電所

に建立されています。

平成20年に、観光客と地元の人が交流できる拠点施設として、龍飛岬観光案内所「龍飛館」を整備しました。

『今夜は、この本州の北端の宿で、一つ飲み明かそうじゃないか。』「こりゃ、いかん。今夜は、僕は酔うぞ。いいか。酔ってもいいか。」「かまわないつも。僕も今夜は酔うつもりだ。ま、ゆっくりやろう。』（太宰治 小説「津軽」より引用）と、太宰一行が宿泊した宿として知られる「旧奥谷旅館」（平成11年廃業）が、土地・建物の所有者から町へ無償譲渡され、「龍飛岬観光案内所 龍飛館」としてリニューアルオープンしました。

この宿は、かつて、観光客はもと



▲石川さゆりの「津軽海峡冬景色」歌謡碑



▲龍飛岬観光案内所「龍飛館」

より、数多くの作家や画家が逗留した宿として知られており、宿帳には津軽三味線の大家・高橋竹山のほか、太宰治（作家）、棟方志功（版画家）等の名が記されています。

展示品として、多くの著名人がしたためた色紙や作品が展示されているほか、太宰治が小説「津軽」執筆の折、親友N君と投宿した部屋を復元公開しています。

### 3 龍飛岬でのイベントへの挑戦

#### (1) 龍飛海峡まつり

津軽海峡の本マグロは、龍飛岬沖が最高の漁場となっています。全国的



▶龍飛海峡まつりポスター

なマグロのブランドとしては、青森県の「大間マグロ」は言わずと知れた存在であります。ここ外ヶ浜町で水揚げされる本マグロも、味は負けないものと目負しています。ブランド化で大事なことは、まずは地元の人が地元食材に愛着を持つことが大事です。津軽海峡の本マグロは、水揚げ後、築地市場へ出荷され、なかなか地元の人々の口に入らないという現状を踏まえ、「龍飛海峡まつり」(9/23開催)を企画し、マグロ解体ショーを行いました。龍飛岬は、観光客も多く訪れることから、町内外の人に津軽海峡の海の恵み是非味わって欲しいものです。

地元漁協をはじめ、関係団体等との連携を深め、龍飛ならではの地元産品で提供できる新鮮な山海の幸を活かした食材メニューの開発や、津軽海峡本マグロをはじめとする地元水産物のブランド化など新たな販売促進及び販路拡大に努めています。

#### (2) 太宰治の歩いた道を守る

##### 「龍飛・義経マラソン」

平成24年で4回目を数えるマラソン大会は、単なる健康増進イベントとしてではなく、外ヶ浜町の観光資源PRを含めた外ヶ浜町の知名度向上を目指して開催しています。景勝地・龍飛岬をスタートし、義経渡海伝説の舞台となった三厩地区の歴史・ロマンがあふれる風景を走りながら楽しんでもらいます。このイベントでは、町民が総出でおもてなし交流活動を行っており、伝統芸能である「三厩荒馬」や郷土料理「若生コンブのおにぎり」を食していただくことで、外ヶ浜らしい心のもったおもてなしが人気で、少しずつですが参加者も増加してきています。



▲龍飛・義経マラソン ゴール風景

### 最後に、外ヶ浜町からメッセージ

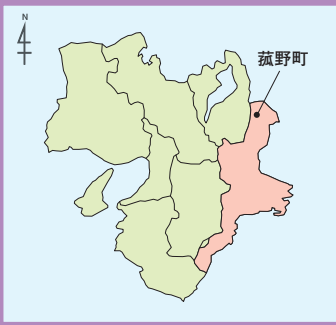
本レポートでは、主に龍飛岬を中心に新たな挑戦をメインに記述させていただきました。龍飛岬以外にも多くの観光資源が皆様をお待ちしております。

美しさだけではない、楽しさだけでなく、外ヶ浜の旅は「風趣(ふうしゆ)」の旅情。味わうほどに趣きが増す、こころ旅。いろんな外ヶ浜町の「風」に吹かれながら、気ままな旅を感じてください。ご来町を、心よりお待ちしております。

政策推進課班長 坂井 克仁  
(平成24年9月24日付第2814号)



▲青函トンネル記念館



こも の ちょう  
三重県 菰野町

# 自然と調和したまち 菰野町

# 持続可能なまち

## 菰野町の概要

菰野町は、三重県の北部に位置し、南と東は四日市市、北はいなべ市、西は鈴鹿山脈の分水嶺を境に滋賀県と接し、町の面積は東西13km、南北10・6kmの107・28km<sup>2</sup>であり、面積の約4割にあたる西側部分は、鈴鹿山脈の主峰、御在所岳を有する鈴鹿国定公園に指定されています。そこは、国指定の特別天然記念物である二ホンカモシカの生息地であり、県指定の天然記念物であるブナの原始林が広がるなど、学術的にも貴重な動植物が多数生息する生物多様性の宝庫となっており、平成22年に愛知県・名古屋市中で開催された生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）のエクスカージョン（体験型の見学会）の場としても選ばれています。鈴鹿山脈を源流とする流れが集まり朝明川、三滝川という2つの河川と

なり、平野部にゆるやかな丘陵地と扇状地を形成しています。三滝川流域には菰野・千種・鶴川原地区があり、朝明川流域には、朝上・竹永地区が広がり、5地区で町を形成しています。人口は、約41,000人、世帯数は約15,000世帯の自然豊かな町です。その豊かな土壌には美しい田園や農村集落が広がり、まさに日本の原風景ともいべき景色を四季折々の変化の中で体感することができます。

## COP10関連事業を契機として

菰野町では、平成22年秋に、愛知県名古屋市中で開催された生物多様性条約第10回締約国会議、いわゆるCOP10に関連した事業を実施しました。これは、当町が都市近郊にあつて豊かな自然を有し、また町民の環境保全意識が高い町として、COP10の開催に合わせて関連事業を誘致できれば、当

菰野町町章





▲里山体験 水辺(ため池)

町の豊かな自然を世界の人々にアピールすることができ、当町のまちづくりの理念にも合致し、さまざまな効果が期待できると考えて取り組みました。こういった活動実績も踏まえ平成23年度からスタートした第5次菰野町総合計画の基本理念としても「自然と調和したまち 持続可能なまち」を掲げているところです。

具体的な取り組みとして、平成22年のCOP10前後に行われたアジアユース会議、国際ユース会議、COP10それぞれのエクスカージョン会場として、たくさんの町民ボランティアによる運営スタッフに支えられ、世界中から来町した若者に菰野町の豊かな自然に触れてもらうことができたことは、



▲里山体験 里山林

大変、有意義であったと思います。その効果を検証しますと、まず1点目は、町民の皆さんが身近にありすぎて忘れていた自然の大切さ、生物多様性の保全の重要性について、改めて気づいていただくことができたことです。2点目は、この菰野町は、先人から受け継いできた世界に誇れるすぐれた地域資源の宝庫であるという事実を知っていただくことができたことです。3点目は、こういった活動を積極的に情報発信することによって、菰野町の魅力を日本内外に情報発信することができたことです。そして、4点目は、COP10の関連事業終了後も国の天然記念物に指定されているシデコブシ群落の保全活動、あるいはホタル

の育成、外来魚の駆除活動など形は様々ですが、生物多様性の保全を意識した菰野町の住民の皆さんによる取り組みが確実に根付いている点です。言い換えると、このすぐれた自然環境の中にある地域資源を生かした人と人のかかわりをベースにした活動の大切さを再認識することができたことが、COP10関連事業実施による最大の成果であったと思います。

### ソーシャルメディアにやさしい町宣言

当町では平成24年5月1日、「ソーシャルメディアにやさしい町」を宣言しました。

インターネットの普及から20年近くが過ぎた現在、ツイッターやフェイスブックといったソーシャルメディアが情報流通メディアとして非常に大きな勢力となっており、当町でも公式ツイッターや公式フェイスブックページによる情報発信を開始しています。

町がソーシャルメディアに注目している点は、あらゆる人があらゆる機会に情報を生み出し、発信する可能性を有している点であり、つまり「口コミ効果」です。加えて、マスメディアや行政などが情報を発信(生産)し、町民の皆さんが受信(消費)するといった固定化された役割が取り払われつつあることも変化の特徴であると思います。

そこで当町では、菰野町に関係する個人や団体が、ソーシャルメディアを活用して、良質な情報をストレス無く発信できる環境をととのえることで、地域の魅力を広く「伝達・拡散」していただけるような町を目指そうという思いから、「ソーシャルメディアにやさしい町」を宣言しました。

具体的な取り組みとしては、町内の各イベント会場や施設において、ソーシャルメディア上でユーザーが所在地情報を共有する「チェックインスポット」登録を積極的に行ったり、携帯電話を手軽に充電できる充電スポットを「道の駅菰野ふるさと館」併設の食事処「マコモの里」に設置するなど、の施策を開始しています。しかしながらこのような施策よりも、まずはこの「宣言」の発信そのものにより、地域情報の拡散を担うユーザーの皆様を意識を持って集っていただくきっかけをつくったことが一つの大きな目的であり、成果であると考えています。

一方で、新聞やテレビなどのマスメディアや町広報紙などは、これまで



▲道の駅菰野ふるさと館に併設されているお食事処「マコモの里」に設置した充電スポット

の歴史の中で築き上げられた情報発信ツールとしての社会的使命や情報の信頼性の高さといった特色があります。今後も、その特色を活かしたマスメディアなどの積極的な活用に変わりはありませぬ。

町としては、情報の生産と消費の関係が大きく変化することに着目し、そのメディアの特性を活かしながら、町民の皆さんや観光客の方々に菰野町の良さをどんどん情報発信してもらうことを期待しています。

### C級グルメと特産品開発

菰野町では、農業と観光の連携により地域の活性化を図るため「C級グルメ」と称して文化(culture)、地域(community)、継続(continuation)の意味を含み込んだ特産品づくりに取り

り組んでいます。

#### ★マコモ

菰野町の町名の由来といわれるイネ科の多年草のマコモについては、商工会を中心にブランド化を図る様々な関連プロジェクトが立ち上がり、マコモ製品の伊勢神宮奉納やマコモを使用した料理コンテストなど町民の皆さんのご努力により取り組みの幅が広がってきています。ユニークな取り組みとして、耕作放棄地対策として牛を放牧し、牛が雑草を食べることで田んぼを再生し、そこにマコモを栽培しました。

秋には、農家の方と地元の園児たちが協力して収穫し、それを調理して食事をを行うなど世代を越えた活動が盛んに行われています。そして、平成24年10月4日・5日には、これまでの菰野町の活動実績を評価いただき、全国のマコモ生産者や研究者など関係者が一堂に会して情報交換を行う第7回全国マコモサミットを開催しました。

#### ★かやく飯

菰野町では、昔から豊作をお祝する祭りで振舞われている「ごんぼ飯(かやく飯)」に着目し、特産品化する取り組みを進めています。その中で、ごんぼ飯は、完全手作業で作付けられているので大変な労力と時間を要し

ますが、自分が生産したごぼうが観光客へ提供されることが励みとなり、高齢者の生きがいづくりにもなっています。具体的には、ごぼう生産者組合が湯の山温泉内にある宿泊事業者と連携して「菰野かやく飯」を商品開発し、宿泊する観光客等に提供しています。この「菰野かやく飯」は、ごぼう、鶏肉、油揚げ等が入っており、鶏肉と調味料は県内産、その他の食材はすべて町内産野菜を使用し、「道の駅菰野ふるさと館」においても持ち帰り用として販売しています。

#### ★関取米

菰野町発祥の「関取米」は小粒良質米であり、すし米に好適であったことから、関東地方をはじめ全国的に有名となりましたが、次第に栽培されなくなりまし

た。しかし、三重県農業研究所で種子保管されていたわずかなもみ種を入手し、復活栽培させながら、生産者や酒蔵、酒屋、飲食店などが連携して日本酒や寿司メニューの開発に取り組んでいます。平成23年10月には、三重県との共同研究協定を締結し、さらに専門的な見

地から品種改良や栽培技術の確立を図ることとしています。

ここに紹介した「C級グルメ」の取り組みの特徴は、以前は別々に活動していた町内の農業生産者、商工業事業者、観光事業者、行政が例えば「マコモ」をキーワードにして、それぞれが得意分野を生かしながら、お互いに知恵を出し合い、連携しながら徐々にはありますが、着実に前進していることです。

「C級グルメ」の取り組みは、菰野町への愛着を出発点としてのたくさんの方を巻き込みながら継続的な取り組みになっていることが町の活性化に繋がっていると思います。

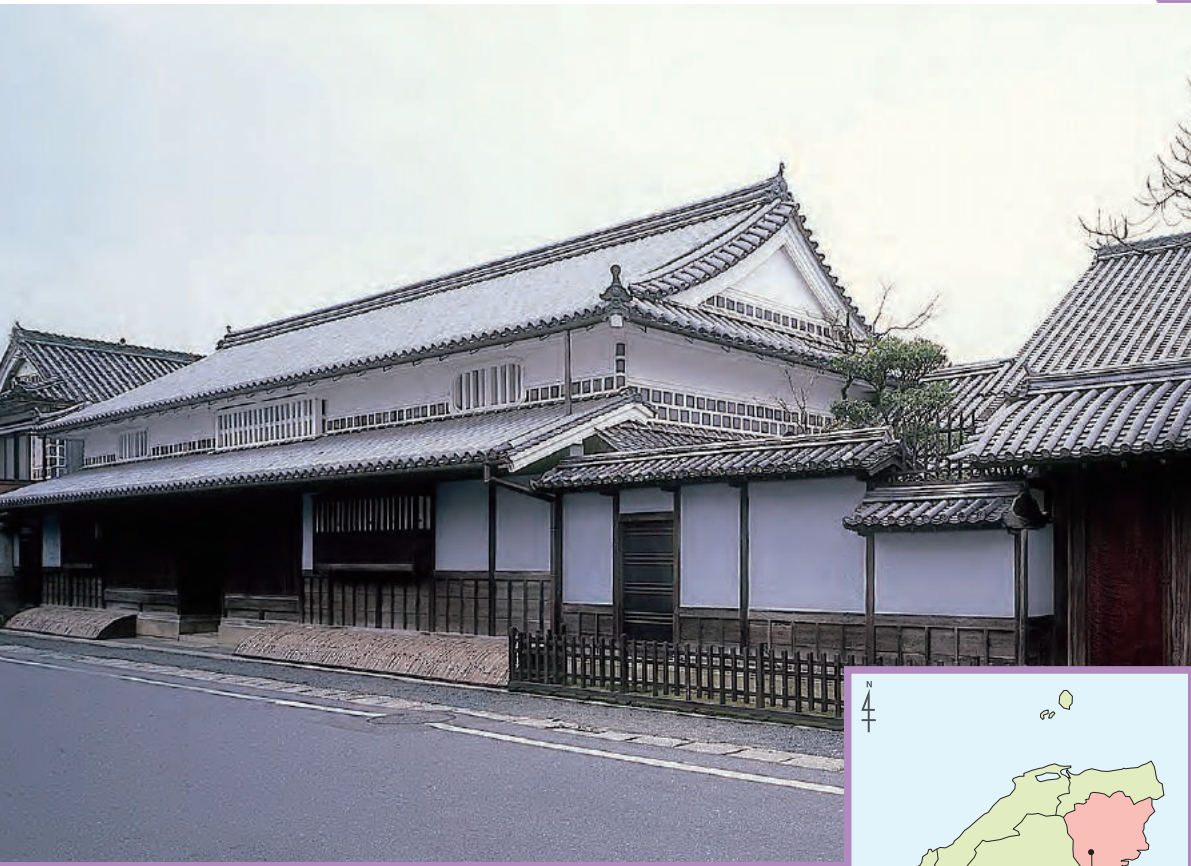
菰野町 企画情報課

(平成24年8月6日付第28009号)



▶第7回全国マコモサミットのパネルフレット

# 旧山陽道宿場町 矢掛町 ブランド化と地域活性



岡山県 やかげちょう  
**矢掛町**



▶脇本陣なまこ壁



## 歴史と文化のまち やかげ

矢掛町は、岡山県の南西部に位置し、人口15、200人を擁し、面積90・62km<sup>2</sup>、瀬戸内海気候に属し、温暖な気候と豊かな自然に恵まれ、災害の少ない住みやすい町です。

▶旧矢掛脇本陣高草家



歴史は古く、奈良時代に右大臣として活躍した吉備真備公ゆかりの地であり、江戸時代には旧山陽道の宿場町として人・文化・産業などの要衝として殷賑を極め、往時の本陣・脇本陣の双翼が国の重要文化財に指定され、さらに健全な状態で旧姿を留めているのは全国でも唯一矢掛町のみです。幕末

やかげ観光大使



「やかっぴー」



に天璋院篤姫が江戸へ嫁ぐ際、当本陣に止宿された文献が数年前発見され、耳目を集めました。

こうした歴史的資産が今なお現存し、深い歴史と多様な文化を滲えたる重厚な町として、平成の大合併でも単独の路線を選択し、木目細やかな町づくりを推進しています。

しかしながら、少子高齢化社会の到来により本町でも深刻な人口減少が顕著で、平成22年度には過疎地域として指定を受けた経緯があります。爾來、この過疎指定を前向きに受け入れ、過疎債事業を積極的かつ有効的に活用し、多元的な事業を推進しています。

### 少子化対策と定住促進

平成18年に町長に就任して以来、まず人口増を伴う少子化対策が、喫緊の課題と捉え、矢継ぎ早に事業を実施しました。乳幼児医療費の助成や保育料の軽減、更には若者の定住を目指す住宅団地の造成など、ソフトハード両面から対策を推進してきました。特に平成23年度からは若者を対象に定住をさせる方に新築助成金を120万円支給する制度を創設したところ、1年で60名を超える多くの町外の方が町内に移

住をして来られており、一定の成果は上がっています。

### 産業振興と企業誘致

産業振興対策としては、行政基盤の根幹である財政の観点からも、企業誘致が町税増収に繋がることから、就任直後からトップセールスを展開し、リーマンショック以後の景気の停滞時期があったにも拘わらず、20社を超える誘致を進め、安定行政への道のりを歩んでいます。

### 矢掛町ブランドの認定

自然豊かで歴史のある本町において、以前から工芸品や食品などの特産品はあったものの、矢掛町全体として統一的特産品の指定や、販路の特定などはありませんでした。そこで、矢掛町として数々ある特産品を矢掛町ブランドとして認定し、その発掘とPRを兼ねて、またブランド化した特産品の販路の確立を目指し、39品目を認定したものです。これにより各出展者の意識にも変化がみられ、官民が一体となった矢掛町の売り出しを展開しております。また町内にある水車の里フ

ルートピアや農協矢掛市場の青空市きらりでも取り扱いをしております。

### 安心・安全のまちづくり

本町のような中山間地域においては、商店やスーパー等が少なく、また街路灯防犯灯も非常に少ないこともあり、特に中高校生の夜間時の通行が暗く危険だという声が多くありました。そこで、環境に優しく消費電力の少ないLED照明を町内に、5年がかりで千数百か所を約1億円をかけて設置したところ、夜間でも明るくなり安心して通行できると好評を得ています。

### 環境対策

また環境対策としては、個人住宅用の太陽光発電設備への助成を国・県と共に進めると同時に、役場や文化施設並びに各学校等の公共施設に太陽光パネルを設置しております。この度、この二酸化炭素排出削減に対し、国内クレジット認証も受けております。加えて、電気自動車を早くから導入し、平成24年度は7地区ある公民館に1台ずつ三菱自動車の電気自動車ミープを配備したところです。このこ



▲矢掛町ブランドに認定された特産品

ともあり、先日三菱自動車の益子社長がわざわざ当町までお礼に来られ、地域経済の発展や町の特産品について会談し、東京本社で特産品の臨時販売店が実現しました。

### 予防医療の充実

また、予防医療の充実、健康づくりによる介護予防・福祉の充実も、就任当時から積極的に推進しており、特定健診の受診率の向上が、町民の健康維持の第1歩と捉え、推進員を委嘱し、戸別訪問により健診を訴えていきました。その結果、平成23年度の健診受診率は54%で、県上位で毎年推移しています。

◀「郷土美術館」町木の赤松を使った伝統工法による建物



◀全国で初めてグラウンド、テニスコートにLED照明を設置



## 教育行政

教育行政では、早くから電子黒板を全教室に、また生徒用のパソコンを180台購入配備し、授業で生徒全員が利用できるよう、教育環境の向上を推進しています。加えて、1中学校7小学校の耐震化並びに大規模改修も完了しており、安全安心して教育を受けることが可能となっています。

また昭和57年から造成を続けてきた総合運動公園も間もなく完成します。フットサル兼用のテニスコートや、子ども広場など整備を進め、特に全国で初めて多目的グラウンド並びにテニス

コートにLED照明を建設中であり、話題となっています。

## 協働のまちづくり

しかし町づくりの基本は、協働のまちづくりです。当町でも、数々の団体や個人がボランティアで役割を担って下さっています。特に、当町を東西に横断する一級河川である小田川の河川敷は、県の浚渫などで何年かに一度、雑木は伐採するものの、数年すると元の木阿弥となっていました。そこで、最初の伐採は当町が県費で行い、その後の維持管理や草刈りは、町が購入した機械を活用し、地元の住民がボラン

ティアで実施するというスタイルが、ほぼ全域で定着し、今では以前と見違えるほどきれいな河川に生まれ変わっています。岡山県アダプト制度での町内組織数は89団体、町ヒカ制度での組織数は80団体を数え、協働のまちづくりの成功例と言えます。

また、もう一つの例として、平成24年度から地域に主体性を持たせた自治協議会補助制度を制定しました。産業・ものづくり・観光の振興や、健康・福祉・健全育成推進、芸術・文化・スポーツ・生涯学習、更には、環境保全や地域の安全安心事業等、地域で企画実施する事業に対して、ソフト事業は10割以内、ハード事業は9割以内で補助する制度です。自治会から申請を受け、事業採択は自治協議会の中で決定したものを町長が補助を交付する制度となっており、既に4件の事業が住民主体で展開されています。

こうした人づくりが町づくりという観点からも、町民一人ひとりが明るく楽しく積極的に町政に関心を持ち、できることは町民自らが実行する町づくりを目指すことで、矢掛町という町が燦然と輝く町になるものと期待しております。

これからの日本社会は、予測不可

能なことが起こりうる時代に突入しております。地方自治体もそうした不測の事態に備えるべく、危機管理も含め俯瞰的な立場に立ち、重層的な事業を推進していかなければなりません。そのためにも町民や議会、更には民間企業などと連携を図りながら、中長期的な展望を持ちながら鋭意努力して参ります。

平成26年(2014年)、合併60年を迎えます。今後も「やさしさにあふれ かいてきで げんきなまち」の実現に向け、住民と共に更なる発展を目指し取り組んで参ります。

矢掛町長 山野 通彦  
(平成24年11月19日付第28820号)



▲宿場まつり「大行列」

あしきたおこりづつ  
▼「葦北御郡筒」の伝統文化 江戸時代に葦北一帯の守備に当たっていた火縄銃鉄砲隊



あしきたまち  
熊本県 芦北町

# 「個性の光る活力ある まちづくり」を目指して くすべでは21世紀を担う子どもたちのために

## 芦北町の概要

芦北町は、熊本県の南部に位置し、不知火海と九州山地の豊かな自然に恵まれた風光明媚な土地で、昔から九州南部の交通の拠点として発展してきました。

東西に16・6 km、南北に25・4 kmの総面積233・81 km<sup>2</sup>を有しており、すが、平地が少なく、町土の約8割が山林となっており、典型的な中山間地域であります。

昭和30年に佐敷町、大野村、吉尾村が合併して「葦北町」となり、昭和45年に葦北町と湯浦町が合併して「芦北町」となりました。そして平成17年1月1日に田浦町と芦北町が合併し、現在の「芦北町」が誕生しました。

## まちづくり支援への取り組み

芦北町は、海や山、温泉など豊かな資源に恵まれており、各集落には、それぞれの特徴があります。その一つ一つの集落がその特色を活かした地域づくりをすることにより、点が線に、線が面へと広がり活力あるまちづくりへとつながっていきます。そんな、地域それぞれの特色を活かした「みんなが主役のまちづくり」を目指し、「芦北町まちづくり支援事業」を実施しています。

この事業は、町民自身の知恵や工夫を活かした行政区単位での取り組みについて、行政が協力・サポートする事業で、社会環境が変化し少子高齢化が進み、地域内コミュニティの希薄化などが見られるようになったことから、

芦北町町章



▶ 廃校のグラウンドに歓声が沸く「大運動会」



地域コミュニティを支援する目的で開始されました。大きな特徴として、事業費の一部の補助に併せて、全84行政区それぞれに職員を配置し、企画の段階から事業実施までのすべてをサポートしています。配置した職員は、その地区の一員として参加し、日ごろの業務で培ってきたノウハウを活かしてアドバイスや手助けを行います。地区の皆さんの輪の中に入って一緒に活動することから、地区にとつての身近な相談役として大変喜ばれています。また、行政区ごとに申請を行うこ

▶ 百年続く伝統文化「早苗振り」



とで、地域の特色を活かしたイベントなどが実施しやすく、地域コミュニティの活性化につながっています。いくつか例を挙げますと、ある地区では、地元で100年続く伝統文化「早苗振り」を写真や映像で保存し、後世に伝えようと、この事業を活用しています。また、ある地区では、小学校が廃校になり途絶えた運動会を復活したところ、町外や県外に行かれた方々も帰郷し、大勢の方が参加され、その中には首都圏から参加された方もおられたようで、地域の絆が一層深まりました。

## 国際交流への取り組み

このように、本事業は、各地域で行われる祭やイベント等にも活用でき、地域を盛り上げようと各行政区で様々な催しや取り組みが行われており、特色を持たせ、使いやすい事業にするこ

とで、町民主体のまちづくり活動の促進へとつながっています。

は、平成8年、芦北町国際交流協会の前身である「芦北町国際交流友の会」が始めたもので、町内では、佐敷小学校の児童がカンボジアについての学習をとおして、自分たちに出来る国際貢献とは何かを考え、チャリティーバザーを開始したことを皮切りに、町全体に広がっていきました。町内に6つ

芦北町では、急速に進展する国際社会に対応すべく、国際感覚豊かな人材を育成することを目的に国際交流事業を展開しています。

なかでも、芦北町国際交流協会と共催している「カンボジアに学校を贈る運動」では、内戦で教育環境が壊滅的狀態にあったカンボジアへ学校を贈るための募金活動に

町ぐるみで取り組み、現在、4校の学校を贈呈しています。この取り組み



▲ 国際交流事業「カンボジアスタディーツアー」

▼ 国際交流事業

「カンボジアスタディーツアー（トゥールスレン博物館での研修）」



ある小学校のうち中心校である佐敷小学校は、現在まで毎年チャリティーバザーを開催し、その益金を寄附しています。お隣の大野小学校では、募金米やサラダ玉ねぎを児童たちが栽培し、その販売益を寄附しています。また、この事業では、現地カンボジアへ子どもたちの派遣も行っており、学校を訪問して子どもたちとの交流、各種施設、JHP（カンボジアを中心に「学

校」や「教育」という観点から人道的な支援を行っているNPO法人、JICA（独立行政法人国際協力機構。日本の政府開発援助（ODA）を行う機関）などでの学習を行い、帰国後はその体験をレポートとしてまとめてもらい、報告会を実施し、子どもたちの国際理解の深化、そして、世界に視野を広げ、心豊かで健全な郷土愛を持つ青少年の育成に努めています。

また、カンボジアの学校の先生を町内の小学校に受け入れ、音楽など文化教育の研修を行っており、これまでに13名を受け入れています。

平成24年度は、ブータン王国からの研修生の受け入れも行い、芦北町が実施しているまちづくりに関する事業の研修を行いました。

さらに、「外国の地方公共団体の機関等に派遣される職員の処遇等に関する条例」を制定し、職員としての身分を保障しながら青年海外協力隊員として発展途上国へ派遣しています。これまで3名の職員がその適用を受け、それぞれニカラグア、ボリビア、ガーナに赴任し、村落開発などの業務に当たっています。

このほかにも、英国派遣事業や国際交流員の招へいなど、国際感覚豊かな人材を育成するために、様々な事業を展開しています。

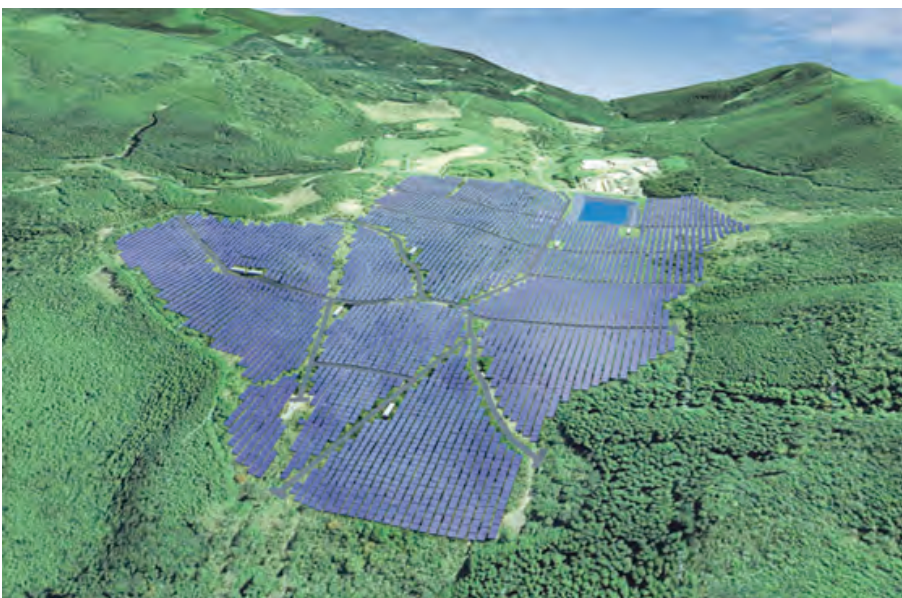
再生可能エネルギー  
メガソーラーの誘致

大規模太陽光発電所（メガソーラー）誘致事業は、新エネルギーや省エネルギーなどの取り組みを積極的に推進し、経済の発展や農山漁村の保全などを目的とする「熊本県総合エネルギー計画」の一環として、取り組みを行いました。

本町では、町有地である「矢城牧場跡地」「女島埋立地」の2ヶ所について、熊本県を通じて、公募を行った結果、多くの事業者が現地視察を行い、事業実施への可否についての検討を行いました。その後、現地視察を

行った事業者に対し事業企画提案書の提出を求め、町として選定委員会を設立し、事業計画・経営能力・地域貢献及び事業への取り組み姿勢・意欲面などを厳正に審査のうえ、それぞれ事業者を決定しました。

「矢城牧場跡地」については、芦北



▲ 県内最大の太陽光発電事業「メガソーラー（矢城牧場跡地完成予想図）」

▼「メガソーラー」起工式の様子



町南西の水俣市・津奈木町の境に位置する標高約500mの高原に位置する高原であり、約15年間遊休地であった牧場跡地に対し、面積約32万㎡、2万1,500kwの出力規模を誇るメガソーラー発電施設が完成します。

一方「女島埋立地」は、不知火海に面し、港湾機能の拡充、地場産業の振興などを目的として昭和61年から埋め立て造成を行った土地であり、本町にて企業誘致を計画していた土地です。総面積約17万㎡の内、約9万㎡、8,000kwの出力規模で「矢城牧場跡地」

に次ぐメガソーラー発電施設となりま  
す。なお、「女島埋立地」については、  
東京都が共同設立した官民連携インフ  
ラファンド事業第1号案件となるなど、  
本町としてもエネルギー政策を積極的  
に推進しています。

両地ともに、予定通り工事が進む  
と、平成25年度中に2ヶ所合わせて  
2万9,500kwの出力能力を持ち、  
一般家庭約8,000世

帯分の電力を補つ県下最  
大（H25・3月現在）の  
メガソーラー発電施設が  
完成します。また、現地  
法人を町内に設立し、維  
持管理を行うとともに、  
施工に関しても地元企業  
の活用など、雇用創出の  
面においても、大変期待  
をしています。

今後は、エネルギー  
の安定供給、雇用創出等  
に寄与するとともに、環  
境学習の拠点として活用  
し、見学者等による集客  
の増加につなげていきま  
いと考えています。

大相撲尾上部屋合宿の誘致

芦北町で最初に相撲合宿を誘致し  
たのは平成23年10月のことでした。

本町には、長い歴史と伝統のある  
春の佐敷諏訪神社例大祭があり、子ど  
もたちの奉納相撲や九州高校選抜相撲  
大会で賑わいを見せ、町民が一番楽し

みにしている行事の一つであります。

今回、誘致した尾上部屋の尾上親  
方（元小結濱ノ嶋・熊本県宇土市出身）  
は、高校時代にこの大会に出場した経  
験のある方で、そのような縁もあり、  
今まで出会ったことのない本物の力士  
に子どもたちや町民と直接触れ合っ  
てもらおうと、地元相撲協会の献心的な  
働きかけと親方の理解を得て、大相撲



▲「大相撲尾上部屋合宿」ちびっ子たちと把瑠都関



▲ 福祉施設での記念撮影



▲「佐敷城跡観月会」

町内外から300人が会場に訪れ薪能を楽しむ

尾上部屋合宿の誘致に成功しました。尾上部屋には人気力士、関脇柁瑠都関（当時は大関）が在籍していることもあり、20,000人の町民はその日を待ち望んでいました。

尾上部屋は1週間ほど滞在し、午前中稽古に精を出す傍ら、町内園児たちとの相撲や、来場者との記念撮影、餅つき大会、ちゃんこ鍋の食事会、握手・サインなどファンサービスも時間の許す限り応じてもらい、また、福祉施設や保育園へ訪問を行うなど積極的交流を深めてくれました。夕暮れ時

にちゃんこ鍋の買い出しや散策などで力士が町なかを闊歩する様には、何とも言えぬ風情を感じることができました。

日本の伝統文化の代表であり国技でもある「大相撲」は、観客動員の減少や新弟子力士不足など危機的状況にあります。本町では、今後も大相撲合宿の誘致を続け、「町民みんなで大相撲を応援しよう」という機運を盛り上げ、大相撲人気復活の一助になればと考えています。また、本町の相撲クラブでは、全国大会で上位入賞する子どもたちもおり、そんな子どもたちに

夢と希望を与えるとともに、町の活性化にもつなげていけたらと思います。

このほか、文化・スポーツの振興については、江戸時代に芦北一帯の守備に当たっていた火縄銃鉄砲隊「葦北御郡筒」の伝統文化、射法を継承しようとして平成15年に「葦北鉄砲隊」を復活結成。以来、県内外はもとより、英国や韓国など海外にも遠征して演武を披露しており、平成24年には県民文化賞も受賞しています。また、毎年秋には、日本古来の伝統芸能であります薪能や狂言による「観月会」を国史跡に指定されている「佐敷城跡」で開催しています。一方、芦北町総合型地域スポーツクラブやスポーツ振興補助金など制度を充実させています。スポーツの振興をまちづくりの1つに掲げており、先のロンドンオリンピックにおいてパドミントン女子ダブルスで本町出身の藤井瑞希選手がみごと銀メダルに輝いたことは記憶に新しいところです。

また、芦北町では、「温故創新」を教育理念に掲げ、武道の必修化においては、町のシンボリック武道である空手を全国に先駆け一早く導入し、また、

論語の素読を通して徳育にも力を入れており、子どもたちの礼節を重んじる心と態度の醸成を目指しています。

産業面では、「未来につなげる芦北町農林漁業振興基本条例」を制定し、安全・安心・良質で売れる農林水産物の生産、供給体制の確立及び地場消費体制の整備を目指しており、その代表格としてテコポン、サラダ玉ねぎ、太刀魚、あじきた牛などがあげられます。また、熊本県で唯一「ほたる保護条例」を制定し、本町に生息するほたるを貴重な地域資源として保護することで、自然環境及び景観の保全継承に努めています。

このように、芦北町では、まちづくりの基本理念として「個性の光る活力あるまちづくり」を掲げ、郷土愛を育み、誇ることのできるまちづくりを実現するために多種多様な取り組みを行っています。後世に何を残してやるのか。その使命感に燃え、「すべては21世紀を担う子どもたちのために」を合言葉に、オンリーワンのまちづくりを展開していきます。

芦北町長 竹崎 一成

(平成25年4月8日付第28036号)





# 町村の施策事例集 IV 完全保存版

「魅力ある町村を実現するための様々な取り組み」

---

---

平成27年3月発行

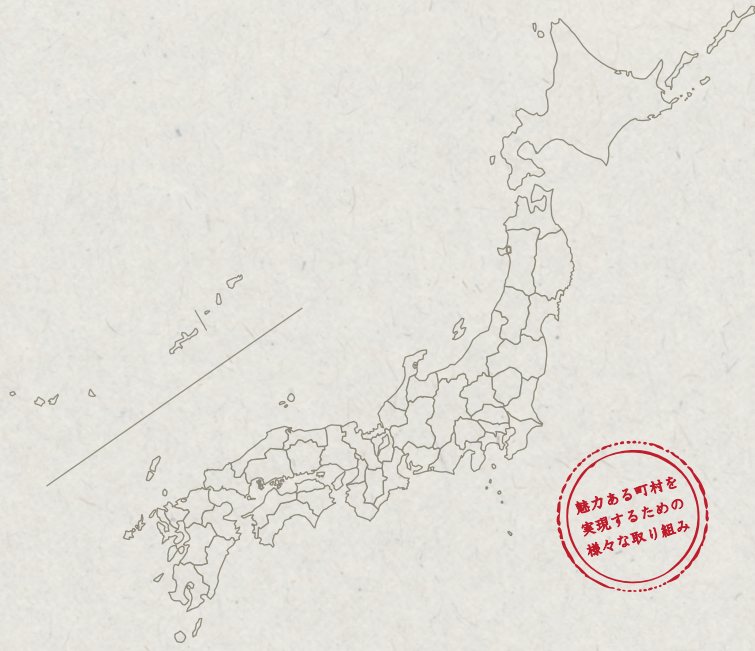
編集・発行 全国町村会

〒100-0014 東京都千代田区永田町1-11-35

全国町村会館

---

---



魅力ある町村を  
実現するための  
様々な取り組み

## 町村の施策事例集 **Ⅳ**

完全保存版

移住・定住・交流人口促進、空き家・空き店舗活用

教育・伝統文化・スポーツ、子育て、健康福祉

農林水産業振興、地域産業育成、起業・就業促進

自然・環境・衛生、新エネルギー

観光・イベント（ご当地フェスタ）、体験型ツーリズム

NPO・住民ボランティア等との協働、防災危機管理

町村独自のまちづくり施策